

秋田県文化財調査報告書第120集

# 東北縦貫自動車道発掘調査報告書XII

— 館平館Ⅰ遺跡・館平館Ⅱ遺跡・白長根館Ⅰ遺跡・白長根館Ⅱ遺跡・丑森遺跡  
道合Ⅰ遺跡・道合Ⅱ遺跡・大岱Ⅱ遺跡・大岱Ⅲ遺跡・円川原遺跡・大岱Ⅳ遺跡 —

1984・12

秋田県教育委員会

# 東北縦貫自動車道発掘調査報告書XII

— 鹿角郡小坂町に所在する

たて ひら だて  
館 平 館 I 遺 跡

たて ひら だて  
館 平 館 II 遺 跡

しら なが ね だて  
白 長 根 館 I 遺 跡

しら なが ね だて  
白 長 根 館 II 遺 跡

うし もり  
丑 森 遺 跡

みち あい  
道 合 I 遺 跡

みち あい  
道 合 II 遺 跡

おお だい  
大 岱 II 遺 跡

おお だい  
大 岱 III 遺 跡

えん が わら  
円 川 原 遺 跡

おお だい  
大 岱 IV 遺 跡

の調査 —

秋 田 県 教 育 委 員 会

# 序

東北縦貫自動車道建設に伴う発掘調査は、秋田県教育委員会が日本道路公団の委託を受けて、記録保存を目的に実施しているものであります。昭和54年度から昭和56年度までは鹿角市が、昭和57年度と昭和58年度は小坂町がそれぞれ発掘調査対象地域になりました。

本報告書は、昭和57年度と昭和58年度の2カ年継続調査の大岱Ⅱ遺跡と大岱Ⅳ遺跡のほか、昭和58年度調査の館平館Ⅰ遺跡・館平館Ⅱ遺跡・白長根館Ⅰ遺跡・白長根館Ⅱ遺跡・丑森遺跡・道合Ⅰ遺跡・道合Ⅱ遺跡・大岱Ⅲ遺跡・円川原遺跡の調査結果を収録したものです。この報告書が、鹿角地方の歴史解明と文化財保護に広く活用されることを望むものであります。

最後に、この調査に御協力いただきました顧問、専門指導員、日本道路公団、小坂町、同教育委員会はじめ関係各位に心から感謝の意を表します。

昭和59年12月

秋田県教育委員会

教 育 長 齋 藤 長

# 例 言

1. 本書は、東北縦貫自動車道路線内に所在する小坂町分14カ所の遺跡のうち、昭和58年度に実施した11遺跡（一部、昭和57年度からの継続調査）の発掘調査報告書である。
2. 調査成果については機会をみて発表してきたが、本書を正式のものとする。
3. 本書の執筆・編集担当者は下記のとおりである。

|                   |           |
|-------------------|-----------|
| 調査に至る経緯と調査経過      | 永瀬福男      |
| 調査の組織と構成          | 永瀬福男      |
| 地形と地質             | 藤本幸雄      |
| 環境と周辺の遺跡          | 永瀬福男      |
| 館平館Ⅰ遺跡・館平館Ⅱ遺跡     | 永瀬福男      |
| 道合Ⅰ遺跡・道合Ⅱ遺跡・円川原遺跡 | 永瀬福男      |
| 白長根館Ⅰ遺跡・白長根館Ⅱ遺跡   | 熊谷太郎      |
| 丑森遺跡・大岱Ⅳ遺跡        | 熊谷太郎・大野憲司 |
| 大岱Ⅱ遺跡・大岱Ⅲ遺跡       | 小林 克      |

4. 本文中の「地形と地質」は秋田県立能代北高等学校教諭藤本幸雄氏に執筆を、石器の石質は秋田県立博物館学芸主事嵯峨二郎氏に鑑定をお願いした。記して感謝申しあげる。
5. 発掘作業員及び整理事業員の氏名は、本書末尾に記した。
6. 遺構には調査時の発見順に一連番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断されたものもあり、そのため欠番がある。
7. 遺構に付した略記号は下記のとおりである。  
S I …… 竪穴住居跡    S K …… 土壙    S K T …… Tピット    S N …… 焼土遺構  
S K F …… フラスコ状ピット    S R …… 埋設土器    S D …… 溝  
S B …… 掘立柱建物跡    S X …… その他の遺構
8. 土層図中などのレベル数値は、標高である。

# 目 次

## 序

## 例 言

|                 |         |
|-----------------|---------|
| 調査に至るまでの経緯と調査経過 | 1       |
| 調査の組織と構成        | 2       |
| 地形と地質           | 2       |
| 環境と周辺の遺跡        | 10      |
| <br>            |         |
| 館平館 I 遺跡        | 15~28   |
| 第 1 章 発掘調査の概要   | 17      |
| 第 2 章 調査の記録     | 19      |
| 第 3 章 ま と め     | 24      |
| <br>            |         |
| 館平館 II 遺跡       | 29~38   |
| 第 1 章 発掘調査の概要   | 31      |
| 第 2 章 調査の記録     | 32      |
| 第 3 章 ま と め     | 36      |
| <br>            |         |
| 白長根館 I 遺跡       | 39~98   |
| 第 1 章 発掘調査の概要   | 41      |
| 第 2 章 調査の記録     | 44      |
| 第 3 章 ま と め     | 89      |
| <br>            |         |
| 白長根館 II 遺跡      | 99~106  |
| 第 1 章 発掘調査の概要   | 101     |
| 第 2 章 調査の記録     | 103     |
| 第 3 章 ま と め     | 103     |
| <br>            |         |
| 丑森遺跡            | 107~120 |
| 第 1 章 発掘調査の概要   | 109     |
| 第 2 章 調査の記録     | 112     |

|                  |         |
|------------------|---------|
| 第3章 ま と め        | 118     |
| <b>道合 I 遺跡</b>   | 121～130 |
| 第1章 発掘調査の概要      | 123     |
| 第2章 調査の記録        | 125     |
| 第3章 ま と め        | 128     |
| <b>道合 II 遺跡</b>  | 131～136 |
| 第1章 発掘調査の概要      | 133     |
| 第2章 調査の記録        | 133     |
| 第3章 ま と め        | 134     |
| <b>大岱 II 遺跡</b>  | 137～158 |
| 第1章 発掘調査の概要      | 139     |
| 第2章 調査の記録        | 141     |
| 第3章 ま と め        | 151     |
| <b>大岱 III 遺跡</b> | 159～184 |
| 第1章 発掘調査の概要      | 161     |
| 第2章 調査の記録        | 164     |
| 第3章 ま と め        | 178     |
| <b>円川原遺跡</b>     | 185～190 |
| 第1章 発掘調査の概要      | 187     |
| 第2章 調査の記録        | 187     |
| 第3章 ま と め        | 188     |
| <b>大岱 IV 遺跡</b>  | 191～230 |
| 第1章 発掘調査の概要      | 193     |
| 第2章 調査の記録        | 198     |
| 第3章 ま と め        | 218     |



白長根館 I 遺跡出土注口土器



大岱 IV 遺跡出土岩偶

## 調査に至るまでの経緯と調査経過

東北縦貫自動車道は、秋田県の北東部に所在する鹿角市と鹿角郡小坂町を通過する。秋田県教育委員会は、文化庁と日本道路公団とが交わした覚書に基づき、昭和44年・同48年・同52年(註1) (註2) (註3)に遺跡分布調査を実施した。その後、路線内に所在する遺跡について、日本道路公団仙台建設局と秋田県教育委員会との間で協議が持たれ、最終的に記録保存することが決定された。発掘調査は昭和54年度から昭和56年度までは鹿角市地区が対象となり、34遺跡の発掘調査が実施された。

昭和57年度と昭和58年度は小坂町地区が対象となった。小坂地区では、路線上に13遺跡、工用道路上に1遺跡が、それぞれ所在する。秋田県教育委員会は、日本道路公団仙台建設局の発掘依頼(「仙建総管107号」昭和57年3月26日)を受け、14遺跡を発掘調査することにした。

昭和57年度は、はりま館・横館・大岱Ⅰ・大岱Ⅱ・大岱Ⅳの5遺跡を調査したが、大岱Ⅱと大岱Ⅳの2遺跡は、土地買収の関係で、昭和58年度にも継続調査されることになった。

昭和58年度は、上記継続調査の2遺跡のほか、館平館Ⅰ・館平館Ⅱ・白長根館Ⅰ・白長根館Ⅱ・丑森・道合Ⅰ・道合Ⅱ・大岱Ⅲ・円川原の計11遺跡の発掘調査を実施した。

昭和58年度の調査経過は、大略下記のとおりであるが、個々の遺跡の調査経過は、それぞれの項に記載してある。4月1日に小坂町小坂字小坂鉦山尾樽部に発掘調査事務所を開設し、発掘調査体制をととのえる。4月上旬～5月上旬は、今年度調査予定地の予備調査を実施した。予備調査の目的は、各遺跡の基本層序の把握であり、大湯軽石層上の土砂が重機で排除されるために、本調査に先かけて実施したものである。5月9日から本調査を実施し、10月29日にすべて終了した。11月上・中旬は、発掘器材の後始末・遺物・図面・写真・スライド等の整理を行い、11月下旬には、すべての資料・発掘機材を秋田県埋蔵文化財センターへ搬出した。12月からは埋蔵文化財センターで、遺物の復元・実測など報告書作成までの諸作業を実施した。

(註1) 秋田県教育委員会 『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書』 1970年

(註2) 秋田県教育委員会 『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書』 1972年

(註3) 秋田県教育委員会 『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書(八幡平～十和田錦木)』  
1978年



## 調査の組織と構成

|       |   |
|-------|---|
| 調査主体  | 秋田県教育委員会  |
| 調査顧問  | 坪井清足 奈良国立文化財研究所所長<br>芹沢長介 前東北大学教授   |
| 専門指導員 | 村越 潔 弘前大学教授<br>小林達雄 国学院大学助教授<br>林 謙作 北海道大学助教授<br>須藤 隆 東北大学助教授<br>進藤秋輝 多賀城跡調査研究所研究第一科長 |
| 調査担当者 | 永瀬福男 秋田県埋蔵文化財センター 社会教育主事<br>熊谷太郎 秋田県埋蔵文化財センター 社会教育主事<br>小林 克 秋田県埋蔵文化財センター 文化財主事       |
| 調査補佐員 | 福本雅治・大信田学・岩沢公則・安保 徹・高橋一則・花田孝夫・阿部義行・<br>畠山 圭   |
| 事務補助員 | 小田島洋子・安田育子  |

## 地形と地質

### I 地形地質の概況

本地域は鹿角盆地北部に位置し、各遺跡は南流する小坂川の右岸の火山灰台地上にあるものが多い。本地域の地形は、①山地、②丘陵、③台地、④沖積低地の四つに区分される。次にその各々について概要をまとめてみる（第1図）。

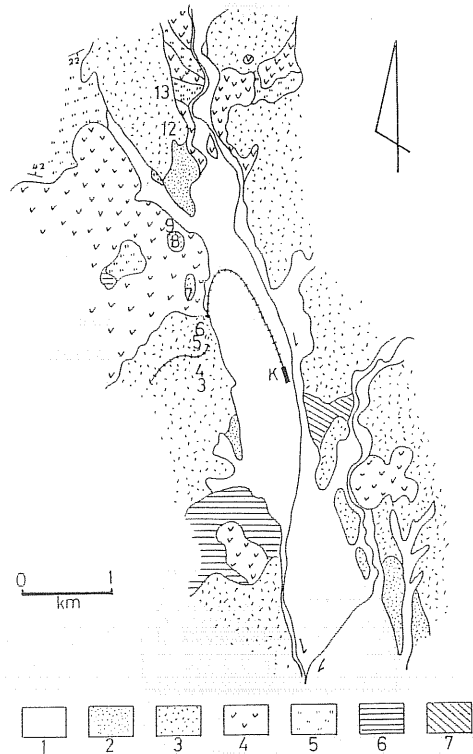
①山地：小坂川右岸では高森(482.0m)を最高点とし、北部は400m以上の標高を示すのに対し、南部では主として230～250mの波状の起伏を示す丘陵の中に、290～350mの残丘状突起部が点在する。一方、左岸では200～280mのなだらかな丘陵および火山灰台地の中に270～350mの残丘状突起部が分布しており、東西をはさんで起伏量のちがいは特に認められない。これらの山地は秋田県(1973)によれば、小坂川右岸で主として新第三紀中新世の大滝層に属する浮石質凝灰岩、硬質泥岩およびそれらに貫入する石英安山岩よりなり、特に残丘状の部分と北部の300m以上の山地は石英安山岩からなることが多い。また、左岸では大滝層より下位の瀬の沢層を構成する凝灰岩、砂岩、泥岩の互層も一部に見られる。小坂鉦山より南では第三紀中新

世上部の遠部層を構成する石英安山岩質凝灰岩が広く分布しており、残丘状の部分は右岸と同様に石英安山岩よりなる。

②丘陵：標高230～250mの波状起伏を示し、下位から第四紀更新世の石英安山岩質凝灰岩、砂礫層、軽石質火山灰層等で構成される。このうち石英安山岩質凝灰岩と軽石質火山灰層は層相、鉱物組成、地形との関係から内藤（1966）の長土路溶結凝灰岩、小坂軽石質火山灰層にそれぞれ対比される。

③台地：十和田火山から供給された火砕物による段丘地形であり、内藤（前出）による鳥越面と関上面に2分される。このうち鳥越面は小坂川右岸の大岱で、標高250～260m下流のはりま館で215mであり、関上面は大岱で230～235m、はりま館で200m±となる。

④沖積低地：主として河床堆積物よりなり、部分的に比高2mほどで段化することもある。小坂川下流では十和田火山由来の毛馬内軽石質火山灰層（内藤：前出）も分布しており、比高2～5mの段丘地形を形成している。

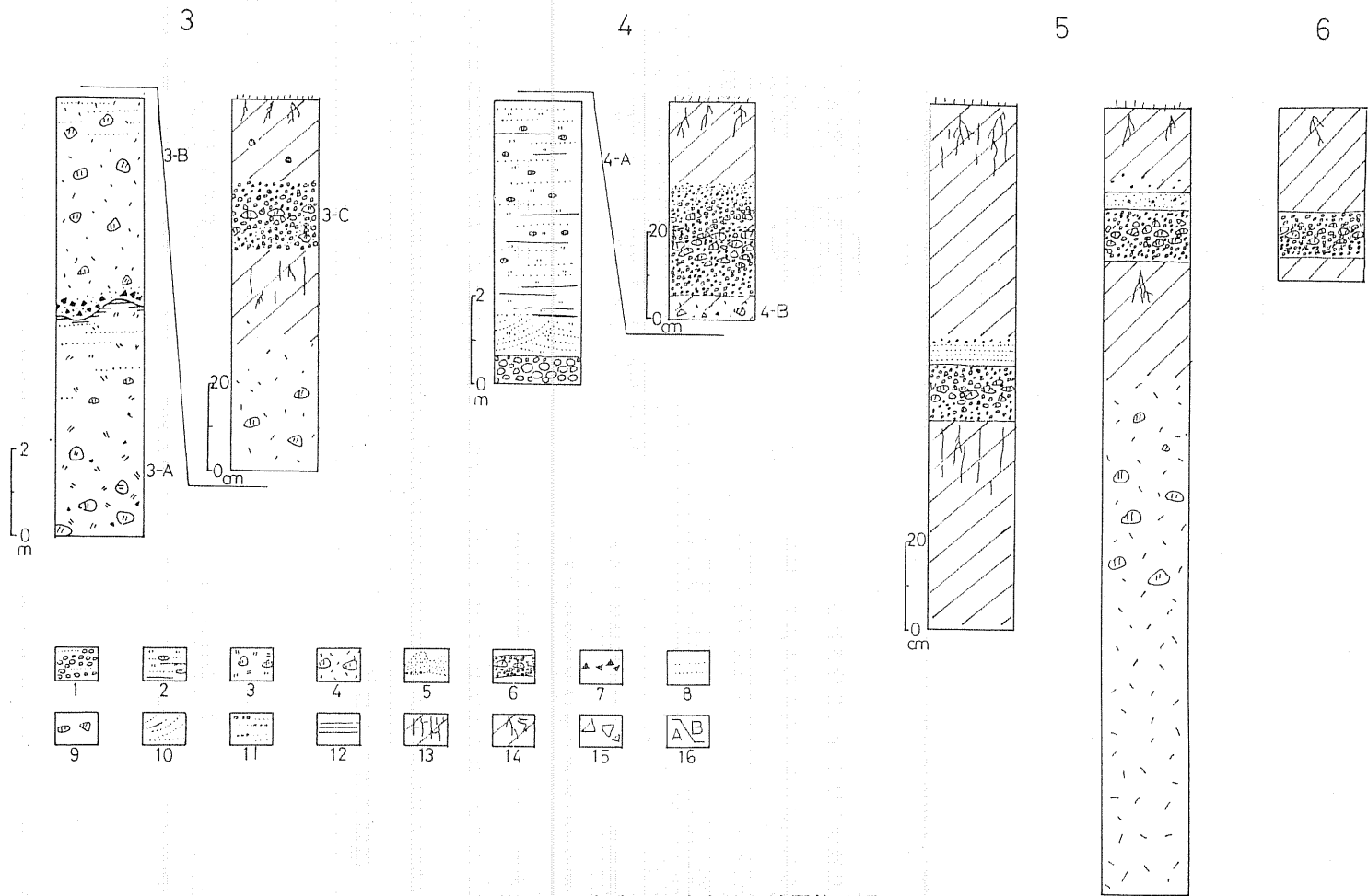


第1図 地質図

## II 遺跡の地形と地質

### No. 3 館平館 I 遺跡

標高210～216mの鳥越面上に位置し、北側は225～230mの丘陵に至る斜面になる。地質は最下部が径6～8cmの灰白色軽石を含む火砕物層で、これは2～3mで茶褐色粘土層に漸移する。その際軽石は1.5～6cmとなり、弱くラミナが見られるようになる。なお、暗灰色～黒色の安山岩質角礫が散在するが、これの大きさは0.3～1.8cm(平均0.9cm)である。軽石の鉱物組成は第1表のようになり(3-A)、角閃石を含まないことから高市軽石質火山灰層(内藤：前出)に対比できる。次に灰白色の軽石質火砕物層と接する基底部1mほどでは黒色～暗灰色、暗赤色の安山岩質角礫(0.2～10.5cm、平均4.6cm)を多く含み、軽石は0.7～2.6cm(平均1.4cm)で小



第 2 図 各遺跡の代表的な地質柱状図

さい。基底部をはなれるにしたがって軽石の粒径は大きくなり、岩片は小さくなる。本層の軽石についての鉱物組成は第1表の3-Bに示すが、3-Aと異なり角閃石を含み、鳥越軽石質火山灰層に対比される。最上部の50~70cmは黒色の腐植土層であるが、中に15cmの層厚で2.5~6.5cm大の軽石を含む降下火山灰層（大湯軽石質火山礫層）がはさまれる。この火山灰層は上面、下面とも明瞭であるが、上位の黒色腐植土中にも同質の軽石が不規則に散在することがある。比較的大きい軽石の平均径は3.4cmであるが、岩片の大きさは0.8~1.5cmで安山岩が多い。本層の軽石の鉱物組成は第1表のとおりで(3-C)、角閃石を含まず、単斜輝石の少ない大湯軽石質火山礫層の特徴をよく示している。

#### No. 4 館平館II遺跡

標高225~230mのゆるやかな丘陵上にあり、南側は鳥越面につらなる。地質は、下位から、河床性礫層、含石英軽石質凝灰岩、黄褐色軽石質火砕物、黒色腐植土層となるが、黒色腐植土層中には大湯軽石質火山礫層がはさまれる。このうち、河床性礫層は、流紋岩、安山岩、硬質泥岩、チャートなどの垂円~円礫(4~15cm)からなり、表面に酸化皮膜が形成されている。また、含石英軽石質凝灰岩は灰白色~白色でラミナがよく発達しており、一部に細粒の砂~シルトの薄層をはさみ、肉眼でも石英の多いのがわかる。層厚は6~7mである。軽石(数mm)の密集している部分について鉱物組成を求めたところ(4-A)、重鉱物が極めて少なく、あってもほとんどが角閃石である結果を得た。次に黄褐色軽石質火砕物であるが、軽石(0.3~1.6cm大)を含み安山岩の角礫(1.9~5.5cm、平均3.7cm)が多い点で降下堆積物の層相とは異なっており、砕流堆積物の基底部に似ている。鉱物分析の結果(4-B)は角閃石を含む点で鳥越軽石質火山灰層に似ているが、申ヶ野軽石質火山灰層(内藤:前出)も角閃石を含んでおり、なお検討が必要である。

大湯軽石質火山礫層は、軽石が2.8~5.6cm(平均3.8cm)、安山岩角礫が0.7~1.8cm(平均1.1cm)であり、層厚は20cmであるが、上部に5cmほどで細粒砂の多い風成二次堆積層をとまうこともある。全体的にくずれやすく、空隙も多い。大きい軽石は、中央部10cm位の厚さの部分に多くなる。

#### No. 5・6 白長根館I・II遺跡

標高215~220mの鳥越段丘にありほぼ平坦であるが、東西方向にゆるやかに高度が増して丘陵部に移行する。地質は、下位から鳥越軽石質火山灰層、黒色腐植土層の順に重なるが、黒色腐植土層中には13cmの層厚で大湯軽石質火山礫層がはさまれる。鳥越軽石質火山灰層は8~21cm大のやや丸みを帯びた軽石を不規則に含み、無層理塊状である。また、大湯軽石質火山礫層は5cmの厚さで細粒のシルト質風成砂層をとまうことがある。軽石は平均3.2cm大(まれに11.2cmもあり)、安山岩質角礫は0.2~0.6cmで平均0.4cmであり、全体としてくずれやすい。黒

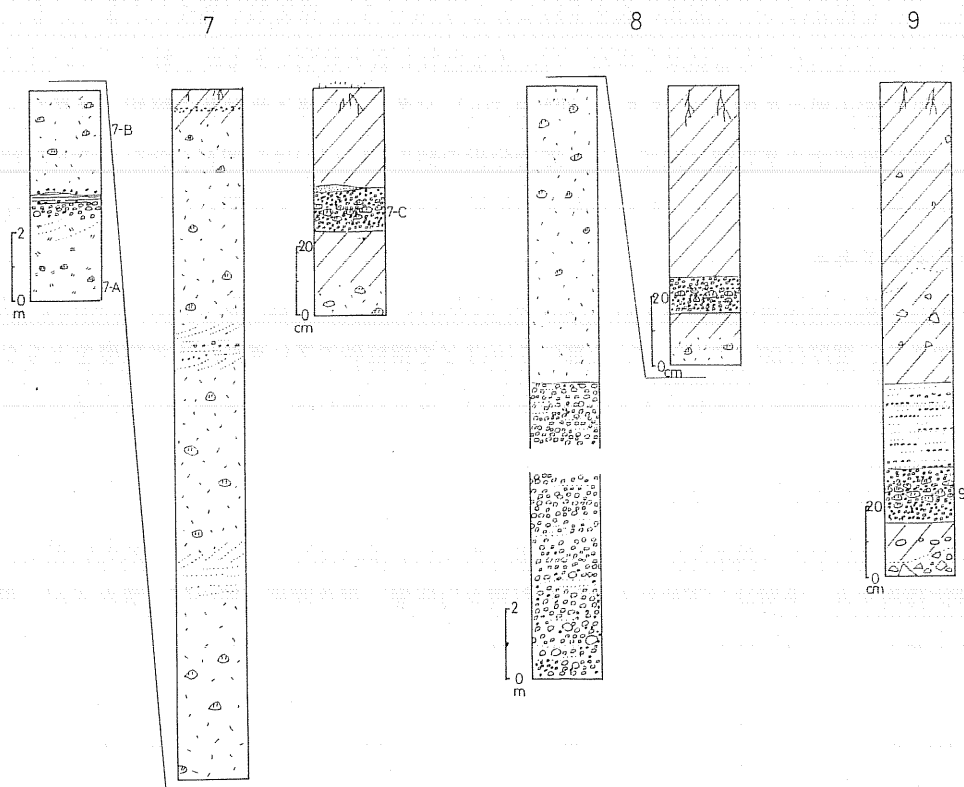
色腐植土層は、遺跡南部や凹地で厚くなり、1 m以上に達する。

### No. 7 丑森遺跡

標高215～220mの鳥越面上に位置しており、平坦である。地質は、遺跡付近は下位から鳥越軽石質火山灰層、大湯軽石質火山礫層をはさんだ黒色腐植土層の順に堆積しているが、遺跡の南の小坂鉄道のトンネル付近では鳥越軽石質火山灰層の下位に灰白色の軽石を含む火砕物層が見られ、この層の上部1 mほどでは径2～30cmの安山岩質亜円礫を含み粘土層(層厚2～5 cm)に移化する。この軽石の鉱物組成(7-A)は角閃石を含まず、単斜輝石がやや多い。層位関係、鉱物組成からみて高市軽石質火山灰層に対比できる。

鳥越軽石質火山灰層は、基底部で1～3 cm大の安山岩質角礫と0.2～1 cm大の軽石を含んで弱いラミナが見られ、全体として暗灰色であるが中～上部は5～12cm、時に30cm大の白色軽石を乱雑に含み、乳白色塊状である。部分的に斜交ラミナが発達し、泥岩や流紋岩の亜円礫(径1～7 cm)を含むこともある。

大湯軽石質火山礫層は径0.2～5.5cmの軽石と0.2～1.7cm大の安山岩角礫を含んでおり、層厚は11cmであるが、部分的に3～5 cmの厚さで砂質の風成二次堆積層が上位に重なる。風成二次堆積層は地形的な凹所に分布する傾向があり、大湯軽石質火山礫層そのものの層厚も凹所ない



第3図 各遺跡の代表的な地質柱状図

し斜面のすそで厚くなる。鉱物組成は角閃石を含まず、単斜輝石が斜方輝石よりかなり少ない特徴を示す(7-C)。

#### No.8 道合I遺跡

標高239~240mで、鳥越段丘上に位置し、平坦な地形であるが、北側斜面は急崖をなす。

地質は石英安山岩体の上に表面が赤褐色になった流紋岩、安山岩(径0.8~11cm)の垂円礫を含む礫層が7m以上の層厚で堆積しており、その上に8~10mの層厚で鳥越軽石質火山灰層が重なり、さらに10cmの厚さの大湯軽石質火山礫層をはさむ黒色腐植土層に移化する。

礫層は露頭が悪く全容は不明であるが、円磨度がやや高いこと、酸化皮膜のあること等から見て河成堆積物とみられる。また、鳥越軽石質火山礫層は、最上部で最大28cmの円みがかかった軽石を不規則に含んでおり、堆積構造は不明であるが、火砕流堆積物であろう。一方、大湯軽石質火山礫層は、径0.2~7.6cmの軽石と0.2~2.7cm大の安山岩角礫を含み、全体にくずれやすく空隙も多いなど、降下堆積物の特徴を良く示している。

#### No.9 道合II遺跡

堀内沢の右岸に位置し、標高195~200mの小規模な台地状の地形をなす。

地質は、南側の急斜面が石英安山岩体の一部であり、それに由来する崖錐堆積物が遺跡付近も含めて厚く堆積している。遺跡の柱状図によれば、最下部は石英安山岩の風化礫(3~25cm)が暗褐灰色の有機質土中に散在しており、その上に径2~7cmの円礫(安山岩、流紋岩質)を含む暗灰色の有機質土が重なり、さらに14cmの層厚の大湯軽石質火山礫層、25cmの層厚の平行ラミナをもつ。二次堆積物層、そして85cmほどの厚さで石英安山岩の角礫をまばらに含む黒~暗灰色腐植土層が重なっている。このうち大湯軽石質火山礫層は径0.1~5.6cm(まれに10.2cm)の軽石と径0.2~2.3cmの安山岩質角礫を含み、くずれやすい。また、径2cm以上の軽石は中央部に多い。軽石の鉱物組成は角閃石を含まず単斜輝石が少ないなど他の大湯軽石質火山礫層の組成に一致している。

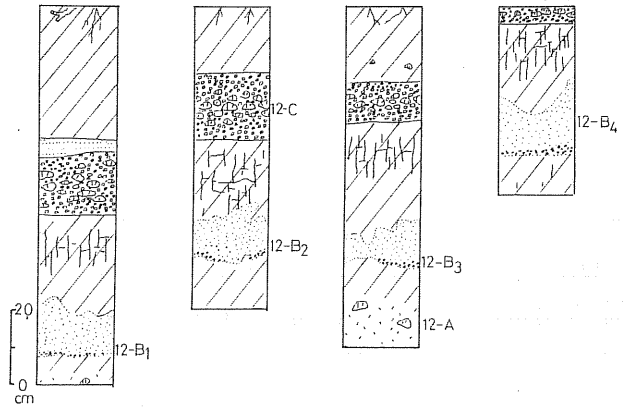
#### No.12 大岱III遺跡

標高258~263mの平坦な鳥越面上に位置しているが、東西に新第三紀層よりなる残丘状の突起が見られ、中央部にゆるく傾斜している。

地質は下位から鳥越軽石質火山灰層、黒色腐色土層、含軽石灰白色細粒火山灰層、黒色腐色土層、大湯軽石質火山礫層、黒色腐植土層の順に重なっている。このうち、含軽石灰白色細粒火山灰層は申ヶ野軽石質火山灰層をのぞいて鳥越軽石質火山灰層と大湯軽石質火山礫層のあいだにはじめて発見された火山灰層であり、本報告で大岱火山灰層と命名されることになったものである。この火山灰層は鳥越軽石質火山灰層(塊状で径5~12cmの黄褐色軽石を多量に含む)から漸移する黒色腐植土層の上に概して不規則な境界面をもって重なっており、基底部に0.2

～0.4 cmの黄褐色～黄白色の軽石を含むこともあるが、全体としてはむしろ灰白色であり、不規則に膨縮して水平方向でとぎれることもある。最大層厚の計測はその点で困難であるが、20cmに達する部分があり、多くは8～15cmである。鉱物分析の結果(12-B<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>、B<sub>3</sub>、B<sub>4</sub>)は角閃石をほとんど含まない点で十和田火山の完新世の火砕物と共通であるが、単斜輝石が斜方輝石と同量に近い位含まれる点で

12



第4図 各遺跡の代表的な地質柱状図

大湯軽石質火山礫層とも異なっている。十和田火山東方の完新世火山灰層との対比のため、より詳細な検討が望まれる。一方大湯軽石質火山礫層は径0.2～12.0cmの軽石と0.2～2.8cmの安

第1表 火砕物の鉱物組成

|                   | 無色鉱物,<br>火山ガラス | 鉄 鉱 物 | 普通角閃<br>石 | 単斜輝石 | 斜方輝石 | カウント数 | 対 比   |
|-------------------|----------------|-------|-----------|------|------|-------|-------|
| 3-A               | 65             | 18    |           | 5    | 12   | 569   | TK    |
| 3-B               | 75             | 13    | 2         | 4    | 6    | 880   | TO    |
| 3-C               | 73             | 12    |           | 2    | 13   | 812   | OY    |
| 4-A               | 94             | 1     | 4         |      | 1    | 1074  | KO    |
| 4-B               | 55             | 21    | 3         | 8    | 14   | 424   | SA(?) |
| 7-A               | 73             | 13    |           | 5    | 9    | 724   | TK    |
| 7-B               | 45             | 30    | 4         | 8    | 14   | 453   | TO    |
| 7-C               | 71             | 13    |           | 2    | 13   | 451   | OY    |
| 9                 | 65             | 20    |           | 3    | 12   | 479   | OY    |
| 12-A              | 51             | 22    | 3         | 13   | 11   | 467   | TO    |
| 12-B <sub>1</sub> | 67             | 19    |           | 6    | 8    | 697   | } OD  |
| 12-B <sub>2</sub> | 87             | 6     |           | 3    | 4    | 830   |       |
| 12-B <sub>3</sub> | 59             | 22    |           | 7    | 12   | 635   |       |
| 12-B <sub>4</sub> | 93             | 3     |           | 2    | 2    | 757   |       |
| 12-C              | 77             | 13    |           | 2    | 8    | 848   | OY    |

ODをのぞいて軽石を砕き、 $\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{2}$ の大きさについて個数%を求めた。ODはB<sub>1</sub>～B<sub>3</sub>は軽石を含む部分。B<sub>4</sub>は細粒火山灰質部分をそのままつづした値。TK：高市軽石質火山灰層、TO：鳥越軽石質火山灰層、KO：小坂軽石質火山灰層、SA(?)：申ヶ野軽石質火山灰層、OY：大湯軽石質火山礫層、OD：大湯火山灰層

山岩質角礫を含んでおり、属厚は11~17cmと変化し上位に3~5cmの厚さで風成二次堆積物ともなうこともある。軽石の鉱物組成は他の遺跡の同層とほぼ一致した値を示している(12-C)。なお、大湯軽石質火山礫層の下の黒色腐植土層は特徴的に亀裂が入ることが多く、上部の黒色腐植土とは異なっている。

#### 図表説明

##### 第1図 地質図(秋田県、1973による)

凡例：1沖積層、2関上面堆積物(火山灰質二次堆積物)、3鳥越軽石質火山灰層、4石英安山岩、5浮石質凝灰岩、6硬質泥岩、7瀬の沢層、図中の3、4、5、6、7、8、9、12、13はそれぞれ遺跡の所在地を示し、本文の番号、柱状図の番号に対応する。

##### 第2図 各遺跡の代表的な地質柱状図

凡例：1円~亜円礫(砂を含む)、2含石英軽石質凝灰岩(砂質部、シルト部にラミナあり)、3高市軽石質火山灰層、4鳥越軽石質火山灰層、5大岱火山灰層、6大湯軽石質火山礫層、7安山岩質角礫、8砂質部(平行ラミナあり)、9軽石、10砂質部(斜交ラミナあり)、11砂礫部、12シルト~粘土質、13黒色土で乾燥部に縦に亀裂が入る、14黒色腐植土、15角礫、16柱状図の位置を示す(Aの上位にB)柱状図のわきの3-A、3-Bは鉱物分析用試料の位置。

##### 第3図 各遺跡の代表的柱状図、凡例は第2図に同じ。

##### 第4図 同上

#### 参考文献

秋田県(1973)：秋田県総合地質図幅・十和田湖

秋田県(1973)：秋田県総合地質図幅・花輪

秋田県(1973)：秋田県総合地質図幅・大館

秋田県(1973)：秋田県総合地質図幅・碓ヶ関

内藤博夫(1966)：秋田県米代川流域の第四紀火山碎屑物と段丘地形、地理学評論、Vol.39, P.463~484

内藤博夫(1970)：秋田県花輪盆地および大館盆地の地形発達史、地理学評論、Vol.43, P.594~606

中川久夫、ほか(1972)：十和田火山発達史概要、東北大地質古生物邦報、No.73, P.7~18



## 環境と周辺の遺跡

昭和57年度、58年度の発掘調査の対象遺跡は小坂町に所在する。小坂町は秋田県の北東部に位置し、湖（国立公園十和田湖）と鉱山（小坂鉱山）のある町として知られている。

秋田県の北部を西流する米代川の流域には、上流から鹿角・大館・鷹巣の3盆地が形成されている。そして、小坂町は鹿角盆地の最北端に位置する。鹿角盆地は、北側を白神山地に、西側を高森山地に、東側を奥羽山地に囲まれている。鹿角盆地の北部を流れる小坂川は、支流である相内川・古遠部川・砂子沢川・荒川の水を集め、米代川と合流する。小坂川の右・左岸には段丘地形が認められる。標高は200～250mであり、鳥越面・関上面(註1)に相当する。この段丘は浸蝕され、数多くの谷(沢)がみられる。遺跡は沢と沢に区切られた段丘や丘陵上に立地する。

小坂町内でもっとも古い時期の遺跡としては、下大谷地・元山・内の岱・鶴・一ツ森・大地・荒川遺跡(註2)が知られ、縄文時代前期に属する。昨年調査されたはりま館・大岱Ⅰ・大岱Ⅳ遺跡もこの時期のものである。これらの遺跡からは円筒下層式土器が出土しており、東北地方北部から北海道南部に形成された円筒土器文化圏に属することが知られる。

縄文時代中期の遺跡は、寺の沢・下大谷地・二夕渡・鶴・手紙坂・松森遺跡等である。中期に主体をなす土器は円筒上層式土器であるが、鶴遺跡では大木式土器も出土しており、東北地方南部の影響を受けるようになる。また、二夕渡遺跡からは、北陸地方の土器が出土しており、縄文人の広範な交流をうかがうことができる。

縄文時代後期の遺跡は、松木沢・内の岱・牛馬長根・館野・大生手・下大谷地杉沢・寺上・下大谷地内の岱・大地遺跡等である。いずれも、後期前葉の十腰内Ⅰ式土器が出土している。後期の遺跡のなかで、下大谷地杉沢遺跡の組石群(註3)が注目される。組石の周辺からは土壌が検出され、土壌底面に敷かれた粘土・火山灰や副葬品から、組石及び土壌は墓址とする結論が出された。大湯環状列石を代表とする類似遺構は祭祀址か墓址かと、説の分かれるところであるが、この発掘調査結果は、墓址説が有力であることを示唆してくれた。小坂町には組石や配石の一部と考えられる礫が露出している場所があり、今後の学術調査が期待される。

縄文時代晩期の遺跡は、館野・下大谷地・寺の沢・大地遺跡等があり、大洞BC～A式期の土器を出土する。

縄文時代は狩猟・採集を生業とする時代と考えられている。縄文人は小坂川の両岸の段丘上に集落を営み、季節ごとの山の幸を求めて、生活していたものと考えられる。

弥生時代の遺跡としては、尾樽部・砂山・下大谷地・曙台・寺の沢・火薬庫東方・からみ山・内の岱等の遺跡が知られている。これらの遺跡からは、弥生時代中期や後期に編年されている田舎館式・天王山式・鳥海山式期の土器のほか、北海道に濃密に分布する後北式土器が出土し

ている。昭和56年に、青森県南津軽郡田舎館村垂柳遺跡から弥生時代の水田跡が発見され、また、秋田県南秋田郡若美町横長根A遺跡では、炭化米が検出され、東北地方北部の稲作農耕の存在が確実となった。垂柳遺跡は沖積平野に存在し、稲作を目的に設定された集落であり、横長根A遺跡は砂丘の後背湿地を水田利用した可能性のある遺跡である。小坂地区の弥生時代の遺跡は、縄文時代の遺跡と同様、段丘上に位置するため、稲作農耕の可能性は薄いものと考えられる。

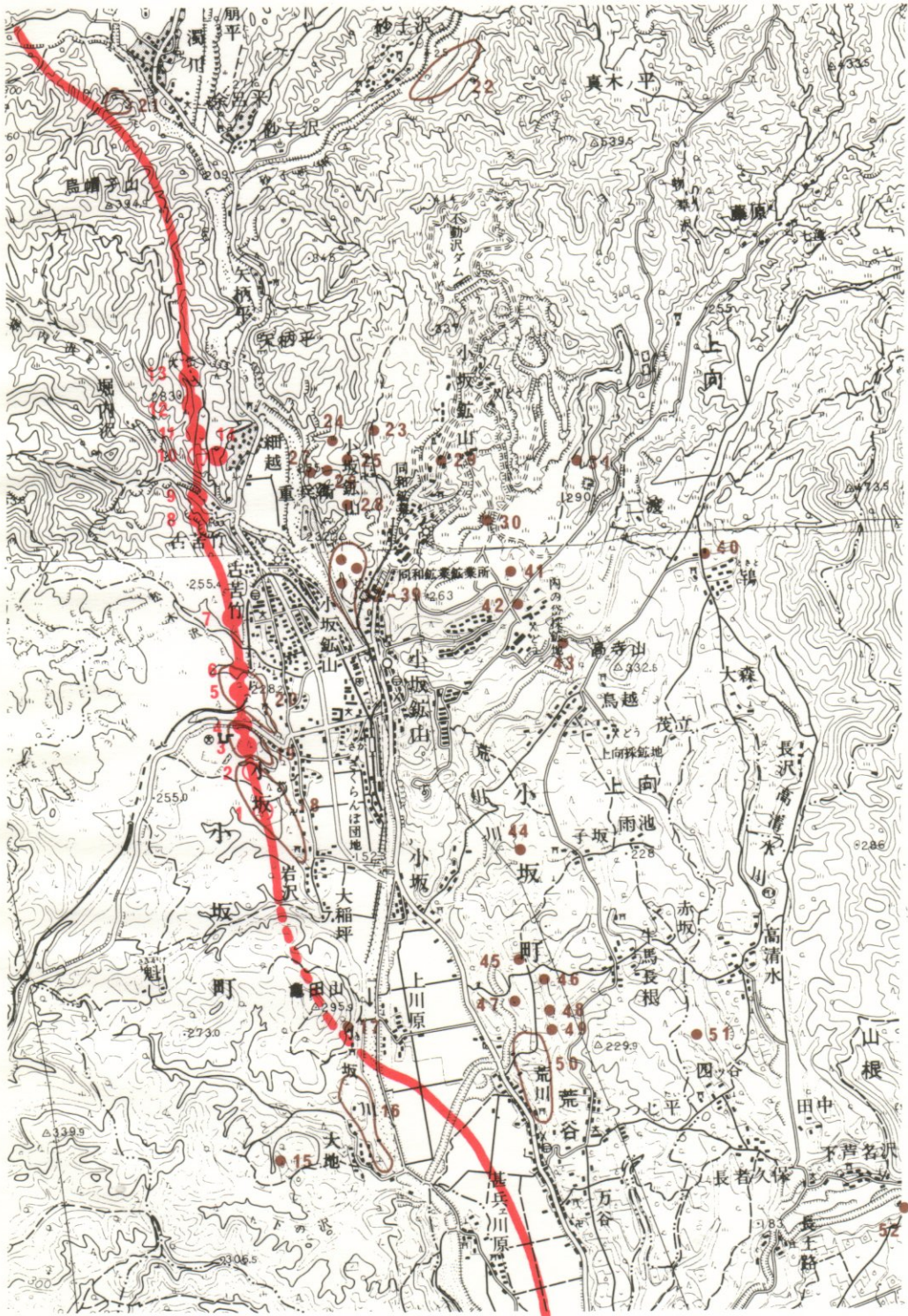
古代の遺跡としては、牛馬長根Ⅱ・つつじ岱遺跡が知られているが、実態は不明である。昨年調査されたはりま館遺跡では、平安時代の集落の一部が検出され、小坂地区の古代史解明に貴重な資料を提供した。

中世の館跡としては、八幡館・小坂館・白長根館・大地館・荒川館・濁川館・台作館・横館・館平館が知られている。近世初期の成立とみられている『鹿角由来記』には、大地村・小坂村・濁川村・八幡館村等の村々が登場する。小坂地区の主な集落は、中世末期には成立していたものと考えられる。

- (註1) 内藤博夫 「秋田県米代川流域の第四紀火山碎屑物と段丘地形」 『地理学評論 第39巻第7号』 1966年
- (註2) 安保 彰 「小坂のあけぼの」 『小坂町史』 1975年
- (註3) 小坂町教育委員会・小坂環状列石調査団 『小坂環状列石墳墓』 1969年
- (註4) 青森県立郷土館 『弥生時代の青森』 1982年
- (註5) 若美町教育委員会 『横長根A遺跡第2・3次発掘調査略報』 1983年
- (註6) 秋田県教育委員会 『中世城館』 1981年
- (註7) 鹿角市 『鹿角市史』 1982年

第2表 小坂地区遺跡一覽

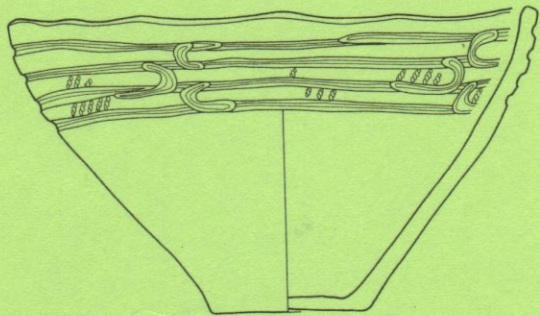
| 番号 | 遺跡名               | 遺構・遺物                           | 番号 | 遺跡名          | 遺構・遺物                |
|----|-------------------|---------------------------------|----|--------------|----------------------|
| 1  | はりま館              | 竪穴住居跡・フラスコ状ビット・<br>縄文土器(前~晩)    | 27 | 小坂環状<br>石墓   | 土壙・縄文土器(後)           |
| 2  | 横館                | フラスコ状ビット・縄文土器・<br>石器・弥生土器(小坂X式) | 28 | 下大谷地<br>環状列石 | 縄文土器(後)              |
| 3  | 館平館I              | 竪穴住居跡・フラスコ状ビット                  | 29 | 元山           | 縄文土器・石器              |
| 4  | 館平館II             | 縄文土器・弥生土器                       | 30 | 内ノ岱狸沢        | 縄文土器(前)・岩偶・石器        |
| 5  | 白長根館I             | 竪穴住居跡(縄文・平安)<br>フラスコ状ビット        | 31 | 内ノ岱<br>貯水地   | 弥生土器・紡錘車・<br>アメリカ型石鏝 |
| 6  | 白長根館II            | フラスコ状ビット                        | 32 | 下大谷地I        | 縄文土器(前)              |
| 7  | 丑森                | 竪穴住居跡(縄文・平安)・<br>フラスコ状ビット       | 33 | 下大谷地II       | 縄文土器(中)              |
| 8  | 道合I               | 竪穴住居跡(縄文)<br>フラスコ状ビット           | 34 | 下大谷地III      | 縄文土器(後)              |
| 9  | 道合II              | 縄文土器(後)                         | 35 | 下大谷地IV       | 縄文土器(晩)              |
| 10 | 大岱I               | Tビット・土壙・縄文土器・<br>弥生土器           | 36 | 下大谷地V        | 弥生土器                 |
| 11 | 大岱II              | 石組遺構・フラスコ状ビット                   | 37 | 砂山I          | 弥生土器                 |
| 12 | 大岱III             | 縄文土器(前~晩)・弥生土器<br>後北C式土器        | 38 | 砂山II         | 土師器                  |
| 13 | 円川原               | 縄文土器(後)                         | 39 | 小坂館          |                      |
| 14 | 大岱IV              | 竪穴住居跡(縄)・縄文土器(前)                | 40 | 鶉            | 縄文土器(中)・青竜刀形石器       |
| 15 | 中の崎               | 縄文土器(中)                         | 41 | 一の渡          | 炉跡(後)                |
| 16 | 大地館               |                                 | 42 | 曙岱           | 弥生土器・後北C式土器          |
| 17 | 大地                | 縄文土器(後)・土偶                      | 43 | 一つ森          | 縄文土器(中)              |
| 18 | 横館                |                                 | 44 | 大生手          | 縄文土器(後)              |
| 19 | 館平館               |                                 | 45 | 手紙坂          | 縄文土器(中)・土偶           |
| 20 | 白長根館              |                                 | 46 | つつじが岱        | 土師器(擦文系)             |
| 21 | 濁川館               |                                 | 47 | 松森           | 縄文土器(前)              |
| 22 | 八幡館               |                                 | 48 | 牛馬長根I        | 縄文土器(後)              |
| 23 | 小坂山<br>鉦石山<br>状石籬 | 縄文土器(後)                         | 49 | 牛馬長根II       | 土師器                  |
| 24 | 大谷地<br>環状列石       | 縄文土器(後)                         | 50 | 荒川館          |                      |
| 25 | 寺の沢I              | 縄文土器(晩)・<br>石剣・有孔石製品            | 51 | 四ツ谷          | 須恵器                  |
| 26 | 寺の沢II             | 竪穴住居跡・縄文土器(後・晩)                 | 52 | 坂の上          | 弥生土器                 |



第5図 東北縦貫自動車道路線上の遺跡と周辺遺跡

# 館平館 I 遺跡

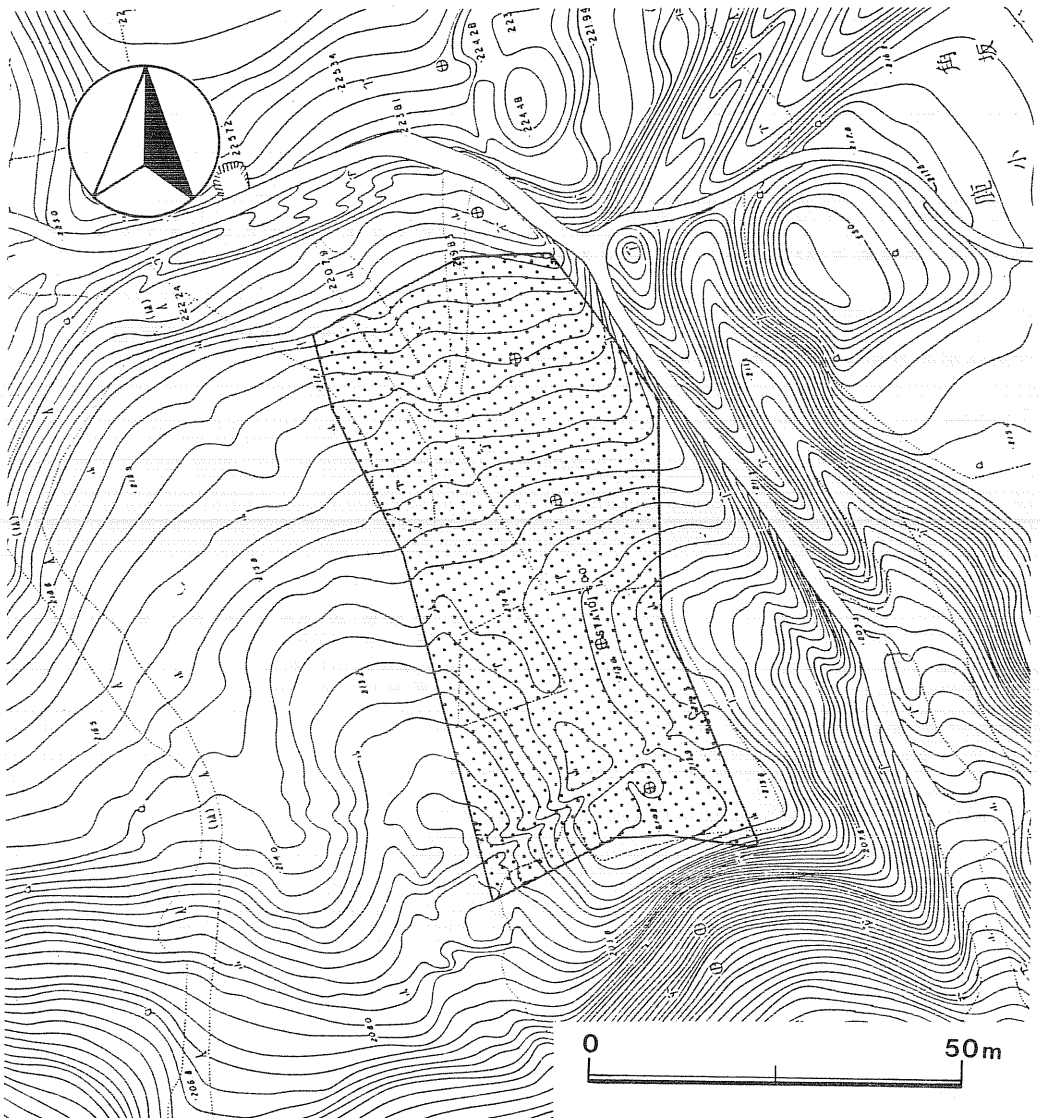
遺跡番号 No. 3  
所在地 鹿角郡小坂町字館平12番地の1  
調査期間 昭和58年5月9日～6月21日  
発掘調査予定面積 3,380m<sup>2</sup>  
発掘調査面積 2,800m<sup>2</sup>



## 第1章 発掘調査の概要

## 第1節 遺跡の概観

館平館1遺跡は、小坂川右岸の狭小な丘陵上に所在する。この台地は、小坂川右岸に形成された丘陵の東端部に位置する。遺跡の南側と東側は浸蝕され、急斜面を呈し、北側と西側は起伏の激しい丘陵部へと続く。遺跡の標高は約218 mである。遺跡の南方には、縄文時代前期と



第1図 遺構周辺の地形と発掘調査区

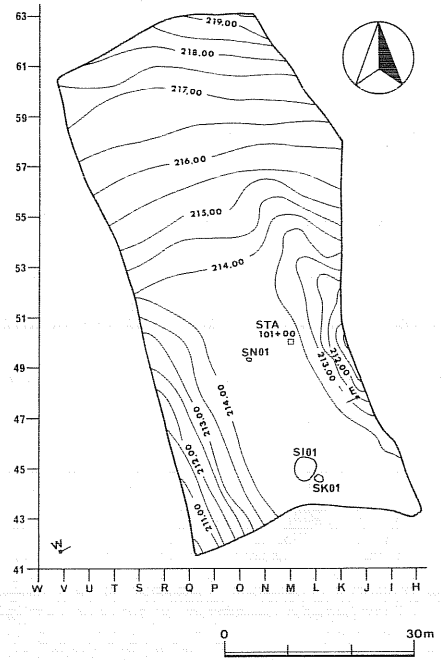
館平館 I 遺跡

弥生時代後期を主体とする小規模な横館遺跡と縄文時代前期・後期と平安時代のかなり大規模な集落跡が存在する。遺跡の北方には、この遺跡と接続して、館平館 II 遺跡が存在する。

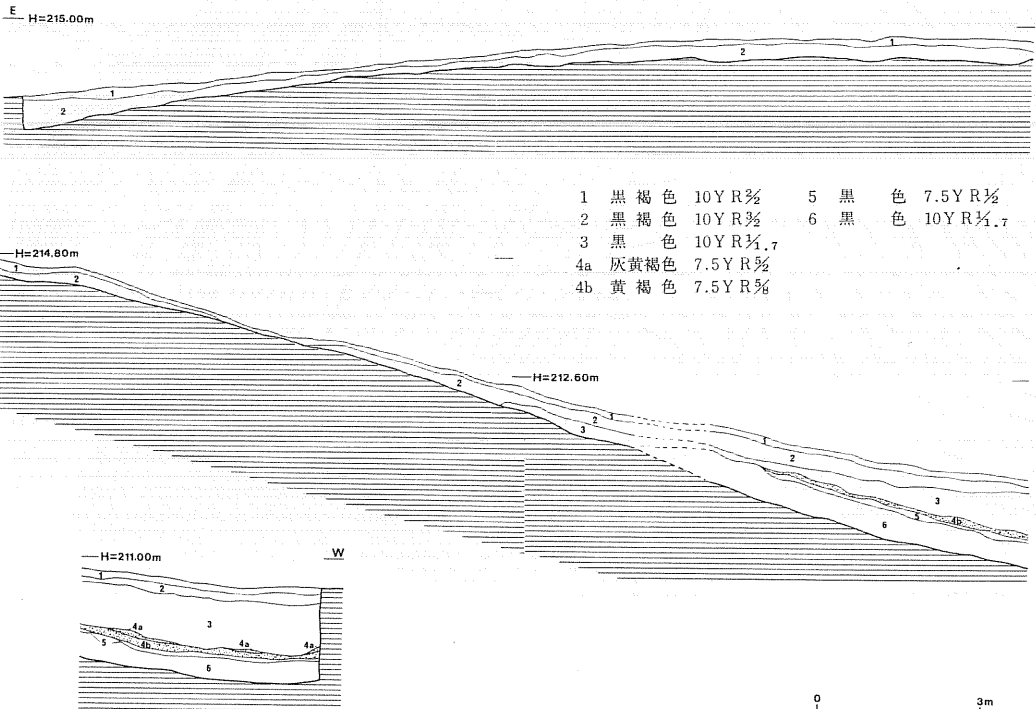
遺跡の基本層序は、上位から黒褐色及び黒色土層（1～3層）→大湯軽石層（4a・4b層）→黒色土層（5・6層）である。遺跡の南半部は凸レンズ状の地形を呈しているため、3層～6層は流され、堆積を見ない。

第2節 調査の方法

発掘調査は、日本道路公団が設定した STA 101+00 を発掘原点 (M50) とし、4 m × 4 m にグリッド杭を打設して、実施した。グリッドの一边は磁北方向に一致する。また、グリッドの



第2図 グリッド配置図



第3図 土層実測図

名称は、南北方向の算用数字と東西方向のアルファベットの組み合わせで南東隅杭をもって呼称することにした。

### 第3節 調査の経過

発掘調査期間は、昭和58年5月9日～同年6月21日である。

5月9日から表土の除去作業を開始した。5月18日にグリッド杭を打設し、南端部から粗掘りを開始した。5月19日には竪穴住居跡(S I 01)のプランを確認した。5月20日からS I 01の精査を開始した。5月21日に土壌のプランが確認され、精査を開始した。5月24日から、S I 01・S K F 01の実測を開始した。調査は北半部へと進行しているが、遺物・遺構の検出はない。5月27日からS I 01の炉跡の焼土を洗浄し、骨片・植物の種子などの検出につとめる。6月4日には半円状扁平打製石器1点を出土したが、遺物・遺構の検出は少ない。6月8日からは、作業員の半数を館平館Ⅱ遺跡に派遣した。6月9日小刀が検出されたが、これは、地主が終戦後埋納したものであるという。6月15日から地山面の地形測量・写真撮影を実施した。

## 第2章 調査の記録

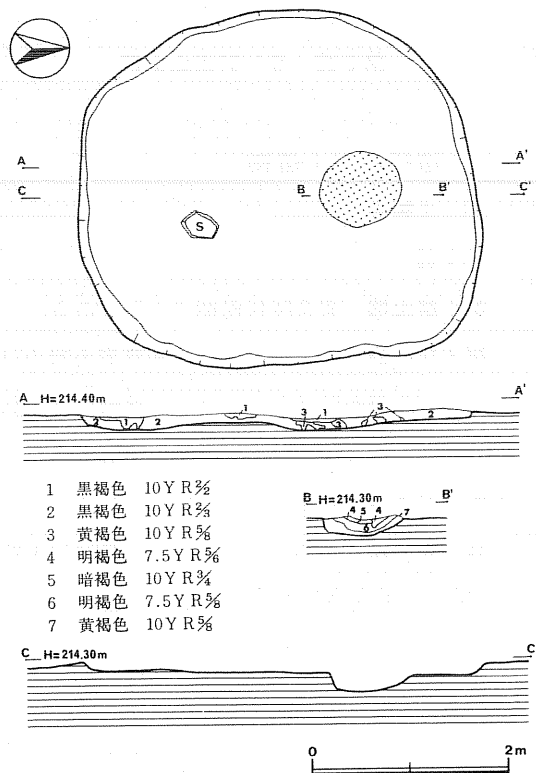
### 第1節 縄文時代の遺構と遺物

#### 1 発見遺構と遺物

##### (1) 竪穴住居跡

**S I 01** 台地の南端部(L44グリッド)で検出された。平面プランは、ほぼ円形を呈し、長軸4m・短軸3.6mである。床面は緩い凹凸をなし、北壁近くに地床炉が認められる。壁高は約10cmである。柱穴は認められない。

出土遺物は、浅鉢形土器と石皿1個である。浅鉢形土器は、口径19cm・器高9.8cm・底径5.5cmを測る。口縁部には三条の縄文帯が施文され、弧状の曲線で5区画される。



第4図 S I 01 竪穴住居跡

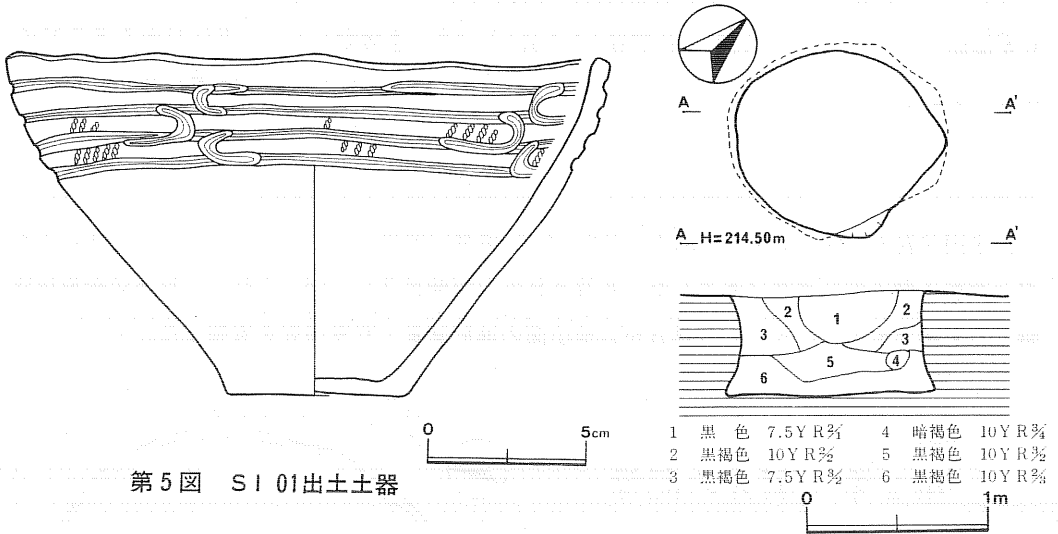


内外面とも、ミガキが顕著である。後期中葉（加層利B<sub>2</sub>式併行）の土器と考えられる。石皿は平板な石材の一面を縁どりし、中央部がわずかに磨耗している。石材は凝灰岩である。

(2) フラスコ状ピット

**SKF01** 堅穴住居跡（S I 01）の近く（K44グリッド）で検出された。開口部径1.10m、深さ0.55m、底径1.20mを測る。

出土遺物は、埋土上位の半円状扁平打製石器 1 点である。



第5図 S I 01出土土器

第6図 SKF01フラスコ状ピット

2 遺構外出土遺物

(1) 土製品

①土器

**第1群土器** 縄文時代前期の土器である。

第1類土器（第7図1・2）深鉢形土器の口縁部破片である。口縁部には、指頭圧痕文を施した太い隆帯が貼付されている。体部には複節斜縄文が施される。円筒下層b式土器である。

第2類土器（第7図4）深鉢形土器であり、器表面には木目状撚糸文が施されている。円筒下層d式土器である。

第3類土器（第7図3・5～10）深鉢形土器であり、口縁には突起が見られる。口縁部には、押圧縄文か絡条体圧痕文が施され、部分的に縦位・横位の隆帯が貼付される。隆带上及び口縁部文様帯の下端には刺突文が施される。円筒下層d式土器である。

**第2群土器** 縄文時代後期の土器である。

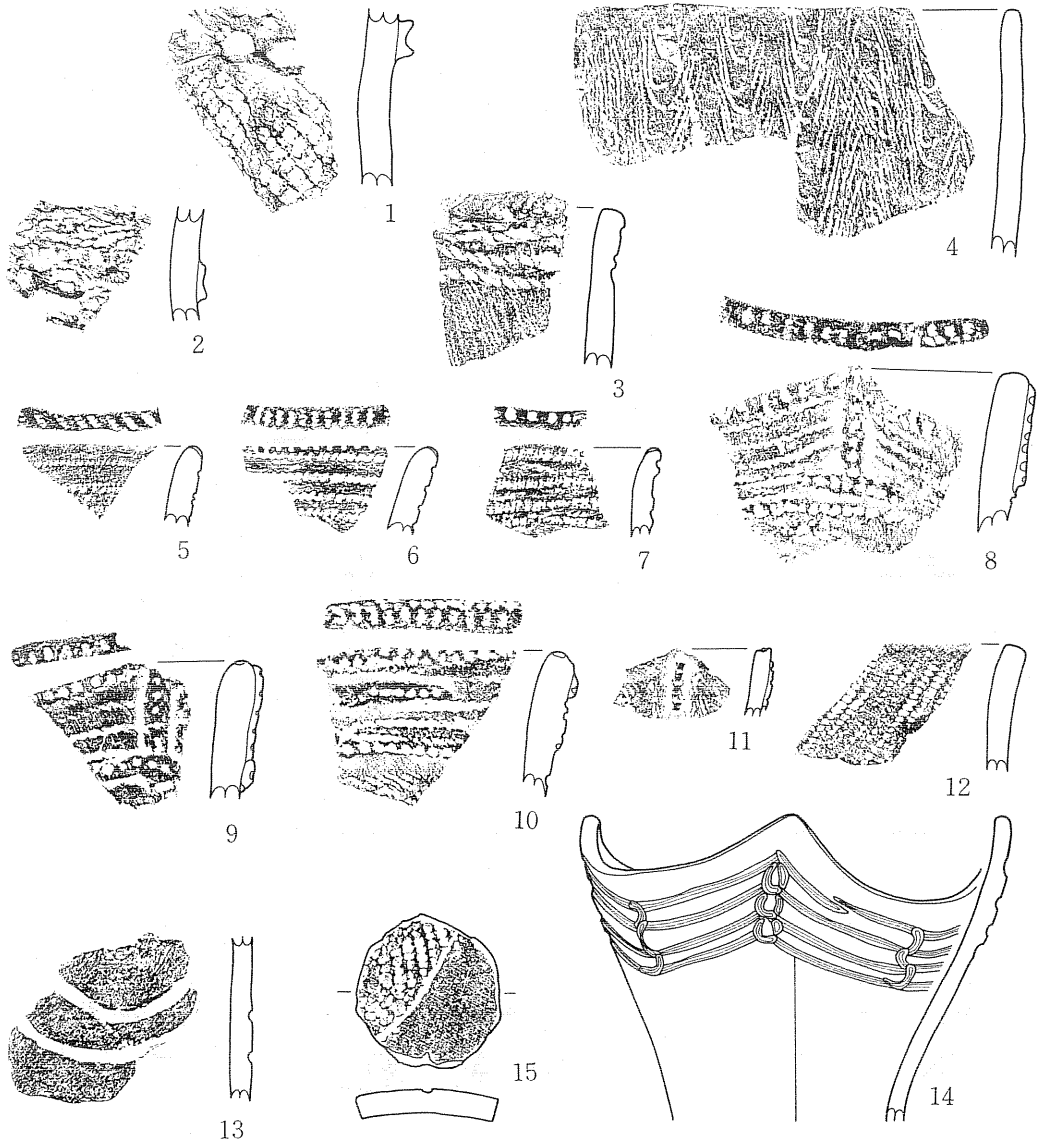
第1類土器（第7図11）小型の深鉢形土器と思われる。波頂部には垂下する隆帯が貼付され、隆帯には刺突文が施されている。

第2類土器（第7図12）深鉢形土器と思われる。器表面には斜縄文が施される。

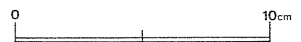
第3類土器（第7図13・14）13は波状突起4山の深鉢形土器と思われる。内外面はミガキが顕著である。口縁部には、4本の平行沈線が引かれる。この平行沈線は波頂部で( )状沈線で区切れ、( )状沈線と( )状沈線の間は弧状沈線で区切られる。加曾利B<sub>2</sub>式土器に併行するものと考えられる。

②円盤状土製品

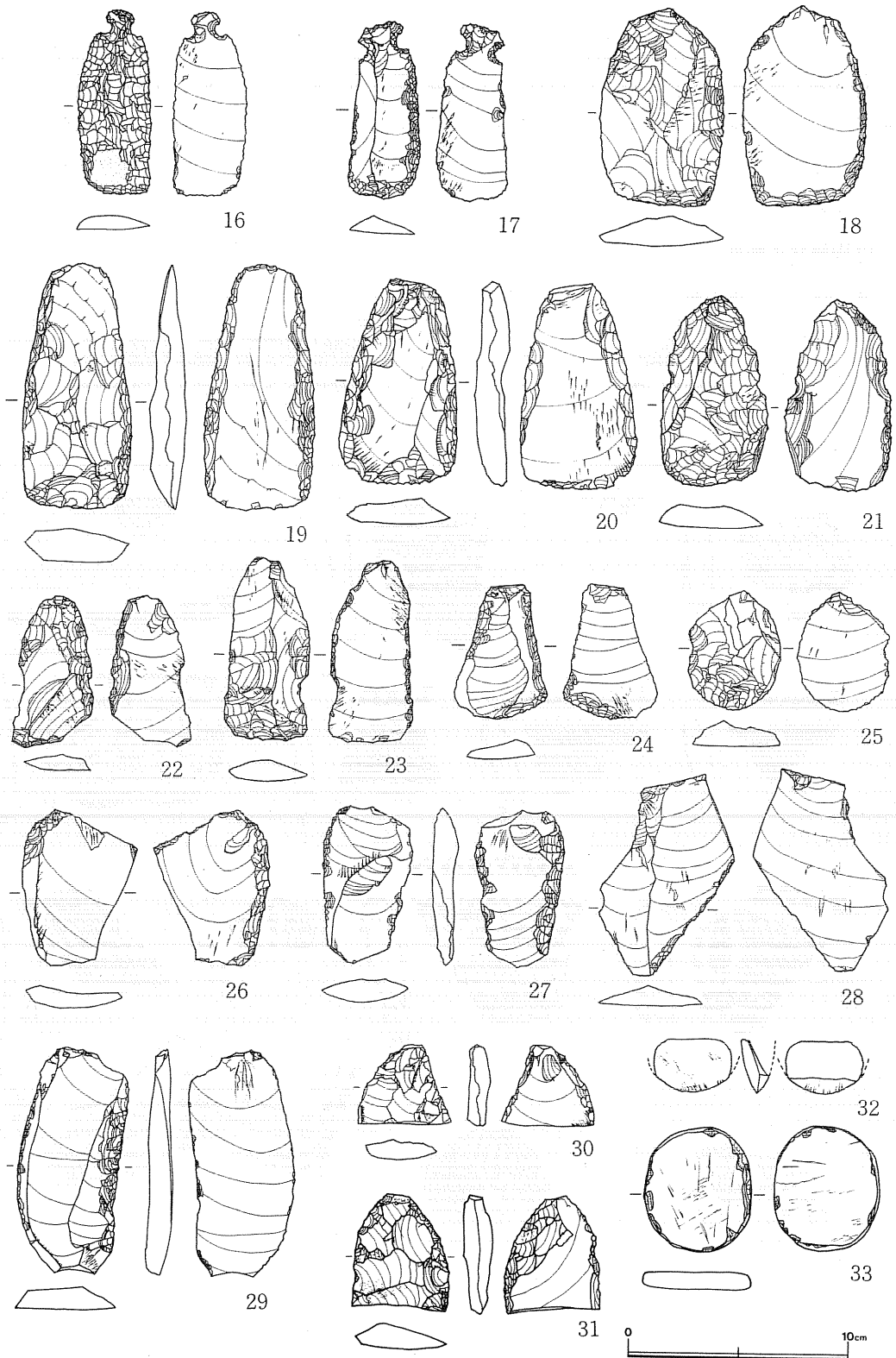
第7図15は、縄文時代後期の土器片を円形に加工したものである。直径は5.8cmである。



第7図 遺構外出土遺物



館平館 I 遺跡



第 8 図 遺構外出土遺物

(2) 石製品

①石器

石匙（第8図16・17）縦長の石匙で、頁岩を使用している。

石筥（第8図18～21・30・31）主要剝離面への調整加工は、基部から両側縁に施されるのが普通であるが、18は刃部にも認められる。いずれも、頁岩を使用している。

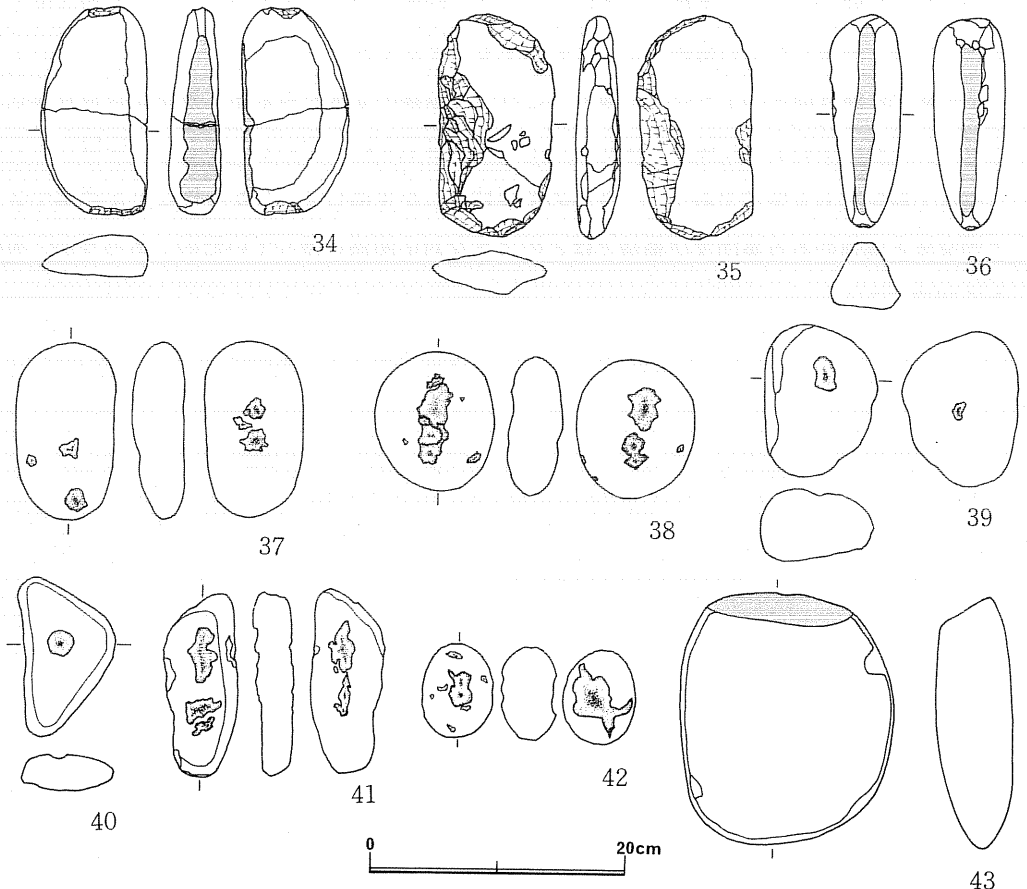
削器（第8図22・23・26～29）両側縁か一側縁に刃部を作出している。いずれも、頁岩を使用している。

搔器（第8図24・25）24はバチ形を呈し、25は楕円形を呈する。石材は頁岩である。

磨製石斧（第8図32）強凸弱凸片刃石斧の刃部破片である。緑色凝灰岩を石材としている。

磨石（第9図34～36・43）手頃な河原石の一侧縁を磨面としている。いずれも、安山岩を使用している。

凹石（第9図37～42）拳大の河原石の両面か片面に凹部が見られる。いずれも、安山岩を使用している。



第9図 遺構外出土遺物

## ②円盤状石製品

第 8 図33は、凝灰岩を楕円形に成形し、全面を研磨したものである。長軸は5.5cmであり、厚さは0.7cmである。

## 第 3 章 ま と め

館平館 I 遺跡は狭少な丘陵に立地する。検出された遺構は、縄文時代後期中葉（加曾利B<sub>2</sub>式併行）の竪穴住居跡 1 軒とそれと同時期のものと考えられるフラスコ状ピット 1 基である。

小坂地区の遺跡は、東北縦貫自動車道建設に伴う発掘調査でみる限り、①はりま館遺跡（前期）・白長根館 I 遺跡（後期）・大岱Ⅲ遺跡（後期）・大岱Ⅳ遺跡（前期）のごとく数軒の住居と貯蔵穴によって構成された遺跡、②館平館 I 遺跡・丑森遺跡・道合 I 遺跡のごとく 1 軒のみの住居と貯蔵穴からなる遺跡、③大岱Ⅱのごとく貯蔵穴のみで住居がない、④遺物は出土するが、住居も貯蔵穴もない遺跡のように分類することができる。

館平館 I 遺跡は前述のように②に属す。こうした遺跡の立地をみると、狭小な台地及び丘陵であり、住居を中心とした居住区域が狭いという共通点を持っている。そして、住居内から出土する土器型式も 1 型式であって、きわめて短期間しか生活していなかったことが理解できる。この家族と関連のある集団及び集落とはどのような対応関係を持っていたのであろうか、興味ある問題である。



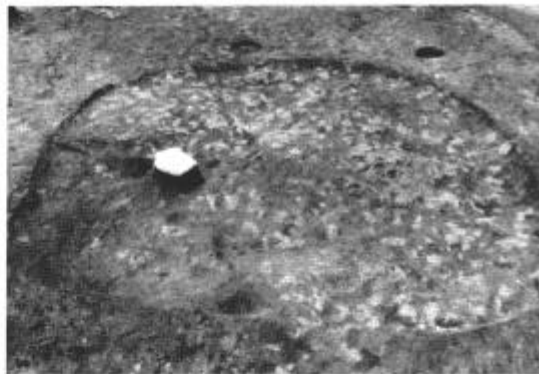
館平館 I 遺跡全景 (北▶)



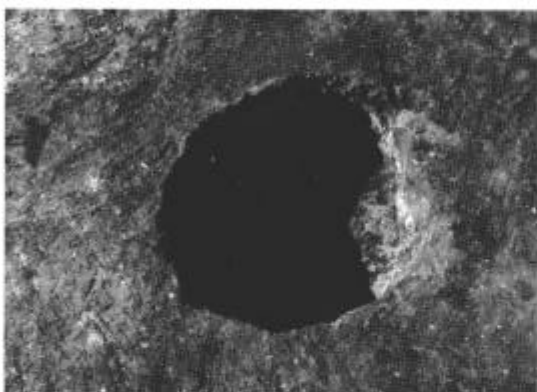
調査状況



土層断面 (南▶)



S I 01 竪穴住居跡 (東▶)



S K F 01 土壙完掘状況



S I 01 土器出土状態



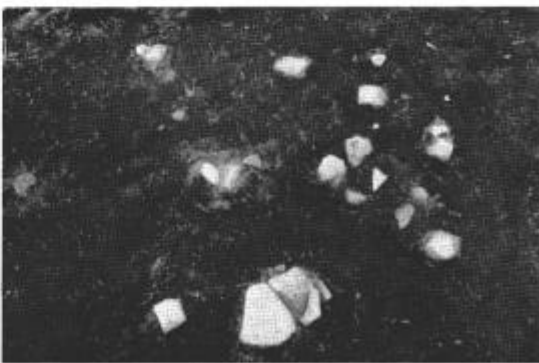
S I 01 石皿出土状態



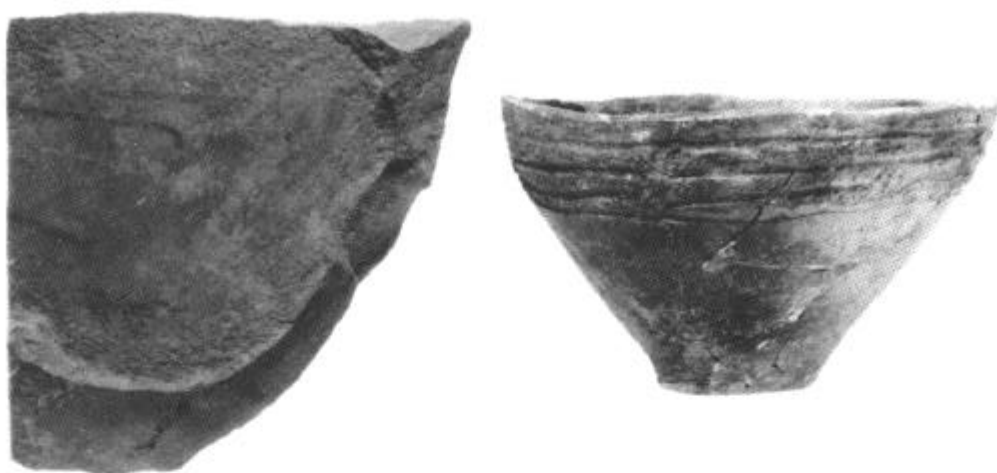
土器出土状態



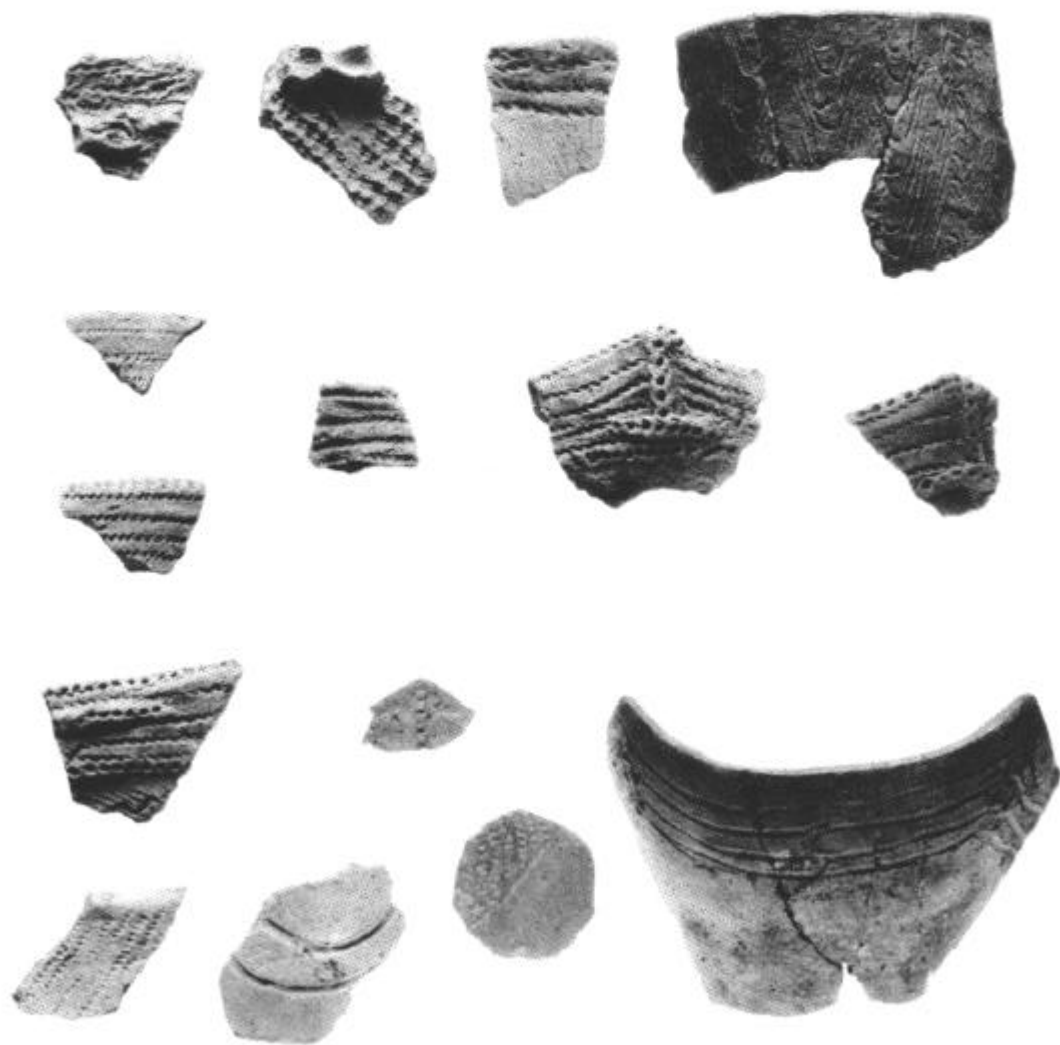
遺物出土状態



遺物出土状態



S I 01 豎穴住居跡出土遺物



遺構外出土土器





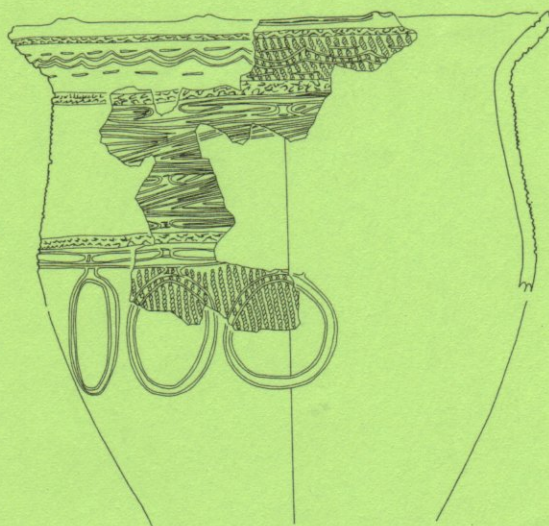
遺構外出土石器

図版 4

1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
10  
11  
12  
13  
14  
15  
16  
17  
18  
19  
20  
21  
22  
23  
24  
25  
26  
27  
28  
29  
30  
31  
32  
33  
34  
35  
36  
37  
38  
39  
40  
41  
42  
43  
44  
45

# 館平館 II 遺跡

|          |                     |
|----------|---------------------|
| 遺跡番号     | No. 4               |
| 所在地      | 鹿角郡小坂町字館平12番地の1     |
| 調査期間     | 昭和58年6月8日～6月30日     |
| 発掘調査予定面積 | 6,776m <sup>2</sup> |
| 発掘調査面積   | 1,963m <sup>2</sup> |

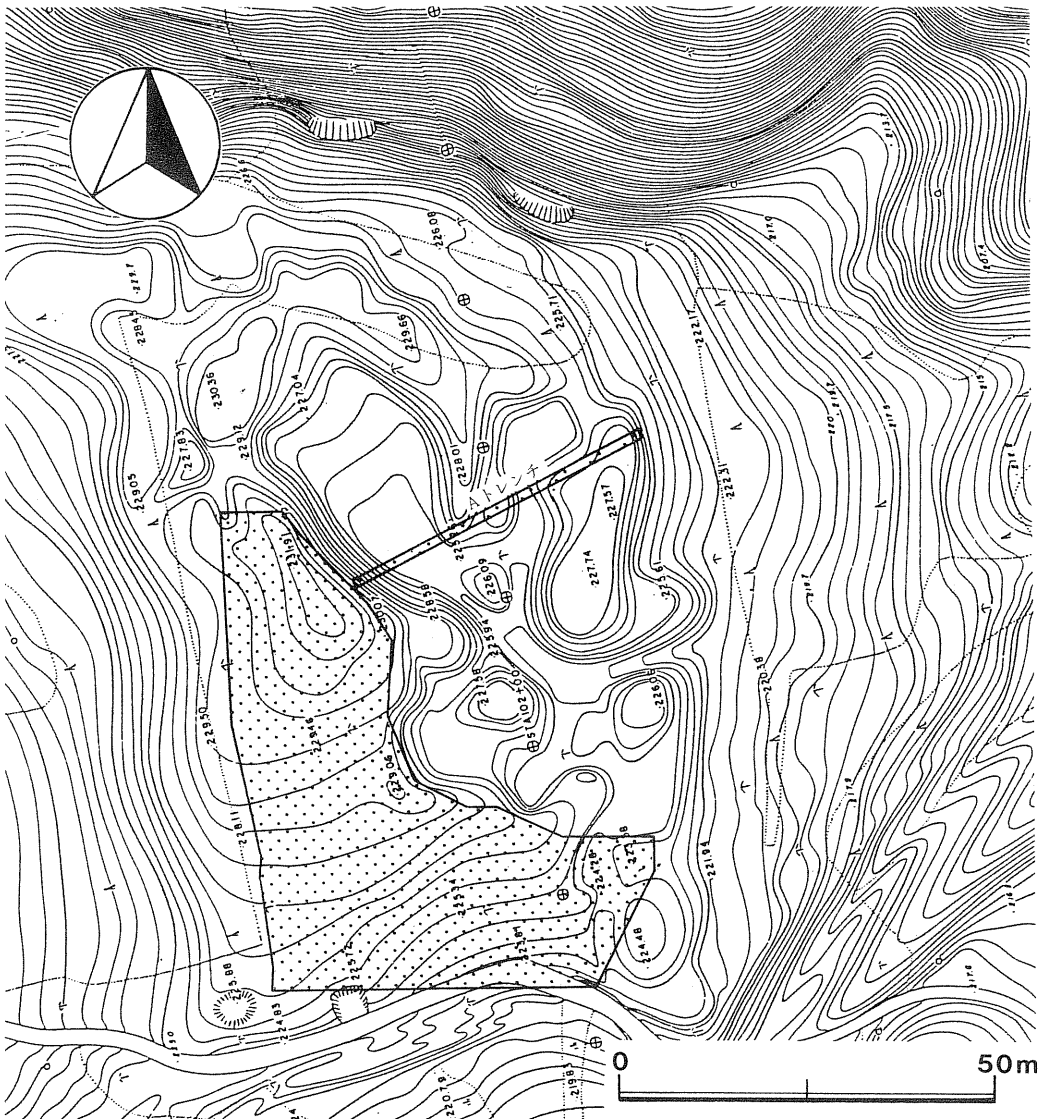


# 第1章 発掘調査の概要

## 第1節 遺跡の概観

館平館Ⅱ遺跡は、小坂川右岸の丘陵の東端部に所在し、館平館Ⅰ遺跡の北に位置する。標高は約225mである。

調査対象地は凹凸の激しい地形を呈している。この凹凸地形が自然地形なのか、それとも人



第1図 遺跡周辺の地形と発掘調査区

工によるものなのか不明であったため、トレンチを設定して調査を試みた。その結果、トロッコの線路と枕木が出土した。地元の方々からの情報なども参考にすると、この凹凸地形は、レンガ製造のための粘土を採掘した跡であると判断された。レンガは小坂鉄道や小坂鉱山の工場に使用された。明治時代のことである。従って、遺跡の大部分は、この粘土採掘のために破壊されていたことになる。発掘調査は、破壊からまぬがれた部分を対象に実施した。

## 第2節 発掘調査の方法

発掘調査は、日本道路公団が設定したS T A 102+00を発掘原点(M50)とし、4 m×4 mにグリッド杭を打設して、実施した。グリッドの一边は磁北方向に一致する。また、グリッドの名称は、南北方向の算用数字と東西方向のアルファベットの組み合わせで南東隅部の杭をもって呼称することにした。

## 第3節 調査の経過

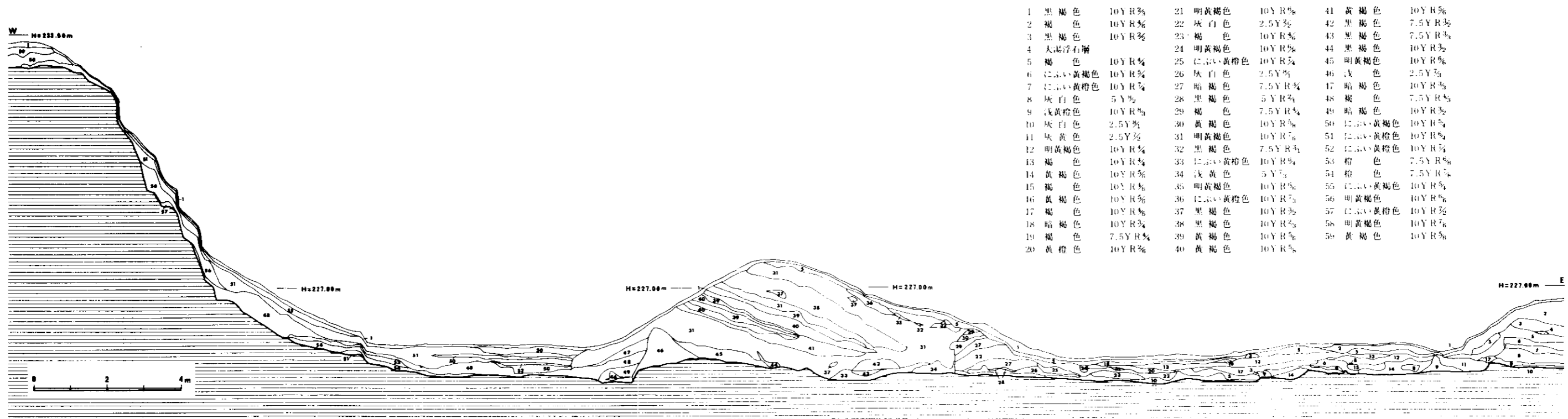
発掘調査期間は、昭和58年6月8日～同年6月30日である。

6月8日から、調査対象地域の凹凸地形の性格(自然地形か人工によるものか)を把握するため、トレンチを設定して、調査を開始する。9日、トレンチからトロッコの線路と枕木が出土する。第1節で述べたごとく、凹凸地形は粘土採掘によるものであり、遺跡の大部分が破壊されていることが判明したため、破壊からまぬがれた部分を調査対象地域とし、調査を進めることとした。6月10日からの粗掘りでは、弥生時代と縄文時代の土器片が若干出土したのみで、遺構は検出されなかった。6月21日から、トレンチの土層の実測を開始した。

# 第2章 調査の記録

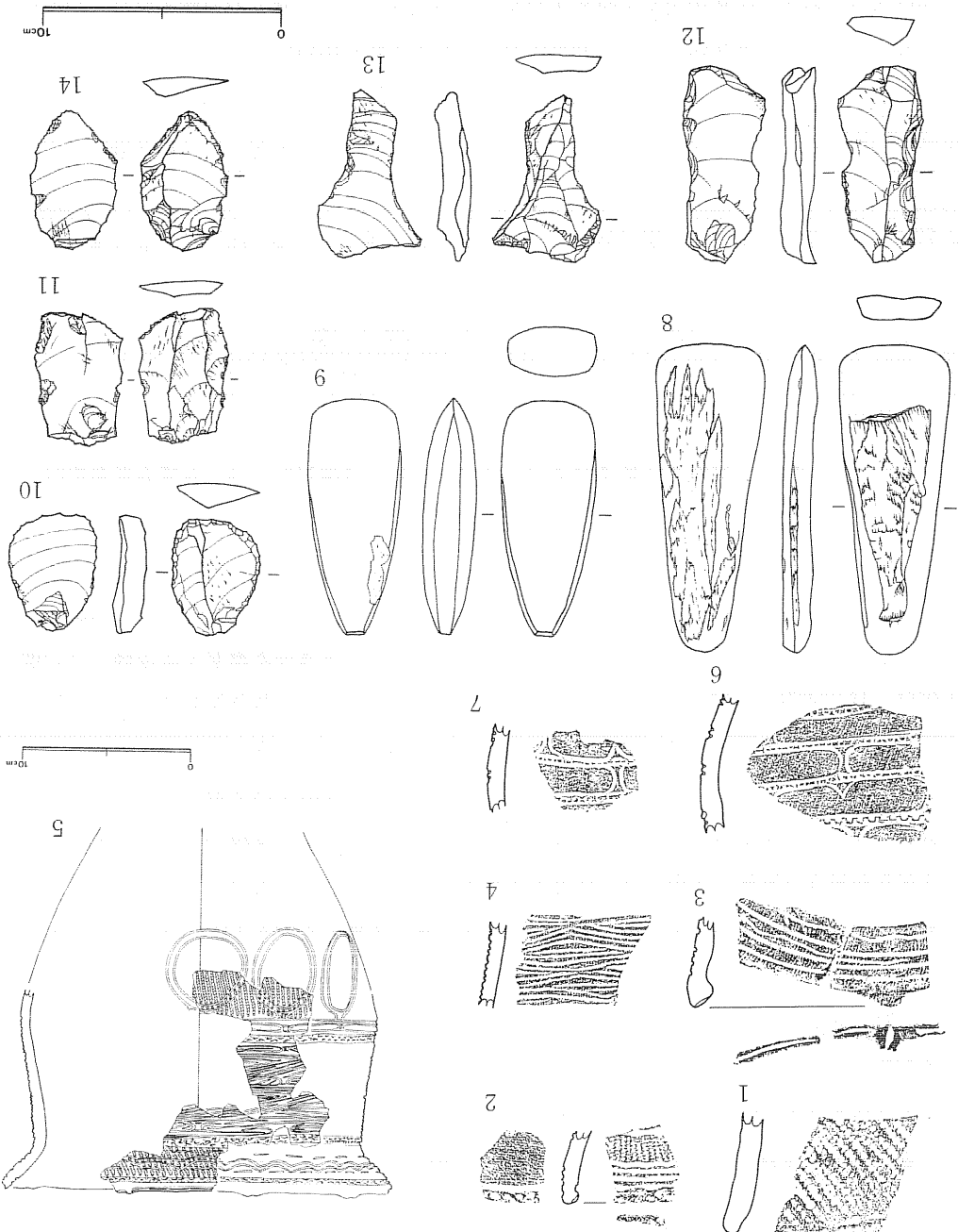
## 出土遺物

検出された遺構はなく、遺物が若干出土したのみであったため、一括して記述することにした。



第2図 土層実測図Aトレンチ土層実測図

第3図 出土遺物



①土器（第3図1～7）

1は深鉢形土器と思われ、器表面に斜縄文が施されている。縄文時代後期の土器であろう。

2～7は弥生時代の土器と考えられる。5は口縁部が「く」の字に外反する深鉢形土器と思われる。文様は口唇部から胴下半部に及び、口唇部・口縁部・胴上半部・胴下半部を交互刺突文で区画し、それぞれに異なる文様を施文している。口唇部には1本の沈線が施文され、頂部が凹む小突起を数個有するものと考えられる。口縁部は縦走縄文の上に、沈線による連弧文や刺突文が施される。胴上半部は沈線文を密に充填している。胴下半部は縦走縄文の上に沈線で円形文を施している。口縁部内面には2本の沈線文が見られる。胎土・焼成とも良好である。

2～4・6・7の器形は不明である。3は頂部に刺突文を有する小突起が見られ、口縁部には縦走縄文の上に数条の平行沈線とくずれた鋸歯状文が施されている。4は5の胴上半部と同じ沈線文が施されている。6と7は同一個体と考えられ、縦走縄文の上に沈線文と竹管文が施されている。2は縦走縄文の上に平行沈線文が見える。口唇部にも縄文が認められ、口縁部内面にも、刺突文と沈線文が見える。

②石器（第3図8～14）

8と9は磨製石斧である。8は片刃であり、9は両刃である。石材は、8が頁岩であり、9が緑色凝灰岩である。

10は搔器であり、11～14は削器と考えられる。いずれも頁岩を使用している。

## 第3章 ま と め

館平館Ⅱ遺跡は、明治時代に大部分破壊されていたため、遺跡の性格を把握することはできなかった。

出土遺物も少なく、弥生時代の土器がわずかに注目されるにとどまった。小坂地区の弥生時代の土器については、地元の研究者が1960年代に精力的に調査し、遺物を公表してきた。

当該遺跡出土の弥生時代後期に編年されている土器群で、交互刺突文がメルクマールとなる。東北縦貫自動車道に伴う調査では、横館遺跡・大岱Ⅰ遺跡・大岱Ⅲ遺跡でも出土している。これらの土器は、大湯軽石層の下の褐色土層中で出土する。しかしながら、この種の土器を伴う遺構は検出されないため、この土器を持った人々の生活の実態は不明である。



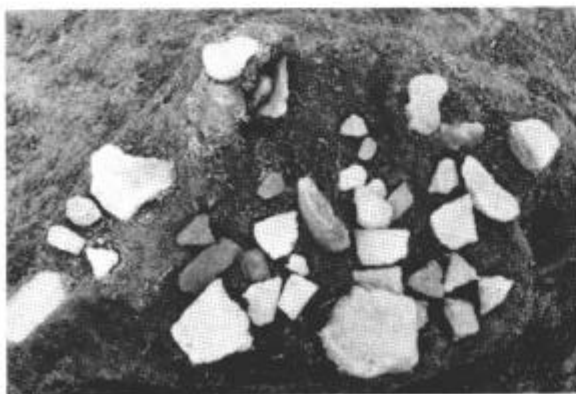
館平館II遺跡全景（南▶）



遺跡東側トレンチ（西▶）



遺跡東側トレンチ（北東▶）



遺物出土状態



トロッコ線路（トレンチ内検出）

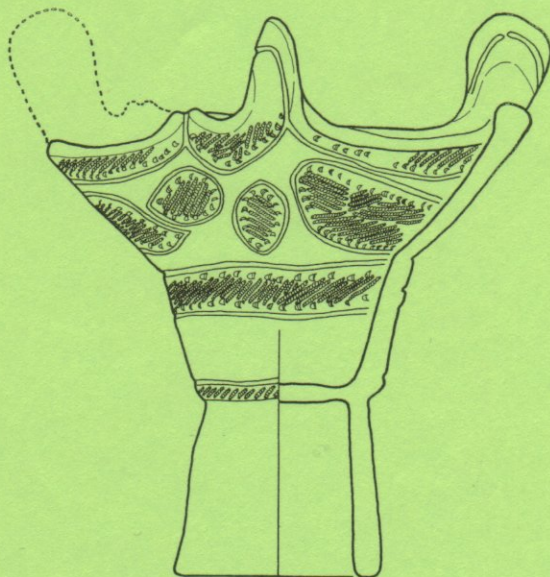




出土遺物

# 白長根館 I 遺跡

遺跡番号 No. 5  
所在地 鹿角郡小坂町字白長根20番地他  
調査期間 昭和58年7月1日～10月4日  
発掘調査予定面積 2,600m<sup>2</sup>  
発掘調査面積 2,916m<sup>2</sup>



## 第1章 発掘調査の概要

### 第1節 遺跡の概観

昭和56年に行われた範囲確認調査の結果、遺跡の総面積は白長根館Ⅰ遺跡が3,250㎡、白長根館Ⅱ遺跡は470㎡と判明した。

遺跡は小坂町の南西部に張り出した河岸段丘上の縁辺部に位置する。標高は約217mで、沖積地との比高差は38m。地形は西方に向い緩やかに上昇し、やがて丘陵に連らなる。南方及び北方は急傾斜で落ち込み沢地に至る。付近には湧水が数カ所あり、現在も使用が可能である。遺跡周辺は山林で、過去において耕作地等に利用されたことはなく、松、杉、雑木が現在も一面に生い茂る。段丘上に隣接し約50m北方に白長根館Ⅱ遺跡が所在する。

遺跡の基本土層は、白長根館Ⅰ遺跡が5層に区分される。1層は黒褐色土で、調査開始前重機により表土除去が行われたため一部攪乱している。2層は大湯軽石層、斜面下位部程残存状態が良く、厚い所では約20cmの堆積を見る。色調と粒子の大小からさらに3層に細別される。

3層は軟質の暗褐色土で、所謂チョコレート色を呈し、上位部分に少量の浮石粒子を混入する。4層は比較的軟質の黒褐色土及び黒色土で、この層中より土器の出土が多い。5層はやや堅くしまった暗褐色土。縄文時代の遺構はこの層から地山にかけて確認された。

白長根館Ⅱ遺跡は馬の背状を呈し、一部では表土層が15cmと薄い、基本土層は同じである。

### 第2節 調査の方法

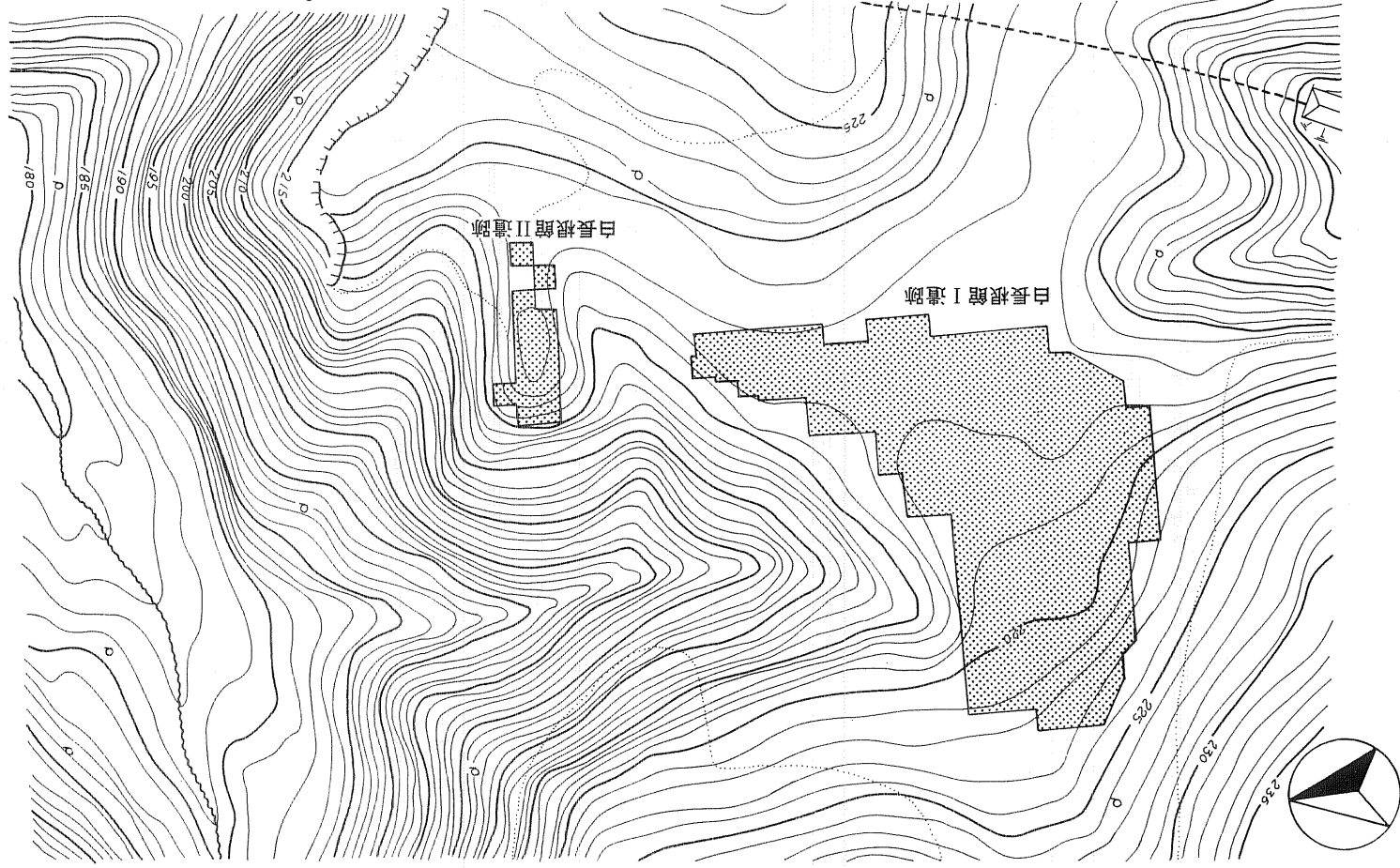
グリッド方式を用いて行った。

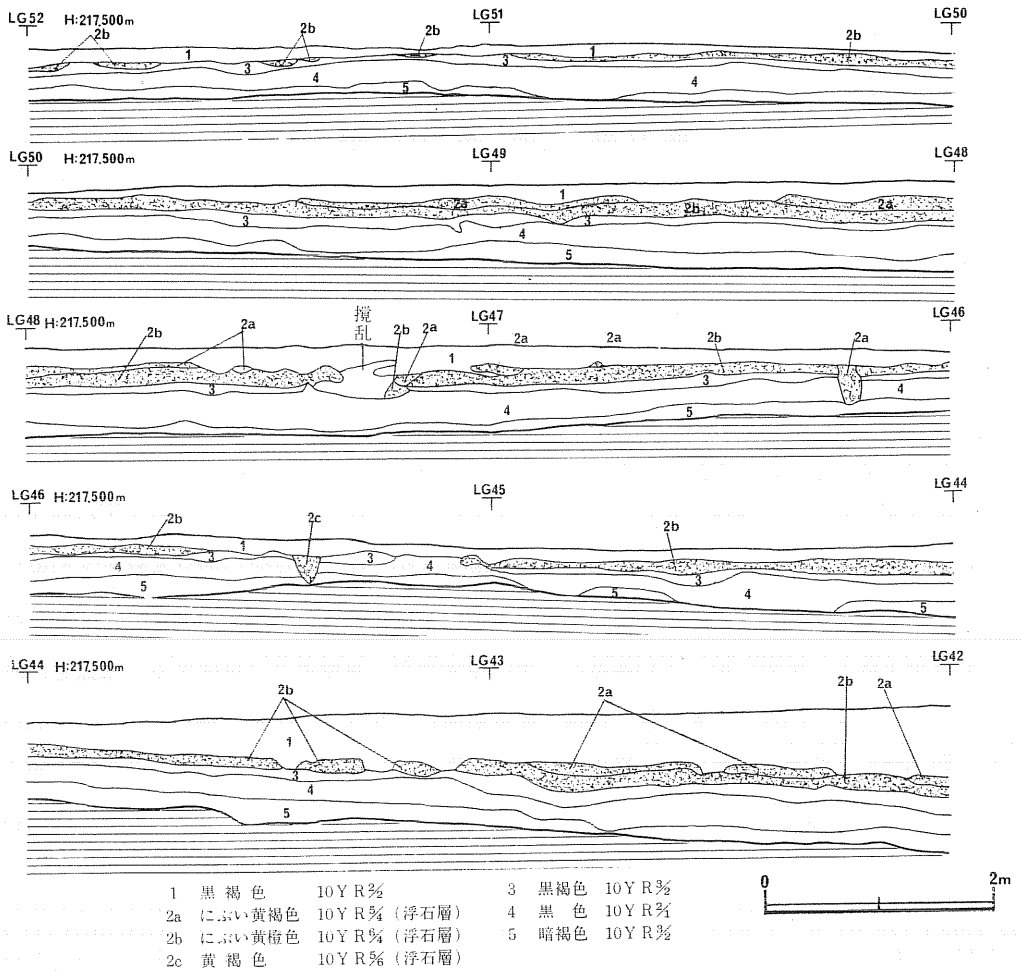
白長根館Ⅰ、Ⅱ両遺跡を含む約3,720㎡の範囲を40m×40mの大グリッドで分割、さらに各調査区内には4m×4mの小グリッドを設定した。グリッドは日本道路公団設置の路線中心杭STA106を基点MA50とし、南北方向に算用数字、東西方向にアルファベットを順列させ、南東隅の合致記号をそのグリッドの名称とした。従って、大グリッドは南北方向が50、60……東西方向がMA、NAとなり、小グリッドはこれを10×10に分割することから基点から数えると西方向にMA、MB……、北方向に50、51……となる。

### 第3節 調査の経過



第一区 白長根館 I・II 遺跡地形、遺跡区位置図





第2図 白長根館I遺跡土層(南一北)

発掘調査は昭和58年7月1日～10月4日まで実施した。

7月1日、現地にて作業員に対し、調査の目的、方法等を説明、午後、必要物品を全員で現場まで運ぶ。2日、粗掘作業開始、調査区西面部より行方。6日、MH46グリッドで、平安時代竪穴住居跡検出、他に数軒隣接している。8日、調査区中央部を中心に土壇、フラスコ状ピットが多数検出され始める。18日、MD42グリッドで立石検出、精査するにつれ竪穴住居跡内にすえられていることが判明。さらに調査区東面部より縄文時代住居跡が2軒検出される。26日、MJ44グリッド周辺にて多量の鉄滓出土。付近より平安時代住居跡検出。工房跡の可能性あり。8月2日、遺構精査開始、今年は特に暑い。10日、一部のフラスコ内より炭化堅果類出土。20日、粗掘り終了。遺構の実測開始。9月6日、小坂町立川上小学校見学。教育庁文化課長補佐中谷雅昭氏来跡。9日、小坂小学校見学。調査区南東部より3基のTピットが平行して検出。17日、遺構の精査をほぼ終了し、実測作業に集中する。30日、教育庁文化課長大井康氏一行来跡。10月1日、実測ほぼ終了。写真撮影と共に補足調査を行う。4日、調査終了。終了後作業員に対し調査結果の概略を説明する。朝夕は涼しくなった。

## 第2章 調査の記録

### 第1節 検出遺構

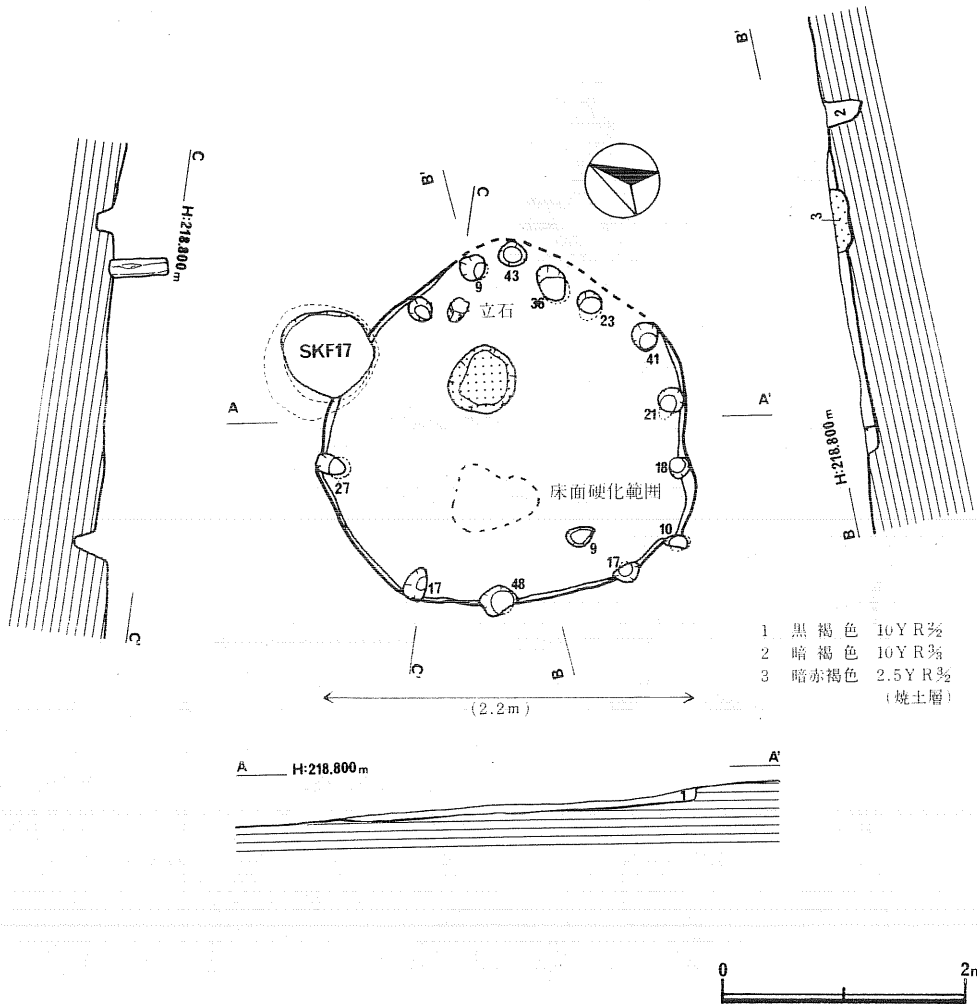
#### 1 縄文時代

##### (1) 竪穴住居跡

**SI 01** (第4図) 平面形は北東側がややふくらむ楕円形。堆積土は軟質の黒褐色土1層で、部分的に焼土を混入。遺構は西から東にかけての斜面上に構築されており、斜面下部の東壁は検出されなかった。西壁は良く残存しており壁高は20~25cm。床面は凹凸を呈するが堅くしまっている。西南部の床面上に白色粘土が堆積、人為的に敷かれたもので硬化している。柱穴は壁柱を主体とし壁際に沿って13本巡る。炉は地床炉で、東壁寄りに位置する。床面を15cm掘り凹めてつくり、内部に多量の焼土堆積。炉に対面して東壁際に立石が検出された。立石は床面を約16cm掘り凹めて収めた後、褐色土をつめて固定している。現存状態で南東方向に約6度傾斜している。北東壁付近でSKF17と重複しており、住居跡が古い。遺物は北東壁付近の床面から深鉢形土器が、南西部からは鉢形土器の破片が少量出土。いずれも縄文時代後期に属する。

**SI 02** (第5図) 平面形は東西に長い楕円形を呈する。確認面で遺構内中央部に多量の炭化材が集積していた。炭化材は住居跡床面より浮いた状態を呈しており、直下の床面に火熱の跡がないことから、本遺構に直接関連するものではない。壁はいずれもほぼ垂直に立ち上り、高さ9~16cm。柱穴は壁際と内部に設けられている。内部のものは炉を囲む様に配され30~74cmと深く、主柱穴と考えられる。床面は西側が高くなっており、炉の西端付近で緩やかな段を形成する。全体がやや凹凸を呈するが、堅くしまっている。炉は地床炉で、住居跡の中央に位置し、床面を約20cm掘り凹めてつくり、多量の焼土が堆積。炉の周縁部はやや高まりを呈する。炉の南面に楕円形の浅いピットを付設しており、堆積土は褐色土を多量に混入する暗褐色土で焼土の混入はない。遺物は炭化材の中及び床面より出土しており、いずれも鉢形土器の破片で縄文時代後期に属する。その他炭化したクルミが2個炭化材中に検出された。

**SI 03** (第6図) 調査区西端部の傾斜地に構築されており、北側と東側の壁の一部は検出されなかった。平面形は楕円形を呈すると思われる。堆積土は軟質の黒色土を主体に、壁付近では黄褐色土を多量に含む。壁は西側が良好に残存しており、ほぼ垂直に立ち上り、高さ23cm。柱穴は内部に4本の主柱穴。底面はほぼ平坦だが、壁付近はやや盛り上がっている。土質は堅くしまっており、一部で土中の小礫が露出。炉は地床炉で、中央部に位置し、地山を4~6cm皿状に掘り凹め、多量の焼土が堆積、東側でSK30、SK31と重複しており、いずれも、土壌が

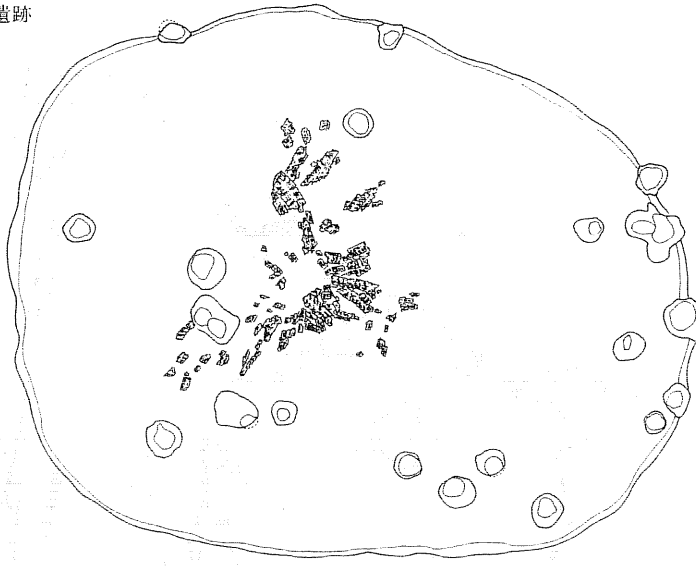


第4図 S101実測図

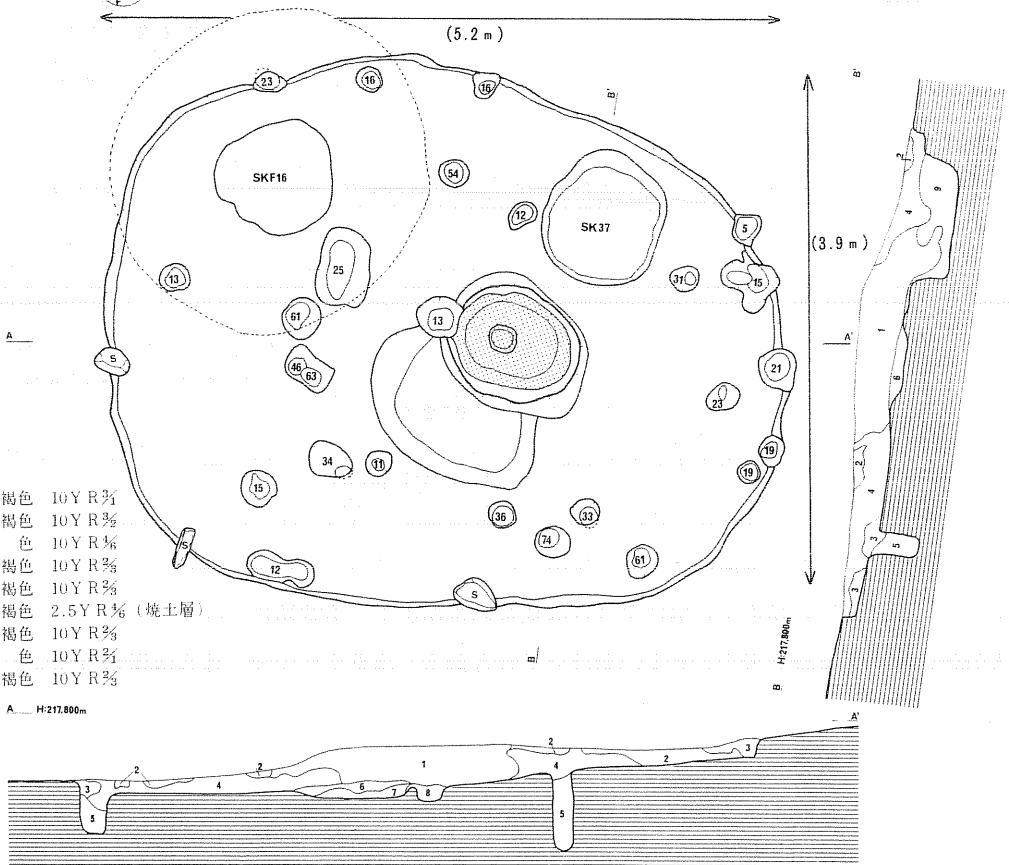
新しい。出土遺物は炉周辺の床面及び堆積土1層の上位面より縄文時代後期の土器片である。

S104 (第7図) 確認面で、砂粒混入の明黄褐色土が遺構内部に楕円形の範囲で分布しているのが認められた。平面形は東壁が検出されないが、東西に長い楕円形を呈すると思われる。堆積土は前述の明黄褐色土の他に壁付近は軟質の黒褐色土。明黄褐色土はほぼ床面までみられ人為的に埋められたと考えられる。壁はいずれも低く、高さ2~4cm。柱穴は遺構外周に6本巡り、遺構内にはみられない。床面はほぼ平坦だが、西側はやや傾斜しており土質は比較的軟かい。炉は東側にあり、扁平な河原石を用いて円形に配列した石囲炉である。内部に焼土はほとんどみられなく底面に少量の炭化物が付着。炉内上面には明黄褐色土が堆積。出土遺物は石囲炉付近及び遺構内東側の堆積土より縄文時代後期土器片である。

白長根館 I 遺跡



(5.2 m)



- 1 黒褐色 10Y R 彩
- 2 黒褐色 10Y R 彩
- 3 褐色 10Y R 彩
- 4 黒褐色 10Y R 彩
- 5 黒褐色 10Y R 彩
- 6 赤褐色 2.5Y R 彩 (焼土層)
- 7 黒褐色 10Y R 彩
- 8 黒色 10Y R 彩
- 9 黒褐色 10Y R 彩

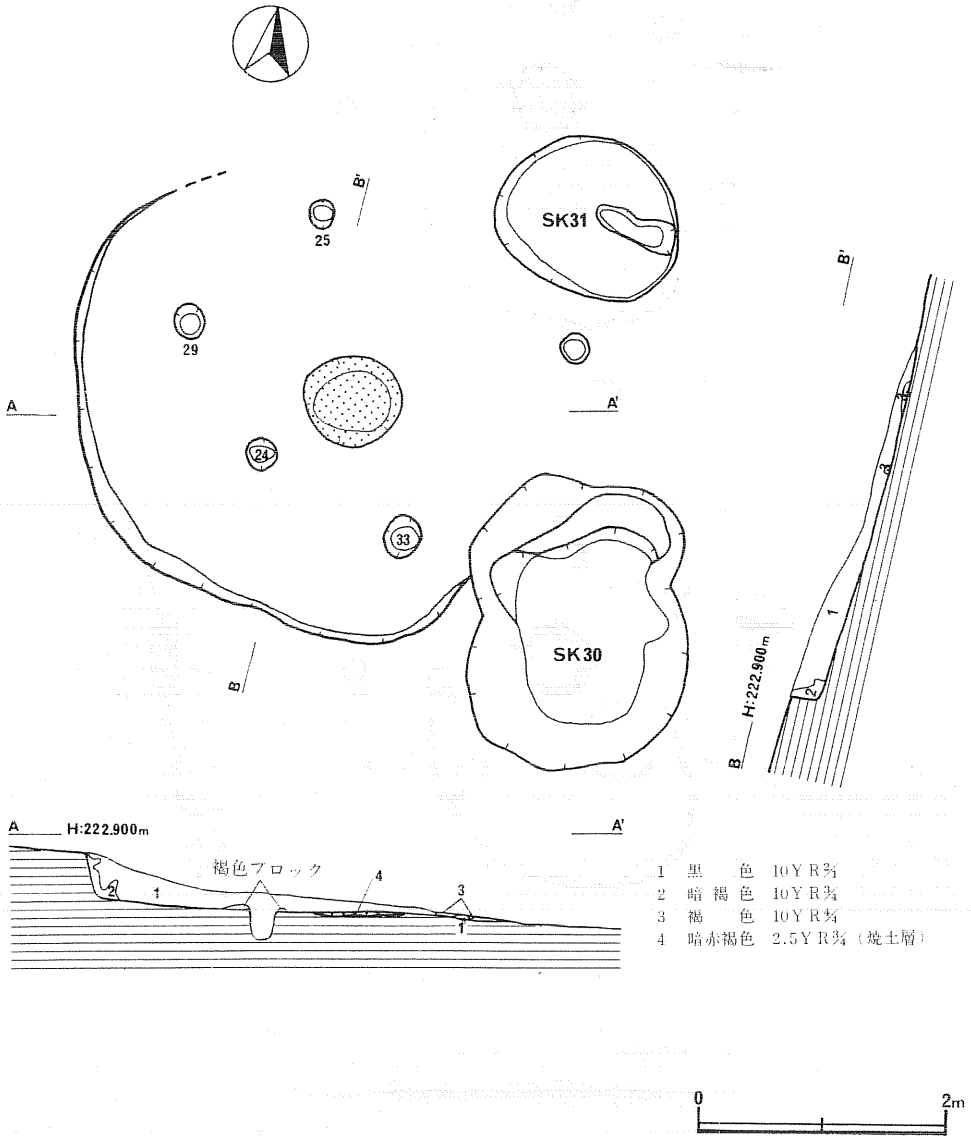
A H:217,800mm

B H:217,800mm

第5図 S102実測図

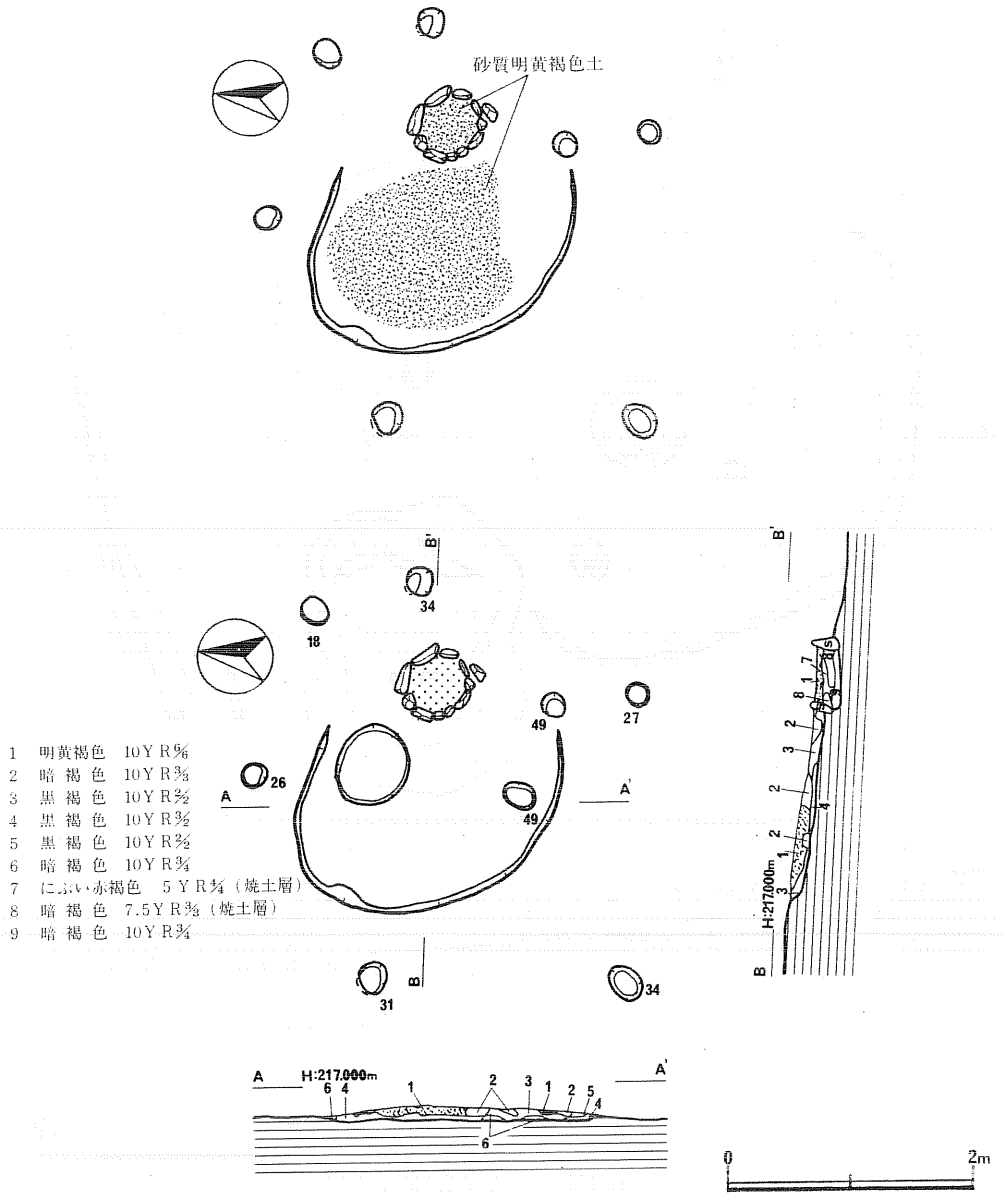
0 2m





第6図 S I 03実測図

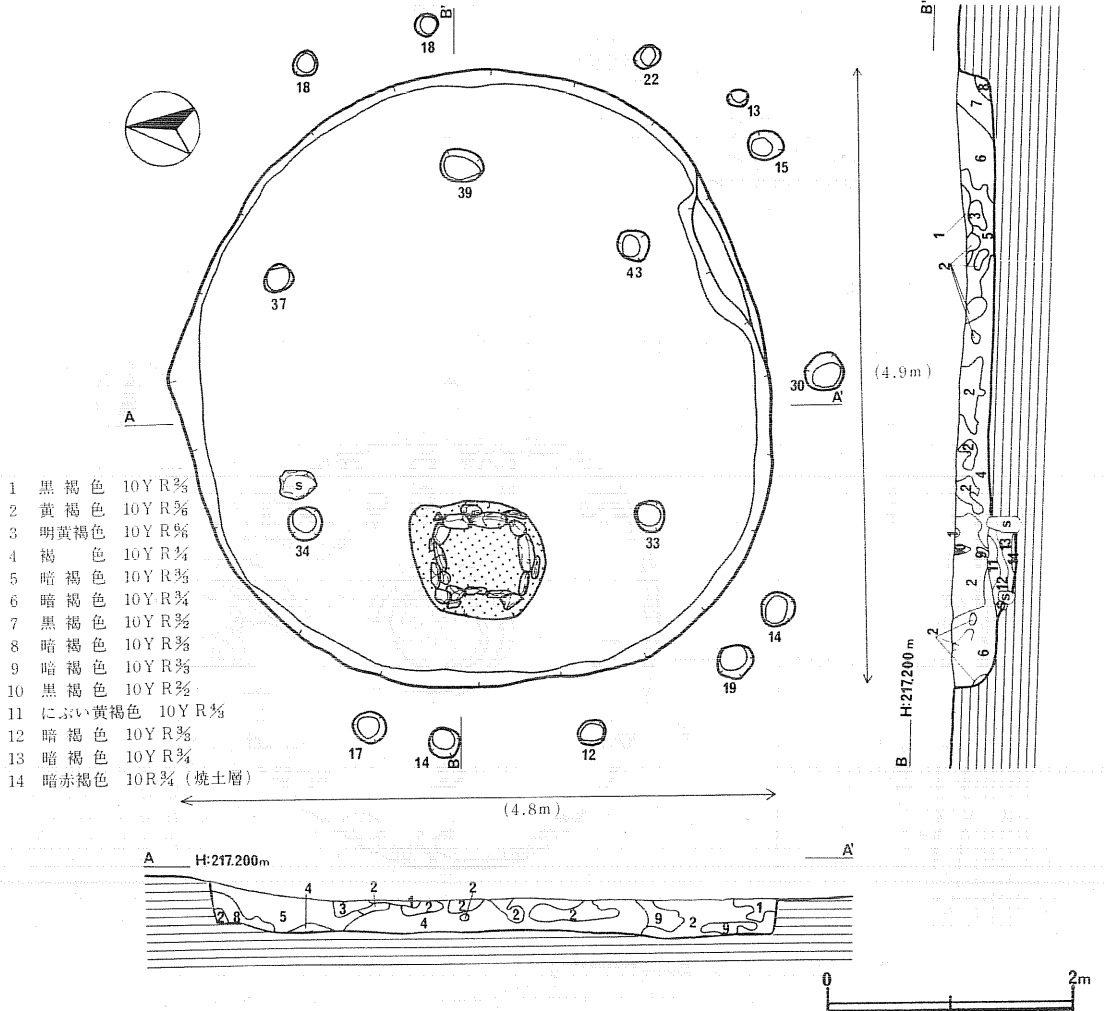
S I 05 (第8図) 平面形は東西にやや長い楕円形。堆積土は、黄褐色土を主体に壁付近ではやや堅くしまった暗褐色土。黄褐色土は確認面で既に検出され、堆積は床面上までなされていることから、人為的な埋め戻しの作業がなされたと考えられる。壁は良好に残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。高さは33~42cm。柱穴は内部に5本の主柱穴を五角形に配列し、外周には12本の柱穴が一部で2個1対の形で巡る。主柱穴は33~43cmと深い傾向を有す。底面は平坦で堅くしまっているが、南東部ではわずかに盛り上り、緩い段を形成している。炉は石囲炉で遺構内西側に位置し、扁平な河原石を用い方形に配列。配列は最初西面部に最も大きな石を2個埋め



第7図 SI 04実測図

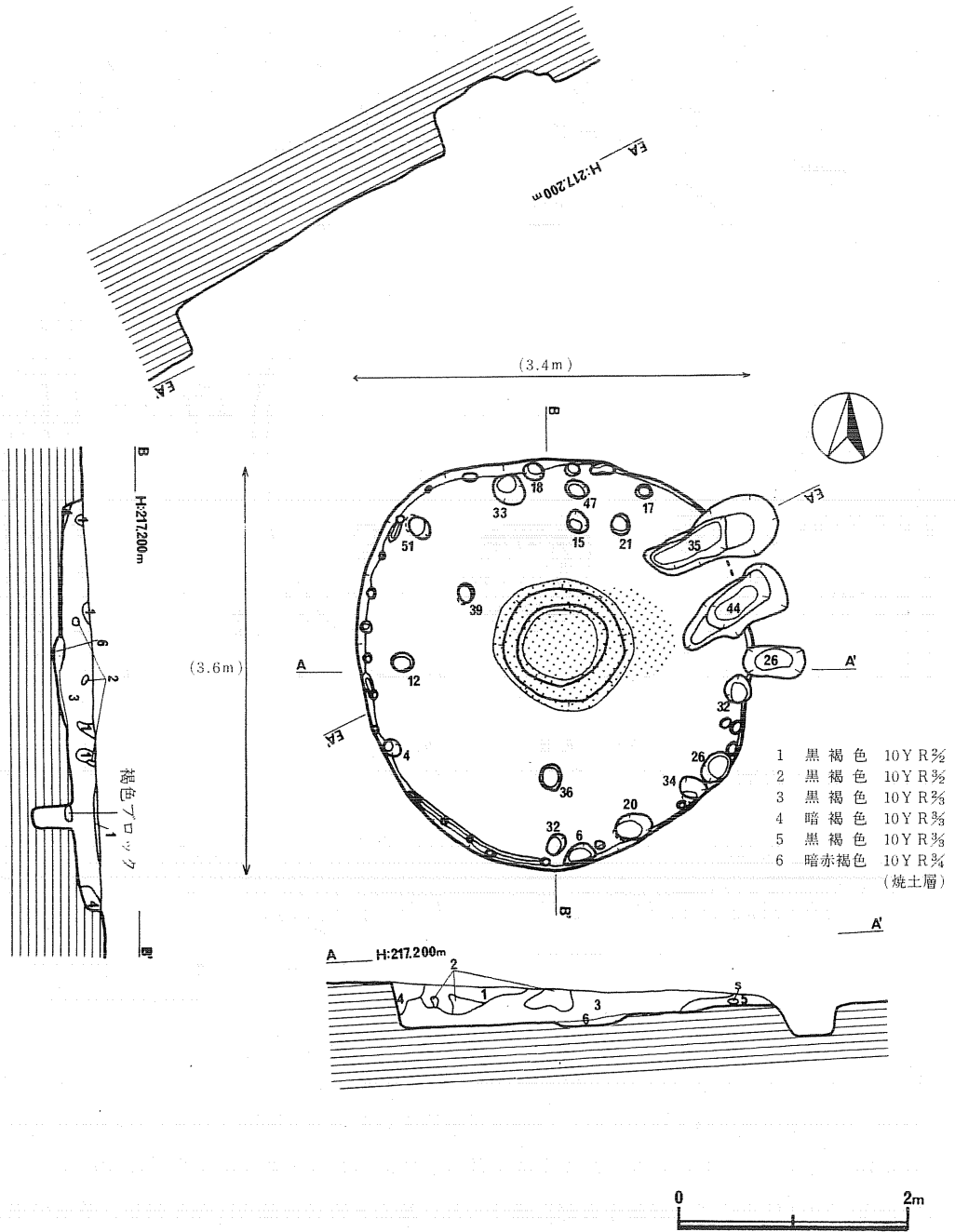
込み、次いで北、南側に西方向へ順次、最後に西面部にやや小さな石を設置してから、すき間に小石を充填し、各石の下位部に褐色土を貼り付け固定している。東側の石は最も火熱を受けている。炉の西側の床面は極めて堅くしまっている。出土遺物は堆積土中より少量の縄文時代前期、中期、後期の各土器片がある。

SI 06 (第9図) 平面形は南北にわずかに長い楕円形。堆積土は軟質の黒褐色土を主体とし、炭化物を少量混入する。壁は西側が高く、東側になるに従い低くなる。西側の壁で高さ10



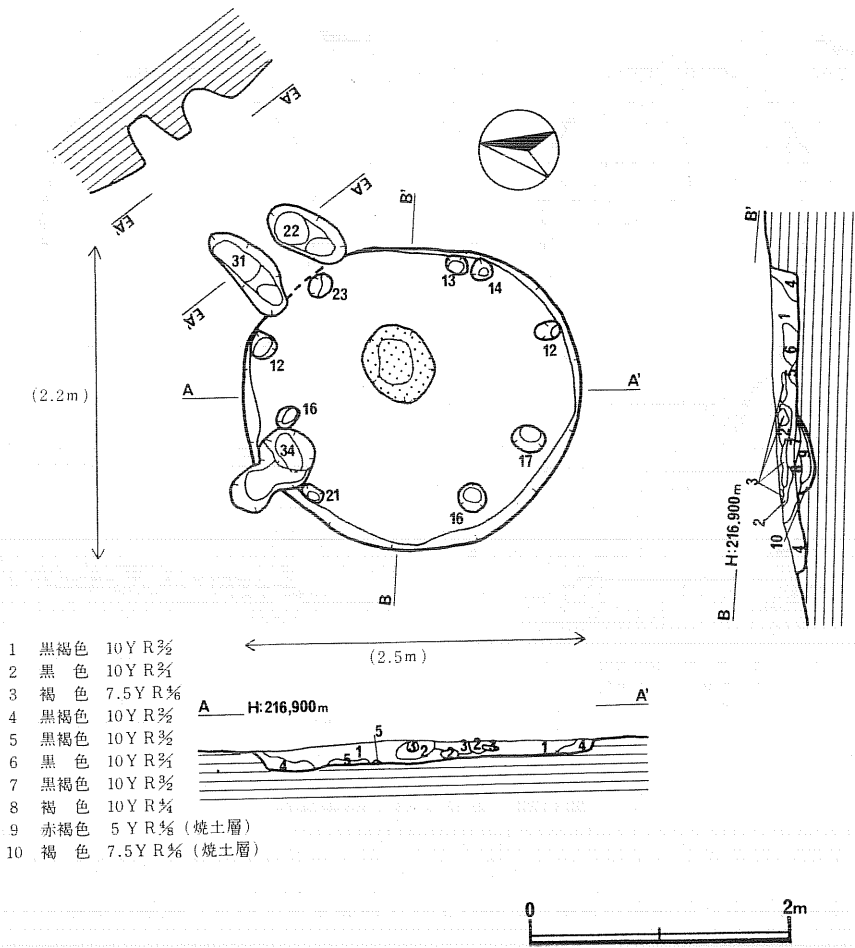
第8図 S105実測図

～11cm。壁溝は西側に浅く検出され、内部に杭状の小穴がほぼ等間隔で巡る。柱穴は壁に沿って巡る他、内部に5本設けられ、内4本は主柱穴と考えられる。底面は平坦で比較的堅くしまっている。炉は地床炉で住居跡中央部に設けられ、地山を約15cm皿状に掘り凹む。多量の焼土が堆積し、焼土の一部は炉外西側の床面にも広く散布している。北東部には壁部をはさんで2条の掘り凹みが東方向へのびている。凹みは長軸55～62cmの楕円形を呈し、深さ55cm。堆積土は住居跡内のものと同様暗褐色土であるが、極めて軟質。底面、壁面共凹凸が激しいが土質は極めて堅くしまっている。出入口施設の痕跡と考えられる。出土遺物は、西側の壁付近の床面よりほぼ完形の注口土器と、堆積土中からは縄文時代後期の土器片である。



第9図 S I 06実測図

S I 07 (第10図) 平面形は南北にやや長い楕円形、住居跡形態は前述S I 06と極めて類似している。堆積土はやや軟質の黒褐色土を主体とする。壁は西側が明確で、東側の壁は一部が検出されない。柱穴は壁に沿って9本巡り、内部にはみられない。床面は東側の壁寄りには緩く傾



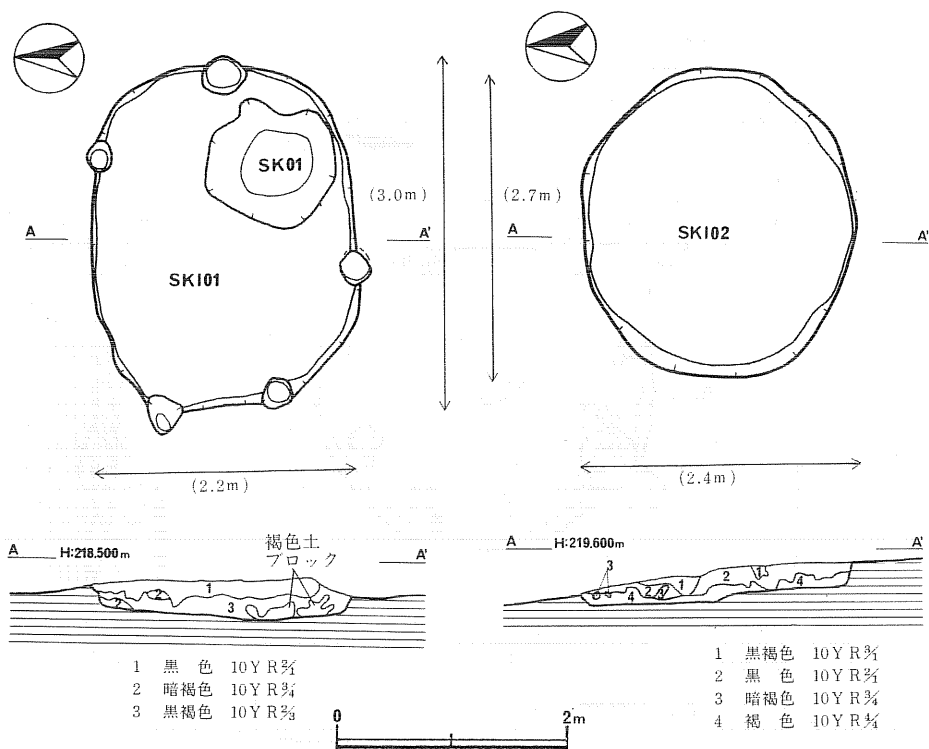
第10図 S I 07実測図

斜するが、他は平坦でしまっている。炉は地床炉で、住居跡中央に設けられ、地山を約10cm皿状に掘り凹めている。多量の焼土が堆積している。S I 16の場合と同様に、東側に2条の楕円形の掘り凹みを有す。堆積土は極めて軟質の黒褐色土で、底面壁面は共に凹凸を呈するが、堅くしまっている。出土遺物は床面よりほぼ完形の縄文時代後期の土器、堆積土中より縄文土器の細片である。

(2) 竪穴状遺構

S K I 01 (第11図) 平面形は東一西に長い楕円形、堆積土は比較的しまった黒褐色土と暗褐色土を主体とする。壁は東側がやや不明瞭。柱穴は壁に沿って5本巡る。底面はやや凹凸を呈し、東側の土質は軟らかくもろい。東側でS K 01と重複しており、土壌が新しい。出土遺物は床面及び堆積土中より縄文時代後期の土器片である。

S K I 02 (第11図) 平面形は東一西にやや長い楕円形。堆積土は部分的に褐色土を多量に



第11図 SK101・02実測図

混入する軟質の黒色土及び黒褐色土を主体にする。壁は西面部を除き低く関連する柱穴はみられない。底面は平坦だが西面から南面にかけては1段高まっている。遺物は堆積土より縄文土器細片が少量出土したのみである。

### (3) 土壌

42基検出された。SK37は平安時代に属する。そのうち遺物の検出された土壌は4基で、いずれも縄文後期前葉～中葉（十腰内I～II式に比定）に属する。他は時期が不明だが形態、堆積土状況（大湯軽石を混入しない）、周辺からの出土遺物等から縄文時代のものとして考え、一括掲載した。但しSK39、41、42、43については平安時代の住居跡に付属すると思われる。

**SK01**（第12図） 平面形は110cm×100cmの不整楕円形。上位部でやや播鉢状に、下部部で円筒状に掘り込まれ、深さ140cm。SK101内に検出されたが、土壌が新しい。

**SK02**（第12図） 平面形は200cm×184cmの楕円形。深さ80cm。堆積土に褐色土と炭化物を比較的多く混入。底面付近より縄文時代後期土器片出土。

**SK03**（第12図） 平面形は直径132cmの不整形円形。深さ24cm。堆積土は軟質の黒色土1層で底面付近に炭化物混入。

**SK04**（第12図） 平面形は80cm×68cmの楕円形。深さ32cm。

- S K 05 (第12図) 平面形は180cm×152cmの楕円形。深さ48cm。底面は平坦。
- S K 06 (第12図) 平面形は168cm×120cmの楕円形。深さ68cm。堆積土に多量の黄褐色土を混入。底面は東端部で一段深く凹む。
- S K 07 (第12図) 平面形は直径140cmの円形。深さ36cm。底面は平坦で堅くしまっている。堆積土上面より少量の縄文土器片出土。
- S K 08 平面形は140cm×80cmの楕円形。深さ24cm。底面北東部に柱穴状のピットを有す。
- S K 09 (第12図) 平面形は直径212cmの円形。深さ68cm。堆積土下層に焼土、炭化物を混入、合わせてこの層中より縄文時代後期土器片が比較的多く出土。
- S K 10 (第12図) 平面形は156cm×100cmの楕円形。深さ28cm。南壁は段を呈す。堆積土下層に焼土炭化物をやや多く混入。
- S K 11 (第12図) 平面形は120cm×112cmの不整楕円形。深さ24cm。
- S K 12 平面形は直径108cmの円形。深さ36cm。底面は平坦だが、東端部で一段深く掘り凹められている。
- S K 13 平面形は直径100cmの円形。深さ44cm。
- S K 14 平面形は120cm×108cmの楕円形。深さ28cm。底面は平坦で堅い。堆積土全層にわたり多量の黄褐色土を混入する。
- S K 15 平面形は直径88cmの円形。深さ20cm。堆積土下層に炭化物を混入。
- S K 16 平面形は156cm×132cmの楕円形。深さ48cm。底面は凹凸を呈し、壁面とも土質は軟かくもろい。堆積土に黄褐色土を比較的多く含む。
- S K 17 平面形は300cm×108cmの長楕円形。深さ32cm。底面は凹凸が激しい。堆積土上層に黄褐色土をやや多く混入。
- S K 18 (第13図) 平面形は128cmの楕円形。深さ80cm。底面は西端部でやや緩い段を形成。堆積土に多量の黄褐色土混入。
- S K 19 平面形は楕円形、短軸120cm。深さ32cm。北西部でS K T 05と重複、土壌が新しい。
- S K 20 (第13図) 平面形は120cm×90cmの楕円形。深さ32cm。堆積土に多量の褐色土を混入する。底面は凹凸を呈するが、堅くしまっている。
- S K 21 (第13図) 平面形は120cm×104cmの楕円形。深さ72cm。底面は平坦で、壁面共堅くしまっている。
- S K 22 平面形は292cm×268cmの不整楕円形。深さ60cm。壁は擂鉢状に落ち込んでおり、底面共凹凸が激しく土質はもろい。堆積土は底、壁面付近に多量の黄褐色土を混入。
- S K 23 (第13図) 平面形は132cm×124cmの楕円形。深さ32cm。堆積上層に多量の炭化物と焼土を混入するが、遺構内に火熱の痕跡はみられない。

S K 24 (第13図) 平面形は140cm×120cmの楕円形。深さ44cm。堆積土上層に、比較的多量の焼土、炭化物を混入。

S K 25 (第13図) 平面形は128cm×108cmの楕円形。深さ32cm。底面は凹凸が激しい。

S K 26 (第13図) 平面形は120cm×100cmの楕円形。深さ36cm。

S K 27 平面形は180cm×100cmの長楕円形で、中間部でややくびれを呈す。深さ27cm。堆積土下層に多量の黄褐色土を混入。

S K 28 平面形は直径92cmの円形。深さ36cm。底面は凹凸を呈し、東西方向に幅28cm、深さ14cmの溝状の凹みを有す。

S K 29 平面形は228cm×180cmの不整楕円形。深さ108cm。壁は擂鉢状に落ち込み、底面共土質はもろく剥落しやすい。堆積土全層に多量の黄褐色土を混入する。西面部でS I 03と重複、S K 29土壌が新しい。

S K 30 平面形は148cm×128cmの楕円形、深さ40cm。底面、壁面共凹凸が激しい。堆積土全層に黄褐色土を多量に混入。西面部でS I 03の推定壁と重複すると考えられる。

S K 31 (第13図) 平面形は132cm×108cmの楕円形。深さ72cm。底面は平坦で堅い。堆積土下層に褐色土を比較的多量に混入。

S K 32 (第13図) 平面形は直径100cmの円形。深さ56cm。底面は北端部で段を呈する。堆積土は全層にわたり部分的に褐色土塊を、底面付近には炭化物を混入する。

S K 33 (第13図) 平面形は108cm×80cmの楕円形。深さ24cm。底面は堅くしまっている。

S K 34 平面形は68cm×60cmの楕円形。深さ40cm。

S K 35 平面形は直径80cmの円形。深さ28cm。

S K 36 平面形は112cm×92cmの楕円形。深さ28cm。

S K 38 平面形は80cm×60cmの楕円形。深さ44cm。S K 41、42と共にS I 16に関連する遺構としての可能性も考えられる。いずれも堆積土は軟質の黒色土や黒褐色土で、褐色土粒子を混入せず底面付近に炭化物をやや多く含む。底面は凹凸が激しく壁面共剥落しやすい。

S K 39 (第13図) 平面形は160cm×144cmの楕円形。掘り込みは上位部で擂鉢状に、下位部で円筒状になされ、S K 01と似かよった形体を呈す。深さ168cm。堆積土は上層に褐色土を比較的多く含んだ粘質の暗褐色土、下層はやや硬くしまった黒褐色土を主体とする。

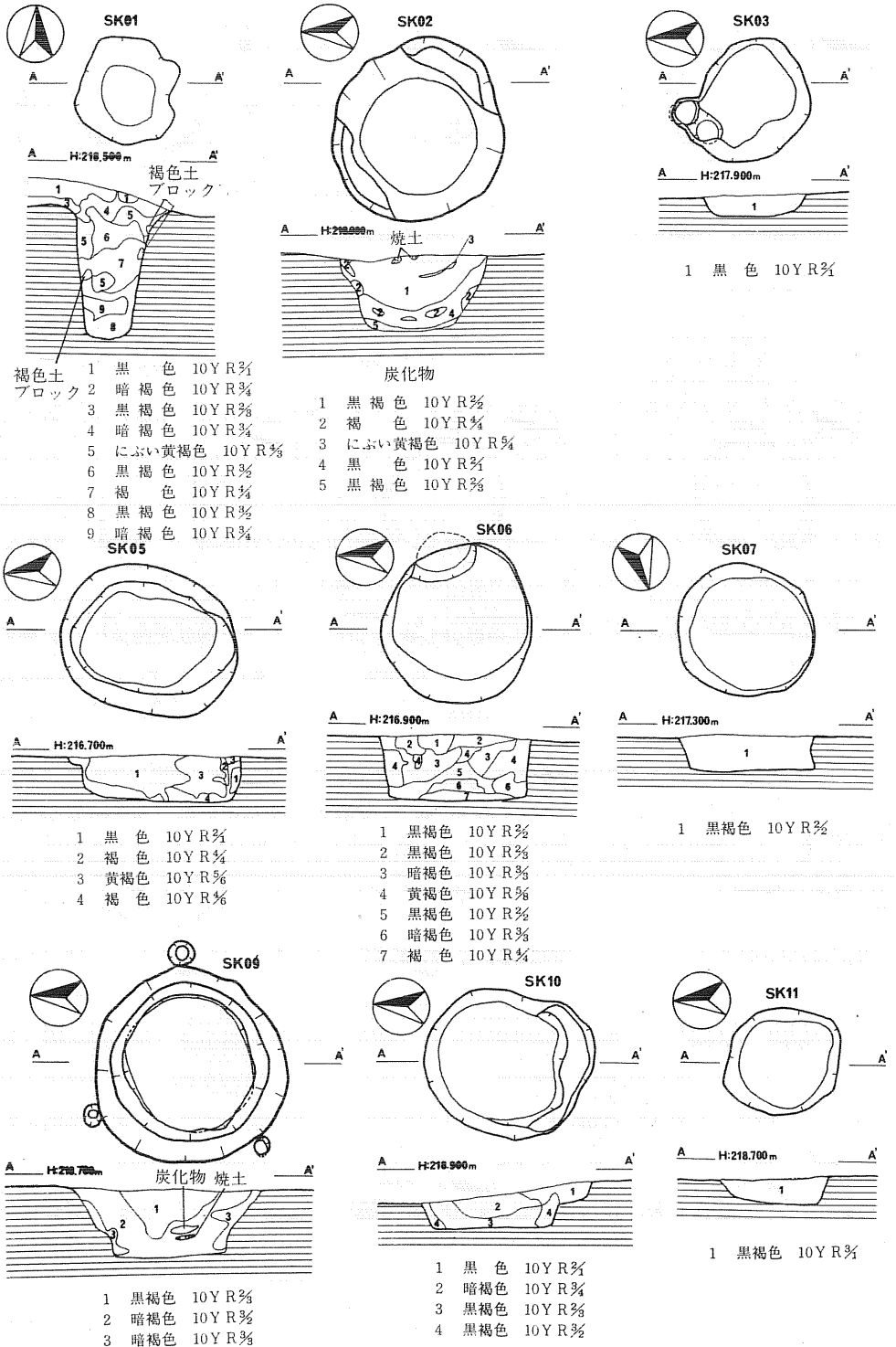
S K 40 平面形は112cm×60cmの楕円形。深さ28cm。

S K 41 平面形は100cm×52cmの楕円形。深さ28cm。

S K 42 平面形は92cm×76cmの楕円形。深さ27cm。底面壁面共凹凸が激しく土質はもろい。堆積土は軟質の黒褐色土を主体にする。S I 18と関連する可能性がある。

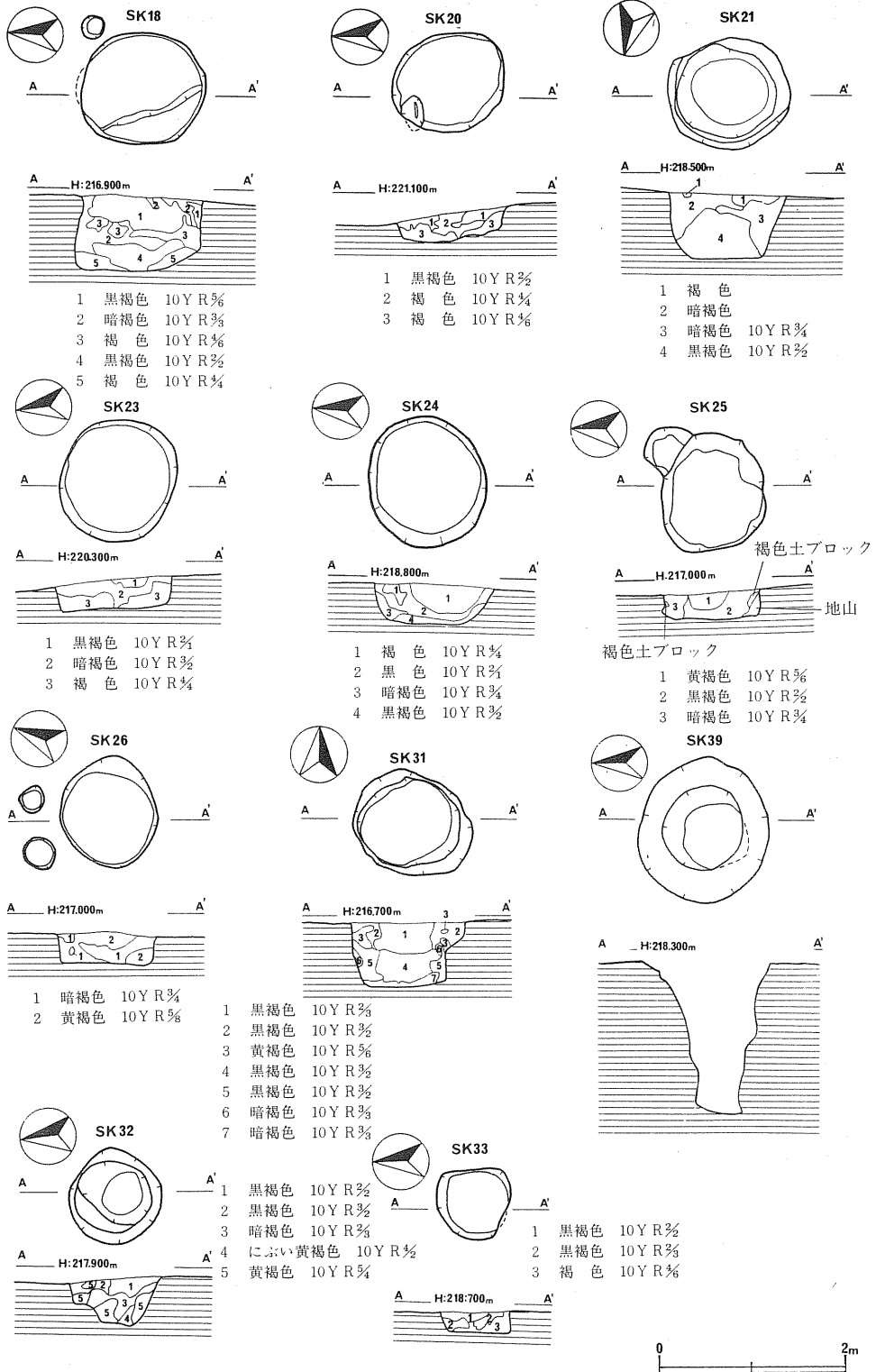
#### (4) フラスコ状ピット





第12図 SK01~03、05~07、09~11実測図

白長根館 I 遺跡



第13図 S K 18、20、21、23~26、31~33、39実測図

17基検出され、9基については堆積土の一部もしくは全てが人為的に埋められた痕跡を呈す。(実測図中スクリーントーン添付部分)。また底面付近より炭化した堅果類が出土しており、遺構の性格を示唆するものと言えよう。

**S K F 01** (第14図) 上面径92cm×92cm、底面径228cm×220cm。深さ184cm。堆積土は上面下50cmから底面にかけて埋め戻しによると思われる堅くしまった砂質の黄褐色土。北面部でS K F 10と重複し、側壁の一部が貫通している。貫通孔は半円を呈し径60cm、高さ73cm。西面部ではS K F 11と側壁下部部で接して生じた空洞をS K F 11方向から河原石で閉塞している。出土遺物は1層下部部から縄文時代後期の土器片が少量出土。

**S K F 02** (第14図) 上面径168cm×160cm、底面径188cm×180cm。深さ64cm。堆積土は暗褐色土を主体に上層には褐色土を下層には炭化物を比較的多量に含む。底面付近より縄文時代後期土器片出土。

**S K F 03** (第14図) 上面径180cm×160cm、底面径228cm×208cm。深さ192cm。堆積土は黒褐色土を主体とし、上層には褐色土、下層には多量の炭化物と焼土を混入。底面付近の12層、13層下部部より炭化堅果類がやや多く出土。2層下部部及び13層底面付近より縄文時代後期土器片が比較的多く出土。

**S K F 04** (第14図) 上面径112cm×96、底面径200cm×200cm。深さ132cm。堆積土は上層が浮石粒子と黄褐色土を混入する、しまった黒褐色土。以下底面に至るまでは焼土と炭化物を含む軟質の暗褐色土で、焼土は底面付近程多く、一部はブロック状に混入。5層中部部と、底面付近より縄文時代後期土器片出土。S I 14と西側で重複しており住居跡が新しい。

**S K F 05** (第14図) 上面径188cm×168cm、底面径160cm×152cm。深さ149cm。堆積土は黒褐色土、及び暗褐色土を主体に全層にわたり黄褐色土を多量に混入する。6層底面付近より縄文時代後期土器片出土。

**S K F 06** (第15図) 上面径140cm×128cm、底面径204cm×200cm。深さ152cm。底面西寄りにさらに1基の小穴がフラスコ状に掘り込まれている。底面からの深さ72cm、上面径52cm×40cm、底面径68cm×70cm。堆積土は黒褐色土、暗褐色土、黒色土が互層し、上層には褐色土、下層には炭化物を多く含む。底面付近には焼土も混入しており、この焼土、炭化物混入層は底面下の小穴にも流入し堆積している。底面上11層から炭化堅果類出土。11層底面付近及びフラスコ内ピットの15層より縄文時代後期土器片出土。S K 07と西面部で重複、本土壌が新しい。

**S K F 07** (第15図) 上面径200cm×184cm、底面径248cm×240cm。深さ200cm。堆積土は黒褐色土と褐色土が互層する。底面直上の9層は軟質の黒褐色土で多量の炭化物と少量の焼土を混入し、層中下部部分から炭化堅果類が出土。8層上部部及び9層底面付近より縄文時代後期土器片出土。

**S K F 08** (第15図) 上面径76cm×76cm、底面径84cm×76cm。深さ56cm。堆積土は上層が堅くしまった砂質の黄褐色土で人為的に埋められたと考えられる。下層は黄褐色土を多量に含む軟質の黒褐色土。

**S K F 09** (第14図) 上面径84cm×72cm、底面径100cm×88cm。深さ76cm。堆積土はほぼ全層にわたり、人為的に埋められたと考えられる堅くしまった砂質の黄褐色土。7層より縄文時代後期土器片少量出土。

**S K F 10** (第14図) 上面径72cm×60cm、底面径240cm×240cm。深さ216cm。堆積土は重複するS K F 01とほぼ同じ状態を呈す。上層部はやや堅くしまった黄褐色土混入の黒色土、上面下60cmから底面にかけては埋められたと思われる堅くしまった砂質の黄褐色土である。2層下部より縄文時代後期土器片少量出土。

**S K F 11** (第14図) 上面径116cm×108cm、底面径226cm×226cm。深さ176cm。堆積土は上層に褐色土混入の黒褐色土、上面下40cmから底面にかけては人為的に埋められたと思われる砂質の黄褐色土。4層より縄文時代後期土器片出土。

**S K F 12** (第15図) 上面径106cm×88cm、底面径208cm×196cm。深さ200cm。堆積土は上層では褐色土を多量に含む黒褐色土。上面下120cmから底面にかけては、人為的に埋められたと思われる砂粒混入の黄褐色土である。9層底面付近より縄文時代後期土器片少量出土。

**S K F 13** (第15図) 上面径108cm×104cm、底面径140cm×132cm。深さ96cm。堆積土は黒褐色土、黒色土、褐色土が互層し上層には褐色土が比較的多く、一部はブロック状に入りこんでいる。7層上位部より縄文時代後期土器片出土。

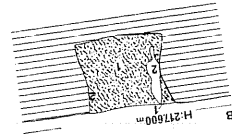
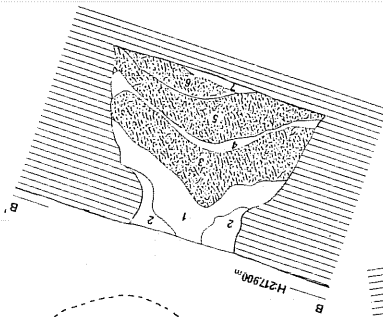
**S K F 14** (第15図) 上面径176cm×164cm、底面径148cm×144cm。深さ124cm。堆積土は全体が比較的軟質の黒褐色土と暗褐色土で、下層に炭化物を混入する。7層底面付近より縄文時代後期土器片少量出土。

**S K F 15** (第15図) 上面径124cm×100cm、底面径180cm×160cm。深さ120cm。堆積土はほぼ全層にわたり埋め戻されたと考えられる堅くしまった砂粒混入の黄褐色土。上面下50cmから底面にかけての周壁に工具痕が検出された。痕跡は堅い砂質ローム面に良く残存しており、長さ8～13cm、幅3～6mmの刻み状のものが3段～4段にわたって巡る。作業は上から下に向け斜状に突きさしながら同時にやや横はぎを加えたものと思われる。

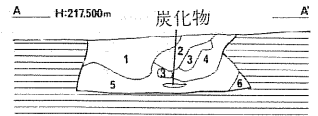
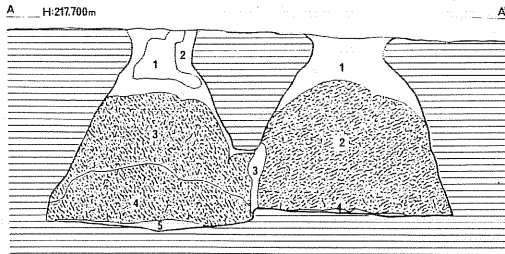
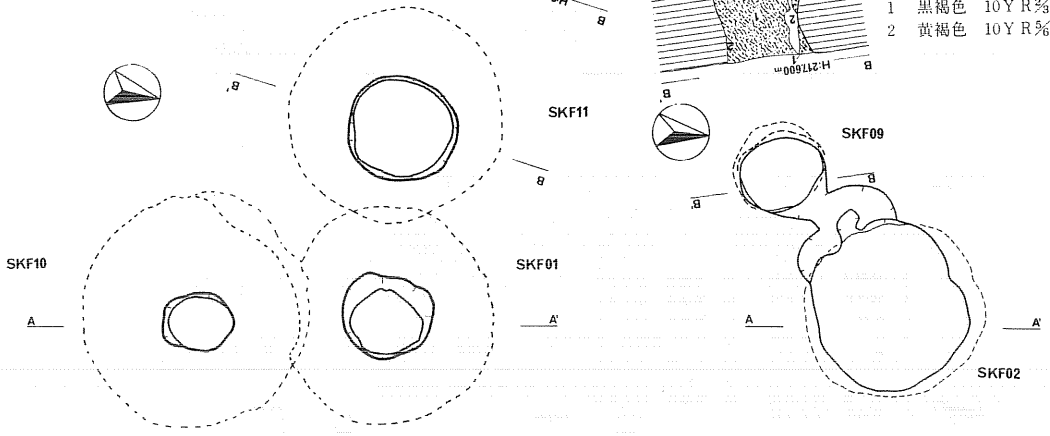
**S K F 16** (第16図) 上面径92cm×88cm、底面径260cm×248cm。深さ148cm。堆積土は上層が軟質の黒色土で炭化物を少量含む。上面下40cmから底面にかけては人為的に埋められたと考えられるしまった砂質の黄褐色土。7層底面付近より縄文時代後期土器片出土。S I 02と南面部で重複しているが、新旧関係は不明。

**S K F 17** (第15図) 上面径76cm×64cm、底面径92cm×88cm。深さ96cm。堆積土は人為的に

- 1 黒色 10Y R%
- 2 黒褐色 10Y R%
- 3 褐色 10Y R%
- 4 黒色 10Y R%
- 5 褐色 10Y R%
- 6 褐色 10Y R%
- 7 黒色 10Y R%



- 1 黒褐色 10Y R%
- 2 黄褐色 10Y R%

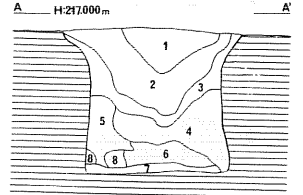
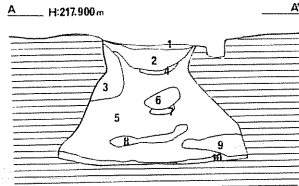
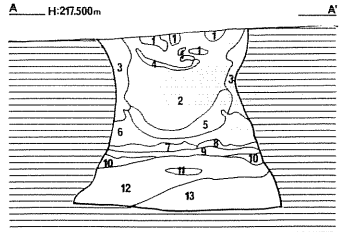
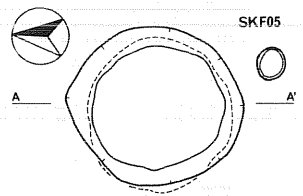
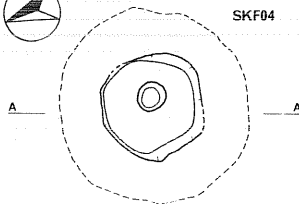
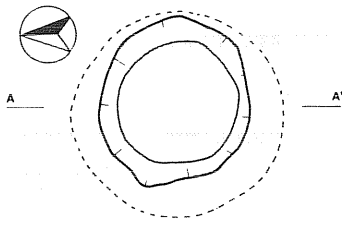


- 1 黒色 10Y R%
- 2 黒褐色 10Y R%
- 3 暗褐色 10Y R%
- 4 暗褐色 10Y R%
- 5 黒褐色 10Y R%
- 6 黒褐色 10Y R%

- 1 黄褐色 10Y R%
- 2 黒色 10Y R%
- 3 黄褐色 10Y R%
- 4 褐色 10Y R%
- 5 黒褐色 10Y R%

SKF03

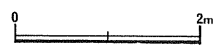
- 1 黒色 10Y R%
- 2 黄褐色 10Y R%
- 3 黒褐色 10Y R%
- 4 黒色 10Y R%



- 1 暗褐色 10Y R%
- 2 黒色 10Y R%
- 3 黒褐色 10Y R%
- 4 黒色 10Y R%
- 5 黒色 7.5Y R%
- 6 褐色 10Y R%
- 7 黒褐色 7.5Y R%
- 8 黒色 7.5Y R<sup>1</sup> %
- 9 黒褐色 7.5Y R%
- 10 黄褐色 10Y R%
- 11 暗褐色 7.5Y R%
- 12 黒褐色 10Y R%
- 13 黒褐色 7.5Y R%

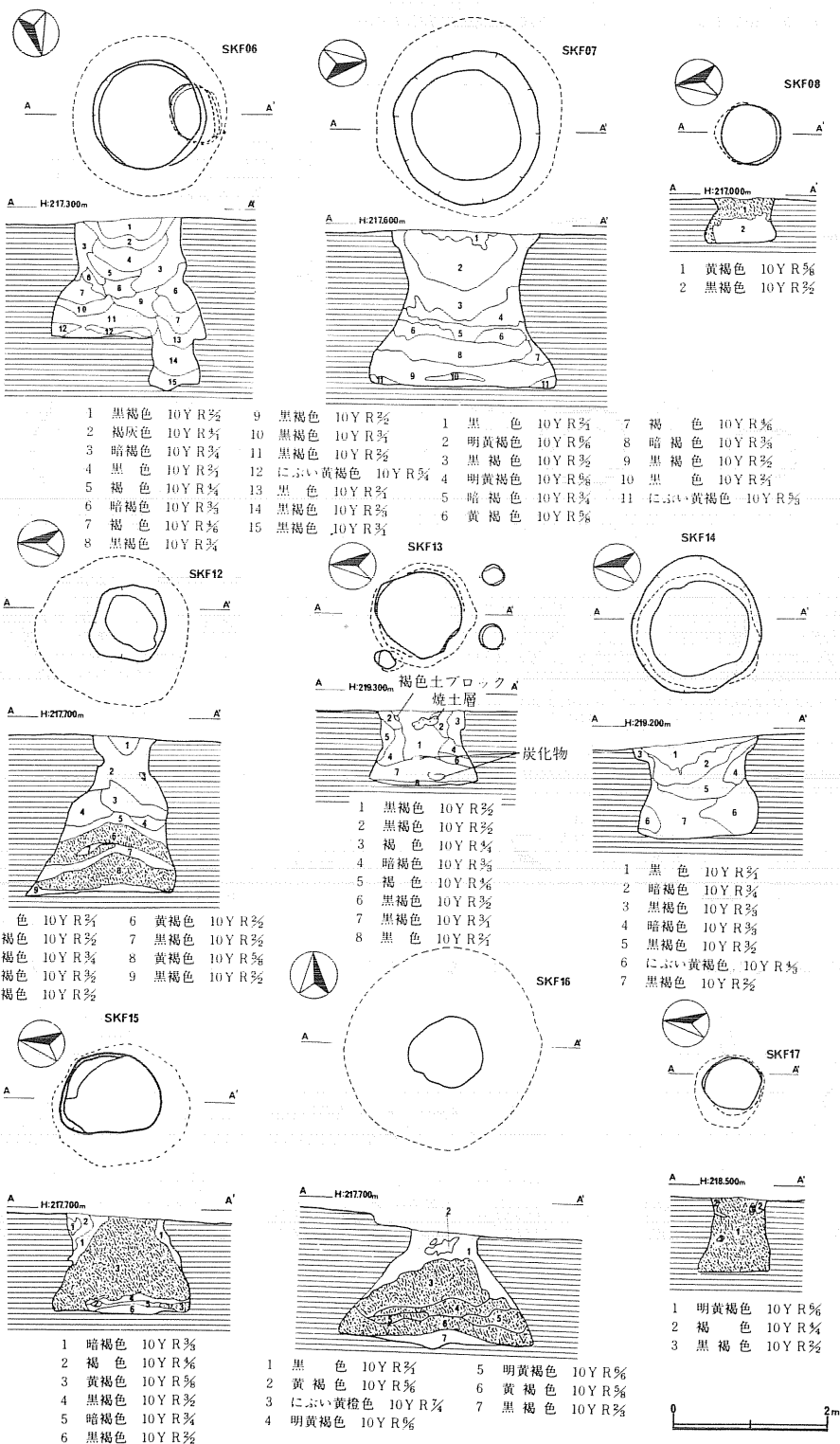
- 1 黒褐色 10Y R%
- 2 黒褐色 10Y R%
- 3 暗褐色 10Y R%
- 4 黄褐色 10Y R%
- 5 黒褐色 10Y R%
- 6 黒色 10Y R%
- 7 赤褐色 7.5Y R%
- 8 黒褐色 10Y R%
- 9 褐色 10Y R%
- 10 黒褐色 10Y R%

- 1 黒褐色 10Y R%
- 2 黒褐色 10Y R%
- 3 黒褐色 10Y R%
- 4 暗褐色 10Y R%
- 5 黄褐色 10Y R%
- 6 黒褐色 10Y R%
- 7 黒色 10Y R%
- 8 褐色 10Y R%

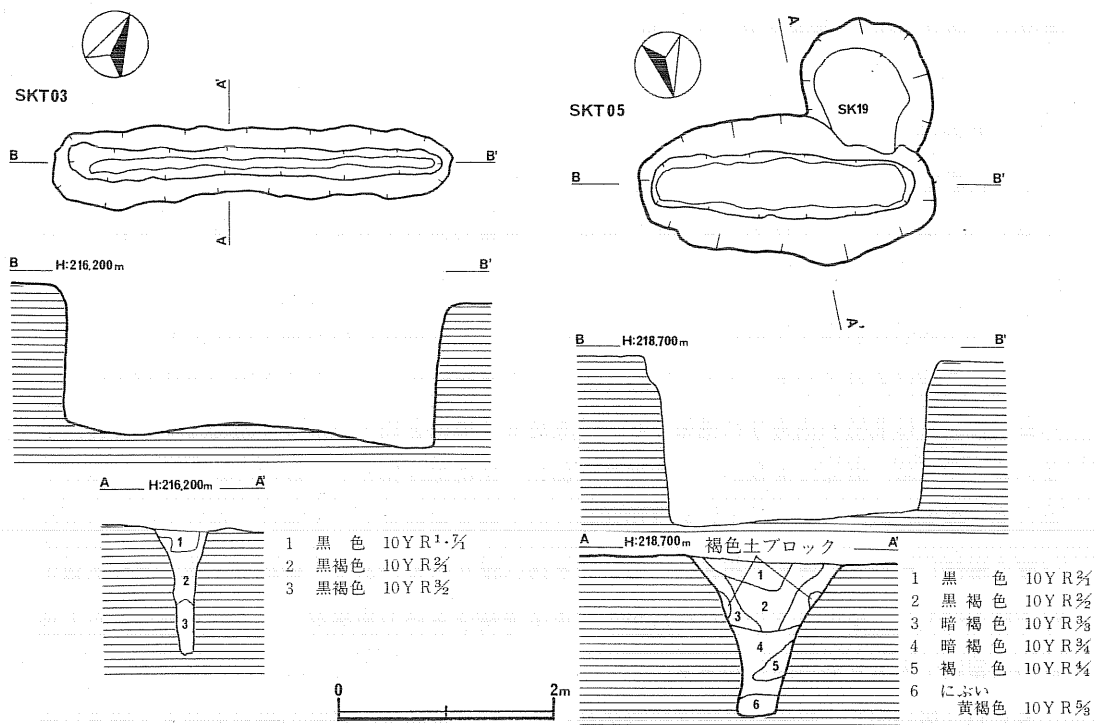


第14図 SKF01~05、09~11実測図

白長根館 I 遺跡



第15図 SKF06~08、SKF12~17実測図



第16図 SKT03、05実測図

埋られたと考えられる砂質の黄褐色土。S I 01と南西部で重複、フラスコ状ピットが新しい。Tピット

7基検出された。SKT04を除きいずれも台地縁端部に位置し南東部の3基は一定間隔で縦列している。断面形態はいずれも壙口部が幅広く壙底部になるにつれ幅狭くなる楔形を呈する。

SKT01 壙口部長径348cm、短径64cm、壙底部長径324cm、短径20cm。深さ120cm。長軸方向はN-38°-E。

SKT02 壙口部長径400cm、短径108cm、壙底部長径328cm、短径16cm。深さ92cm。長軸方向はN-41°-E。

SKT03 (第16図) 壙口部長径364cm、短径72cm、壙底部長径340cm、短径12cm。深さ140cm。長軸方向はN-63°-E。

SKT04 壙口部長径460cm、短径52cm、壙底部長径468cm、短径17cm。深さ104cm。長軸方向はN-66°-E。

SKT05 (第16図) 壙口部長径268cm、短径124cm、壙底部長径224cm、短径44cm。深さ140cm。長軸方向はN-10°-W。

SKT06 壙口部長径340cm、短径64cm、壙底部長径304cm、短径24cm。深さ120cm。長軸方向はN-3°-W。南東壁部分でSKT07と重複しており、SKT06が新しい。

SKT07 北西壁部分をSKT06に切られているため長径は不明。短径は壙口部68cm、壙底

部20cm。深さ160cm。長軸方向はN-80°-E。

## 2 平安時代

### (1) 住居跡

SI 10 (第17図) 平面形は長方形。堆積土に多量の軽石を混入する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は西壁で25~30cm、他は10~18cmと低い。壁溝はカマドの東側と南壁中央で、それぞれ25~38cmにわたり中断している。柱穴は各コーナー部分、対角線上の中心部、及び各壁に2~3本設けられている。床面はほぼ平坦で、土質は軟かく、一部で土中の小礫が露出している。カマドは北壁の西寄りに構築される。燃烧部は地山を15~18cm掘り込んでつくられ、多量の焼土が堆積。底面は火熱により赤褐色に硬化。煙道部は短かく、底面は緩く立ち上がって壁付近で煙出し部に至る。煙出し部は円筒状に凹み残存状態良く、上面に白色粘土がリング状に厚く堆積している。カマドの南側に隣接して浅い掘り込みがあり、堆積土上面に多量の焼土、粘土粒を混入し、層中より少量の鉄滓出土。出土遺物はカマド燃烧部より土師器甕の小片と袖部の残留粘土内より羽口断片がある。

SI 11 (第18図) 平面形は南北にやや長い長方形。堆積土に多量の軽石を混入。壁及び壁溝は西側で中断する。柱穴は各コーナー部分と各壁の中間に設けられ、隅柱は20~30cmとより深い傾向を示す。床面は北東隅でやや盛り上がり、南面にかけて緩やかに傾斜する。

カマドは東壁南寄りに構築。燃烧部は地山を約15cm掘り凹め、少量の焼土と粘土粒が堆積。底面は中央部で凹み、端部でやや立ち上がって、壁付近で煙道部となる。煙道部は明確でない。袖部は残存状態良く、白色粘土が厚く残留している。出土遺物はカマド燃烧部より少量の土師器甕小片。

SI 12 (第19図) 平面形は南北に長い長方形。堆積土に多量の軽石混入。壁は南東部分で内に曲折する。壁溝は北壁と南壁に検出され、南壁では中間部分で50cmにわたり中断する。柱穴は各コーナー部分と南側を除く各壁に設定され、長辺壁では2本、他は1本、等間隔で設けられている。カマドは南壁の東寄りに構築、残存状態は不良で、わずかに燃烧部と思われる浅い掘り込みが検出されたに留まる。

SI 13 (第20図) 平面形は東西に長い長方形。堆積土に多量の軽石を混入する。壁はカマド西寄りの部分で壁溝と共に長さ32cmにわたり中断する。柱穴は各コーナー部分、対角線上の中心点及び長辺壁では等間隔で2本、短辺壁では中間に1本設けられる。西側壁中央の柱穴は特に深く、深さ81cm。堆積土に焼土を混入する。床面はほぼ平坦だが土質は軟かい。西側壁の北寄りの部分に多量の焼土が堆積。焼土は床面よりやや浮いた状態を呈す。焼土内より少量の鉄滓と羽口断片出土。



カマドは南壁中央に構築。燃烧部は地山を約20cm掘り込み、少量の焼土と粘土粒が堆積。底面は中央部で一旦凹んだ後、緩く立ち上がり煙道部となる。煙道部は短かく長さ15cm、壁付近で再び凹み煙道部を形成。北壁部分でS K 21と重複しており、住居跡が新しい。

SI 14 (第21図) 平面形は北辺部がやや弓なりを示す正方形。堆積土に多量の軽石と褐色土を混入する。壁は北面が緩く外傾し、他は垂直に立ち上がる。高さは3～14cmと低い。壁溝は南側で長さ1.5mにわたり中断する。柱穴は各コーナー部分、各壁中央、及び壁部に沿って各辺に2～3本設けられ隅柱はより深い傾向を示す。床面は北側がやや盛り上がり西側にかけて緩く傾斜する。土質はもろく凹凸が激しい。部分的に黄褐色土が厚く付着しており、貼床の残存と考えられる。西側中央の壁付近に焼土が堆積。床面は火熱によりやや硬化している。カマドは東壁の南寄りに構築され残存状態は不良。わずかに燃烧部の掘り込みが検出されたに留まる。出土遺物は南東壁付近より土師器甕の小片と羽口断片が出土。

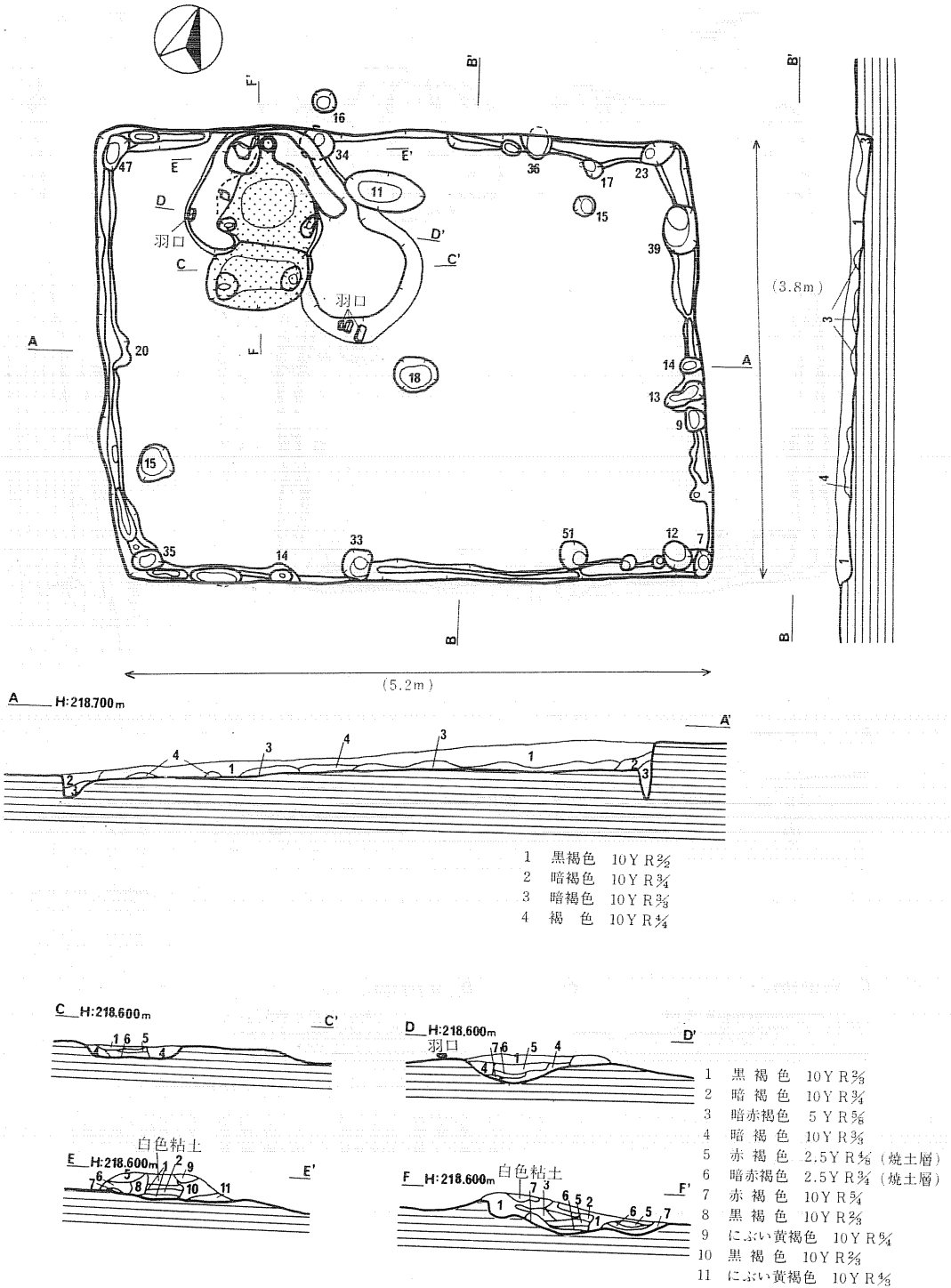
SI 15 (第22図) 壁は西壁のみ残存しており、柱穴の配列と共に南北に長い長方形プランを呈すると思われる。堆積土は壁溝内に多量の軽石を混入する。残存する西壁は5～7cmと低く、やや外傾して立ち上がる。壁溝は西側のみ検出。柱穴は長方形プランに平面形の長方形にあわせて配列され、ほぼ同一の深さを示す。床面は東に向いやや傾斜しており、カマド周辺は堅くしまっている。中央部に焼土が堆積。焼土は床面よりやや浮いており、除去した段階で円形の凹みを検出。カマドは南壁の西寄りに構築。上面に多量の焼土と粘土塊及び火熱により砕けた数個の石が検出された。燃烧部は地山を約15cm掘り凹めると共に、西寄りに方形のピットを付設する。いずれにも多量の焼土が堆積。堆積土内より少量の鉄滓出土。底面は燃烧部でゆるやかに立ち上がった後、やや深く凹み煙出し部となる。煙道部は明瞭でない。

SI 16 (第23図) 調査区北西部の斜面に立地する。隣接してSI 17、18があり、これら3軒の遺構は、その立地状況、形態、出土遺物、及びカマドが壁部に構築されていないこと等に類似性を持つ。平面形は東に向かってやや開き気味の台形を呈するが、東壁は検出されない。堆積土に多量の軽石を混入する。壁は斜面下位部の東壁が無く、SI 17、18の場合と同様、構築時において省かれたものと考えられる。壁溝は西側と南側で幅広く、かつ深く掘り込まれている。柱穴は壁柱を主体に東側では遺構範囲外にも設けられており、共に関連すると考えられる。床面はほぼ平坦で、土質は南側が特に堅くしまっており、一部で焼土が堆積。中央部と南西部から鉄滓出土、特に南西部では多量に出土。住居跡内南側に、南壁に並行してカマド状遺構が検出された。遺構は燃烧痕跡を有するカマド状の掘り凹みと、その西側に方形及び楕円形のピットを付設するもので、全体がカギ状の形を呈する。カマド状のものには多量の焼土と共に上面に白色粘土が厚く堆積しており、底面は火熱により赤褐色に硬化している。粘土内より羽口断片出土。ピットは、堆積土が黄褐色土を多量に含む軟質の黒褐色土で焼土は混入していない。

底面、壁面共土質はもろく剥落しやすい。

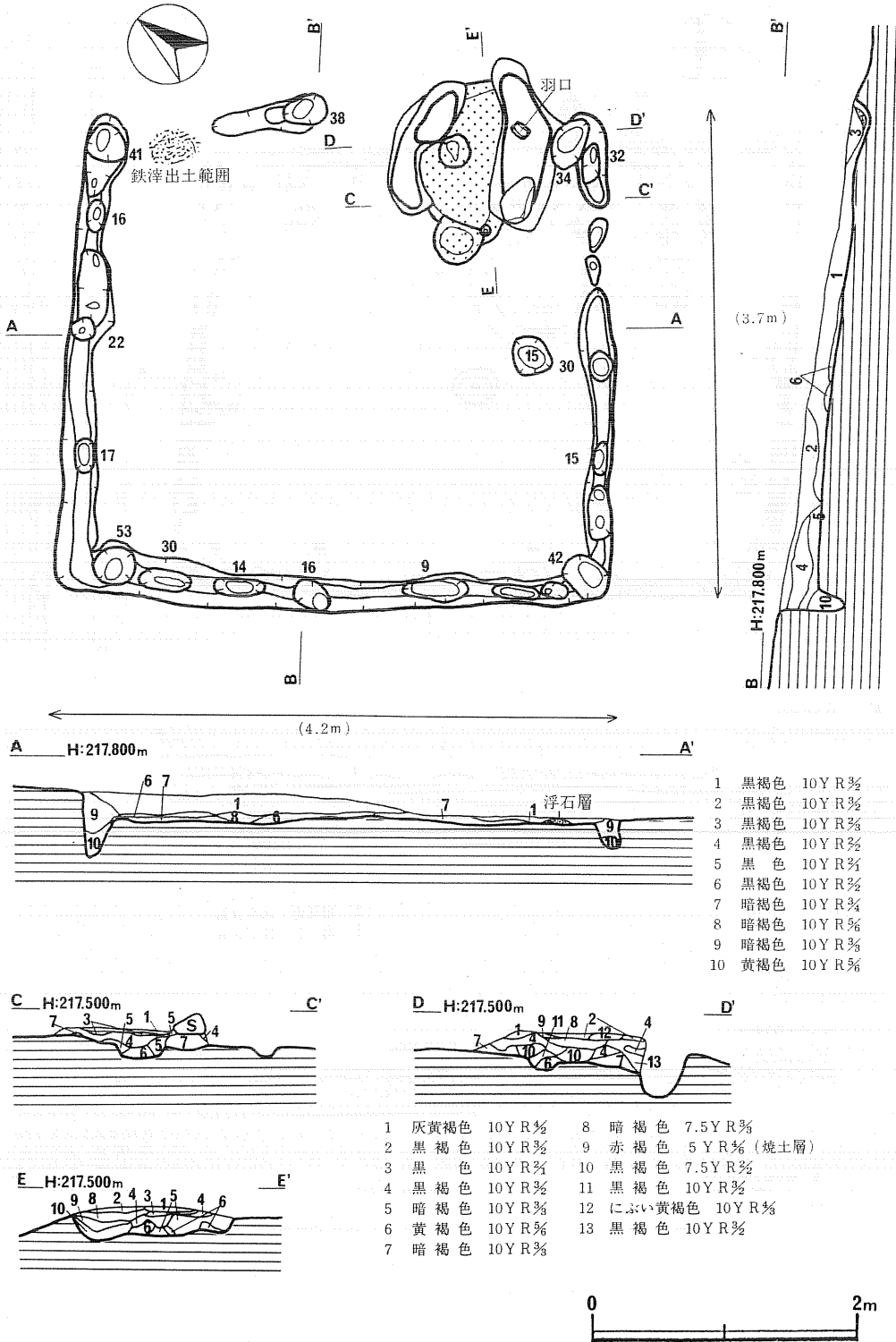
**SI 17 (第24図)** 平面形は方形を呈するが、SI 16と同様東壁は検出されなかった。堆積土に多量の軽石混入。柱穴は壁柱を主体に遺構外東側にも設けられている。床面はほぼ平坦で、北面部がやや堅くしまっている。遺構内西側に、西壁に平行してカマド状遺構が検出された。遺構は円形プランを呈する掘り凹みと、北側に付設する長楕円形の掘り凹みからなり、いずれにも焼土が充満している。円形のは地山を約25cm深鉢状に凹ませた炉状のもので、堆積土は焼土を主体に、上層に白色粘土、中層に炭化物を混入する。焼土下には砂質の黄褐色土が底面かけ堆積。内壁は火熱を受け部分的に硬化しており、上面には周囲を巡る形で白色粘土が厚く貼られ、崩落している粘土粒と共に構築時は円筒状もしくはドーム状に本体が構築されていたと思われる。長楕円形のは深さ15~20cmで、底面は中央部で楕鉢状にやや凹むが、全体が南方向に緩く立ち上がっている。堆積する焼土は、中央部から南端部にかけて粘土粒と炭化物を混入し、少量の鉄滓が出土する。さらに南側に隣接してカマド状遺構2が検出された。遺構は東西に長い楕円形の凹みを呈し、東端部はやや先細りしており煙道部と思われる。燃烧部は地山を約15cm掘り凹み、焼土及び粘土粒が堆積。P 1は円筒状を呈し、深さ28cm、底面は凹凸が激しく、中心部と外周に沿って小穴が穿たれている。堆積土は軟質の黒褐色土で、炭化物を少量混入する他、上面には多量の粘土粒を含む。内部に火熱の痕跡は無い。P 2は楕鉢状の形体を呈し、底面、壁面共堅くしまっている。深さ33cm。堆積土に多量の黄褐色土を混入する。P 3は東西に長い楕円形のプランを呈し、深さ15cm。堆積土は軟質の黒褐色土を主体とする。出土遺物はカマド状遺構1の上面及び東壁に隣接して床面上から羽口断片。

**SI 18 (第25図)** 平面形は方形を呈するが、東壁は検出されない。堆積土に多量の大湯軽石混入。壁は西壁が上位部で崩落、他はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は西側の南寄りと北側が、他に比べ深く掘られている。深さ25~32cm。柱穴は壁柱を主体に、東側では遺構外にも設けられており、共に関連するものと考えられる。床面は、南側が東方に緩く傾斜、他は平坦。北西の壁付近に焼土が堆積。焼土内より少量の鉄滓と羽口断片出土。カマド状遺構は、遺構内中央の西寄りに、西壁に並行して構築。遺構は楕円形プランの掘り凹みとその南に付属する長楕円形プランの掘り凹みからなる。楕円形のは地山を約30cm楕鉢状に凹め、多量の焼土と底面付近には、砂質の褐色土が堆積。上面には外周に沿って半円状に白色粘土が厚く盛られており、本体は筒状もしくはドーム状に構築された炉形式のものであったと考えられる。内壁は火熱により一部が赤褐色に硬化、長楕円形のは地山を15~20cm凹め、堆積土に多量の焼土を含む。特に中央部から南側にかけては多く、粘土粒、炭化物も合わせて混入する。底面は中央部でやや凹んだ後、南方向にかけて緩く立ち上がる。南端部では火熱により硬化。P 1はカマド状遺構の東寄りに隣接し、底面は凹凸を呈している。深さ28cm。堆積土は軟質の黒褐色土を主体と

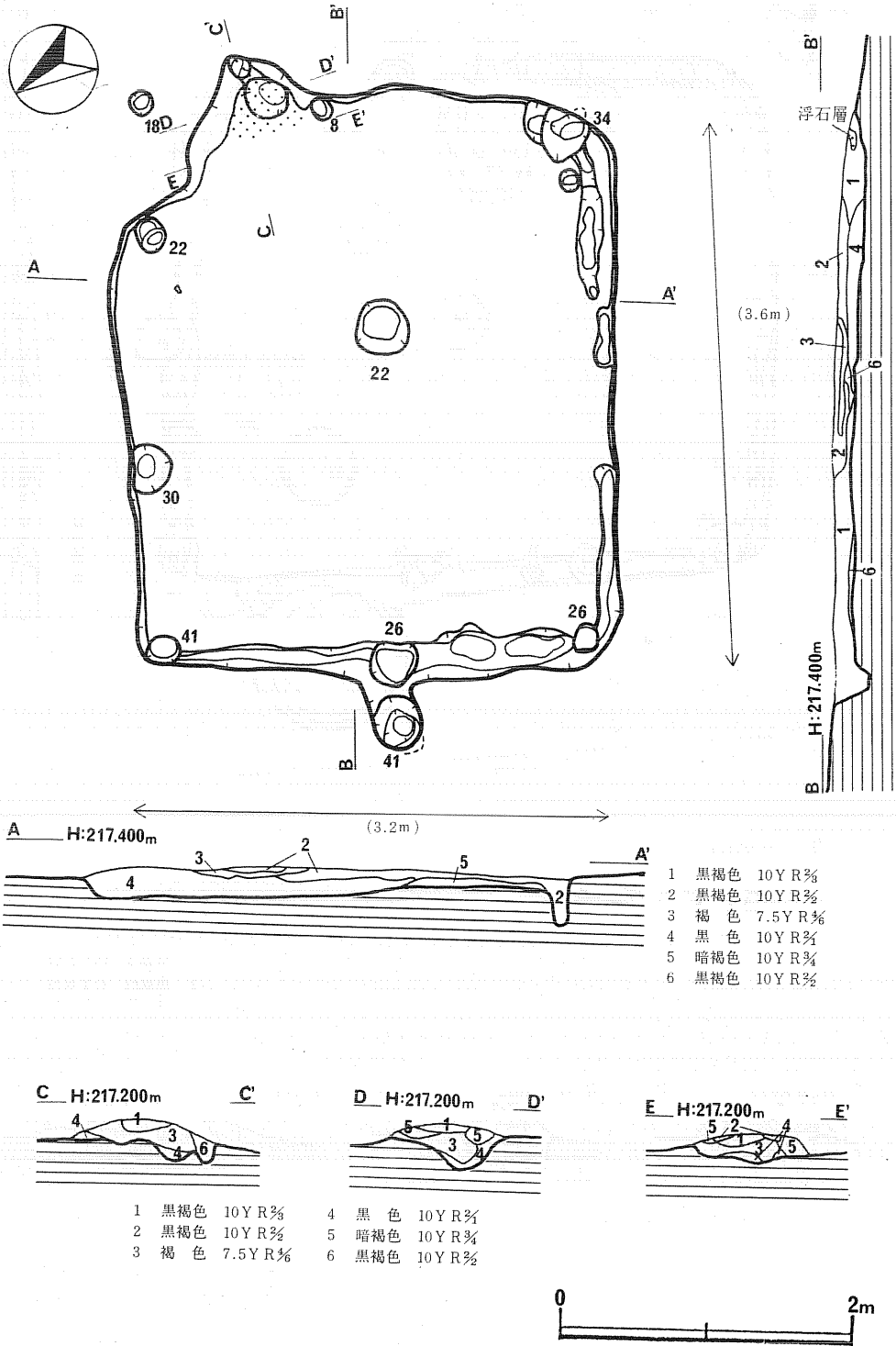


第17図 S I 10実測図

白長根館 I 遺跡

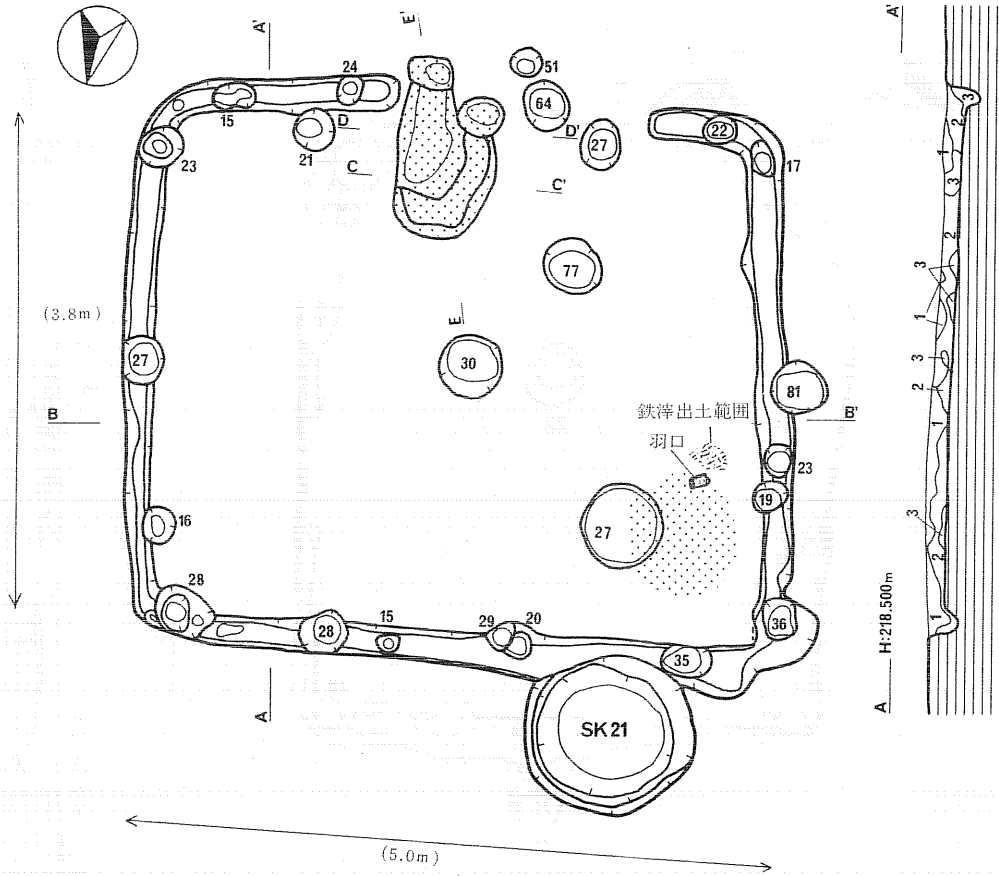


第18図 S I 11実測図

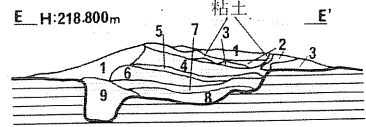
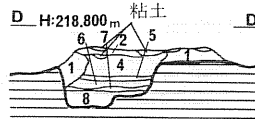
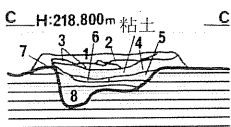


第19図 S I 12実測図

白長根館1遺跡



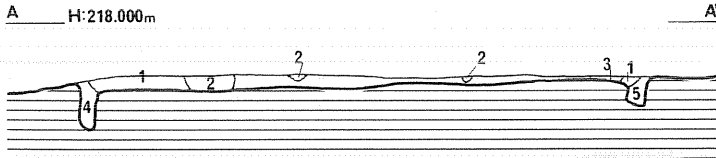
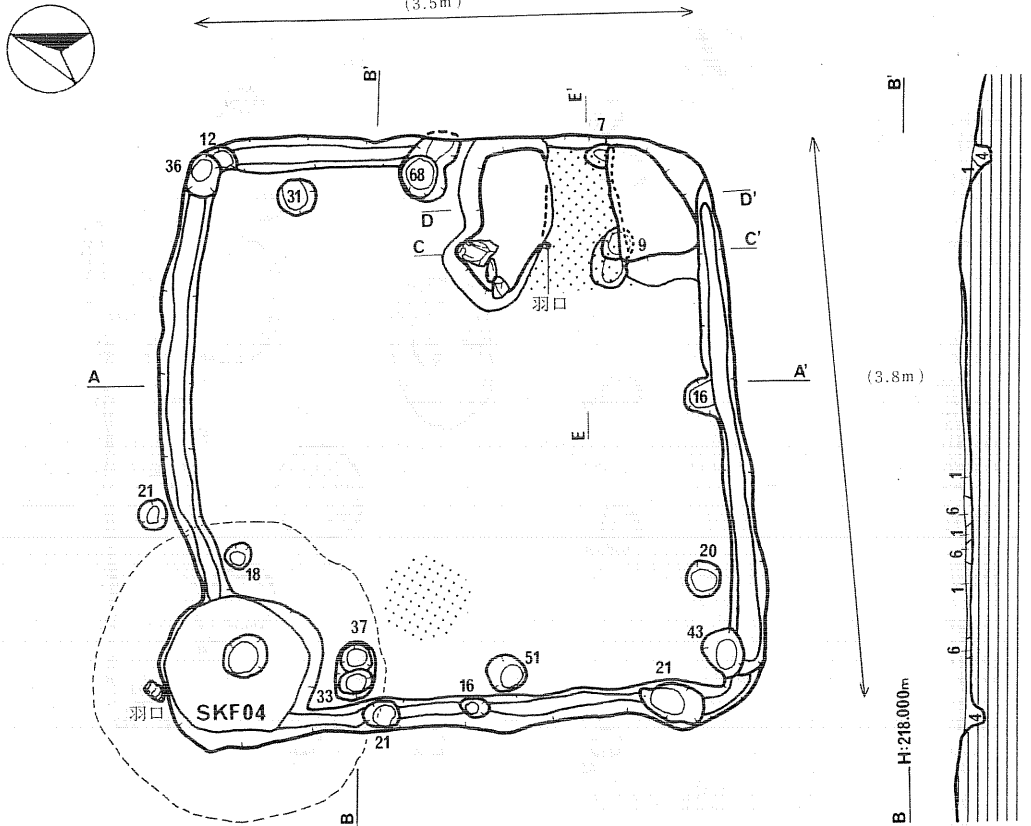
- 1 黒褐色 10YR%
- 2 黒褐色 10YR%
- 3 褐色 10YR%



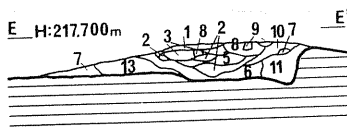
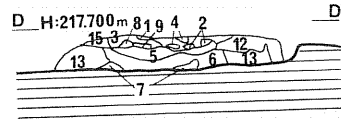
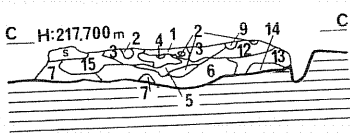
- 1 黒褐色 10YR%
- 2 極暗赤褐色 5YR% (焼土層)
- 3 橙色 5YR% (焼土層)
- 4 黒褐色 10YR%
- 5 黄褐色 10YR% (焼土層)
- 6 暗褐色 10YR%
- 7 にぶい黄褐色 10YR% (焼土層)
- 8 暗褐色 10YR%
- 9 黒色 10YR%



第20図 S I 13実測図



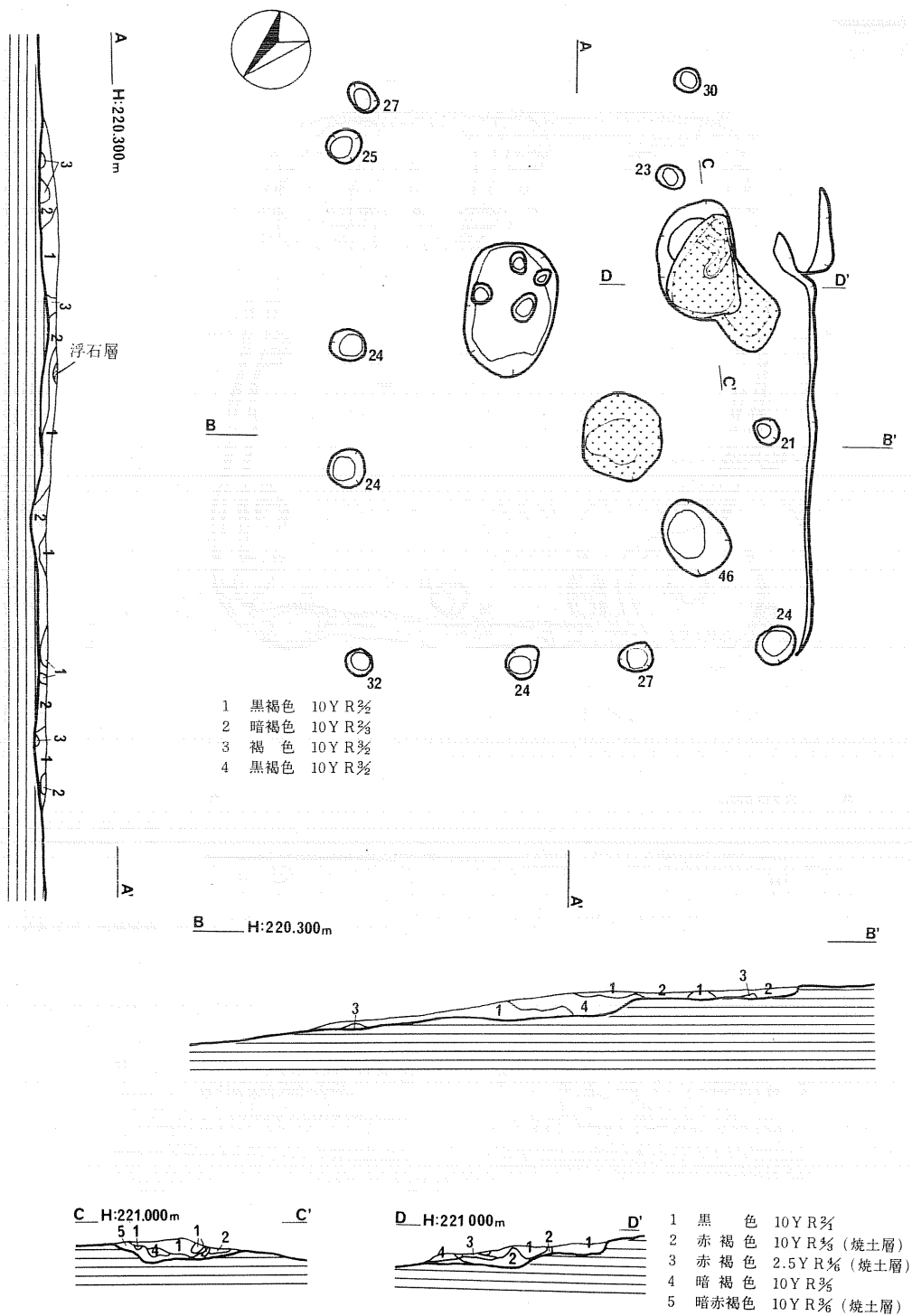
- 1 黒褐色 10YR%
- 2 黒色 10YR%
- 3 暗褐色 10YR%
- 4 黒褐色 10YR%
- 5 黒褐色 10YR%
- 6 明黄褐色 10YR%



- 1 暗褐色 10YR%
- 2 赤褐色 5YR% (焼土層)
- 3 褐色 10YR%
- 4 にぶい黄褐色 10YR%
- 5 褐色 7.5YR%
- 6 暗赤褐色 5YR% (焼土層)
- 7 褐色 10YR%
- 8 褐色 7.5YR%
- 9 暗灰褐色 2.5YR%
- 10 黒褐色 7.5YR%
- 11 黒褐色 10YR%
- 12 黒褐色 10YR%
- 13 黒褐色 10YR%
- 14 黒色 10YR%
- 15 暗褐色 10YR%

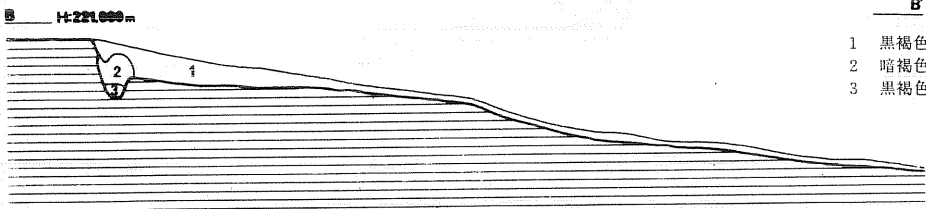
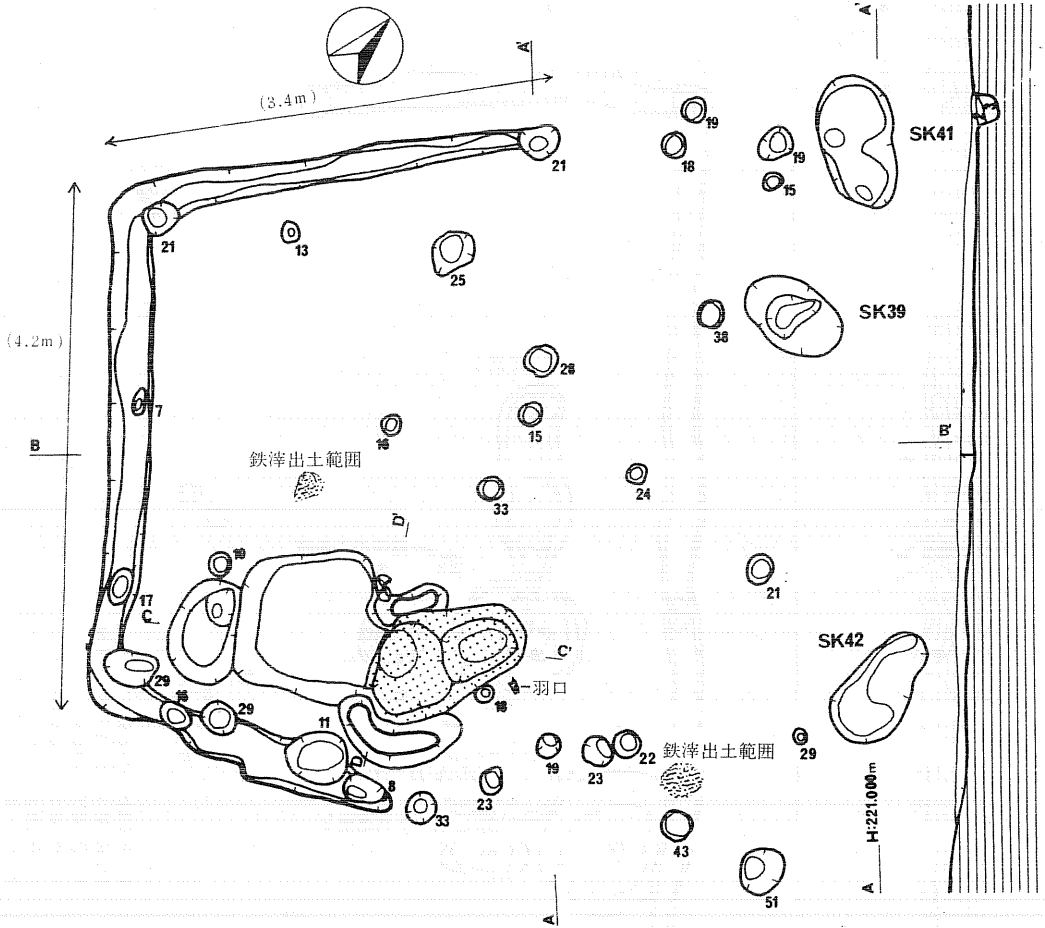
第21図 S I 14実測図

白長根館 I 遺跡

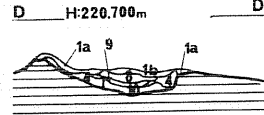
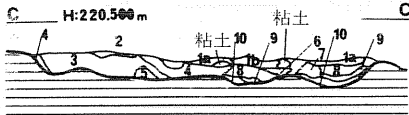


第22図 S I 15実測図





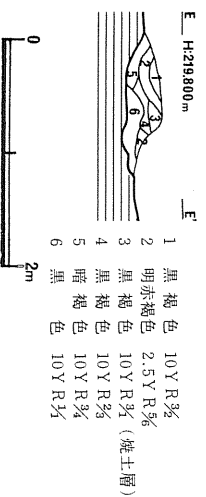
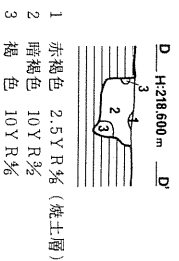
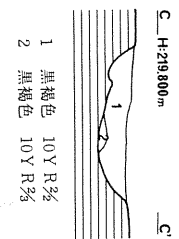
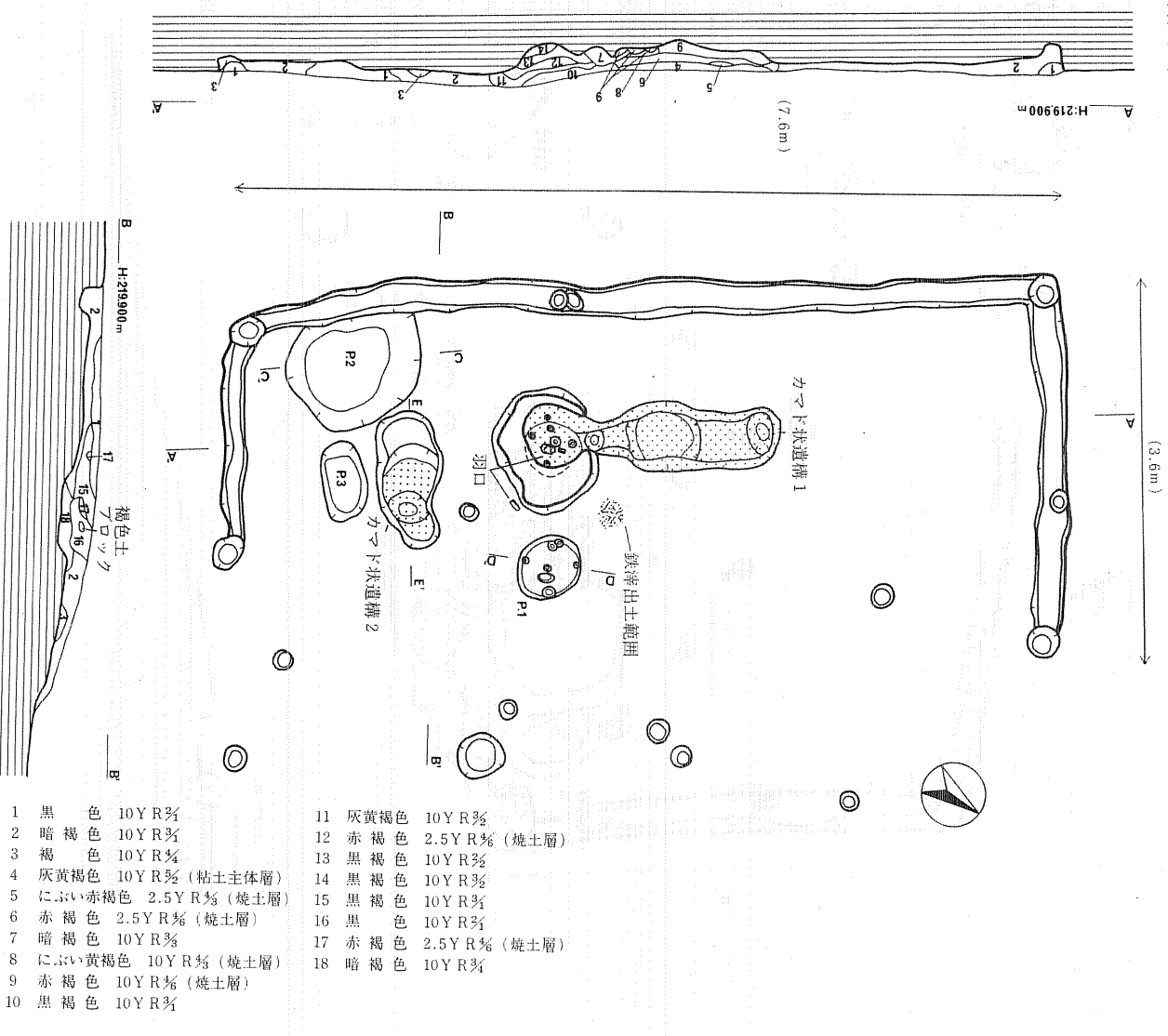
- 1 黒褐色 10Y R%
- 2 暗褐色 10Y R%
- 3 黒褐色 10Y R%



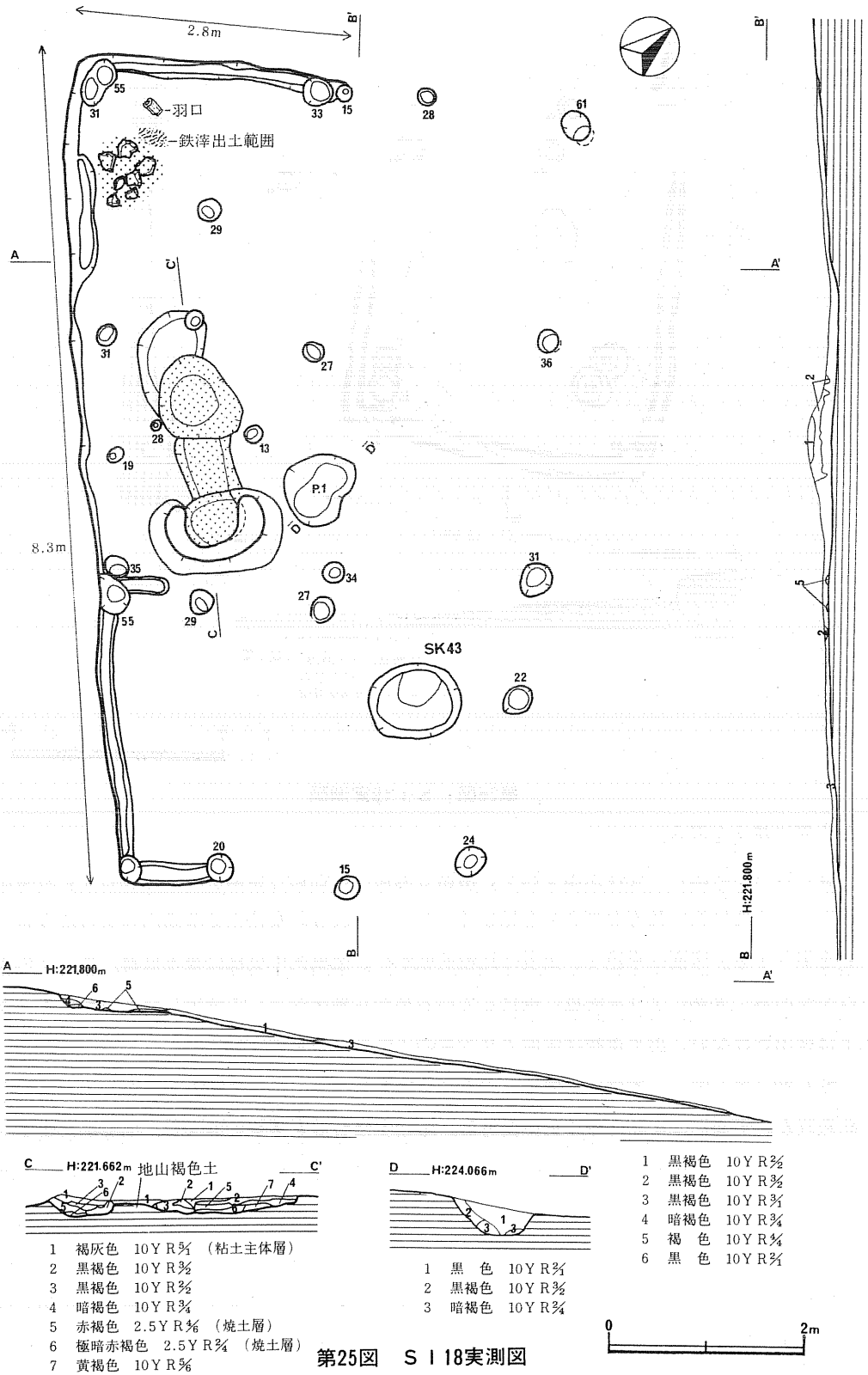
- 1a 黒褐色 10Y R%
- 1b 灰黄褐色 10Y R%
- 2 暗褐色 10Y R%
- 3 黒褐色 10Y R%
- 4 黒色 10Y R%
- 5 黒褐色 10Y R%
- 6 灰黄褐色 10Y R%
- 7 暗赤褐色 2.5Y R% (焼土層)
- 8 明赤褐色 2.5Y R% (焼土層)
- 9 暗赤褐色 2.5Y R% (焼土層)
- 10 にぶい黄褐色 10Y R%



第23図 S I 16実測図



第24図 S117実測図

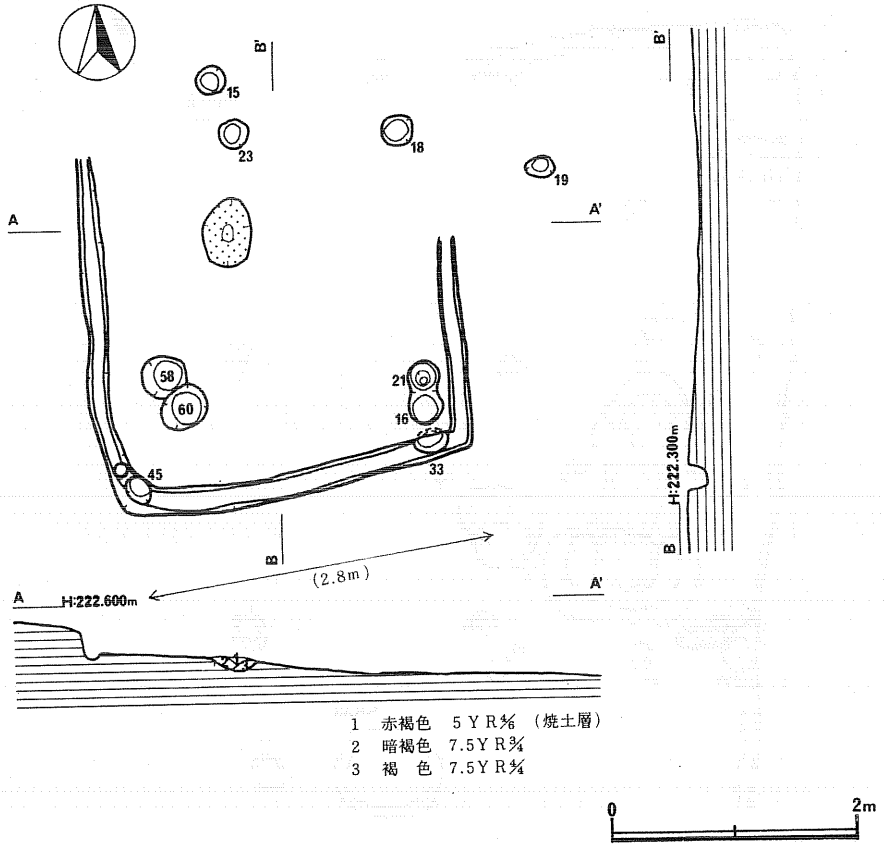


- 1 褐灰色 10Y R $\frac{3}{4}$  (粘土主体層)
- 2 黒褐色 10Y R $\frac{3}{4}$
- 3 黒褐色 10Y R $\frac{3}{4}$
- 4 暗褐色 10Y R $\frac{3}{4}$
- 5 赤褐色 2.5Y R $\frac{3}{4}$  (焼土層)
- 6 極暗赤褐色 2.5Y R $\frac{3}{4}$  (焼土層)
- 7 黄褐色 10Y R $\frac{3}{4}$

- 1 黒色 10Y R $\frac{3}{4}$
- 2 黒褐色 10Y R $\frac{3}{4}$
- 3 暗褐色 10Y R $\frac{3}{4}$

- 1 黒褐色 10Y R $\frac{3}{4}$
- 2 黒褐色 10Y R $\frac{3}{4}$
- 3 黒褐色 10Y R $\frac{3}{4}$
- 4 暗褐色 10Y R $\frac{3}{4}$
- 5 褐色 10Y R $\frac{3}{4}$
- 6 黒色 10Y R $\frac{3}{4}$

第25図 S I 18実測図

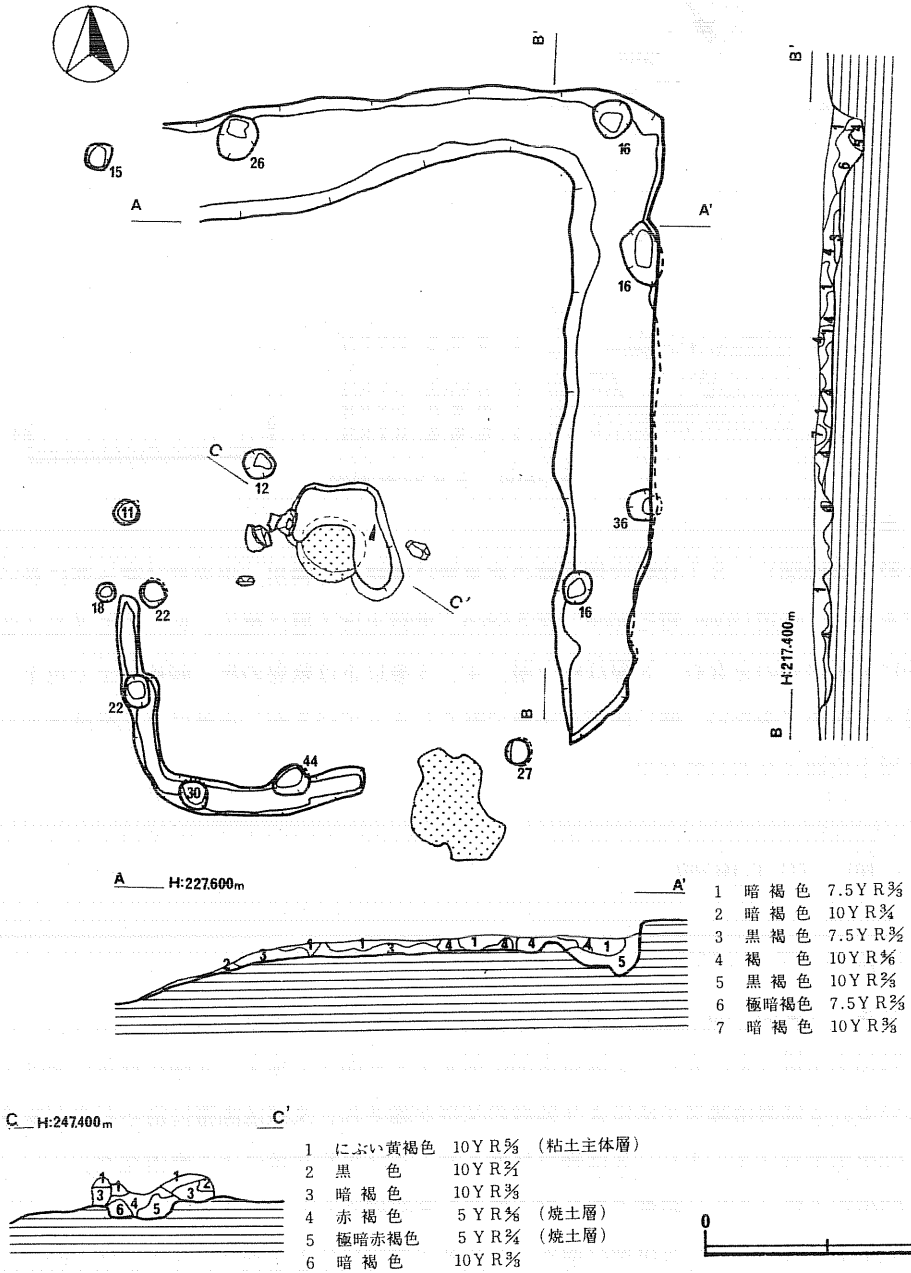


第26図 S I 19実測図

し上層に焼土が混入。

S I 19 (第26図) 壁は検出されず、南側と東側及び西側の壁溝が一部残存している事から平面形は南北に長い長方形プランを呈していたと思われる。堆積土は壁溝内のものに多量の軽石を混入する。床面は平坦で、土質は比較的軟かい。遺構内中央部に焼土痕跡。焼土下の床面はやや凹み、火熱により赤褐色に硬化している事から地床炉として使用したと思われる。カマドは検出されない。出土遺物は床面より少量の土師器杯小片。

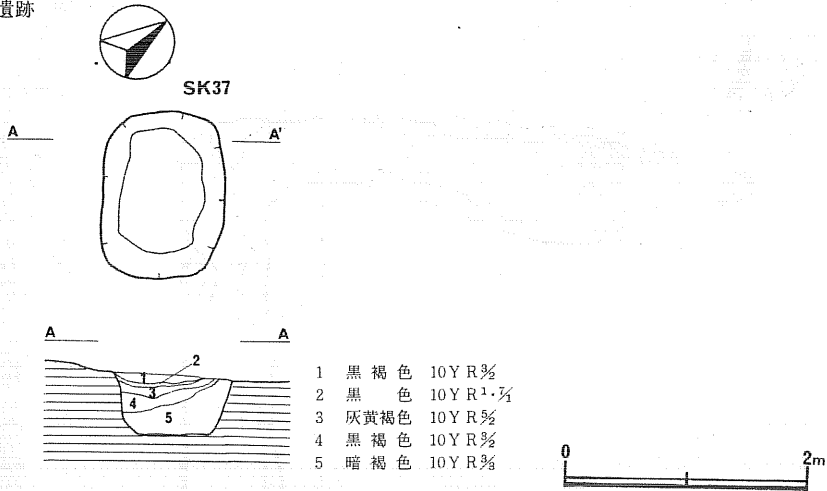
S I 20 (第27図) 遺構確認面で、中央部分に多量の焼土と白色粘土が散布しているのが認められた。平面形は南北にやや長い長方形。堆積土は軽石を多量に混入し、部分的に焼土、粘土粒を混入。壁は東壁のみ検出。壁溝は西側と南側で一部中断し、北側、東側では幅広く深い。床面は平坦で強くしまっているが、南側は風倒木痕と思われる凹みの上に設けられており、黄褐色土を敷いて貼床としている。南側東寄りの壁付近に焼土痕跡。焼土下には掘り凹みがみられず、床面にも火熱による痕跡はみられない。柱穴はその多くが壁柱で、壁溝内に検出された。カマドは壁部に付設されたものは無く、南壁東寄りにみられる焼土痕跡は、カマドと断定する



第27図 S120実測図

には至らなかったが、住居跡内中央部にカマド状の遺構を検出。地山を約25cm掘り凹め、内部には粘土粒と多量の焼土が堆積し、炭化物を少量混入する。底面は凹凸を呈し、内壁と共に一部が火熱により赤褐色に硬化している。上面の外周に沿って白色粘土が厚く貼り巡らされており、本体は筒状もしくはドーム状に粘土構築されていたものと考えられる。底面より土師器の細片出土。

白長根館 I 遺跡



第28図 SK37実測図

## (2) 土壌

SK37 (第28図) SI12 竪穴住居跡の北東壁に隣接して検出。平面形は東～西に長い隅丸長方形を呈し、長辺130cm、短辺90cm、深さ58cm。堆積土は1層に焼土、粘土粒を多量に含み、部分的に灰質のものを含む。3層は粘土層。4、5層以下は軟質の黒、暗褐色土で焼土、炭化物の混入は極めて少ない。壁、底面共平滑で堅くしまっているが、火熱による痕跡はみられない。3層上位面より羽口断片出土。

## 第2節 出土遺物

### 1 遺構内の出土遺物

#### (1) 土器 (第29、30、31、34図)

SI01出土土器(1、2) 1は口縁部に刺突をすき間なく施す。先端が鋭角な棒状工具を用いている。2は磨消縄文手法により弧状の文様が施され、文様区画帯に沿って刺突が施される。

SI02出土土器(3、4) 3は網目状撚糸文。4は平行沈線による磨消縄文。

SI03出土土器(5) 粗製の深鉢形土器でLR斜縄文を地文とする。

SI04出土土器(6) 口縁部に施された数条の平行沈線を基調に、その下部に磨消縄文手法を用い渦巻状の文様を施す。肩部の張る深鉢形土器。

SI06出土土器(7、8、86) 7は網目状撚糸文。8はLR斜縄文を地文とし、頸部に3条の平行沈線。胴部には弧状の文様を沈線で意匠する。口縁部は磨消し無文帯。86は注口土器で把手を付帯する。器面は研磨され、口縁部には沈線で入組状の文様を施す。

SI07出土土器(87) 高台を持つ鉢形土器。磨消縄文手法により入組風の文様を施す。

SKI01出土土器(9、10、11、88) 9、88は網目状撚糸文。10は条線を斜位に施す。11は粗

製の深鉢形土器で、地文としてLR斜縄文が施される。口縁部は平滑に磨かれ無文帯。

SK02出土土器(12、13) 12は口縁部が山形を呈し、口縁部突端に向い数条の沈線を山形に施す。沈線内に刺突文。口縁部内面には瘤状の突起を付す。13は縄文を地文とする器表面に数条の平行沈線を施し、その一部を磨消している。

SK07出土土器(14、15) 14は弧状の沈線を数条施し、沈線の区画外を磨消している。15は頸部のくびれる深鉢形土器で口縁部は無文帯、胴部にはLR、RL斜縄文を交互に施す。

SK09出土土器(16、17、18) 16は縄文を地文とし、数条の比較的太い平行沈線を施す浅鉢形土器。17は口縁部に摘み出しによる山形の装飾突起、器面には突起に向い4条の沈線を山形に施す。18は縄文を地文とした器面に沈線で渦巻状の文様を施す。

SK11出土土器(19) 土器底部で、底面にすだれ状圧痕を残す。

SKF01出土土器(20) 深鉢形土器の口縁部で、内外面共平滑に磨かれている。

SKF02出土土器(21) 壺形土器の肩部で、磨消縄文手法により、平行沈線間に卵形状の文様を施す。

SKF03出土土器(22、23、24、25) 22は磨消縄文手法により渦巻状の文様を施す。23は口縁部の装飾突起で、先端部は肥大し、数条の平行沈線。下部には沈線で区画した方形内に刺突及び渦巻文を施す。24は数条の平行沈線を施し沈線間を磨り消す。25は山形を呈する口縁部で、全面に刺突を施す。

SKF04出土土器(26、27、89) 26は壺形土器でSKF02出土の21と接合する。27は深鉢形土器の口縁部で、縄文を地文とした器表面に数条の平行沈線を施す。89は朱塗の壺形土器で無文の器表面に沈線で奔放な文様が描かれる。

SKF05出土土器(28、29、30、31) 28は無文の壺形土器で、口縁部に3条の平行沈線を施す。29は磨消縄文手法により入組状の文様を施す。30は条線を斜位、横位に施す。31は網目状撚糸文。

SKF06出土土器(32、33、34) 32は口縁部を磨消し無文帯にし、頭部に数条の平行沈線を施す。33は口縁部に3条の平行沈線、胴部は磨消している。34は縄文を地文とし、口縁部を磨消無文帯にする。口縁部に1条の平行沈線。

SKF07出土土器(35、36) 35は深鉢形土器の口縁部で、山形を呈する。口縁部は磨消し無文帯にし、胴部に数条の平行沈線と、沈線間に弧状の沈文を加える。36は網目状撚糸文。

SKF09出土土器(37) 壺形土器で、頭部には3条の平行沈線化した磨消縄文。

SKF10出土土器(38) 縄文を地文とした器表面に横走る沈線を数条施す。

SKF11出土土器(39) 深鉢形土器の口縁部で緩い山形を呈する。器表全面を刷毛目状のもので整形した後、口縁部以下に斜縄文を施す。口唇部に圧痕文。

## 白長根館 I 遺跡

S K F 12 出土土器 (40、41) 40は深鉢形土器の口縁部で斜縄文を施す。41は極めて細い条線を1～3条単位で横位、斜位に施す。

S K F 13 出土土器 (42) 磨消縄文手法により弧状の文様を施す。沈線による区画帯に沿って刺突が連続。

S K F 14 出土土器 (43) 深鉢形土器の口縁部で、器面を平滑に研磨した後、口縁部以下に網目状捺糸文を施す。

S K F 16 出土土器 (44) 入組状の文様を極めて細い沈線で描き、外部を磨り消している。

### (2) 石器 (第35図)

S I 01 出土石器 (1) 石棒で遺構内東面部の壁寄りに直立した状態で検出。断面は五面形を示し、各辺部を平滑に研磨している。安山岩。

S I 02 出土石器 (2) 石筥で基部下端に最大幅を持つ。両面に粗い調整剥離。珪質頁岩。

S I 03 出土石器 (3) 石槍で先端部はやや鈍化。両面に入念な調整剥離を施す。頁岩。

S I 05 出土石器 (4、5) 4は石匙で刃部横型を呈する。片面に調整剥離、特に刃部は入念に加工。5はスクレーパーで片面加工。側縁部に入念な剥離調整を施す。いずれも頁岩。

S K F 04 出土石器 (6) スクレーパーで片面に剥離調整を施す。頁岩。

S K F 07 出土石器 (7) 磨製石斧で、全面を研磨している。安山岩。

S I 16 出土石器 (8) 砥石で側部に使用痕を有する。安山岩。

### (3) 和鏡 (第35図)

S I 17 出土鏡 (9) 住居跡内のほぼ中央、堆積土2層下位部分より出土。銅製の八稜鏡で後背には唐草と思われる文様が施され、中央部に鈕を付帯し紐穴が貫通している。

## 2 遺構外の出土遺物

### (1) 土器 (第31、32、33、34図)

出土土器は縄文時代前期、中期、後期、晩期のもものと土師器で、土師器は平安時代後半に属するものだが極めて少量で小片を主としているため図化するに至らなかった。出土は調査区ほぼ全域にわたるが、前期のものは東部、中期及び晩期のものは北東部の平坦地に、後期のものは中央部から東部にかけての緩斜面に主として検出され、量的には後期が最も多く次いで前期で、中期、晩期のものは少ない。分類は器表面の文様を主体に行った。

#### 第 I 群 縄文時代前期

I 類 (45、46) 器外面に斜縄文を施す。縄文は比較的撚りの太い単節及び複節で、焼成は全体的に不良。45は口縁部がやや外反し胎土に繊維を混入、円筒下層 a 式土器に比定。

II 類 (47、48) 口縁部に綾絡文、胴部に斜縄文を施す。48は複節斜縄文で胎土に繊維を混



入。口縁部は外反するものが多い。円筒下層 a 式土器に比定。

III類 (49) 口縁部に太い陸帯を施す。口縁部及び隆帯上には撚糸圧痕。胴部には斜行撚糸文を施す。出土量は極めて少ない。円筒下層 b 式土器に比定。

IV類 (50、51) 胴部に羽状縄文や木目状撚糸文を施す。口縁部には摘み出しによる低い隆起帯がみられ、隆起帯上には刺突が施される。口縁部には撚糸圧痕。円筒下層 d 式土器に比定。

V類 (52~55) 土器底部で、器形は底部周辺が外方に張り出すもの。底部が上げ底状を呈するもの等がある。底面に縄文施文される場合が多い。円筒下層 a 式土器に比定。

#### 第II群 縄文時代中期

I類 (56、57) 口縁部に隆起帯を施す。56は口縁部にボタン状の貼付文。57は横走する隆起帯に加え、V字状の隆帯を垂下させる。円筒上層 a 式土器に比定。

II類 (58、59) 口縁部から胴部にかけて隆線文を施す。隆線文は簡略化された細い粘土紐によるもので、胴部では互いに交叉をくり返す。円筒上層 d 式土器に比定。

III類 (60) 口縁部から胴部にかけて沈線文を施す。沈線は斜縄文を地文とした器面に口縁部では斜位に短く、胴部では横位に数条施される。円筒上層 e 式土器に比定。

#### 第III群土器 縄文時代後期

I類 (61~69、90、92) 磨消縄文を施す。文様は平行沈線を基調に、その下部あるいは沈線間に曲線、弧線、直線、人体状のものを表現するものと、数条の平行沈線を描き、沈線間を磨り消すものがある。器形は、鉢形土器を主とし、壺形土器も少量出土。鉢形土器は頸部がくびれ、口縁部が外反するものと口縁部が直線もしくはやや内湾しながら立ち上がるもの及び92の様に口縁部が波状を呈し、装飾突起を付帯するものがある。64は壺形土器で、口縁部は磨消され無文帯を呈する。十腰内 I、II 式土器に比定。

II類 (70、71) 条線を施す。条線は4~8条単位の歯状の工具で描かれ、斜位、横位、あるいは弧状に描かれ、互いに交叉させる場合も多い。十腰内 I 式土器に比定。

III類 (72、88) 網目状撚糸文を施す。文様は器表全面に施される場合と、口縁部を磨消し、無文帯にし、胴部に施される場合とがある。十腰内 I 式土器に比定。

IV類 (73、74、94) 磨消し縄文手法により弧状の文様が施され、文様の区画帯に沿って刺突が連続して施される。94は高台を持ち、口縁部に3個の装飾突起。十腰内 II 式土器に比定。

V類 (75、76) 刻目を施す。刻目は数条の平行沈線内に連続して数段、口縁部付近に施される。76は口唇部に山形の突起を付す。十腰内 III 式土器に比定。

VI類 (77~80、91) 地文として斜縄文を施す。所謂粗製土器で縄文は LR 斜縄文を主とし器表全面に施されるもの、口縁部は無文帯にし胴部になされるものがある。器形はいずれも鉢形土器で、深鉢形の場合は口頸部でくびれ、口縁部が外反するものも多くこの場合口縁部は

無文帯にする事が多い。91は口縁部に押圧縄文を1条施す。

VII類 (81, 82, 83) 土器底部を一括して本類とした。底面に木葉痕や網代痕を残す。

第IV群 縄文時代晩期

I類 (84, 93) 三叉文を施す。鉢形土器で口唇部は山形を呈する。93は高台を付した浅鉢形土器で羊角状の突起を1個文様帯中に貼付する。大洞B式土器に比定。

II類 (85) 羊歯縄文を施す。鉢形土器で、口唇部に刻みを有す。大洞BC式土器に比定。

(2) 土偶 (34図、95)

調査区東側のLH48グリッド内で出土。板状の土偶で胴部の他は欠損している。胸部及び背面全面にわたり刺突文が施される。腹部には2条の沈線と沈線間に半円状の沈刻。

(3) 石器 (第36図)

石槍 (10, 11) 出土量は少なく2点。両面に調整剥離が施されるが、10は片面に主要剥離面を一部残す。2は両面に入念な調整剥離。いずれも基部が欠損している。2個共頁岩。

石匙 刃部形態から分類した。

1類 (12~15) 刃部が縦型を呈するもので、先端部分が尖頭するもの、丸くなるもの直線的なものがある。後者を除き、つまみ部は主要軸線上に位置するものが多い。調整剥離は13を除き片面になされる。12~14は頁岩、15は珪質頁岩。

2類 (16) 刃部が横型を呈するもので、出土量は少ない。体部は台形を呈し、下側縁部に細かい調整剥離を施している。頁岩。

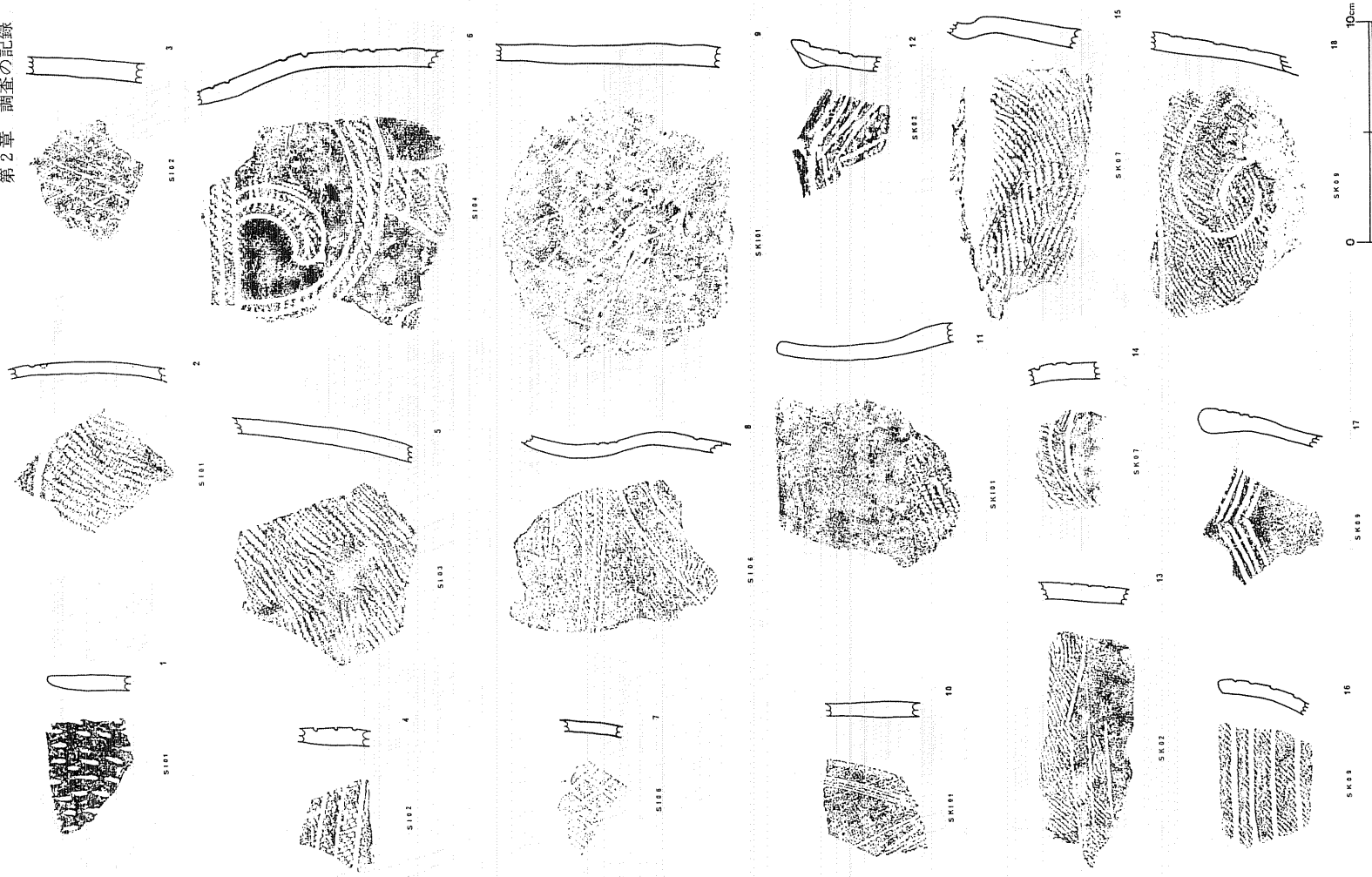
石鏃 (17, 18) 出土量は少なく2点、基部は無茎のものが尖基式で、有茎のものは凸基式である。両面に加工が施され、刃部には入念な調整剥離。いずれも頁岩。

石筥 (19) 基部下端に最大幅を持ち、頭部がやや尖頭化するものである。両面を粗い調整剥離した後、刃部に入念な調整剥離を施す。頁岩。

スクレイパー (20) 片面に粗い加工を施し、側縁部に調整剥離を加える。頁岩。

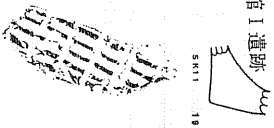
磨製石斧 (21, 22) 刃部は円刃を呈し、全面を研磨している。琉紋岩。

凹石 (23) 出土量が多い。扁平な自然石を利用し、両面に凹部を有す。側縁部には摩耗痕がみられる。安山岩。



第29図 遺構内出土遺物（土器）

SKF17 18



SKF19



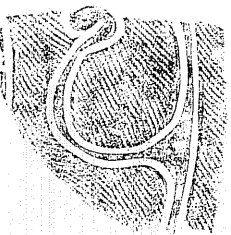
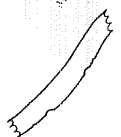
20



SKF20



21



SKF22

22

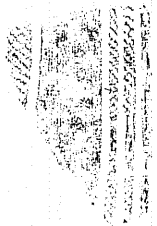


SKF23

23



SKF24

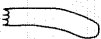


24



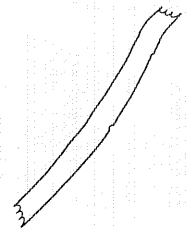
SKF25

25



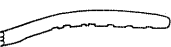
SKF26

26



SKF27

27



SKF28

28



SKF29

29



SKF30

30



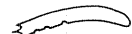
SKF31

31



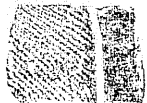
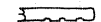
SKF32

32



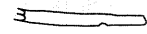
SKF33

33



SKF34

34



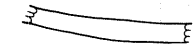
SKF35

35



SKF36

36

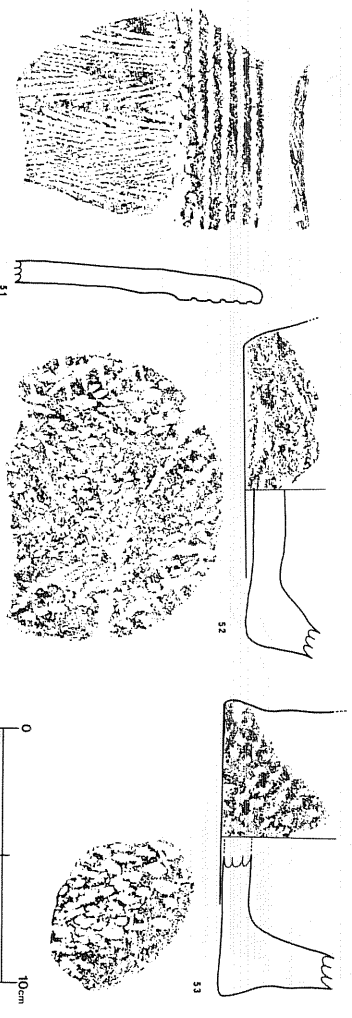
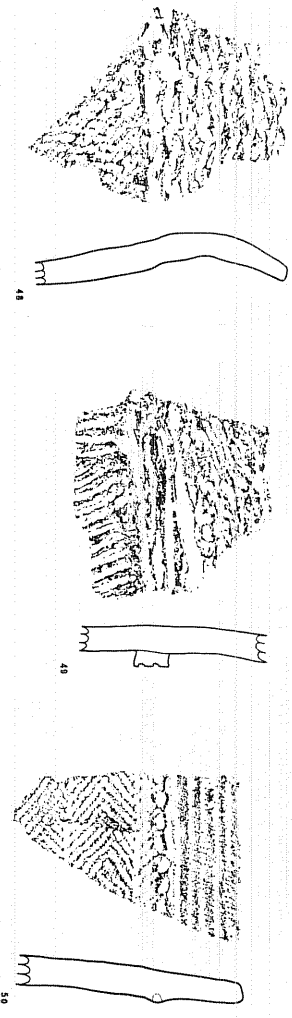
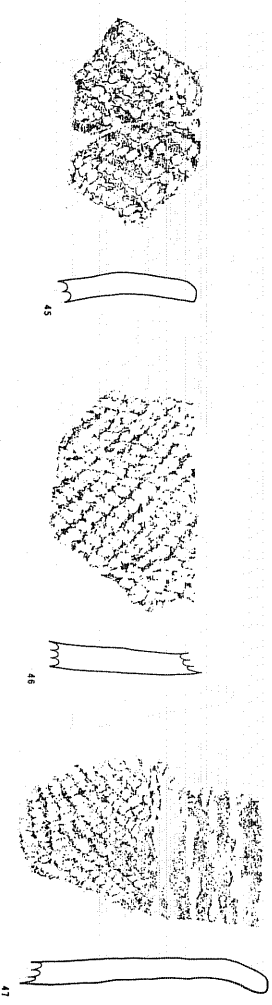
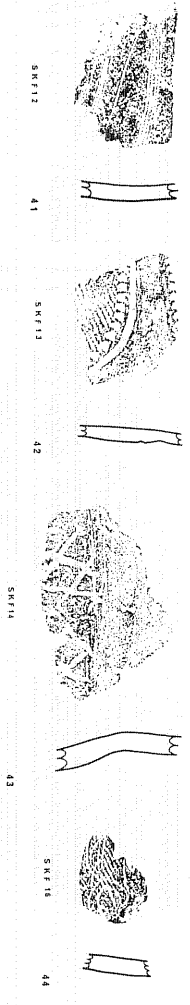
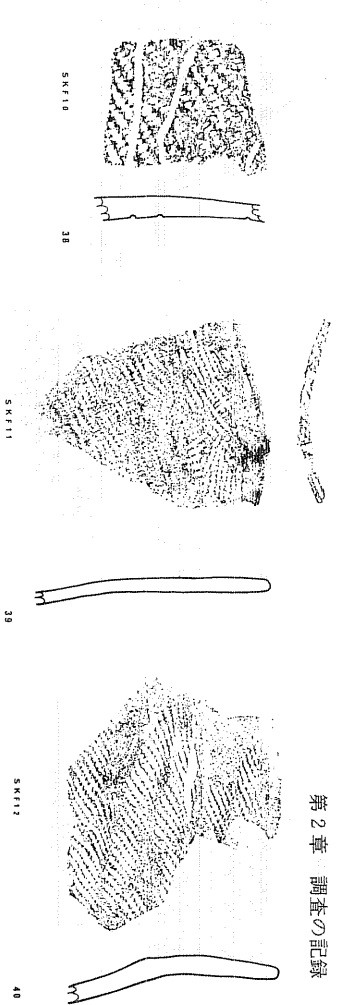


SKF37

37



第30図 遺構内出土遺物(土器)

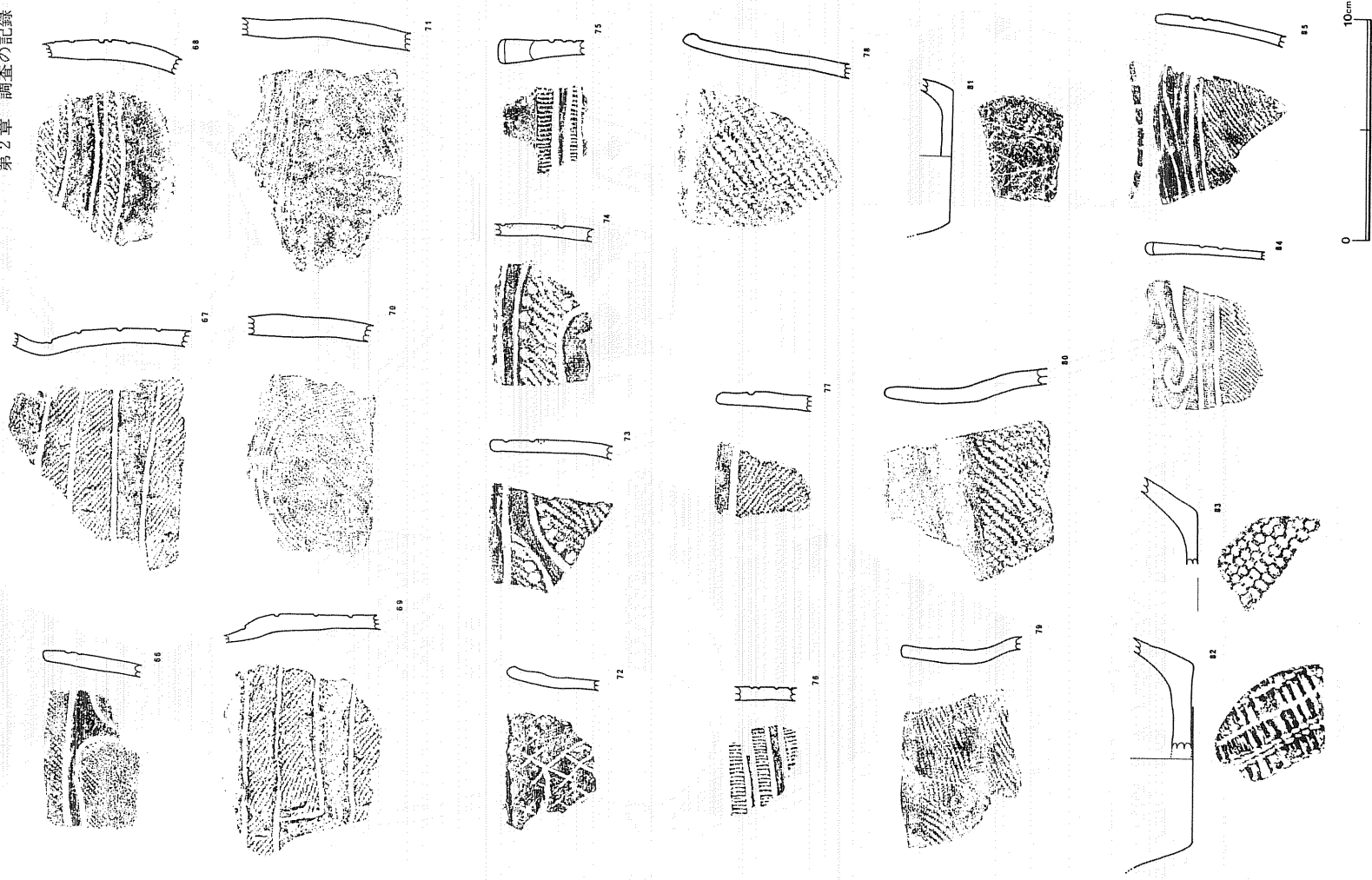


第31図 遺構内遺構外出土遺物(土器)

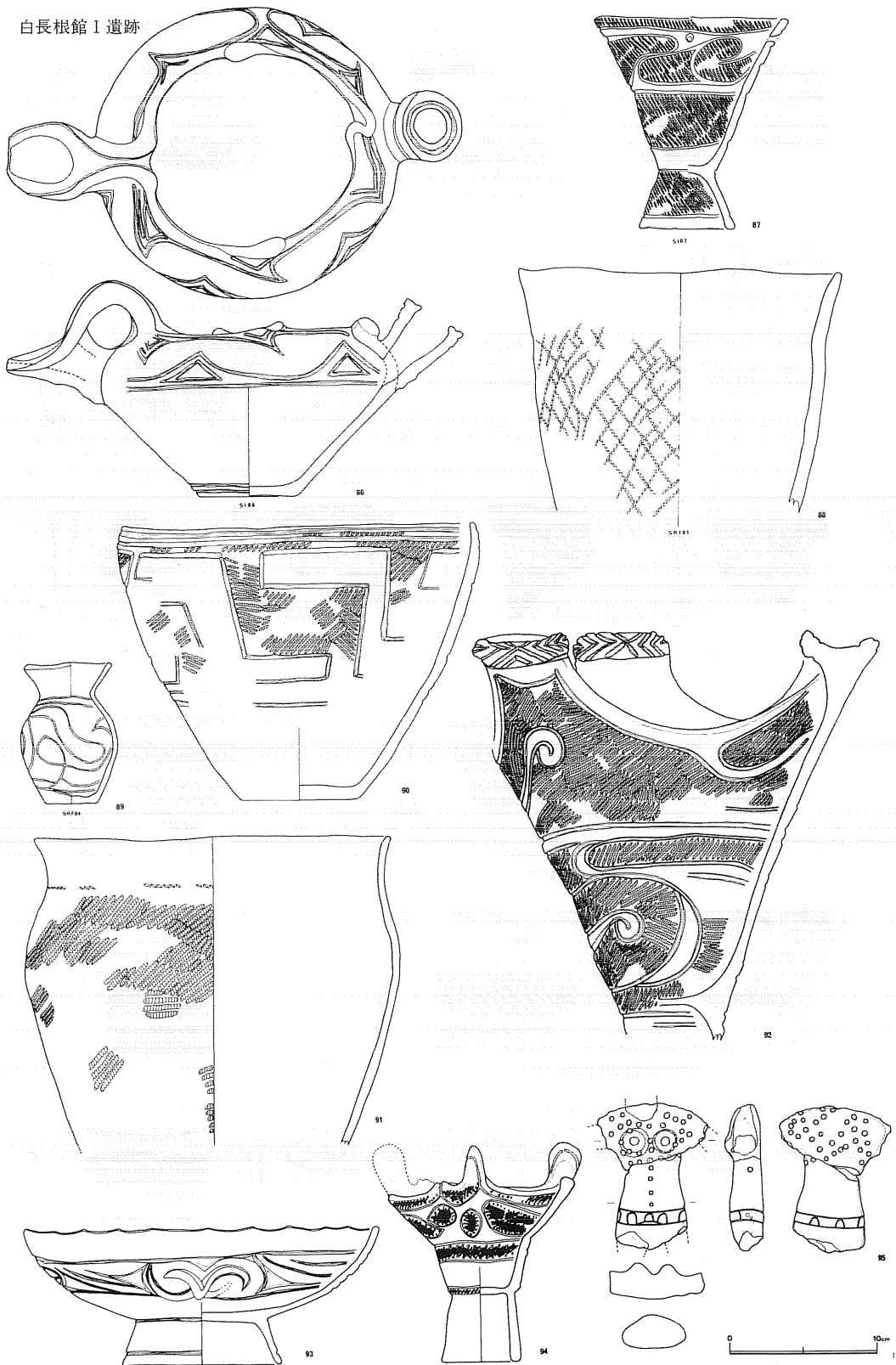
白長根館 I 遺跡



第32図 遺構外出土遺物（土器）

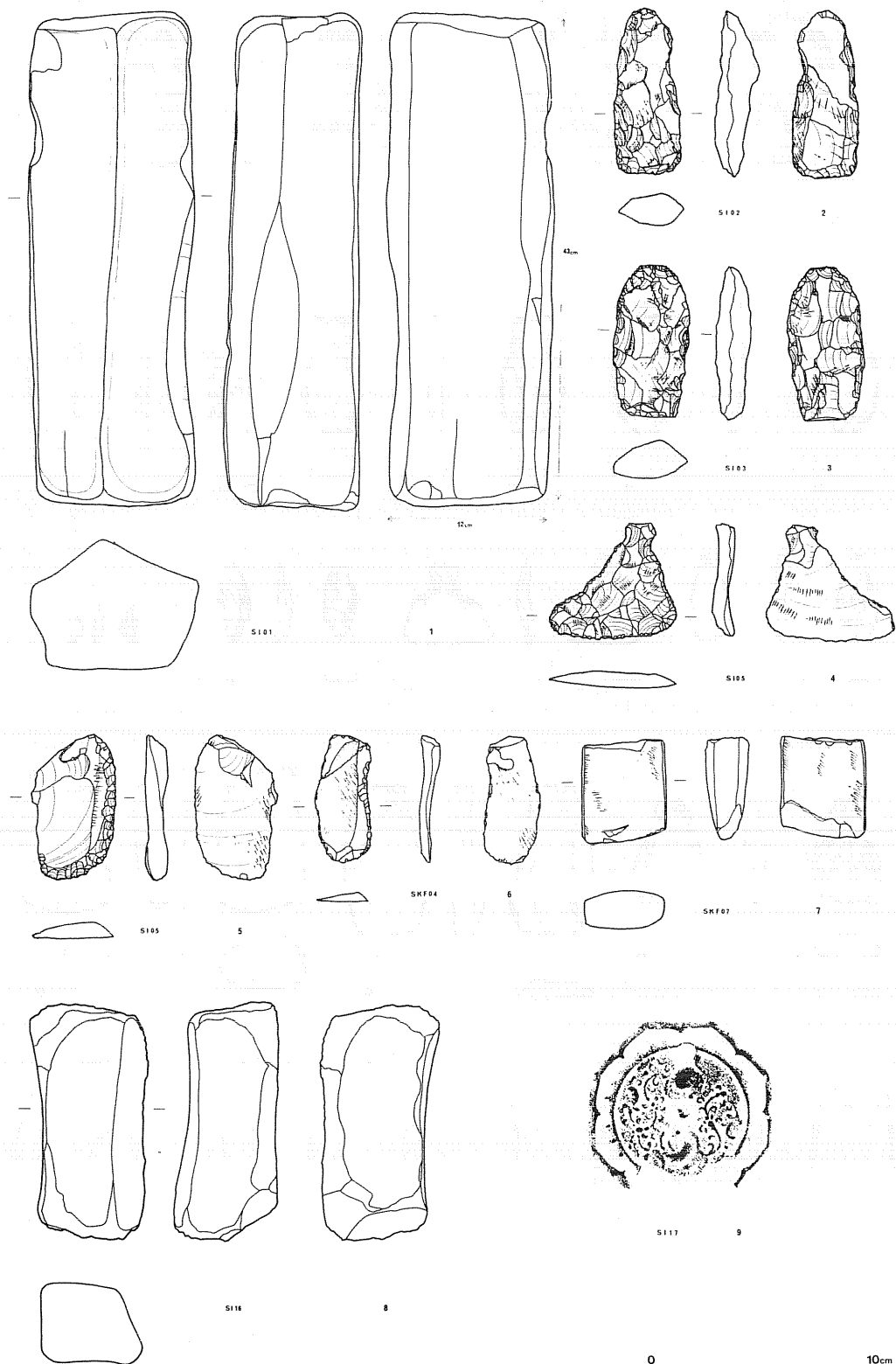


第33図 遺構外出土遺物(土器)



第34図 遺構内、遺構外出土遺物





第35図 遺構内出土遺物 (石器・銅鏡)

第36圖 遺構外出土遺物(石器)



## 第3章 まとめ

本遺跡は縄文時代及び平安時代の2時期にわたって営まれた複合遺跡である。出土遺物は土器が縄文時代前期、中期、後期、晩期のものと平安時代の土師器であり、量的に縄文時代後期のものが多い。その他土製品として土偶、石器は凹石が最も多く、石鏃、石槍、石匙、石筥が少量みられる。

本項では、特に遺構についてその特徴を述べたい。

縄文時代に関連する遺構は竪穴住居跡、竪穴状遺構、土壇、フラスコ状ピット、Tピットであり、遺物の出土するものは、S I 05竪穴住居跡が中期末に比定されるのを除き、他は後期前葉に(十腰内I～II式の時期に比定)に属する。竪穴住居跡ではS I 06、S I 07が壁部の一端に2条の楕円形のピットを有しており、関東地方を中心に中期末から後期初頭にかけてみられる所謂柄鏡形住居跡に類似するものと思われる。その特徴としては、住居跡本体が円形、柱穴は壁柱穴、出入口部としての張り出しを有しその結合部に八字状に開くピット等が述べられており、本遺構についても2条のピットを出入口の痕跡としてとらえる事が出来よう。

フラスコ状ピットは8基が人為的に埋められた痕跡を有し、不用遺構として廃棄される時点での一現象を呈している。また遺構内の堆積土は地山下70cm付近からみられる砂質の黄褐色土である。この事は他の同類の遺構を新たに掘る際、その排土を捨てたとも考えられ、類例として能代市腹鞍の沢遺跡<sup>(註2)</sup>がある。その他7基の遺構の底面付近から、クリ、クルミを主とする炭化堅果類が比較的多く出土しており、貯蔵穴たる性格の一端を示すものと言えよう。混入する層中には焼土と炭化物を多く含むが、遺構内に火熱の痕跡は認められなく、より効果的な保存を計るため堅果類は遺構外で果皮部分を炭化させてから貯蔵したとも考えられる。

次に平安時代のものは住居跡及び土壇で、住居跡については、6軒から羽口と少量の鉄滓が出土。羽口は遺構外のものも含めると54片にも及ぶ。この内S I 16、17、18はいずれも斜面上に構築、東壁は省略されており、内部に炉状の施設を持つ。炉状の施設は上面に多量の白色粘土を残存しており、熱処理を目的とした半シャフト状の形態を有していたと思われる。付設する長楕円形の掘り凹みについては、炉内の残留物の流出部やかき出し部等の性格を持つものであろう。出土した鉄滓は、含有物分析比率によると、チタン分が多く鉄量の少ない製錬滓を呈している。これらの事から遺構は製鉄関連の工房跡と考えられるが、鉄滓の出土量は総じて少ない。また外観は飴状に流動したものは少なく、多くは不規則な塊りで多孔質および酸化風の茶褐色を呈するものが多い事等、製鉄関連を主としながらも、大鍛冶としての可能性もある。以上の事をふまえ、各住居跡の堆積土状況(軽石粒子を多量に含む)、出土遺物等に相異がみら

白長根館 I 遺跡

れない事から、いずれも平安時代後半を主として、ほぼ同時期に営まれた、生産を主体とした集落と考える事が出来よう。

学習院大学放射性炭素年代測定結果

木越邦彦

S K F 03 B P 年代 3710±120 1760 B C S K F 07 B P 年代 3350±130 1400 B C  
S K F 06 B P 年代 3710±120 1760 B C S K F 11 B P 年代 3690±110 1740 B C

東京工業大学 出土鉄滓の粉末 X 線回析結果 (含有成分比率、%)

高塚秀治

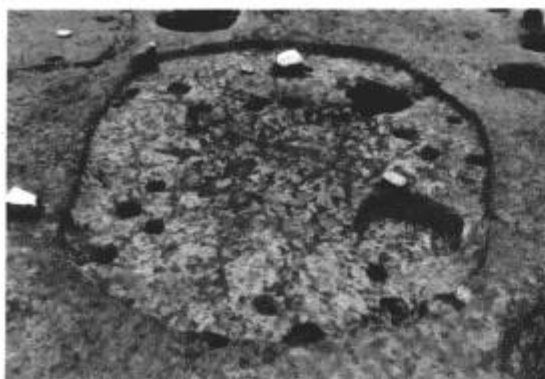
S I 16 二酸化硅素 (SiO<sub>2</sub>) 28.50 二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) 15.36  
酸化アルミニウム (Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 5.76 酸化第 2 鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 39.48  
酸化マグネシウム (MgO) 4.21 酸化カルシウム (CaO) 4.35  
酸化カリウム (K<sub>2</sub>O) 1.00  
S I 17 (SiO<sub>2</sub>) 27.23 (TiO<sub>2</sub>) 15.31 (Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 5.54 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 40.40  
(MgO) 4.05 (CaO) 4.31 (K<sub>2</sub>O) 0.90  
S I 18 (SiO<sub>2</sub>) 23.57 (TiO<sub>2</sub>) 15.31 (Hl<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 5.09 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 47.62  
(MgO) 4.34 (CaO) 3.38 (K<sub>2</sub>O) 0.87

註 1 千葉県文化財センター 「千葉文化財センター研究紀要」 1982年

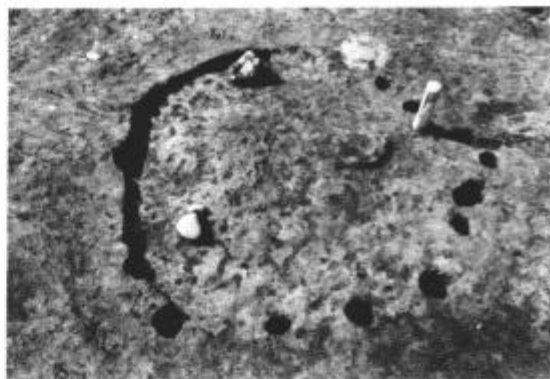
註 2 秋田県教育委員会 「秋田県文化財調査報告書第97集 腹鞆の沢遺跡」 1981年



図版1 遺跡遠景(北▶南)



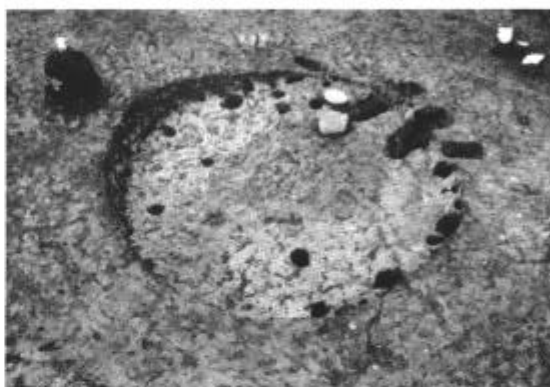
S I 01 豎穴住居跡



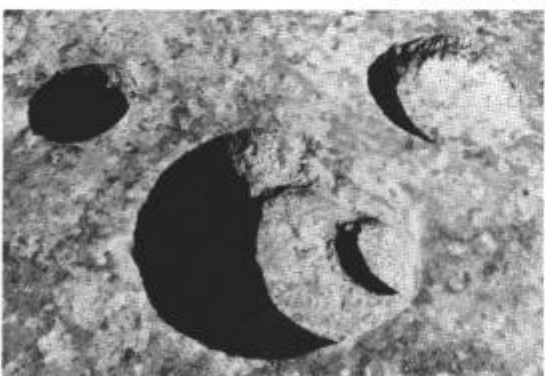
S I 02 豎穴住居跡



S I 05 豎穴住居跡



S I 06 豎穴住居跡



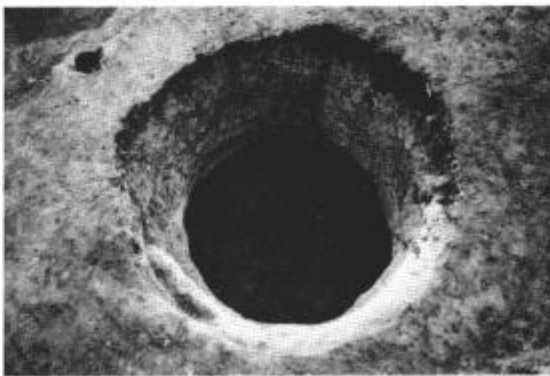
S K 06、S K 14、S K F 08



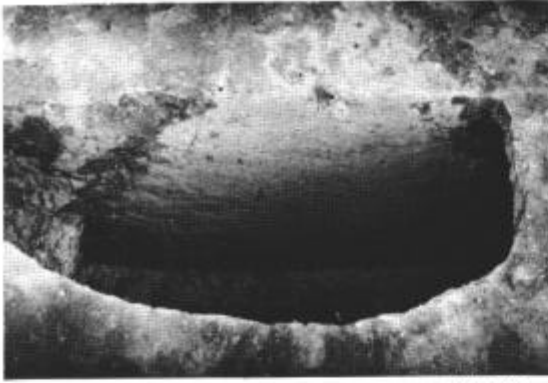
S K F 06



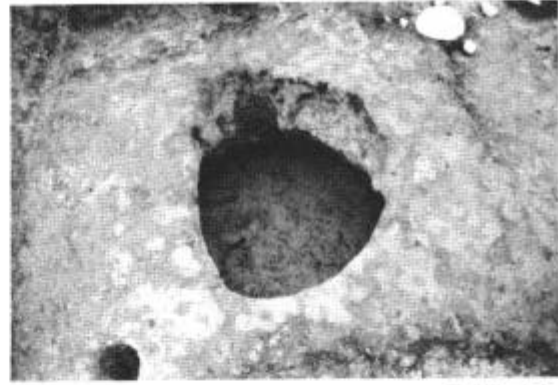
S K F 07 土層断面



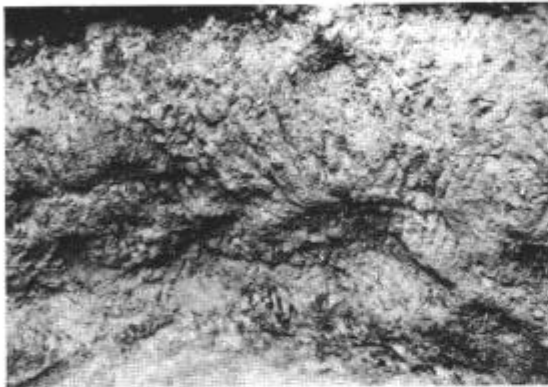
S K F 07



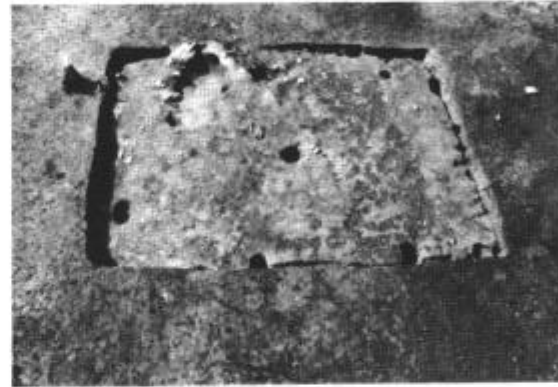
S K F 15土層断面



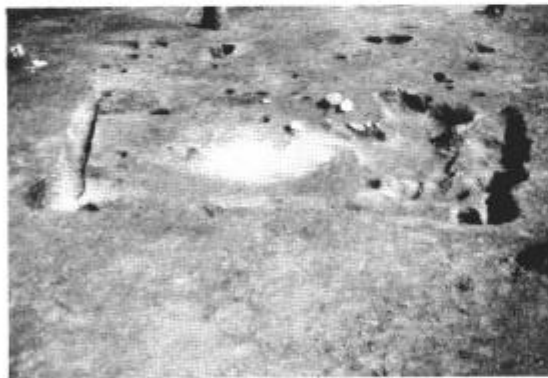
S K F 15



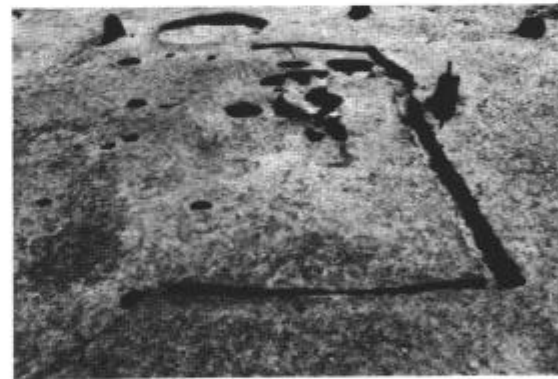
S K F 15内壁工具痕



S I 10竪穴住居跡



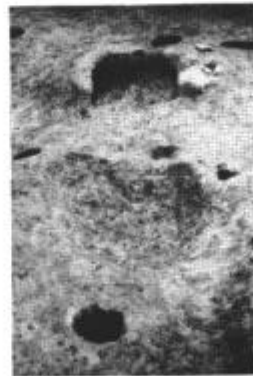
S I 16竪穴住居跡



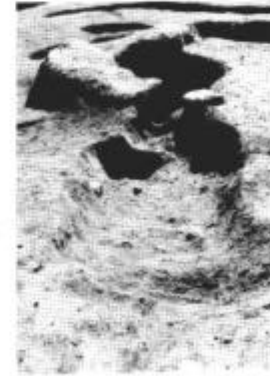
S I 17竪穴住居跡



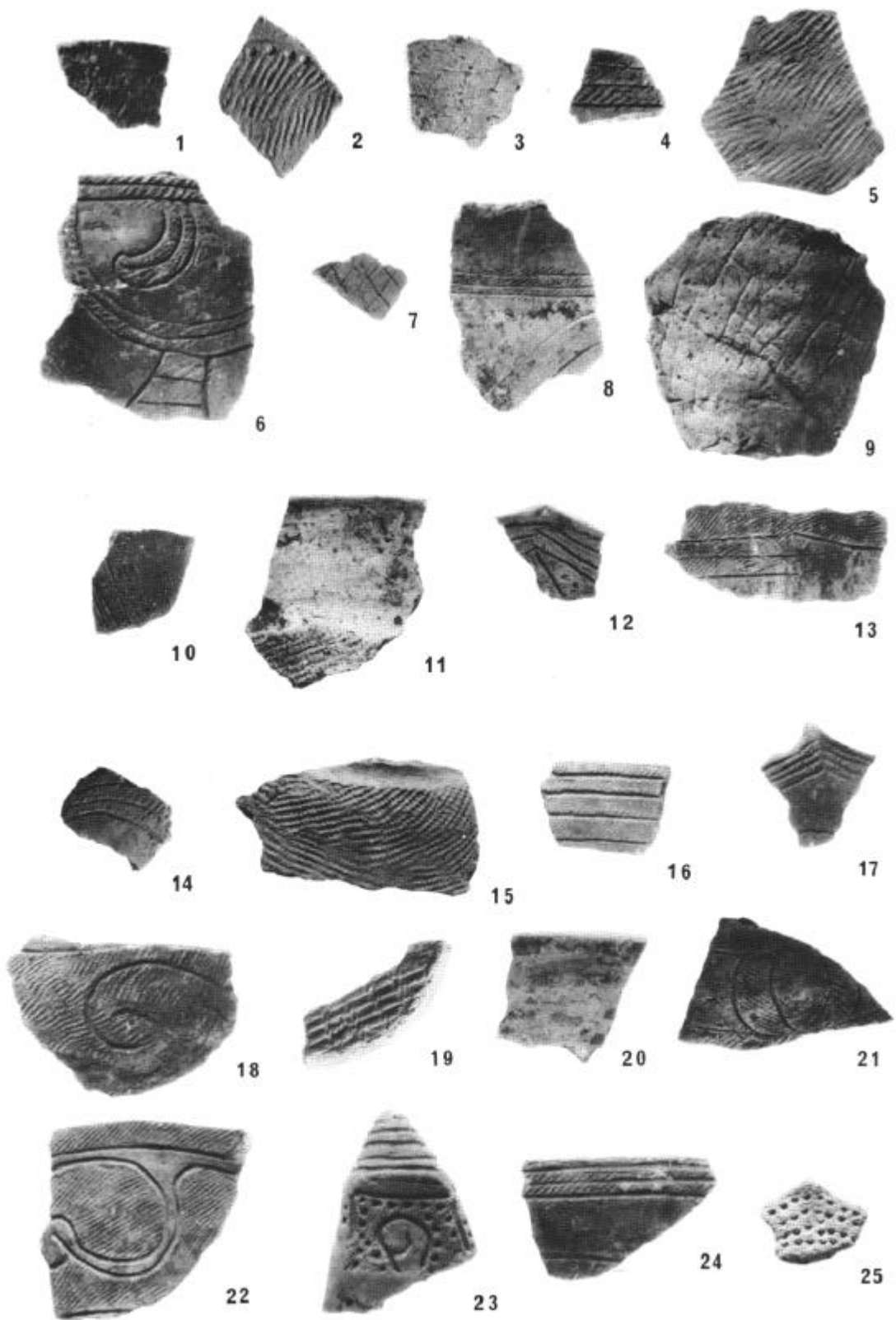
S I 18竪穴住居跡



S I 18カマド状遺構

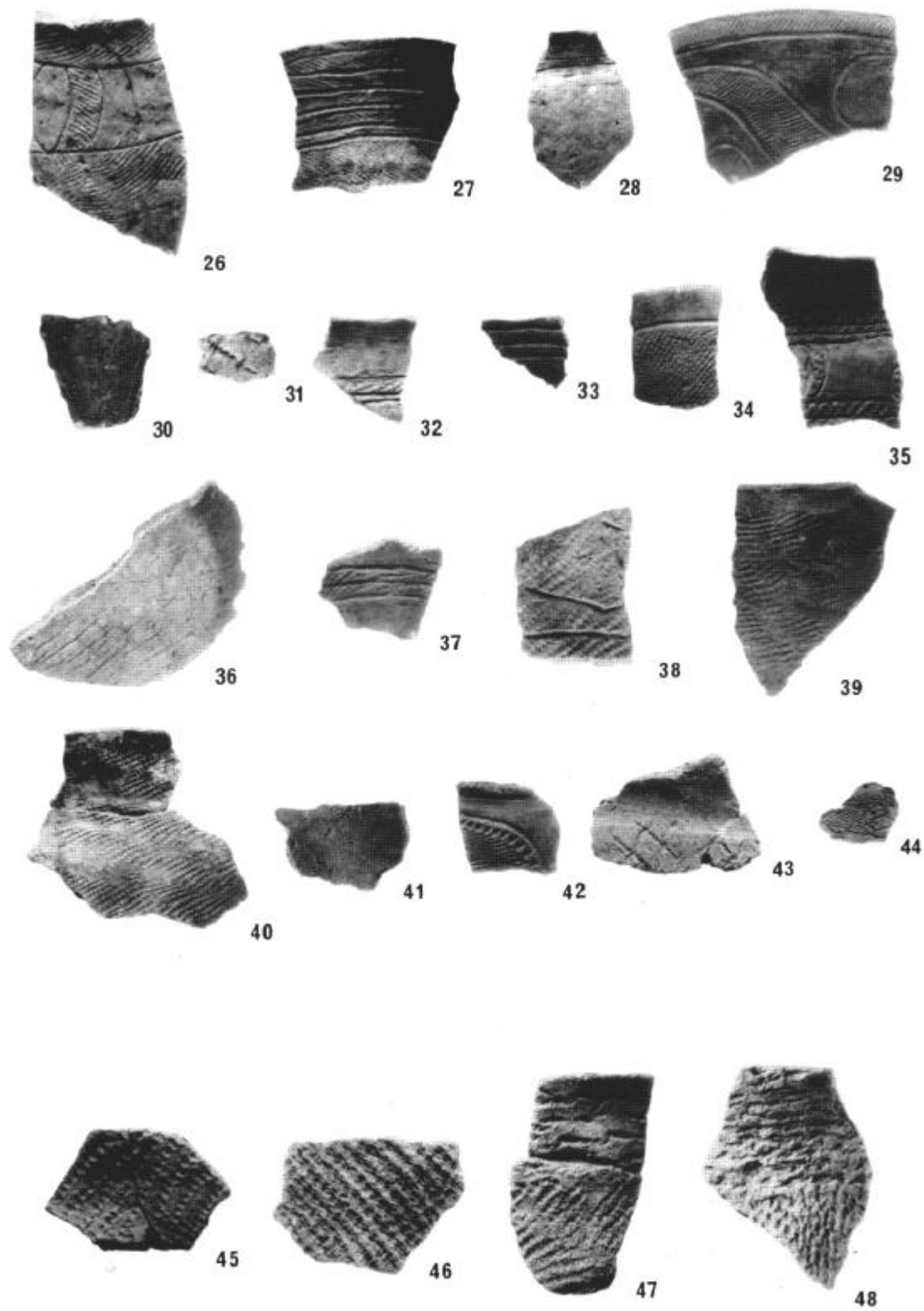


S I 17カマド状遺構

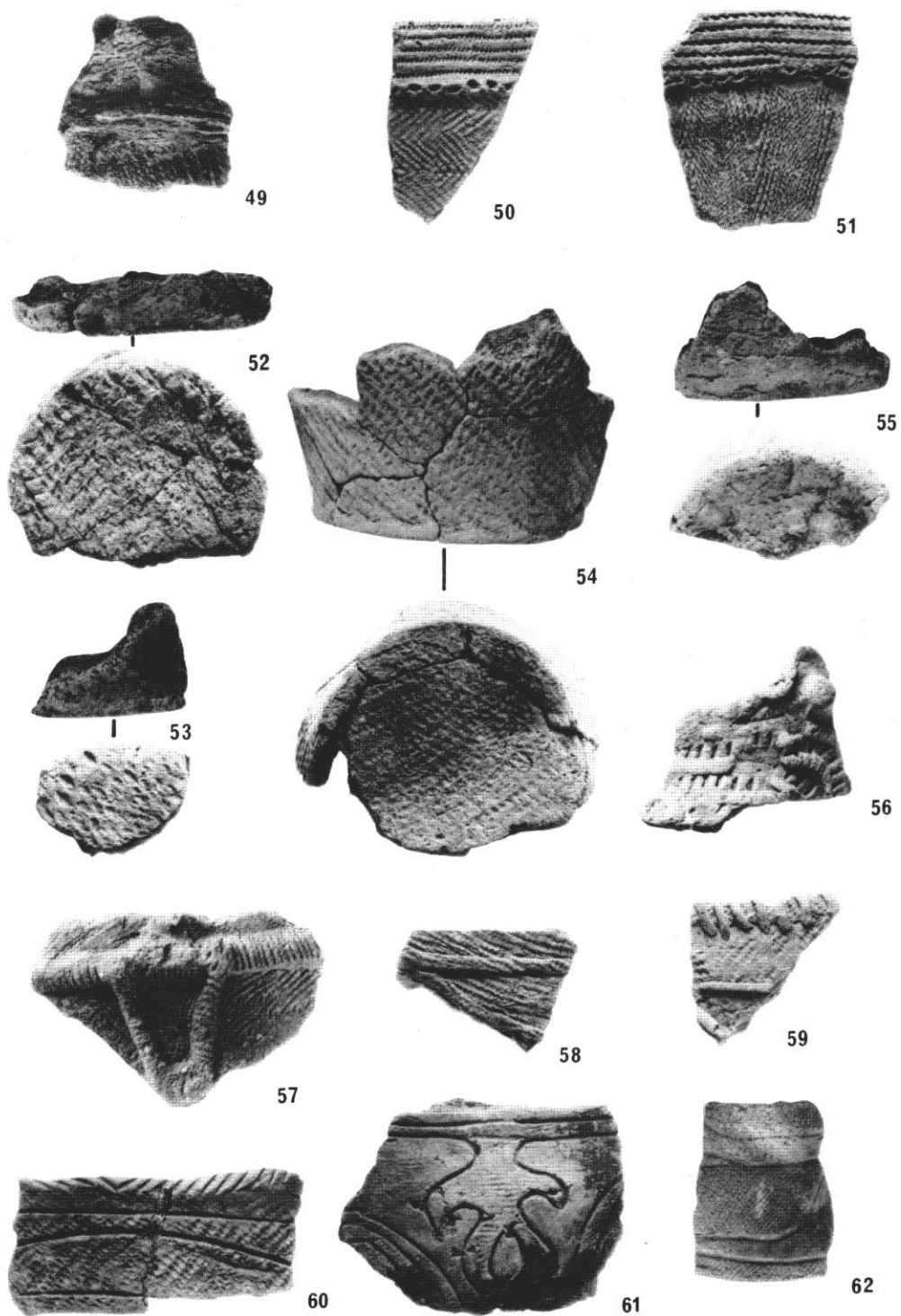


図版4 遺構内出土遺物(土器)

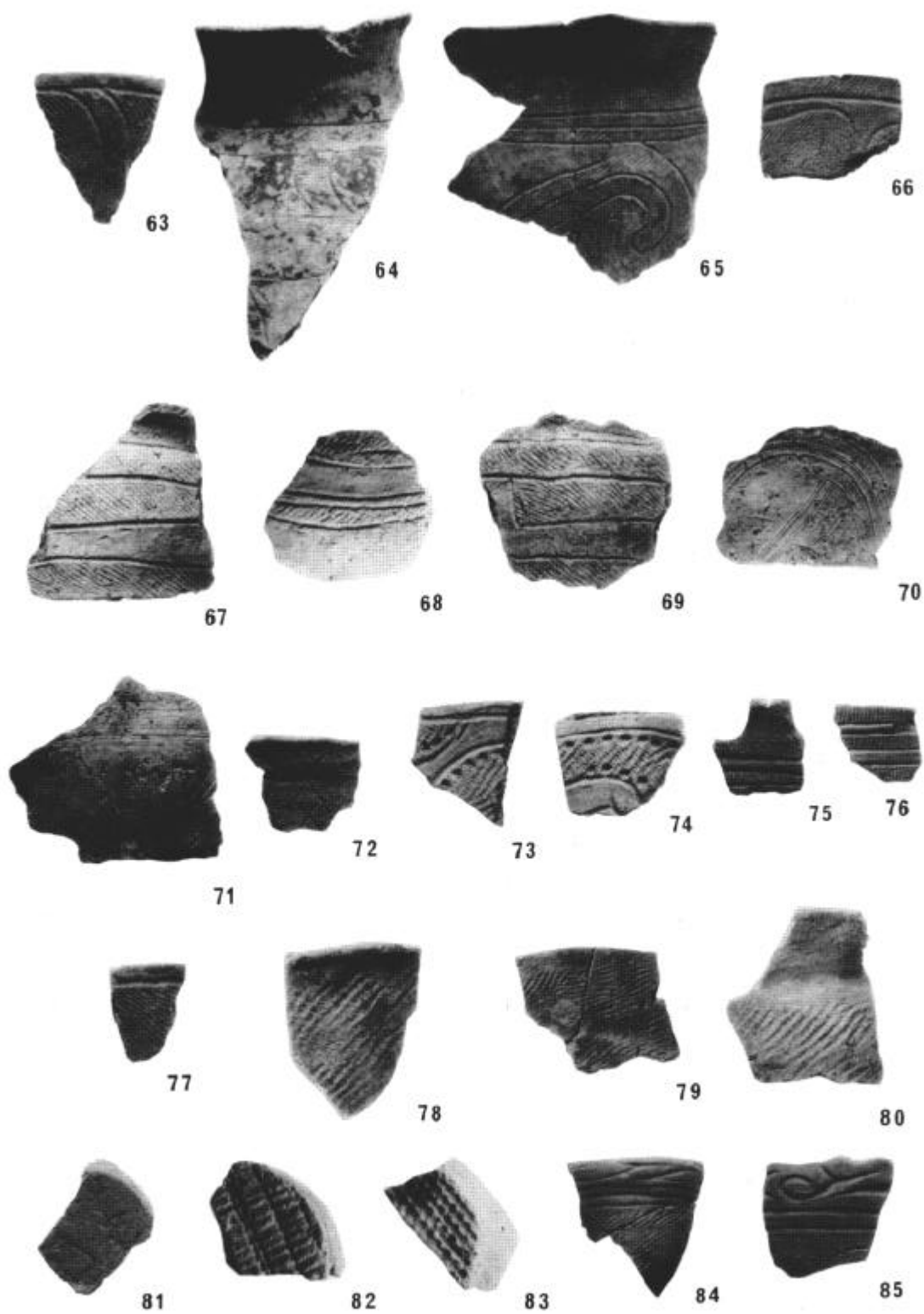




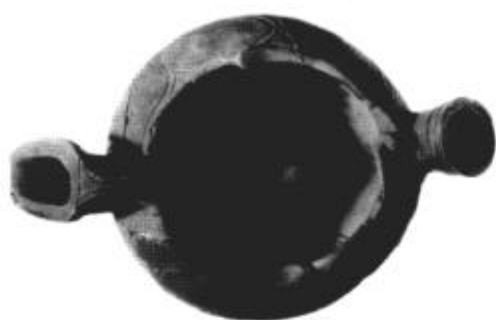
図版5 出土遺物(土器)・遺構内(26~44)・遺構外(45~48)



図版6 遺構外出土遺物(土器)



図版7 遺構外出土遺物(土器)



86



87



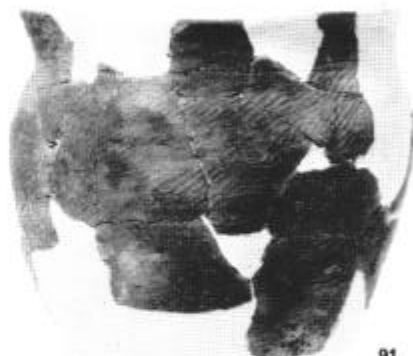
88



89



90



91



92



93



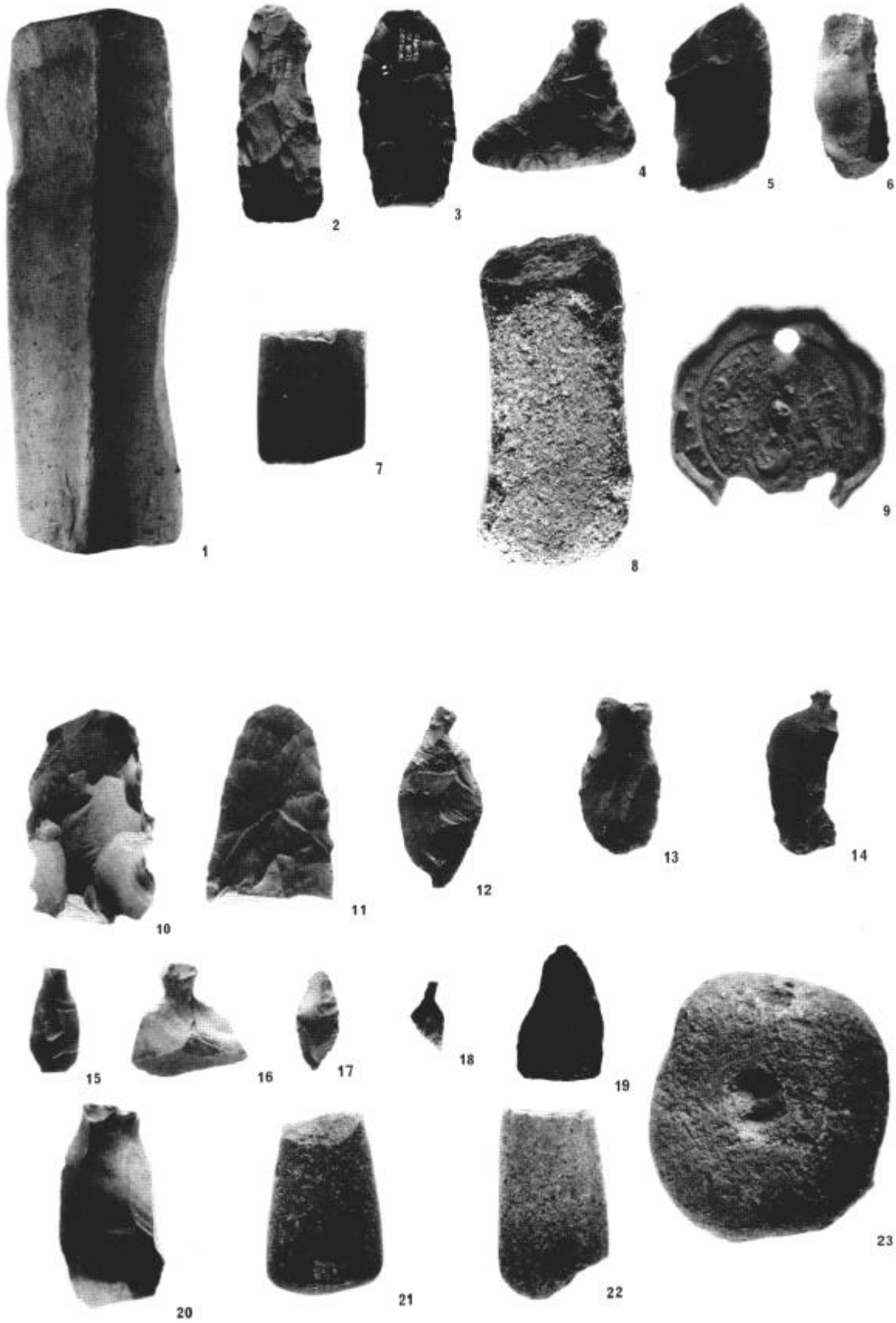
94



95



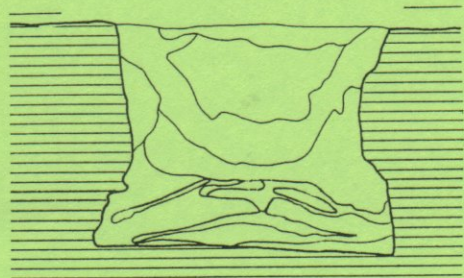
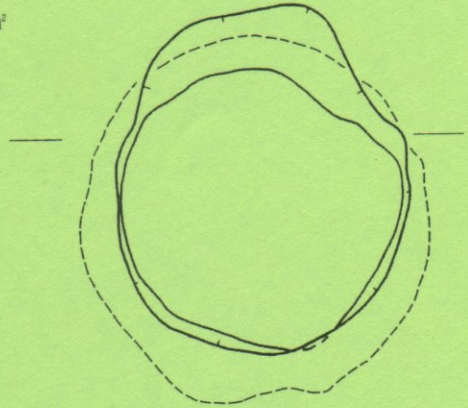
図版8 出土遺物(土器)・遺構内(86~89)・遺構外(90~95)



図版9 出土遺物 遺構内(石器・銅鏡、1～9)・遺構外(石器、10～23)

# 白長根館 II 遺跡

遺跡番号 No. 6  
所在地 鹿角郡小坂町字白長根33番地他  
調査期間 昭和58年7月1日～9月30日  
発掘調査予定面積 376m<sup>2</sup>  
発掘調査面積 226m<sup>2</sup>



## 第1章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観 白長根館I遺跡参照

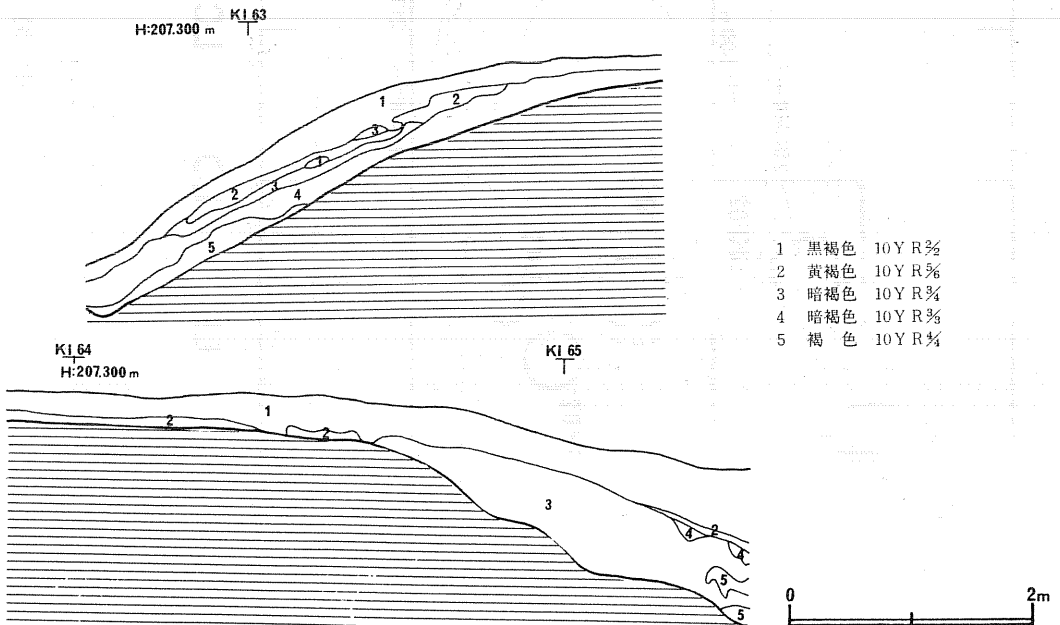
第2節 調査の方法 白長根館I遺跡参照

### 第3節 調査の経過

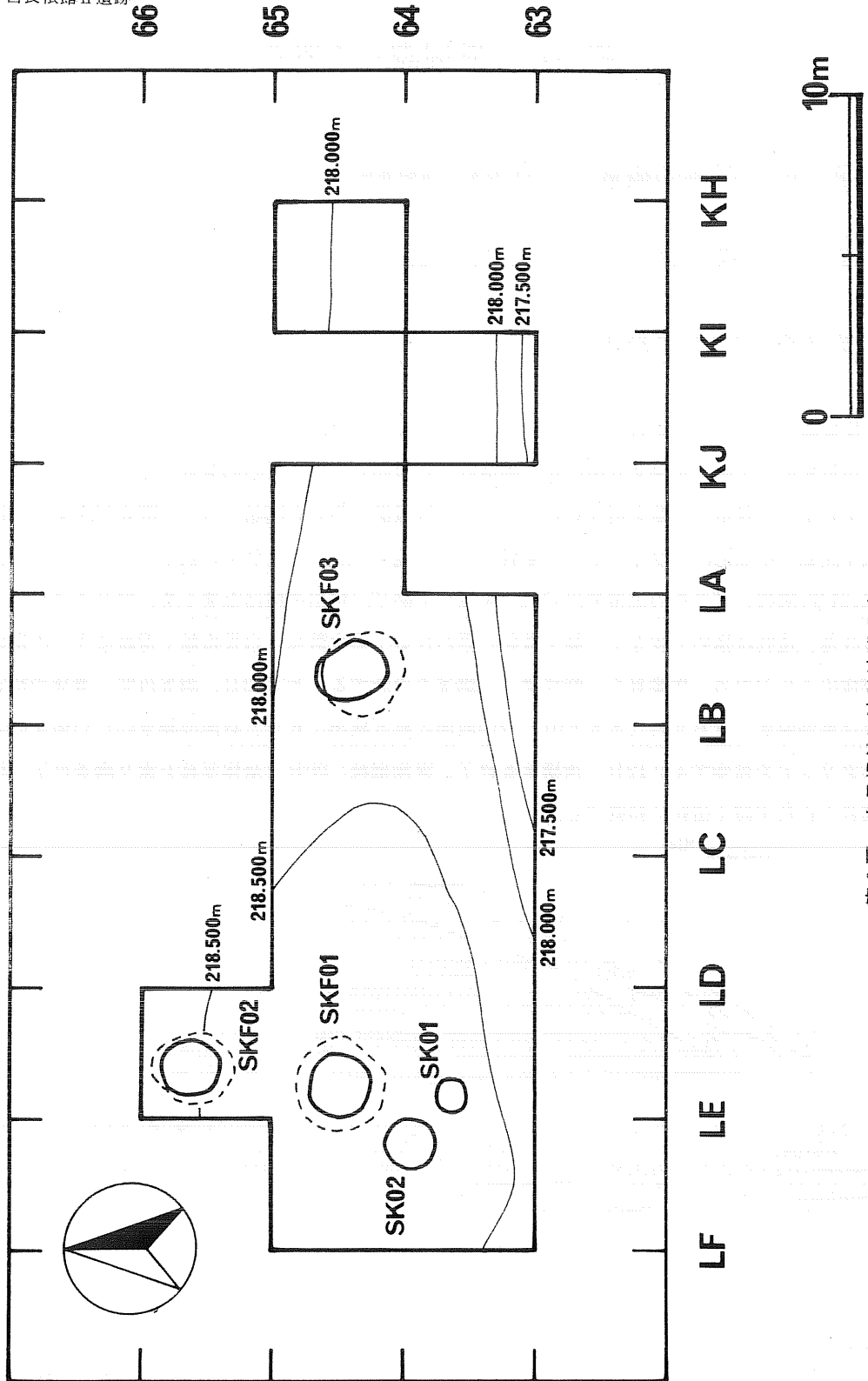
発掘調査は昭和58年7月1日から9月20日まで実施した。

白長根館I遺跡に隣接する事から、両遺跡は並行調査し、7人の作業員で行う。

7月1日、現地の下草を刈り払い、グリッド杭設置の作業を開始、14日、調査区西端から粗掘り開始。南北方向のラインは、土層観察のため残す。20日、フラスコ状ピット(SKF)検出。21日、隣接して2基の土壇検出。28日、粗掘りを終了。検出遺構は土壇1基、フラスコ状ピット3基、遺物は極めて少なく、縄文後期と思われる土器片数点。白長根館I遺跡に多くの遺構が検出されたため、作業員を一時移動し、調査を中断する。8月23日、調査再開。遺構の精査及び実測開始。9月2日、SKF01、02の底面に柱穴検出。6日、斜面部調査のため南北に各1グリッドを拡張する。12日、遺構精査終了、実測継続。20日、全体写真を撮り調査終了。作業員を白長根館I遺跡に移動する。



第1図 白長根館II遺跡土層(南一北)



第2図 白長根館Ⅱ遺跡遺構分布図



## 第2章 調査の記録

### 第1節 検出遺構

土壇2基、フラスコ状ピット3基が検出された。遺物はいずれの遺構からも出土せず、遺構外からわずかに縄文時代後期のものと思われる土器片が少量出土している。

#### (1) 土壇

**SK01** (第3図) 平面形は直径120cmの円形。深さ60cm。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦で堅い。堆積土は比較的堅くしまった褐色土を主体に、2層は砂質である。

**SK02** (第3図) 平面形は直径140cmの円形。深さは36cm。底面は東方向にやや傾斜。堆積土はやや堅くしまった褐色土を主体に、黒色土を部分的に混入する。

#### (2) フラスコ状ピット

**SKF01** (第3図) 壙口部径200cm×180cm、壙底部径320cm×340cm。深さ112cm、堆積土はやや堅くしまった黒褐色土を主体とし、上層及び下層に褐色土を混入する。底面は平坦で堅くしまり周壁に沿って6個の柱穴状ピットを有す。

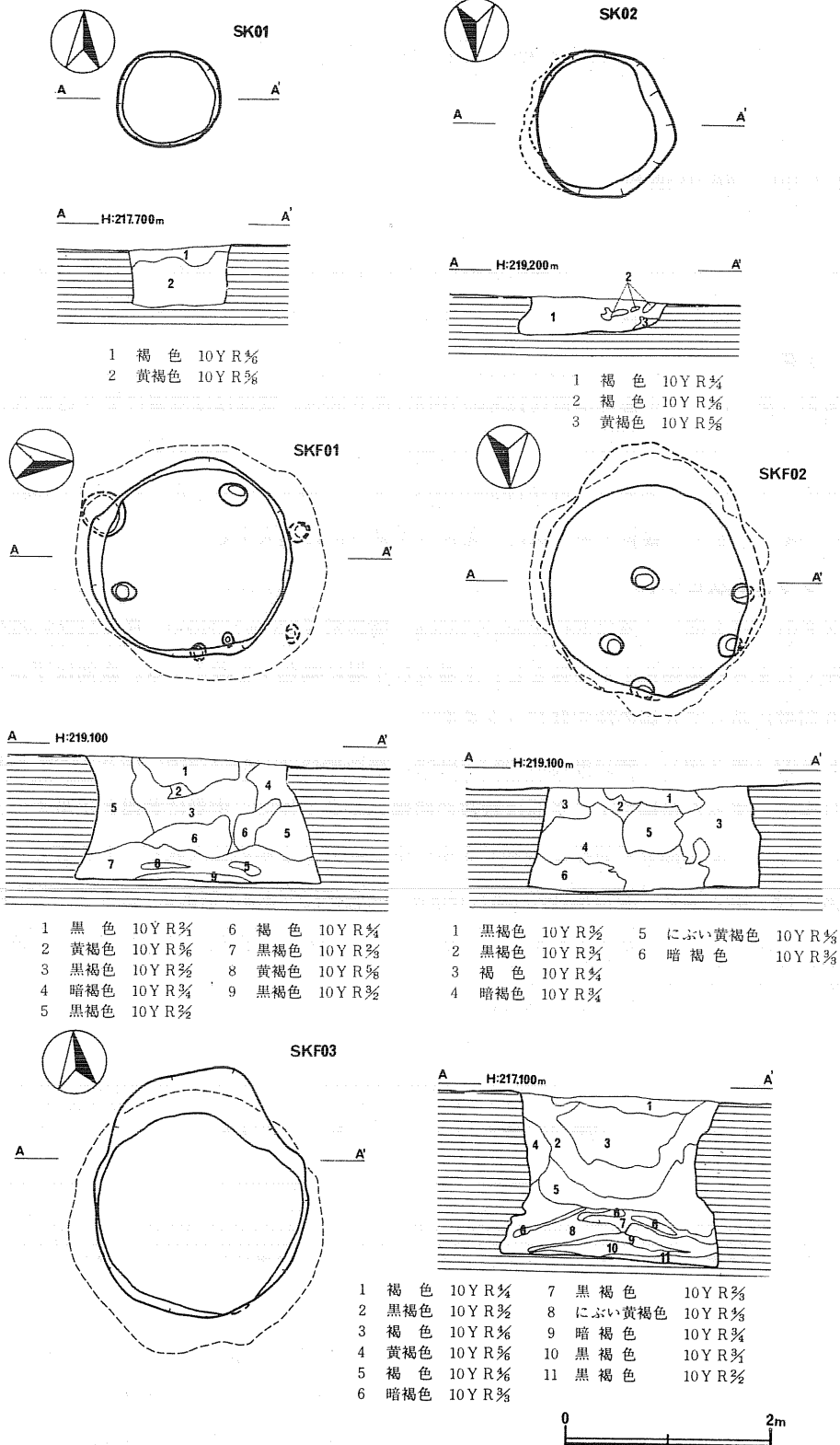
**SKF02** (第3図) 壙口部径200cm×188cm、壙底部径260cm×224cm。深さ100cm。堆積土は上層は堅くしまった黒褐色土、下層は軟質の暗褐色土を主体に、中層に黄褐色土層を介入する。底面は平坦で、北西部分で周壁に沿って3本、中央部分に2本の柱穴状ピットを有す。

**SKF03** (第3図) 壙口部径200cm×180cm。壙底部径248cm×240cm。深さ160cm。堆積土は褐色土、黒褐色土、暗褐色土が濃密に互層し、特に上層では褐色土の混入が多い。底面は平坦で堅くしまっている。

## 第3章 まとめ

検出された遺構は土壇2基、フラスコ状ピット3基で、遺構内からの出土遺物はなく時期は不明である。しかし、位置的に白長根館I遺跡と同一台地上にあり、極めて近接している事、わずかではあるが遺構外より縄文時代後期の土器片が出土している事等から、両遺跡の相関性を推測する事は出来よう。検出された遺構の内、2基のフラスコ状ピットの底面に数本の柱穴状ピットが穿たれており、ピットを覆う上屋構造が存在していたものと考えられる。

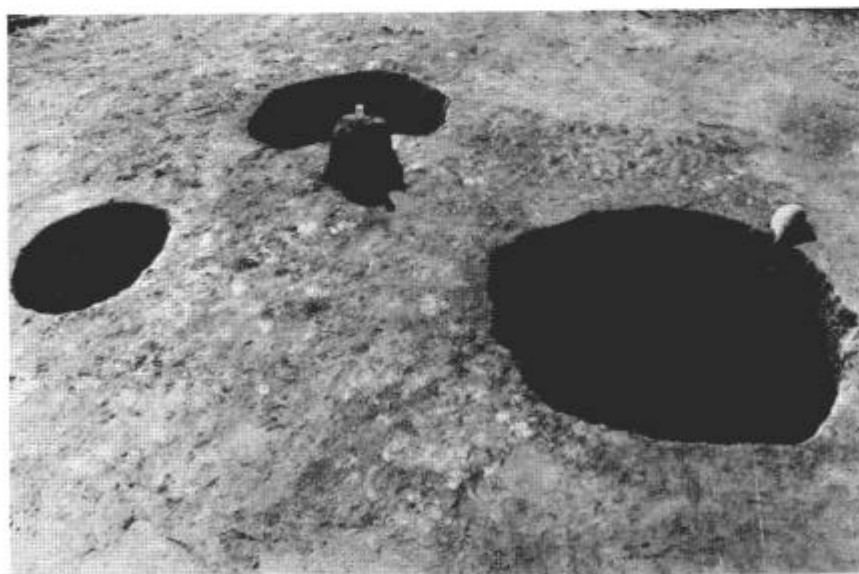
白長根館Ⅱ遺跡



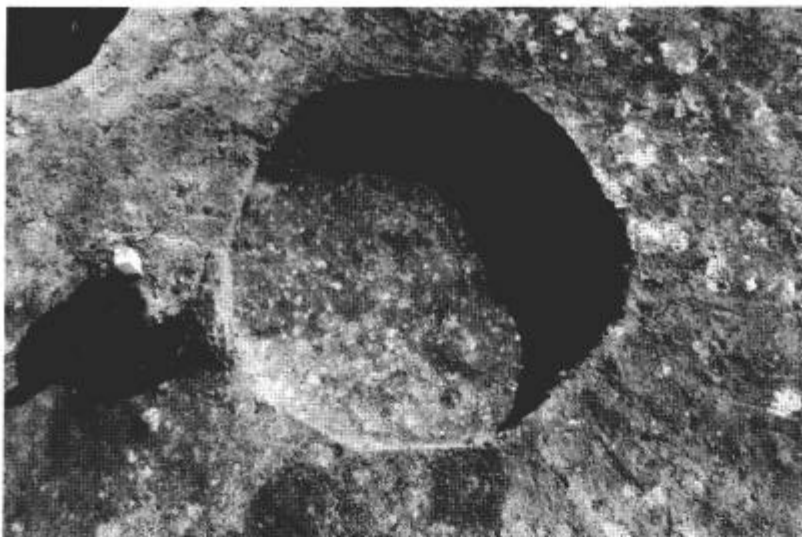
第3図 SK01・02、SKF01~3実測図



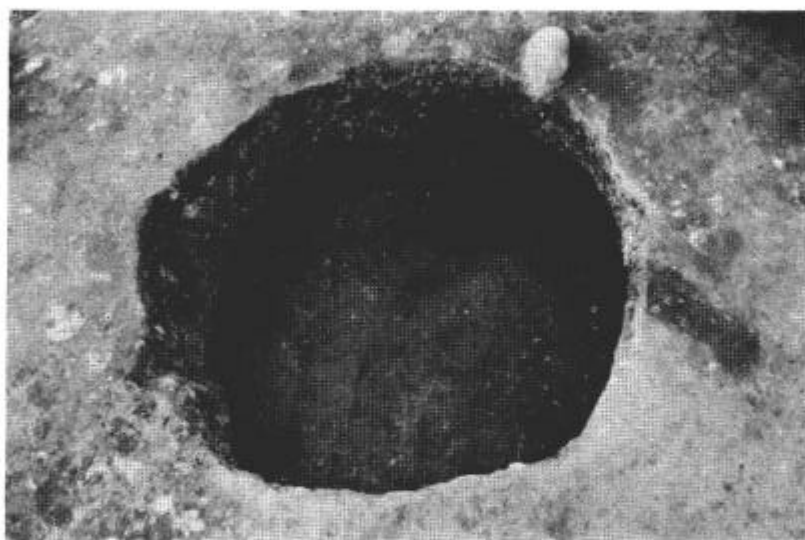
遺跡遠景（東▶西）



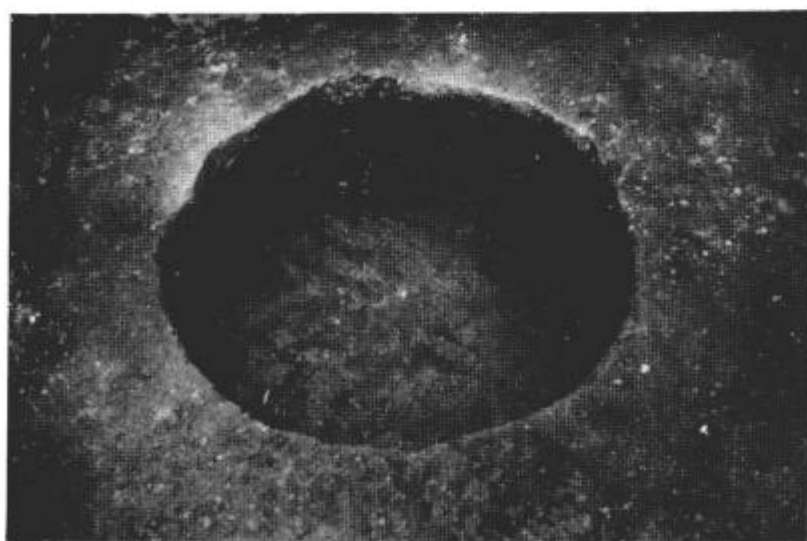
S K 01 • S K 02 • S K F 01



S K 02



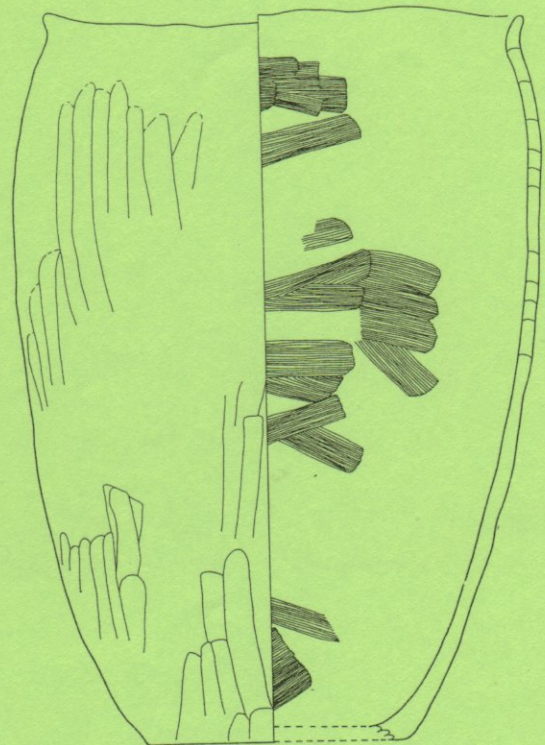
S K F 01



S K F 02

# 丑 森 遺 跡

|          |                       |
|----------|-----------------------|
| 遺 跡 番 号  | No. 7                 |
| 所 在 地    | 鹿角郡小坂町字丑森 5 番地他       |
| 調 査 期 間  | 昭和58年 9 月20日 ~ 11月19日 |
| 発掘調査予定面積 | 4,092m <sup>2</sup>   |
| 発掘調査面積   | 3,200m <sup>2</sup>   |



## 第1章 発掘調査の概要

### 第1節 遺跡の概観

昭和56年に行われた範囲確認調査の結果、遺跡の総面積は5,115 m<sup>2</sup>と判明した。

遺跡は小坂川右岸の舌状に突き出た河岸段丘上に位置する。標高は216 mで、沖積地との比高差は31 m。地形は比較的平坦だが北方を除く三方は河川、小沢によって浸蝕され、急峻な崖を形成している。北方は緩やかな起伏を呈しながら背後の丘陵地に連らなる。遺跡周辺は山林及び笹のおい茂る原野で、過去において植林が行われている。

遺跡の基本土層は5層より成り、深さは45～60 cm、北面はやや深く80 cm。第1層は黒色土で調査開始前重機による表土除去が行われたため、攪乱を呈している。第2層は軽石層で縁辺部程残存が良く、平坦部では一部が消滅している。色調や粒子の相異からさらに3層に細別。第3層は上位部に少量の軽石細粒を含むチョコレート色を呈する暗褐色土で第2層の軽石層と並存する。第4層はやや軟質の黒褐色土で、縁辺部は厚く堆積。遺物の多くはこの層中より出土。第5、6層は細粒の褐色土を多量に含む暗褐色土。

### 第2節 調査の方法

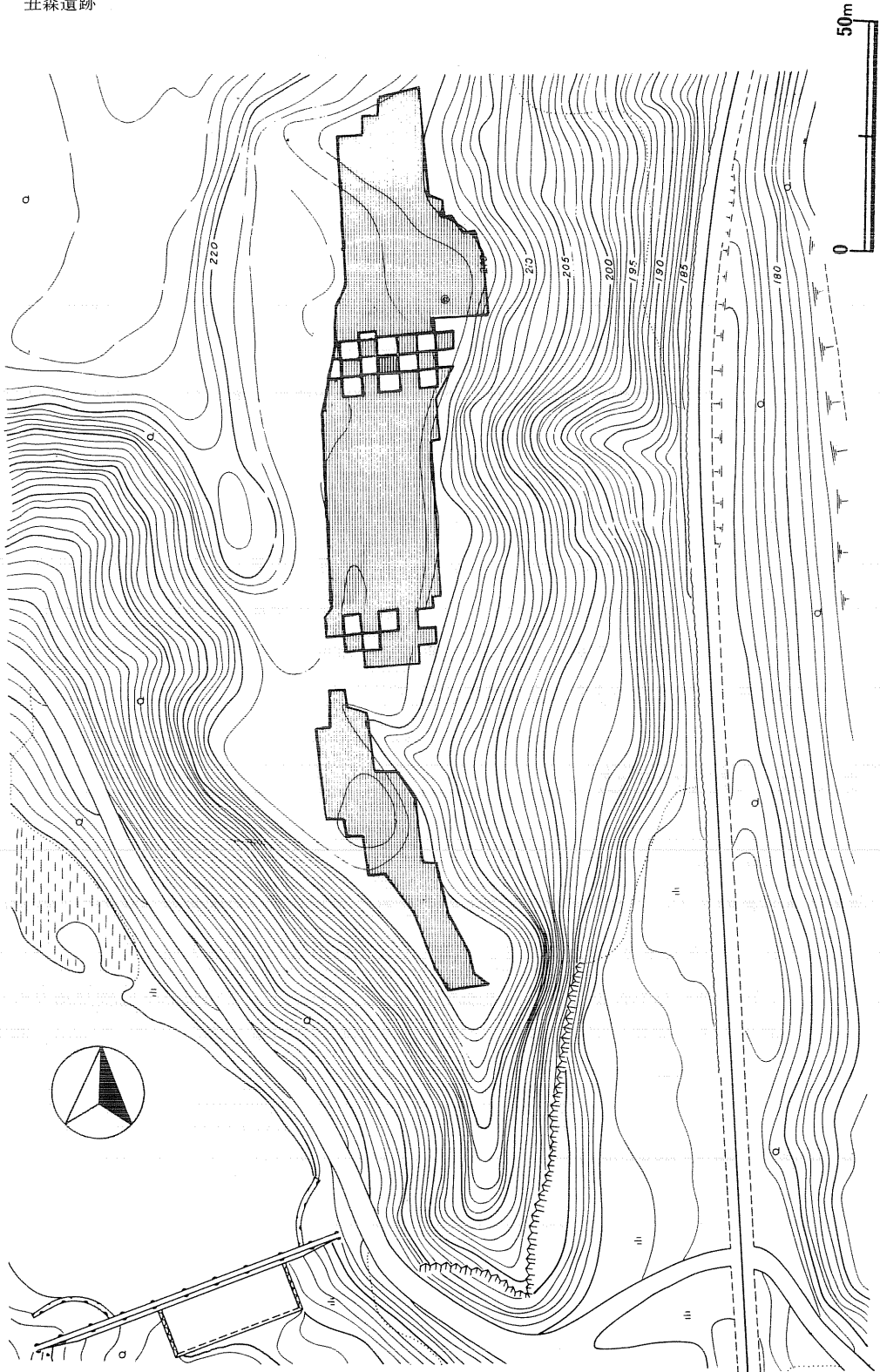
グリッド方式を用いて行った。

遺跡を含む範囲に4 m×4 mのグリッドを設定した。グリッドは日本道路公団設定の路線中心杭S T A160+60を基準点(A、1)にして南北方向に算用数字、東西方向にアルファベットを順列させ、南東隅の合致記号をグリッド名称とした。なおグリッドの起点は遺跡外南方約10 mの地点に基準点より逆算して任意設定しており、この起点より北方向に1、2、3……、西方向にA、B、C……と呼称される。

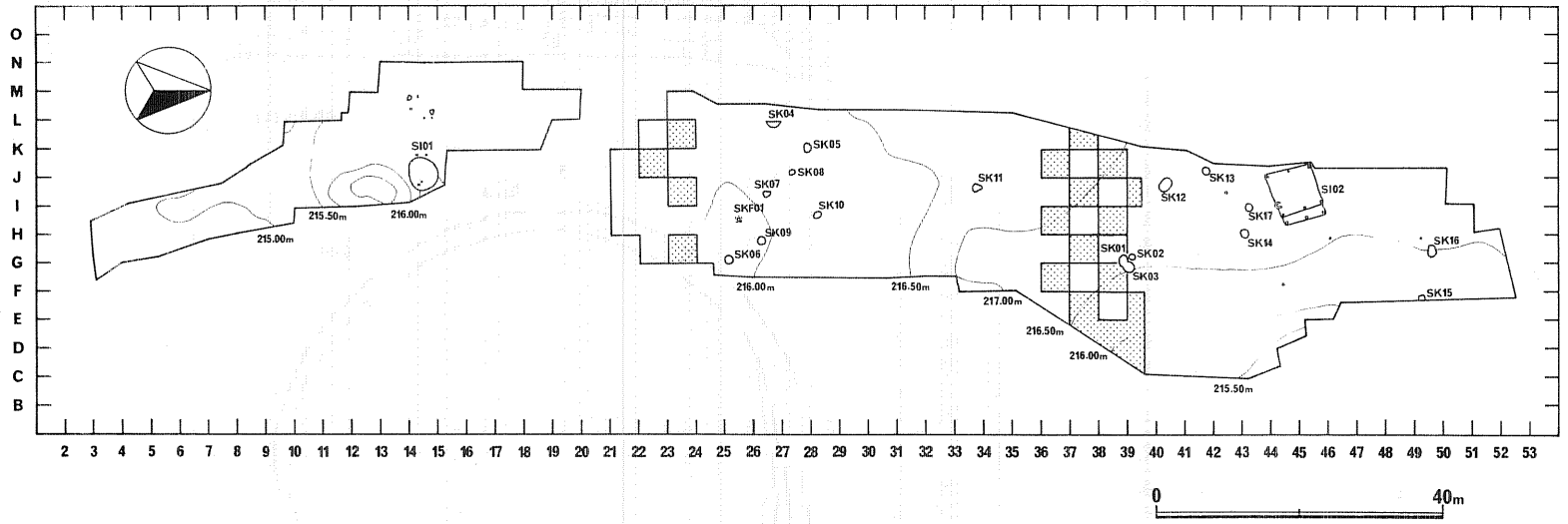
### 第3節 調査の経過

調査は昭和58年9月20日から11月19日まで実施された。

9月20日、表土1層を重機にて排土するため、排土寄せの場所約600 m<sup>2</sup>を最初に調査。24日、土壙3基検出。10月5日、白長根館I遺跡終了。作業員を全員本遺跡に動員。18日、S I 01 竪穴住居跡検出。調査区中央部に土壙検出。29日、遺構の精査終了。実測続行。11月19日、調査終了。



第1図 丑森遺跡地形，調査区位置図



第2図 丑森遺跡遺構分布図



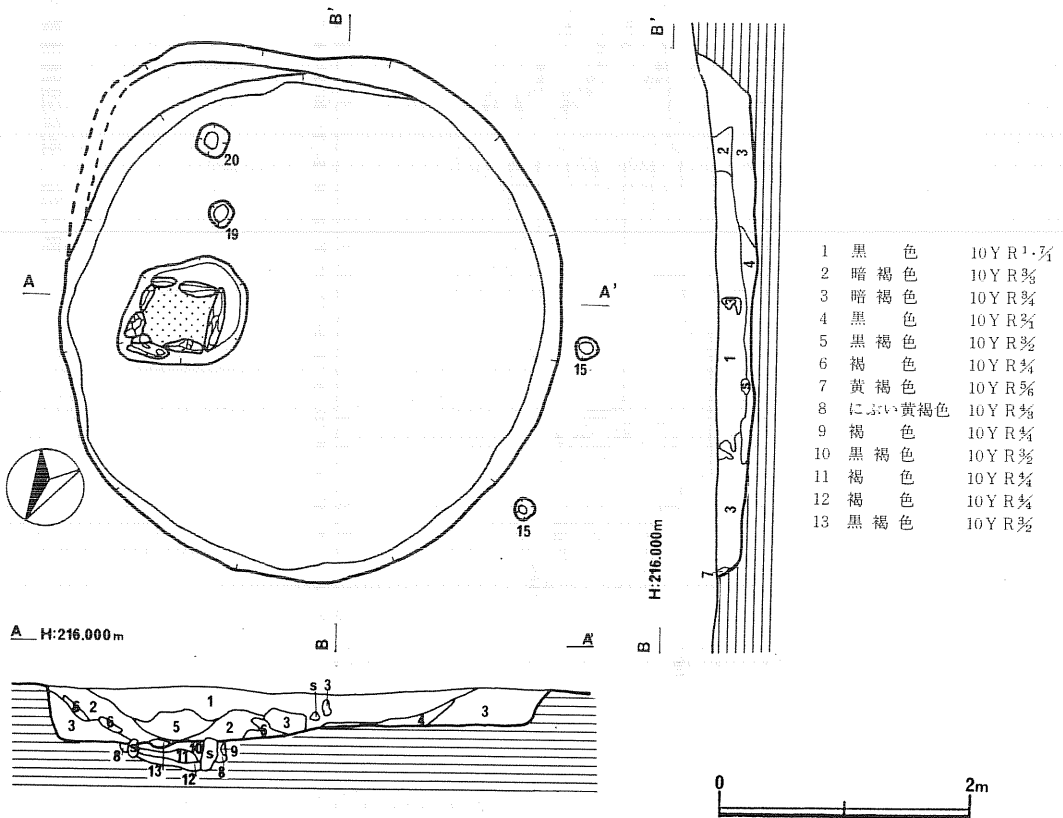
## 第2章 調査の記録

### 第1節 検出遺構

#### 1 縄文時代

##### (1) 竪穴住居跡

S101 (第3図) 平面形は4m×4.2mの南北にやや長い楕円形を呈する。堆積土は、上層が軟質の黒色土で、下層は褐色土を部分的に多量に含む暗褐色土。壁は、東面の一部が崩壊のため不明瞭。壁高は南面が高く40cm、他は15~30cm。柱穴は遺構内及び遺構外周に面してそれぞれ2本検出されたに留まる。床面は平坦で堅くしまっているが、壁付近はわずかに盛り上がっている。炉は石囲炉で遺構内東面の壁寄りに設けられる。地山を皿状に掘り凹め扁平な河原石を方形に埋めこんだ後、下部に褐色土を封入、固定している。出土遺物は堆積土中より、縄文時代後期のものと思われる粗製土器の細片2点。



第3図 S101実測図

(2) 土壌

SK01 (第4図) 平面形は180cm×150cmの不整楕円形。深さ40cm。SK02と重複、02が新しい。

SK02 (第4図) 平面形は170cm×150cmの楕円形。深さ70cm。底面は堅くしまり炭化物が付着。

SK03 (第4図) 平面形は径130cmの円形。深さ10cm。堆積土は極めて軟質の黒褐色土。

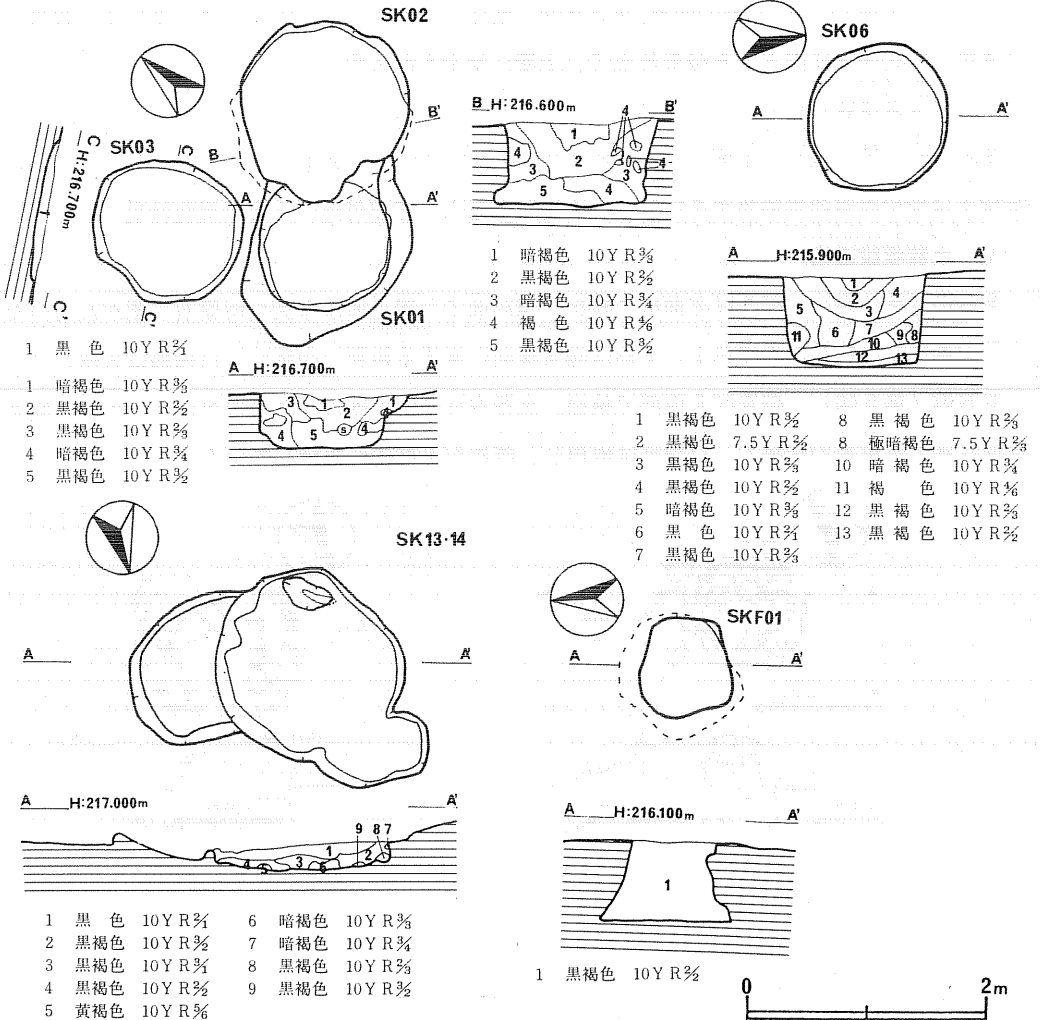
SK04 西面部は調査区外のため未確認。確認段階で長軸200cm。深さ15cm。

SK05 平面形は径120cmの円形。深さ20cm。底面、壁面共凹凸が激しい。

SK06 (第4図) 平面形は径120cmの円形。深さ70cm。堆積土に軽石を混入する。

SK07 平面形は110cm×70cmの不整楕円形、深さ20cm。堆積土に多量の褐色土混入。

SK08 平面形は90cmの円形。深さ27cm。底面、壁面共凹凸が激しい。



第4図 SK01・02・03・06・13・14、SKF01実測図

丑森遺跡

S K 09 平面形は110cmの円形。深さ30cm。底面は平坦で強くしまっている。

S K 10 平面形は100cm×80cmの楕円形。深さ48cm。堆積土に少量の焼土を混入。

S K 11 平面形は140cm×75cmの不整楕円形。深さ50cm。底面、壁面、壁面共凹凸が激しい。

S K 12 平面形は260cm×220cmの楕円形。深さ20cm。北面壁は緩やかに立ち上がり、壁面に附着して土器片が集積。

S K 13 (第4図) 平面形は径150cmの円形。深さ30cm。堆積土に多量の褐色土を混入。西面でS K 14と重複。S K 14が新しい。

S K 14 (第4図) 平面形は径130cmの円形。深さ25cm。堆積土上面に少量の焼土混入。

S K 15 東面は調査区外のため未確認。確認段階で長軸80cm。深さ20cm。

S K 16 平面形は180cm×90cmの不整楕円形。深さ40cm。壁面の一部は崩壊している。堆積土に多量の褐色土が混入。

S K 17 平面形は径150cmの円形。深さ40cm。底面、壁面共平坦で強くしまっている。堆積土は褐色土粒を多量に混入する暗褐色土で、上層に焼土を混入する。

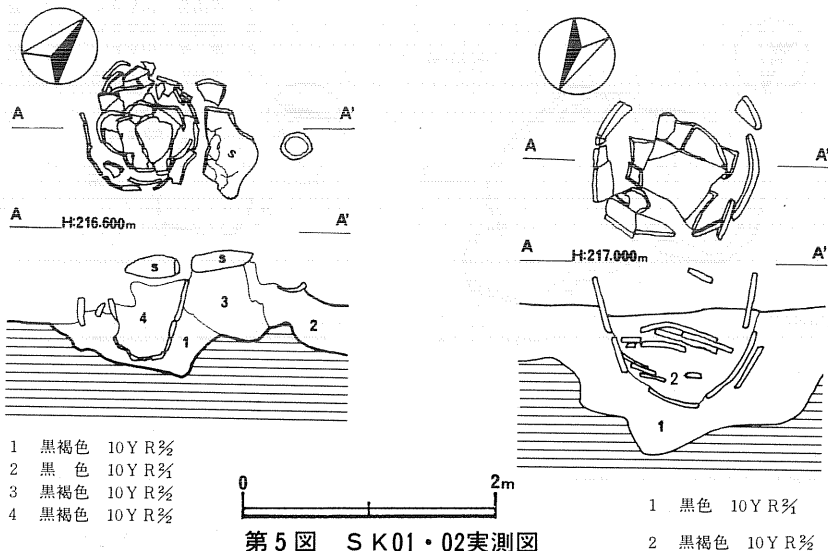
(3) フラスコ状ピット

S K F 01 (第4図) 上面径70cm、底面径110cm。深さ65cm。底面は平坦で強くしまっている。堆積土はやや軟質の黒褐色土を主体に、上層に褐色土、底面付近に少量の炭化物混入。

(4) 土器埋設遺構

S R 01 (第5図) 調査区北面部で検出。確認面で土器上面に拳大の河原石が置かれていた。土器内堆積土は軟質の黒褐色土。土器は縄文後期に属する粗製の深鉢で、口縁部は欠落。

S R 02 (第5図) 調査区北面部で検出。土器内堆積土は極めて軟質の黒色土。土器は縄文後期に属する粗製の深鉢で、口縁部は破損し、破片が土器内に集積している。

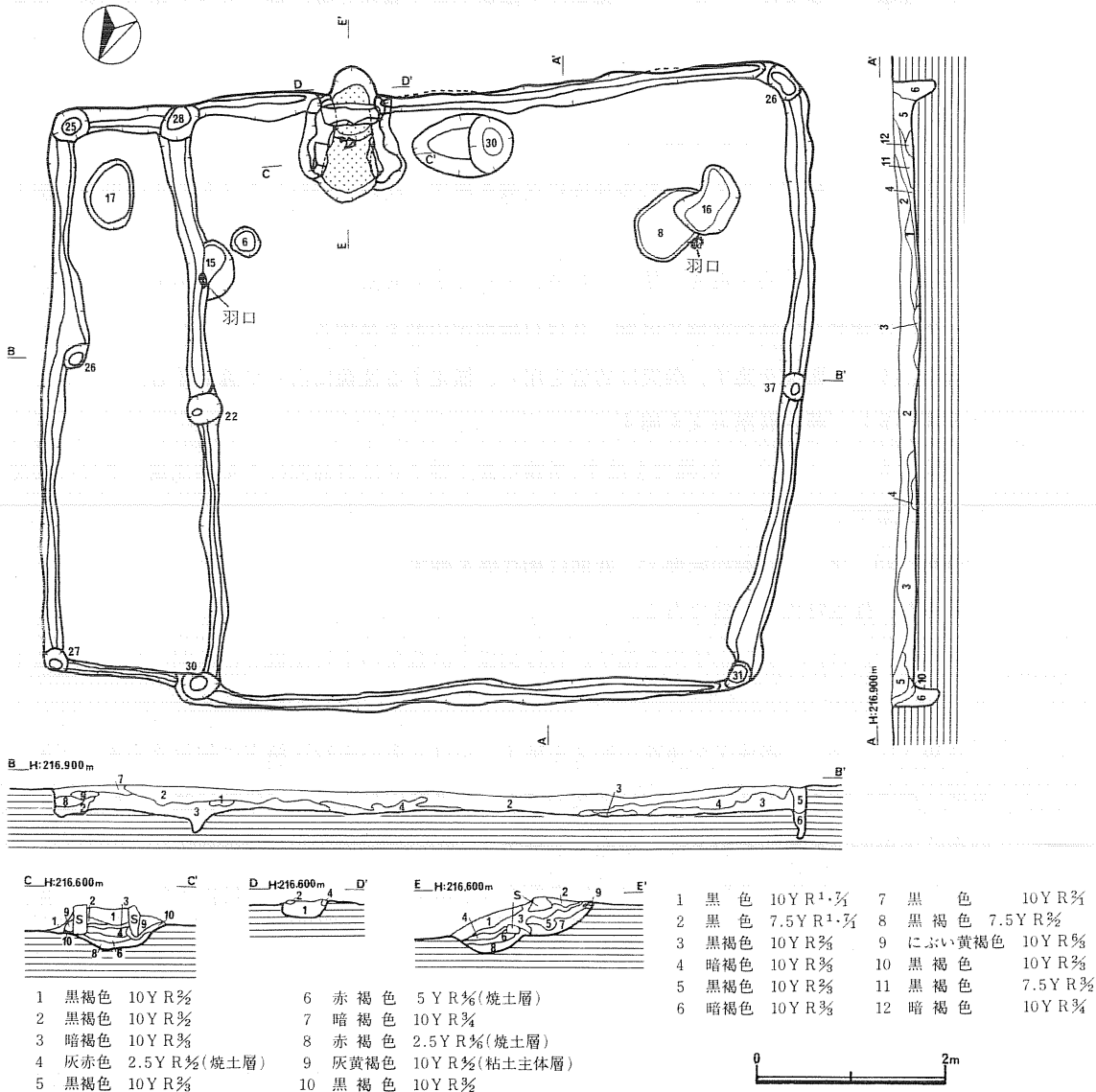


第5図 S K 01・02実測図

2 平安時代

(1) 竪穴住居跡

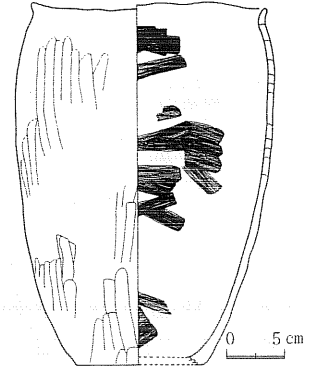
S102 (第6図) 平面形は東西辺長7.9m、南北辺長5.9mの長方形を呈し、北壁の東寄り部分はカギ型に屈曲する。この部分に南-北にのびる溝を検出。溝は褐色土により埋められており、東部分が拡張された痕跡と思われる。堆積土は黒色土と黒褐色土を主体に多量の軽石を混入。柱穴は遺構内各隅部と南辺、北辺のほぼ中央に設けられている。壁は垂直に立ち上がり壁高は15~30cm。床面は平坦であるが、土質は軟らかく部分的に剥落する。カマドは南壁東寄りに構築。燃烧部は地山を約25cm掘り凹め、多量の焼土と粘土粒が堆積。底面は火熱により



第6図 S102実測図

## 丑森遺跡

赤褐色に硬化、端部で強く立ち上がり煙道部に至る。煙道部は短く長さ約25cm。煙出し部は壁付近に設けられ、わずかに凹む。両袖部に方形の石材が良好に残存しており、本体は石材を芯にした粘土構築と考えられる。出土遺物はカマド燃焼部内より土師器甕と遺構内南西部より羽口断片がある。



第7図 S102出土土器

## 第2節 遺構外の出土遺物

(1) 土器 (第8図) 主として調査区北面部の第4層から地山面にかけて出土した。土器は縄文時代後期及び弥生時代のもので、器形はいずれも鉢形土器。分類は器表面の文様を主体に行った。

第I群 縄文時代後期の土器である。

I類(1) 縄文を地文とした器表面に沈線を施す。沈線は平行した2条の不規則な曲線を数段施す。

II類(2、3) 磨消縄文を施す。数条の平行沈線を基調に、口縁部を磨消無文帯にする。2は平行沈線間を弧状の沈線で区画。2は口縁部が山形を呈する。

III類(4) 刺突を施す。刺突は竹管を用い、横走る沈線に沿って連続する。

IV類(5) 網目状捺糸文を施す。

V類(6、7、8、9) 斜縄文を施す。所謂粗製土器で6は口縁部に1条の沈線。7は口縁部が山形を呈する。

VI類(15、16) 土器の底部で、底面に網代痕を残す。

第II群 弥生時代の土器である。

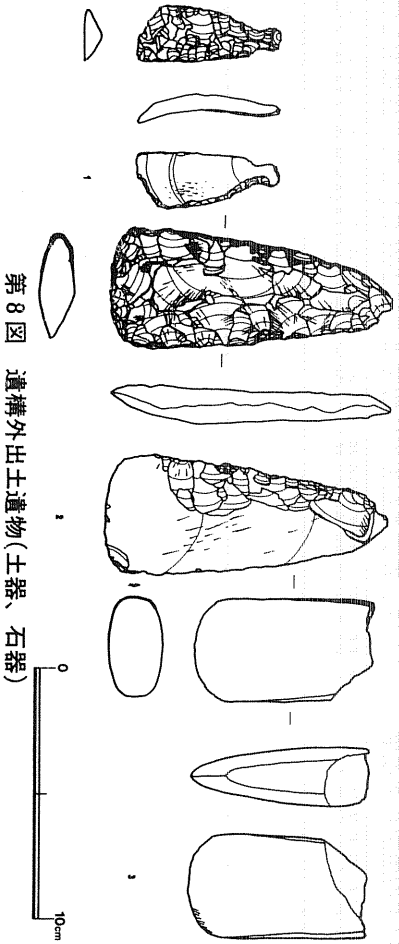
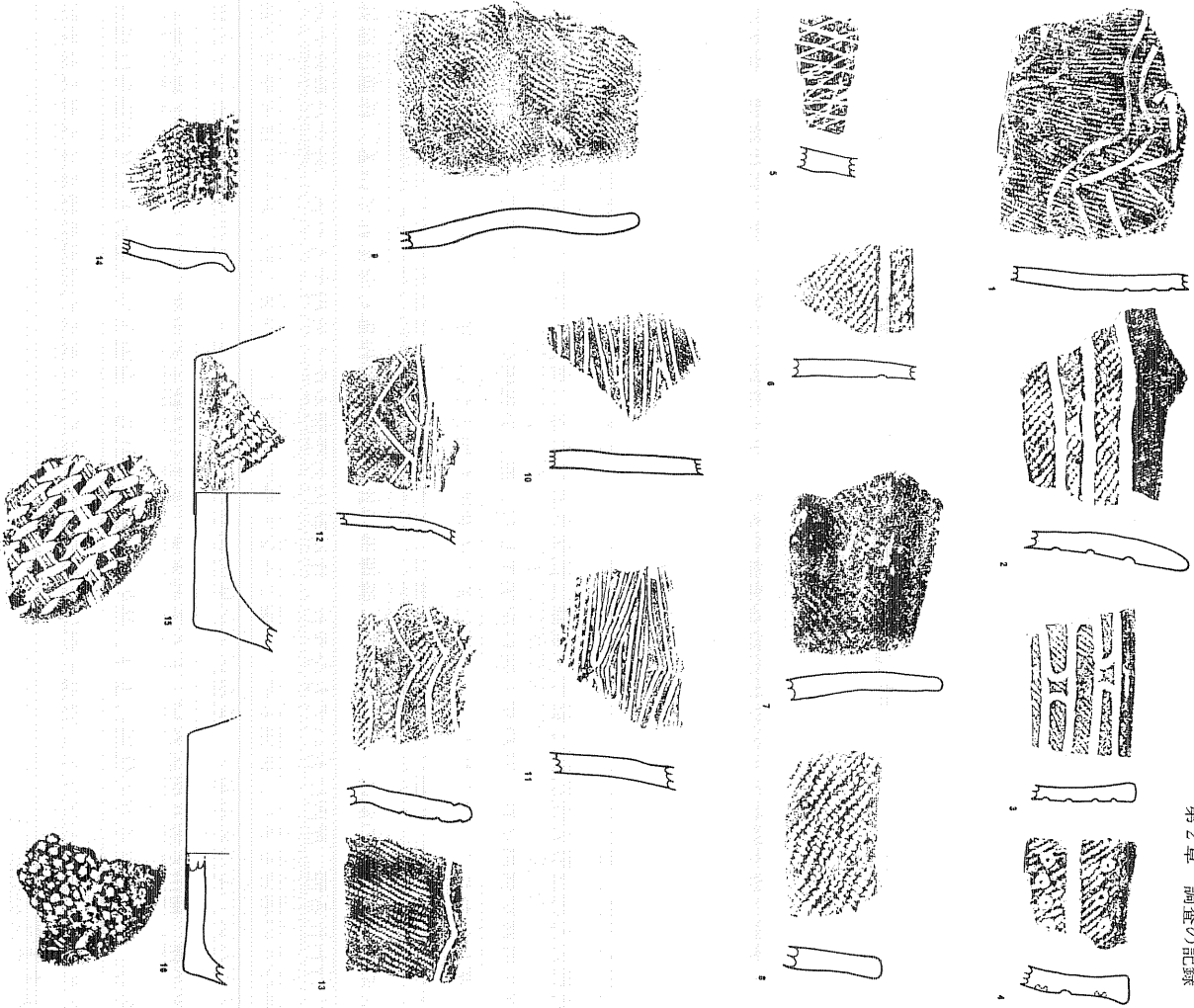
I類(10、11) 変形工字文を施す。11は文様下に数条の平行沈線と沈線間に刺突を連続する。

II類(12、13) 鋸歯文や連続山形文を施す。12は3条の平行沈線下に鋸歯文を施した後、胴部にかけて斜縄文を施す。13は鋸歯文の退化した連続山形文で、口縁部は緩い山形を呈する。内面に1条の山形文、その下部に斜縄文を施す。

III類(14) 斜縄文を施す。施文は口唇部直下と胴部に行った後、口縁部を磨り消し、無文帯にする。口唇部には1条の沈線を施している。

(2) 石器 (第8図) 調査区中央部の第4層から出土したもので、定形のもの3点である。

石匙(1) 刃部は縦型で先端部は扁刃状を呈する。両面加工で、側縁部は入念に剝離調整。



第8図 遺構外出土遺物(土器、石器)

頁岩。

石篋（２） 比較的大型のもので片面に加工を施す。側縁部には入念な剝離調整。頁岩。

磨製石斧（３） 刃部は円刃を呈し、全面を研磨している。流紋岩。

### 第 3 章 ま と め

本遺跡は縄文時代と平安時代の複合遺跡である。出土遺物は土器が、縄文時代後期、弥生時代、及び平安時代の土師器で、いずれも量的には少い。石器は極めて少量で、わずかに石匙、磨製石斧、スクレイパーの類が出土したに留まる。遺構は調査区北部に集中しており、縄文時代のものは、竪穴住居跡、土壇、フラスコ状ピットがある。出土土器から後期に属する。平安時代のもは竪穴住居跡 1 軒で、東側は拡張されている。東側と西側の 2 カ所に粘土塊を含む焼土痕跡が検出され、合わせて羽口が出土した。他、小規模なピットが付近にみられる。鍛冶作業が行われていたと思われ、下記に若干の説明を加えたい。鍛冶は大別して大鍛冶、小鍛冶に分けられ、特に小鍛冶に関連すると思われる遺構の検出例は比較的多い。小鍛冶は可鍛鉄からの製品づくりの他に、製品の補修、修理等の比較的平易な作業も含まれている。作業は屋外で行われる他、屋内においてもなされ、住居跡内の空間を広く使用するため、柱穴は壁柱穴や無柱穴の場合も多く、拡張もその一端とみなす事が出来よう。作業工程においては火熱及び鍛造のため、火床や金敷き、水留め等の施設が必要であり、火床としては住居跡内のカマドの併用の他、地山を掘り凹めたピットをそのまま、あるいは粘土を内張りにして利用する場合等がある。加えてファイゴの使用により、熱効果が高められる。金敷きや水留めとしての甕等は残存する場合が極めて少なく、付近に検出される小規模なピットをその設定痕跡として考える事が出来よう。

以上の事から本遺構については、生活としての住居跡と共に小鍛冶としての作業所を併用していたものと考えられ、この様な形は鉄製品の普及に応じ、随所で行われるようになったと思われる。



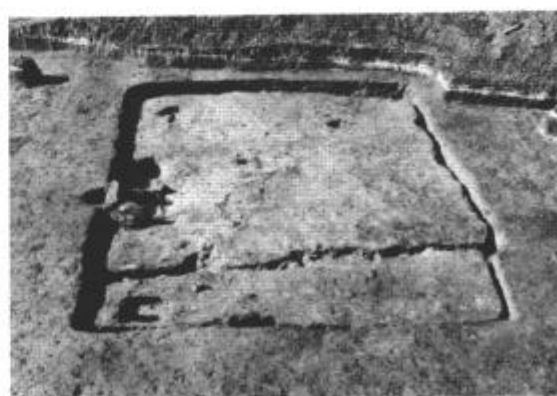
遺跡遠景 (南▶北)



遺跡遠景 (北▶南)



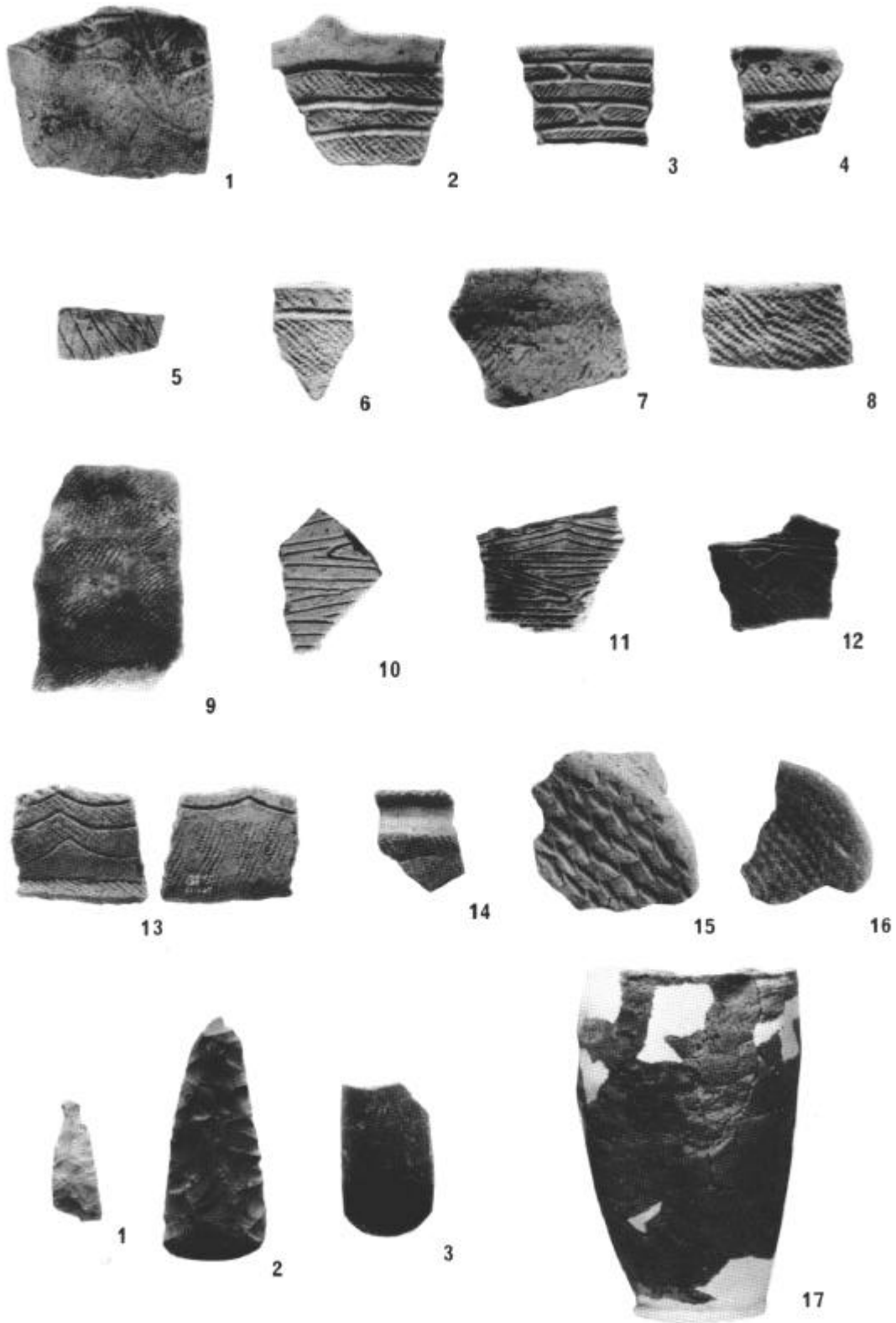
SI 01 豎穴住居跡



SI 02 豎穴住居跡



丑森遺跡

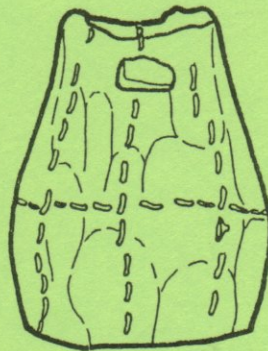


図版 2

出土遺物遺構外（土器・石器）遺構内（土器、17）

# 道 合 I 遺 跡

|          |                          |
|----------|--------------------------|
| 遺 跡 番 号  | No. 8                    |
| 所 在 地    | 鹿角郡小坂町字道合 4 番地他          |
| 調 査 期 間  | 昭和58年 7 月 1 日 ~ 7 月 30 日 |
| 発掘調査予定面積 | 1,028m <sup>2</sup>      |
| 発掘調査面積   | 1,080m <sup>2</sup>      |



## 第1章 発掘調査の概要

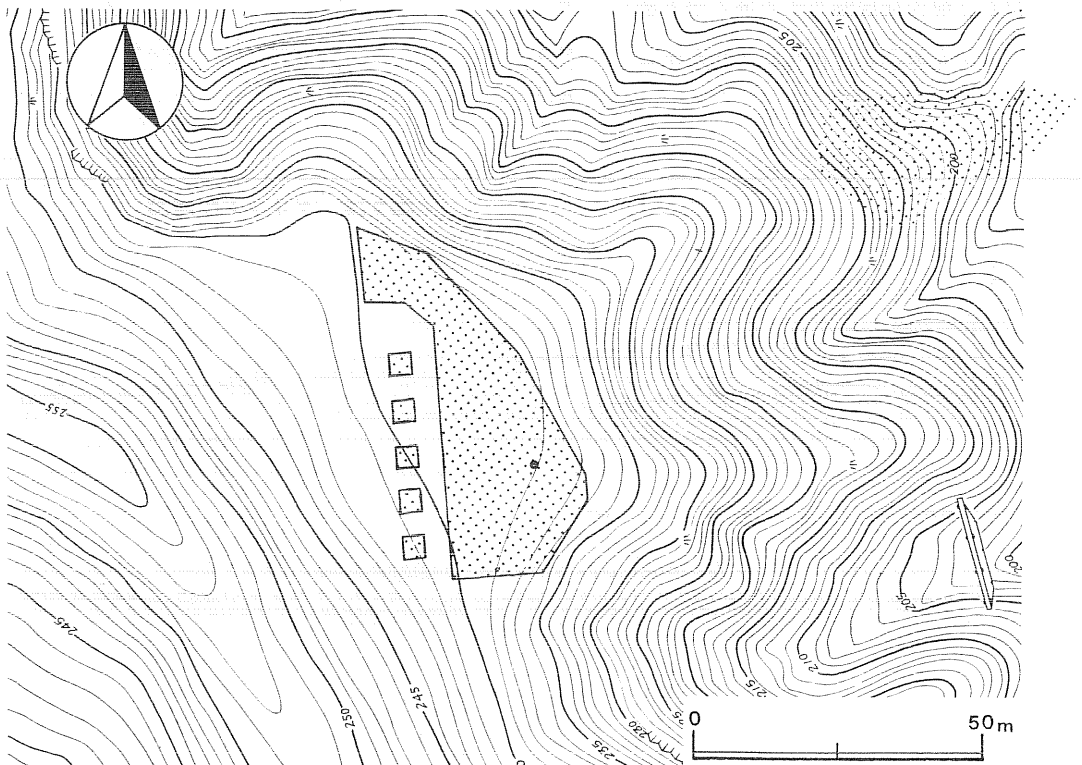
### 第1節 遺跡の概観

小坂川右岸の丘陵は、浸蝕作用による小谷が多くみられる。その一つである堀内沢の右岸に遺跡は立地する。道合I遺跡は、丘陵の末端部に形成された緩斜面に位置し、その面積は狭い。遺跡の東側は急斜面を呈するが、この斜面に湧水が数カ所存在する。後背地は起伏の激しい丘陵である。標高は約240mである。

遺跡の基本層序は、上位から黒褐色土層(1層)→大湯軽石層(2a・2b層)→褐色土層(3層)→黒褐色土層(4層)→黄褐色土層(5層)である。遺物包含層は4層である。

### 第2節 調査の方法

発掘調査は、日本道路公団が打設したSTA119+00を発掘原点(M50)とし、4m×4mに



第1図 遺跡周辺の地形と発掘調査区

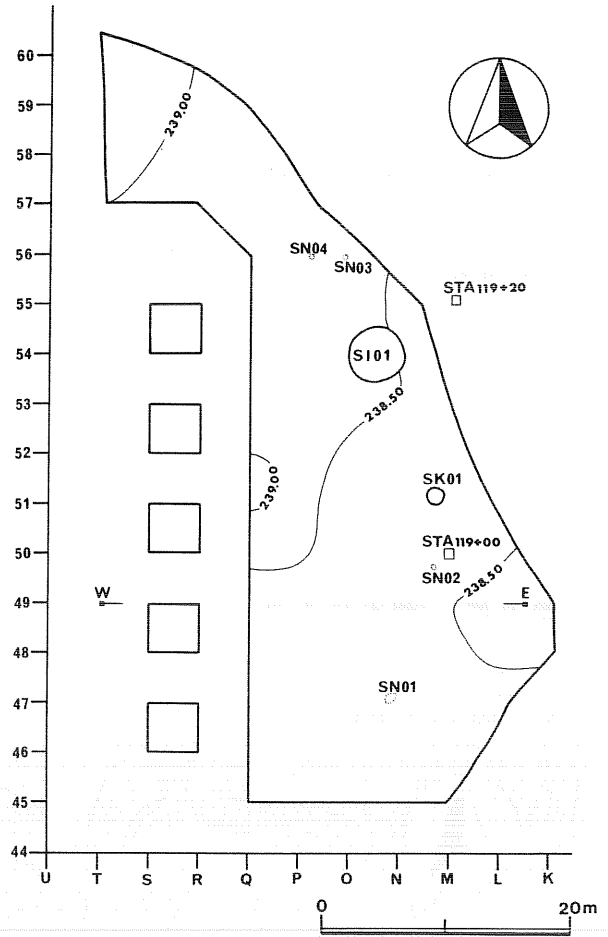
道合 I 遺跡

グリッド杭を打設して、実施した。グリッドの一边は磁北方向に一致する。また、グリッドの名称は、南北方向の算用数字と東西方向のアルファベットの組み合わせで呼称することにした。

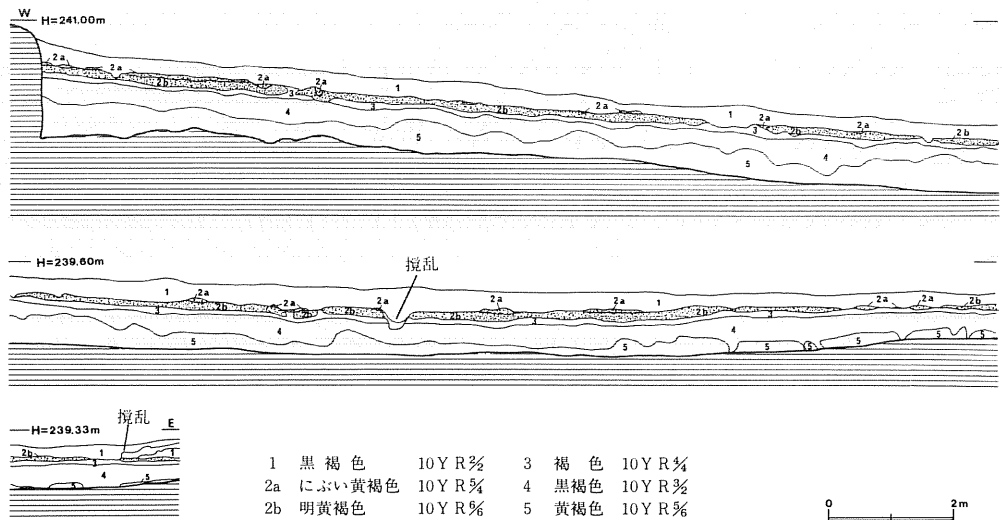
第 3 節 調査の経過

発掘調査期間は、昭和58年 7 月 1 日～同年 7 月 30 日である。

7 月 1 日の午前中に、発掘用具を搬入し、午後から表土除去作業を開始した。19日、竪穴住居跡 (S I 01) のプランを確認し、20日から精査を開始する。26日、S I 01の実測を開始する。27日に竪穴住居跡のすぐ近くで土壌のプランを確認し、精査にとりかかる。28日～30日は遺構分布図と地山面の地形図を作成する。



第 2 図 グリッド配置図



第 3 図 土層実測図

第2章 調査の記録

第1節 縄文時代の遺構と遺物

1 発見遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

S101 (第4図) 丘陵の縁辺部で検出された。直径4.6mのほぼ円形のプランを呈する。

深さは地山面から0.35mほどである。床面は平坦で、ほぼ中央に地床炬を設定している。

柱穴は認められない。

出土遺物(第5図)は、縄文時代中期中葉

(円筒上層a式)の土器が床面から出土して

いる。そのほかに石鏃1点、石筥2点、削器

3点が出土した。

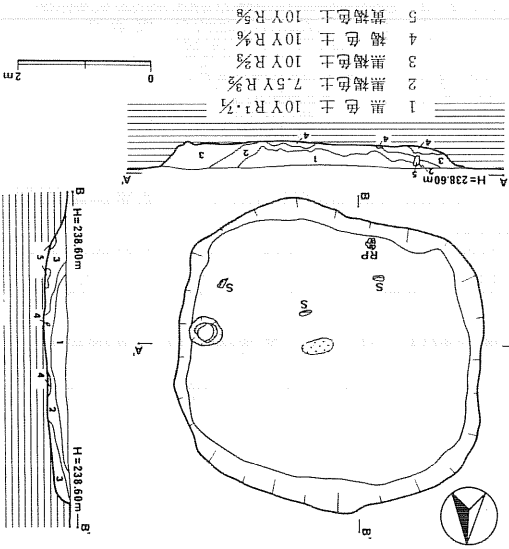
(2) フラスコ状ピット

SKF01 S101竪穴住居跡から11mほど

南で検出された。開口部径1.68m、底部径1.52

m、深さ1.12mを測る。

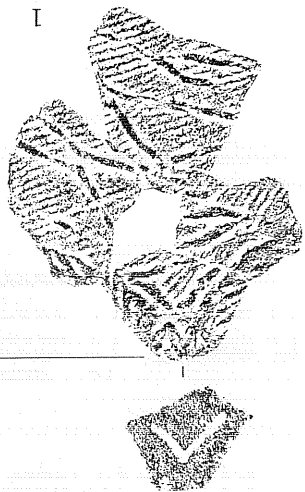
出土遺物なし。



第4図 S101竪穴住居跡

0 2m

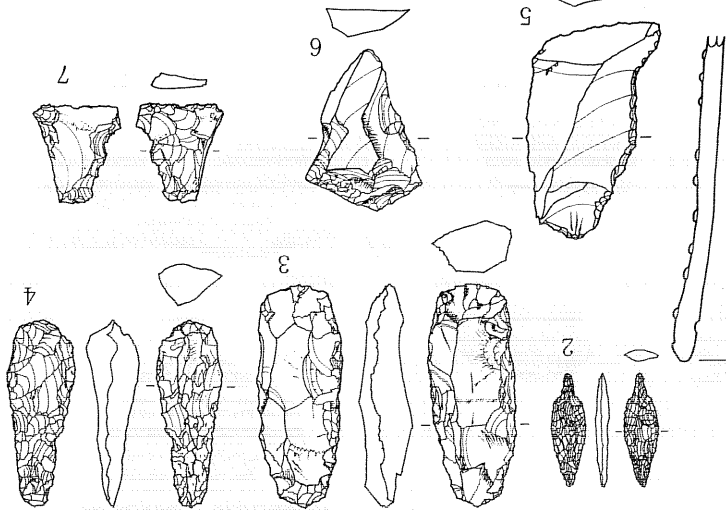
A H=238.60m  
B H=238.60m  
H=238.60m



1

第5図 S101出土遺物

0 10cm



道合 I 遺跡

## 2 遺構外の出土遺物

出土量が少ないため、一括して、記述する。

### ①土器及び土製品 (第7図1~9)

1と2は、深鉢形土器であり、退化した弁状突起を有する。

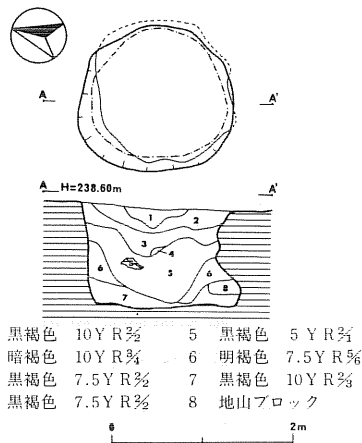
1は口唇部のみに隆帯を貼付するが、2は口唇部のほか、口縁部。胴部にも隆帯が見られる。縄文時代中期の円筒上層d式土器である。

3~8は縄文時代後期の十腰内I式土器であり、深鉢形を呈するものと考えられる。

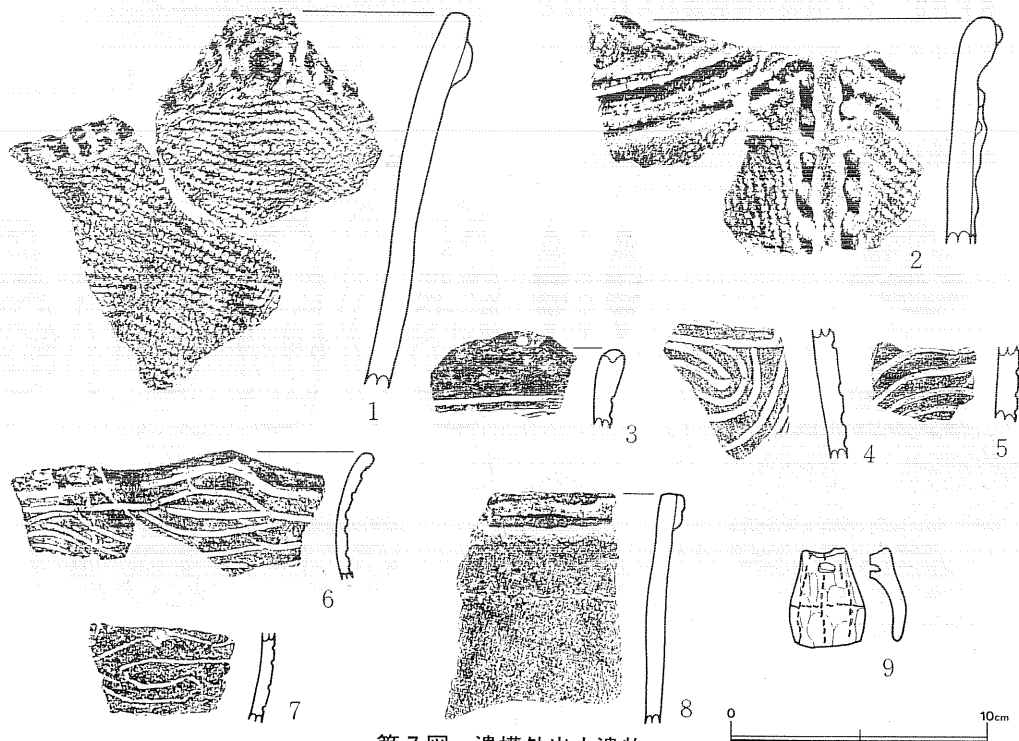
9は鐎形土製品である。高さ3.8cm、鐎部径3cmを測る。刺突文が縦位に8条、横位に1条施文されている。

### ②石器及び石製品 (第8図10~23)

10は縦形の石匙である。11、12、14は石筥であり、背面と主要剥離面の周縁に成形及び整形のための加工を施している。13は搔器であるが、刃部が直線状に長いのが特徴である。15は石槍様石器であり、16は削器であろう。17は両側縁にノッチを有する石器である。10~17の石材は頁岩である。



第6図 SKF01フラスコ状ピット



第7図 遺構外出土遺物



第8図 遺構外出土遺物

#### 道合 I 遺跡

19～21は半円状扁平打製石器である。河原石の一側縁をあらく打ち欠いている。通常、打ち欠かれた側縁には磨面が見られるが、この3点には見られない。22は凹石である。扁平な河原石の両面に凹部が数個ずつ認められる。23は石皿である。楕円形の礫の一面が使用され、磨減している。19～23の石材は安山岩である。

18は円盤状石製品である。凝灰岩を研磨して、円盤状に作出したものである。

### 第 3 章 ま と め

道合 I 遺跡で検出された遺構は、竪穴住居跡 1 軒とフラスコ状ピット 1 基である。フラスコ状ピットは、白長根館 I 遺跡のようにクリ・クルミなどの堅果類を出土する例が多いことから植物性食料の貯蔵穴と考えられる。この貯蔵穴に貯蔵した植物性食料は春になると発芽するため、一冬を越すだけの食料しか貯蔵できない。従って、一家族または小集団が短期間、この道合 I 遺跡で生活したものと考えられる。この住居と貯蔵穴は縄文時代中期中葉の円筒上層 d 式土器を使用した人々によって、構築されたものである。

小坂地区の調査で、道合 I 遺跡のように竪穴住居 1 軒に貯蔵穴 1 基か数基という遺跡は、館平館 I 遺跡や丑森遺跡もそうである。館平館 I 遺跡は縄文時代後期中葉（加曾利 B<sub>2</sub> 式併行）であり、丑森遺跡は縄文時代後期前葉（十腰内 I 式）である。これらの遺跡は狭小な台地や丘陵上に立地する。広い台地の上に、比較的大きな集落を営むはりま館遺跡、大岱 I 遺跡、大岱 III 遺跡、大岱 IV 遺跡とは対照的である。

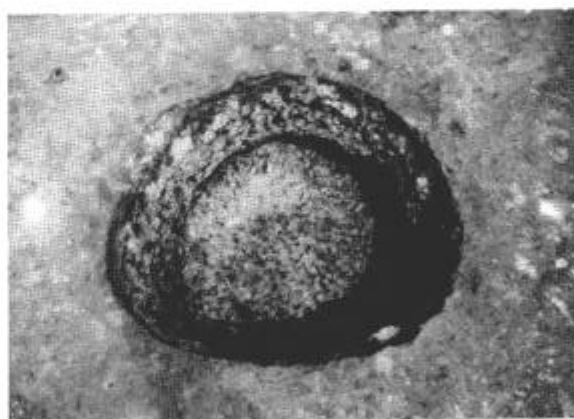




道合 I 遺跡全景 (南▶)



S I 01 竪穴住居跡



S K F 01 土壙完掘状況



遺物出土状態



鐔型土製品出土状態

道合I遺跡

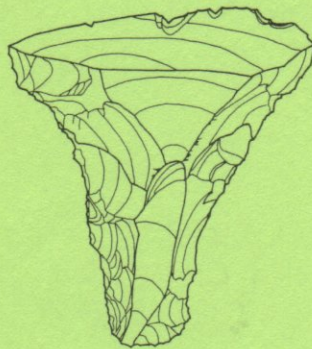


出土遺物

図版 2

# 道 合 II 遺 跡

|          |                     |
|----------|---------------------|
| 遺 跡 番 号  | No. 9               |
| 所 在 地    | 鹿角郡小坂町字道合16番地       |
| 調 査 期 間  | 昭和58年7月26日～8月31日    |
| 発掘調査予定面積 | 1,708m <sup>2</sup> |
| 発掘調査面積   | 1,158m <sup>2</sup> |



## 第1章 発掘調査の概要

### 第1節 遺跡の概観

小坂川の右岸が浸蝕されてできた谷の一つに、堀内沢と呼称されている谷が存在する。この堀内沢の右岸に遺跡は立地する。遺跡の背後は、丘陵の裾部が急斜面をなしているが、この裾部に、礫層が舞台状に堆積している。ここが遺跡であり、すぐ下を堀内沢の清水が流れ、小坂川と合流する。標高は198 mである。

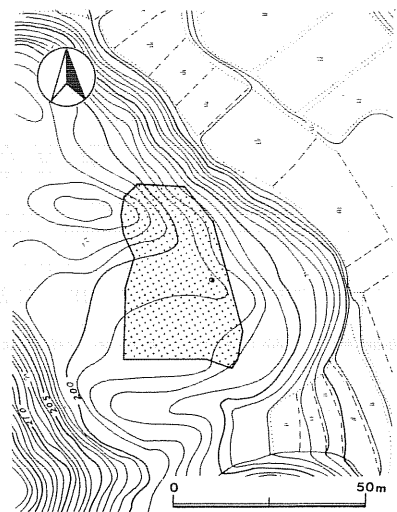
### 第2節 調査の方法

発掘調査は、日本道路公団が設定したS T A 120+60を発掘原点(M50)とし、4 m×4 mにグリッド杭を打設して、実施した。グリッドの一辺は磁北方向に一致する。また、グリッドの名称は、南北方向の算用数字と東西方向のアルファベットの組み合わせで、呼称することにした。

### 第3節 調査の経過

発掘調査期間は、昭和58年7月26日～同年8月31日である。

7月26日から表土除去作業を開始する。台地の中央部が浸蝕を受け、凹んでいた。遺物はこの凹みの5層から出土するため、5層まで掘り進むのに時間がかかった。8月中旬まで無遺物層である1層～4層までの掘り下げを行う。8月中旬から遺物包含層の精査を開始したが縄文時代の土器・石器がわずかに出土しただけである。

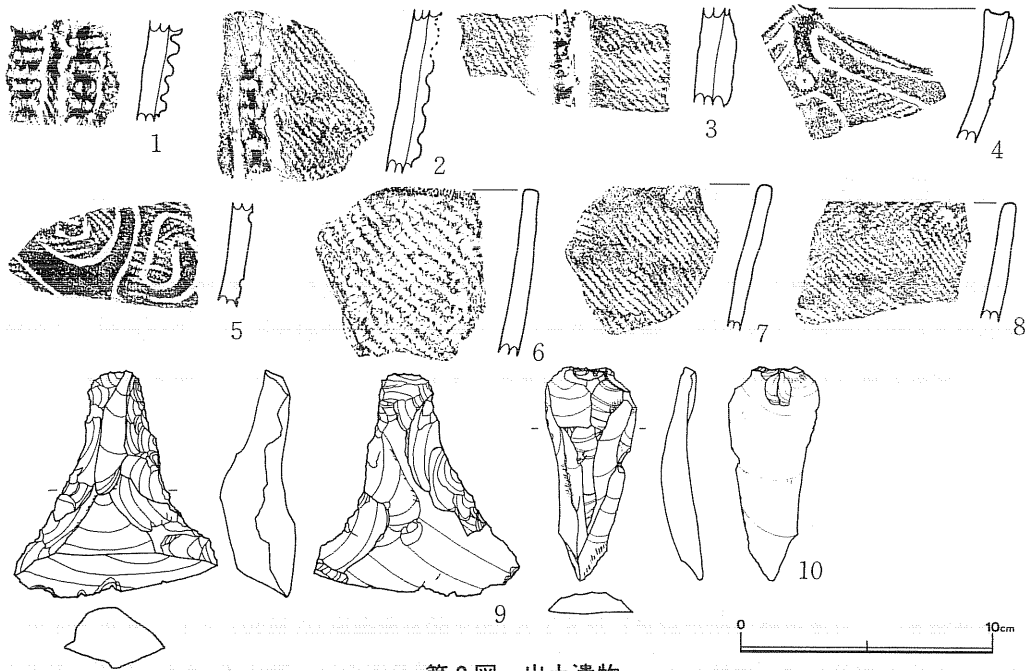


## 第2章 調査の記録

### 出土遺物

検出された遺構はなく、遺物が若干出土したのみで

第1図 遺跡周辺の地形と発掘調査区



第2図 出土遺物

あったため、一括して記述することにした。

①土器 (第2図1～8)

1～8は深鉢形土器の破片と思われる。1～3は斜縄文の上に隆帯を貼付している。隆帯には刺突が加えられる。4、5には磨消縄文が認められる。6～8は斜縄文のみが施されている。いずれも、縄文時代後期の土器と考えられる。

②石器 (第2図9、10)

9は、泥岩を石材とした三脚石器である。10は頁岩を石材とした剥片石器である。

### 第3章 ま と め

道合Ⅱ遺跡は、堀内沢の右岸に形成された残丘の狭小な平坦地に立地する。この平坦地は、浸蝕され二分されているため、住居を構築する場所がないほど狭いところである。遺構は検出されず、縄文時代後期の土器片と石器が少量出土しただけである。

遺跡のすぐ下を、堀内川が流れている。道合Ⅱ遺跡に土器や石器を残した人々は、この川で魚を捕り、川辺に来る動物を狙っていたのだろうか。竪穴住居跡が検出されていないところから、キャンプサイト的な性格の遺跡と思われる。



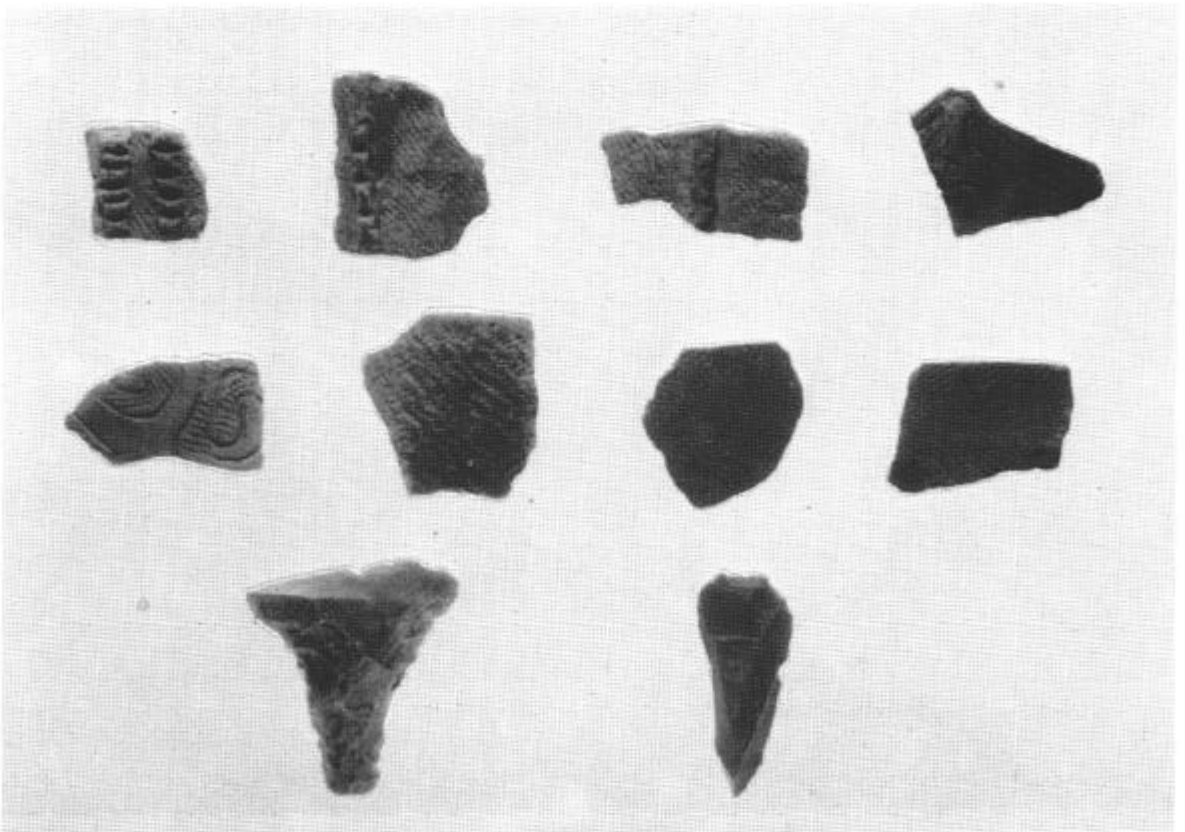
道合II遺跡全景（北▶）



遺物出土状態



調査状況



出土遺物

# 大 岱 II 遺 跡

遺 跡 番 号 No.11  
所 在 地 鹿角郡小坂町小坂字大岱 8 番地他  
調 査 期 間 昭和57年 9 月13日~10月30日、昭和58年 5 月16日~ 9 月 7 日  
発掘調査予定面積 6,484m<sup>2</sup>  
発掘調査面積 6,659m<sup>2</sup> (57年度:1,665m<sup>2</sup>、58年度:4,994m<sup>2</sup>)



illustrated by KAZUNORI. T



## 第1章 発掘調査の概要

### 第1節 遺跡の概観

本遺跡は、大岱Ⅰ遺跡、大岱Ⅲ遺跡、大岱Ⅳ遺跡、円川原遺跡の4遺跡とともに、小坂川の右岸、掘内沢に南縁を画された台地上にある。台地上の遺跡のある地点での標高はおおよそ251m～255mである。大岱Ⅱ遺跡の東側には比高-20m程で大岱Ⅰ遺跡がある。また北側に隣接しては、大岱Ⅱ遺跡とほぼ同じ標高で大岱Ⅲ遺跡がある。

遺跡ののる台地は全体の形状が舌状を呈し、南へ突き出した形をとっている。遺跡はこの台地の南の縁にのり、南北に細長く、東西に狭い尾根状の部分を利用して営まれたものである。線状にのびる地形のため、山火事の類焼を防ぐための防火線として利用されており、現況は荒地であるが、最近に整地された痕跡が残され、ススキやイワシバナの木など背丈の低い草木が生えている。

### 第2節 調査の方法

調査区は地形に応じて、南北に細長く設定された。調査区北端部と南端部にやや広い平坦面があり、このうち北端の平坦面には、日本道路公団が設置した本線車道中心杭 STA128+18.188がある。

調査にあたっては、この STA128+18.188を基準点として磁北に基線を求め、4m間隔の方眼杭を打設してグリッドを組んだ。グリッドの各ラインには、東西ラインに南から、算用数字、南北ラインに東からアルファベットをあて、その組み合わせで各グリッドを呼称することとした。基準点となった STA128+18.188には L10の呼称が与えられた。調査が2箇年にわたり、第1次の調査である昭和57年度の調査では、北端の平坦面が対象区域である。第2次の昭和58年度の調査では、彼処以南が対象区域である。北端の平坦面から南の区域では、東西ラインに対し、新たに北から南へ99、98、97……と算用数字が番号を若くしながらふりあてられた。

### 第3節 調査の経過

調査は、北端の平坦面が対象となった昭和57年度とそれ以南が対象となった昭和58年度と2箇年にわたる。

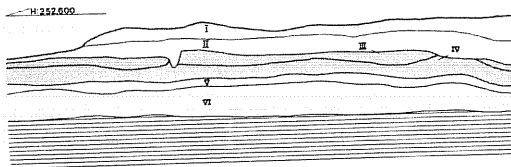
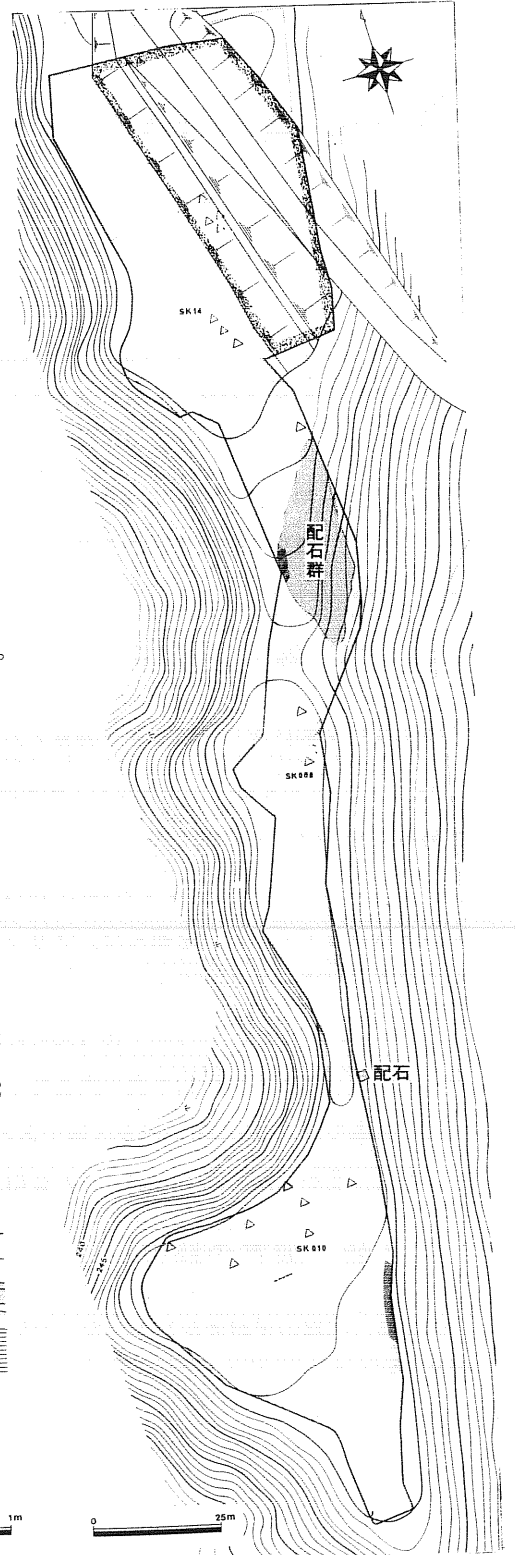
昭和57年度の調査は、9月13日から開始され、10月30日で終了している。その経過は大略以下の通りである。

9月13日、方眼杭打設、表土除去を開始する。9月16日、基本層位確認のための試掘溝を掘る。

大岱II遺跡

9月22日、大湯軽石層下で円形の黒色土プラン(S X01)を確認する。遺物は、縄文時代後期の土器片、石器片が僅かずつ出土している。10月12日、大湯軽石層下の暗褐色土を除いた第VII層地山面で縄文時代後期と思われる土壌プラン(S K014)を確認。10月14日、土壌プラン(S K015~S K019)を確認し、調査する。10月27日、各土壌完掘状態の写真撮影。10月30日、北端平坦面の調査を終える。

昭和58年度の調査は、5月16日から開始され8月20日まで行われた。5月16日、昭和57年度の調査に基づいてグリッドの方眼杭の打設作業を行う。また、調査区内の刈払い作業も併せて行う。人力による粗掘作業を開始する。5月21日、南端の平坦部を調査、縄文時代後期の土器片及び石器片を出土させている。6月6日、K91グリッドで円形の組石(S Q02—第2号配石)を検出する。6月4日、R68グリッドで組石を確認する。6月11日、K91、J92~J93、K92~K93グリッドで配石群を確認する。調査区南端の平坦部から、円形の土壌プラン(S K010)を確認する。7月2日、配石群の写真撮影を行う。配石群の北側のグリッドから小坂X式と思われる土器片を検出している。7月9日、配石群(S Q02)を除いて、他の土壌群は調査を終える。8月1日、航空写真撮影、8月22日、円形組石(S Q02—第2号配石)の石をはずし、下部の土壌を調査する。調査終了。



- |      |           |      |                          |       |
|------|-----------|------|--------------------------|-------|
| I層   | 10Y R 8/2 | 黒色土  | キメ粗く、粘性に欠ける              | } 軽石層 |
| II層  | 10Y R 8/2 | 黒色土  | キメ細く、しまっている              |       |
| III層 | 10Y R 8/2 | 褐色土  | キメ細く、しまっている              |       |
| IV層  | 10Y R 5/6 | 黄褐色土 | 粘性弱、径1mm~3mmの<br>浮石粒からなる |       |
| V層   | 10Y R 3/6 | 暗褐色土 | キメ細く、やや粘質である             |       |
| VI層  | 10Y R 2/6 | 黒褐色土 | しまりに欠ける                  |       |

第1図 大岱II遺跡全体図、基本層位図

## 第2章 調査の記録

### 第1節 検出遺構

#### 1 土 壙

土壙は、断面形がフラスコ状を呈するもの、袋状を呈するもの、擂鉢形を呈するものなどがあり、その数は昭和57年および昭和58年の両年度で18基である。分布状態を見ると、調査区の北端部平坦面に9基、南端部平坦面に7基、その両平坦面を結ぶ尾根部分に2基検出されている。土壙内から時期を確定するような遺物の出土はない。ただし、土壙外周辺から出土している遺物は縄文時代後期の所産である。

##### (1) S K 010

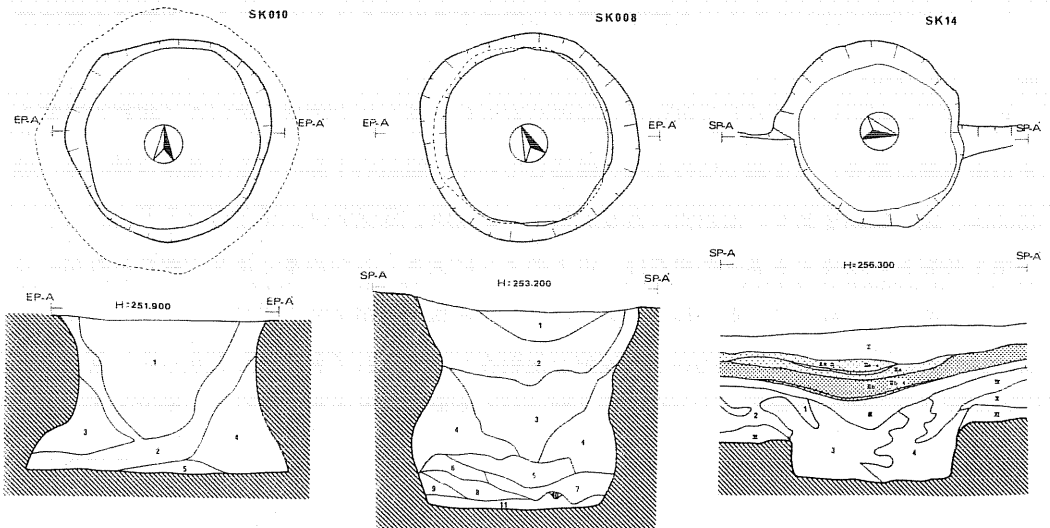
調査区南端部平坦面、W61グリッドで検出された。断面形はフラスコ状を呈する。開口部径163cm、底径207cm、深さ120cmを測る。覆土には壁面の崩落土も堆積しており、図示した3、4層がそれである。出土遺物はない。

##### (2) S K 008

調査区のほぼ中央、屋根部分、N82グリッドから検出された。断面形は袋状を呈する。開口部径173cm、底径133cm、深さ163cmを測る。土壙内からの出土遺物はない。

##### (3) S K 014

調査区北端部の平坦面、J4グリッドから検出された。断面形は逆台形を呈する。土壙上部で大湯軽石層がレンズ状に膨んで堆積している。



第2図 大袋II遺跡検出土壙実測図

## 2. 配石群

J87グリッドからH97グリッドまでのおよそ375㎡の範囲に、河原石を数個組み合わせて1つの単位とした組石が群在して検出された。組石の配置された箇所は東側へ向う斜面である。最も高い位置にある組石と最も低い位置にある組石では5m程の差がある。

配石群そのものは、全体の形状として南北に長い形を呈しているが、第1号配石、第5号配石を中心とする1群と、第2号配石、第4号配石を中心とする1群、第3号配石を中心とする1群とに分けられる。

### (1) S Q01

I92、J92、K92、I93、J93、K93の6グリッドにわたって検出された。大小およそ297個の石からなる。この297個の石は、大よそ5つのまとまりに分けて見ることができる。それらのまとまりについて記述する。

組石A：48個の石からなる。径20～30cmの比較的大きな石を環状に配し、その内部西寄りに径10～20cmの礫が10数個置かれている。東寄りの部分には礫はなく、空隙部分がある。土壌はこの組石の東寄り下部から検出されている。口径105cm、底径56cm、深さ48cmを測る。

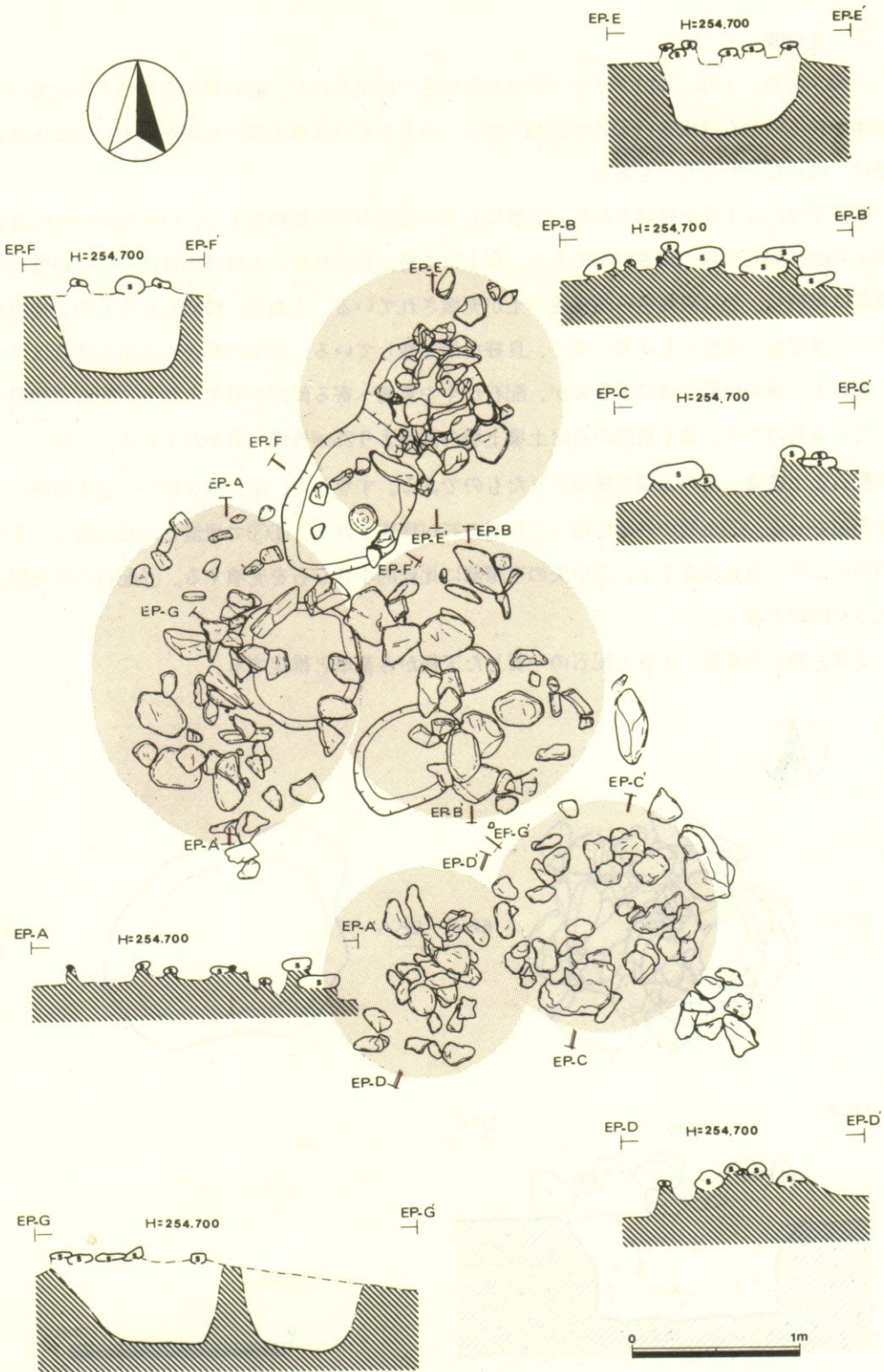
組石B：23個の石からなる。径20～30cmの礫を10数個組み合わせて構築している。南寄りでは石の組み方は疎となる。下部の土壌は組石の中心から南西寄りで検出された。口径74cm、底径40cm、深さ45cmを測る。

組石C：36個の石からなる。径10～20cm程の比較的大きな石を環状に配している。環の東と南の部分には長径が40cmを越える大きな石が1個づつ置かれている。下部に土壌は確認されなかった。

組石D：31個の石からなる。小範囲に径10cm程の小さな石をまとめている。下部に土壌は確認されなかった。

組石E：45個の石からなる。径10～20cm程の石を組み合わせて構築している。組石の下部とその南西側に隣接して1個づつの土壌を確認している。組石の下部にある土壌は口径85cm、底径58cm、深さ40cmを測る。南西側にある土壌は口径82cm、底径60cm、深さ46cmを測る。

第1号配石を構成する各々の組石は、以上のように大きく5つのまとまりで観察された。このうち、組石Aと組石Cは形が環状を呈する点で、形態的に構築時の意図を看取することができる。しかし、その構築法については明瞭な規則性が認められず判然としなかった。配石下部に構築されている各土壌は、全て埋土が1層で10Y R $\frac{3}{4}$ 暗褐色を呈している。配石からの深さが50cm未満と浅い。また内部からの遺物も認められない。配石との対応関係も、土壌構築と配石の設置が一連の工程で考えられず、これらの土壌を墓壇と断ずるには積極的な根拠を欠いておるように思える。



第3図 第1号配石

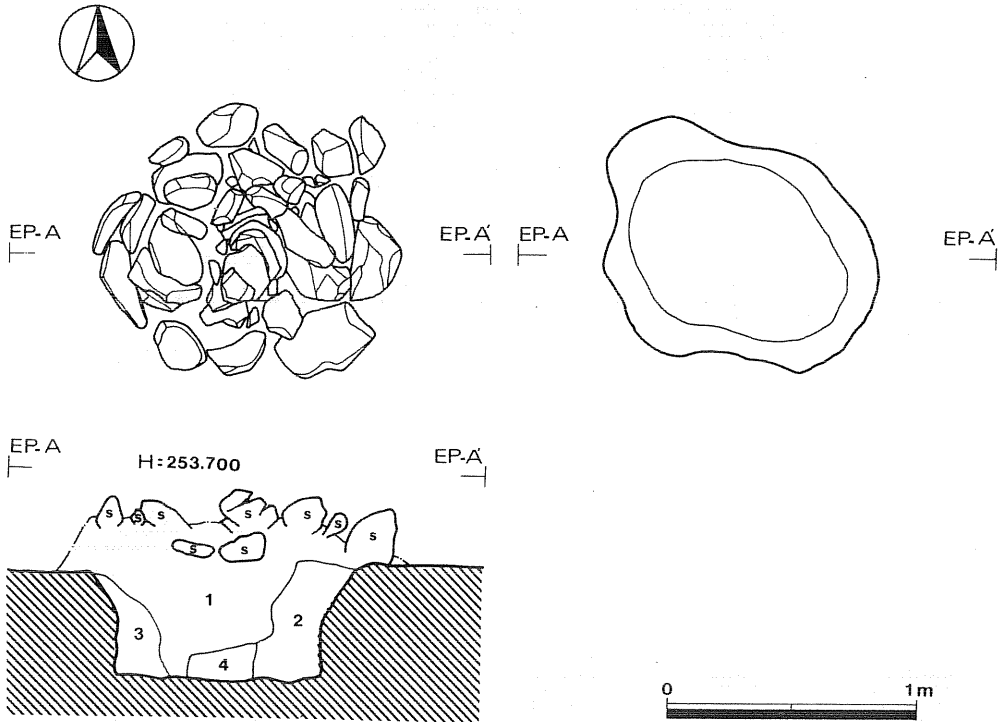
(2) S Q02

J90、K90、J91、K91グリッドが交わる付近で検出された。計42個の石でつくられている。使用されている石は大きいものでは38×27cm、小さなものは拳大程のものがある。石は火熱を受けて破碎しているものもある。

配石下部には土壌が確認された。土壌は北東—南西方向に長軸をもつ。口径123×98cm、底径93×70cm、配石からの深さ57cmである。埋土は4層に分けたが、土壌底面ほぼ中央に褐色土が塊状に堆積し、他は黒褐色～暗褐色の土が充填されている。人為的に埋められたものと推察した。土壌壁面、底面とも非常に硬く、良好な面を残している。土壌内部からの出土遺物はない。

配石と土壌の位置はほぼ重なるが、配石がやや東側へ寄る傾向が看とれる。配石に使用されている石のうち、最も東側の石は土壌上場の西端より25cm外側へ置かれている。しかし、この配石と土壌は一連の工程で構築されたものである。すなわち、①土壌を穿つ。②土壌内に土を充填させる。③土壌の外縁に沿って13個の石が埋置される。④③で埋置した石に沿ってその内側に12個の石を埋置する。⑤中央の空隙部に比較的小さな石を充填する。⑥配石の中央部に大きな円礫を置く。

土壌内埋土の状態、土壌と配石の一貫した工程から墓壙と推定する。



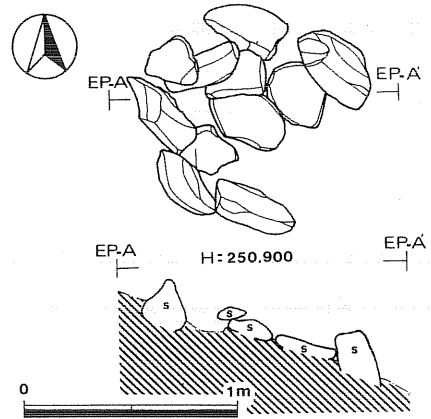
第4図 第2号配石

(3) S Q03

J 87グリッドで検出された。斜面の下方に位置する。配石群の中にあつては最も南側にある。

計11個の石で構築されている。長径が40cm、短径が15~25cm程の比較的大きな石が使用されている。構築にあたっては、先ず扁平な石4個を組み合わせた後、その北側、西側、南側の周囲に長めの石を埋置している。

配石の下部に土壌は確認されなかった。

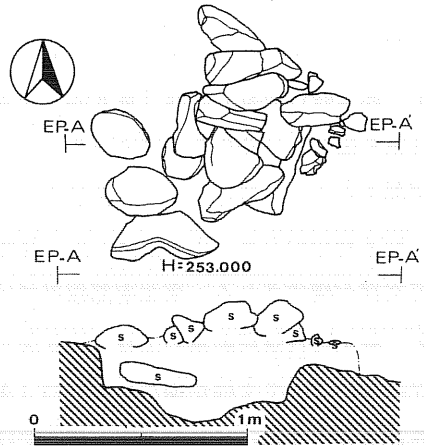


第5図 第3号配石

(4) S Q04

J 90グリッドで検出された。第2号配石の南東2.5 mに位置する。

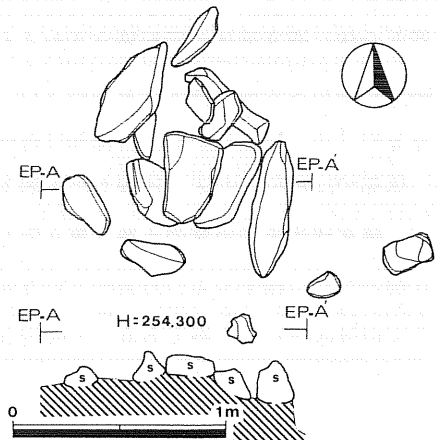
計16個の石で構築されている。1つの石は長径が30~40cm、短径が15~20cmと比較的大きい。16個の石のうち12個が径1 m程の範囲に組み上げられ、その南西側に3個の扁平な石が置かれる。配石の下部には土壌があるが、土壌内にも1個扁平な石がある。土壌は口径93cm、底径85cm、配石からの深さ36cmを測る。土壌内埋土は10 Y R  $\frac{3}{4}$  暗褐色。内部からの出土遺物はない。



第6図 第4号配石

(5) S Q05

I 93、J 93グリッドで検出される。第1号配石の東側に位置する。計15個の石を用いて構築されている。使用されている石は径10cm程のものから長径30~60cm、短径15~30cm程のかなり大きなものまである。構築に際しては、先ず3個の大きな石を組み合わせ、その外周を長めの石で取り囲むようにして埋置している。配石の下部に土壌は確認されなかった。



第7図 第5号配石

## 第2節 出土遺物

大岱Ⅱ遺跡では、遺構内から目立った遺物は出土しておらず、図示することが可能且つ有為な遺物は、全て遺構外から出土している。

### 1 土器

遺構外から出土している土器は、弥生時代と縄文時代のものである。弥生時代の土器は、遺跡の基本層位第Ⅲ・Ⅳ層（大湯軽石層）の直下暗褐色を呈する第Ⅴ層中から出土している。第Ⅴ層は層厚が5～10cmと極めて薄く、またそこから出土する弥生時代の土器の量も僅少である。縄文時代の土器は第Ⅴ層下の黒褐色を呈する第Ⅵ層中から出土している。付図1は昭和57年度の調査区北端での土器片、石器、礫の水平分布と垂直分布を図示したものである。これらの遺物はある程度のまとまりをもって観察される。各々のまとまりを土層図に投影して見ると、大湯軽石層下に集中していることがわかる。

#### (1) 縄文時代中期の土器〔第8図1～3、第9図1〕

〔第9図1〕は絡条体の側面圧痕により口縁部の文様帯中の文様が描かれる。口縁は4個の波頂部をもつ波状口縁となり、波頂下にはボタン状の突起が付される。頸部には半截竹管による瓜形文列がめぐる。円筒上層a式に比定されよう。〔第8図1～3〕は、磨消縄文手法によって文様が構成される。東北部編年では大木10式、青森県内の編年では大曲Ⅰ式に相当する。

#### (2) 縄文時代後期前葉の土器〔第8図4～18、第10図2〕

沈線文によって文様が描かれるもの〔4～9、第10図2〕と、器面全体に縄文原体が回転施文されるもの〔10～18〕がある。前者では沈線文の構成する文様が細い帯を形づくり、磨消縄文の手法により縄文部と無文部が画されるもの〔5～9〕と、無文部を形成しないもの〔4、第10図2〕がある。口縁部はやや外側に開く傾向がある。

器面全体に縄文原体が回転施文されるものには、2段撚の縄を回転施文するもの〔14～16〕と網目状撚糸文を回転施文するもの〔11、12、17、18〕がある。また、器面全体が無文研磨されるもの〔10、13〕もある。口縁部は折返し口縁となり、折返し部分での原体の回転方向は横位、体部では縦位となる。沈線文の土器を十腰内Ⅰ式、他をそれに伴う土器と理解する。

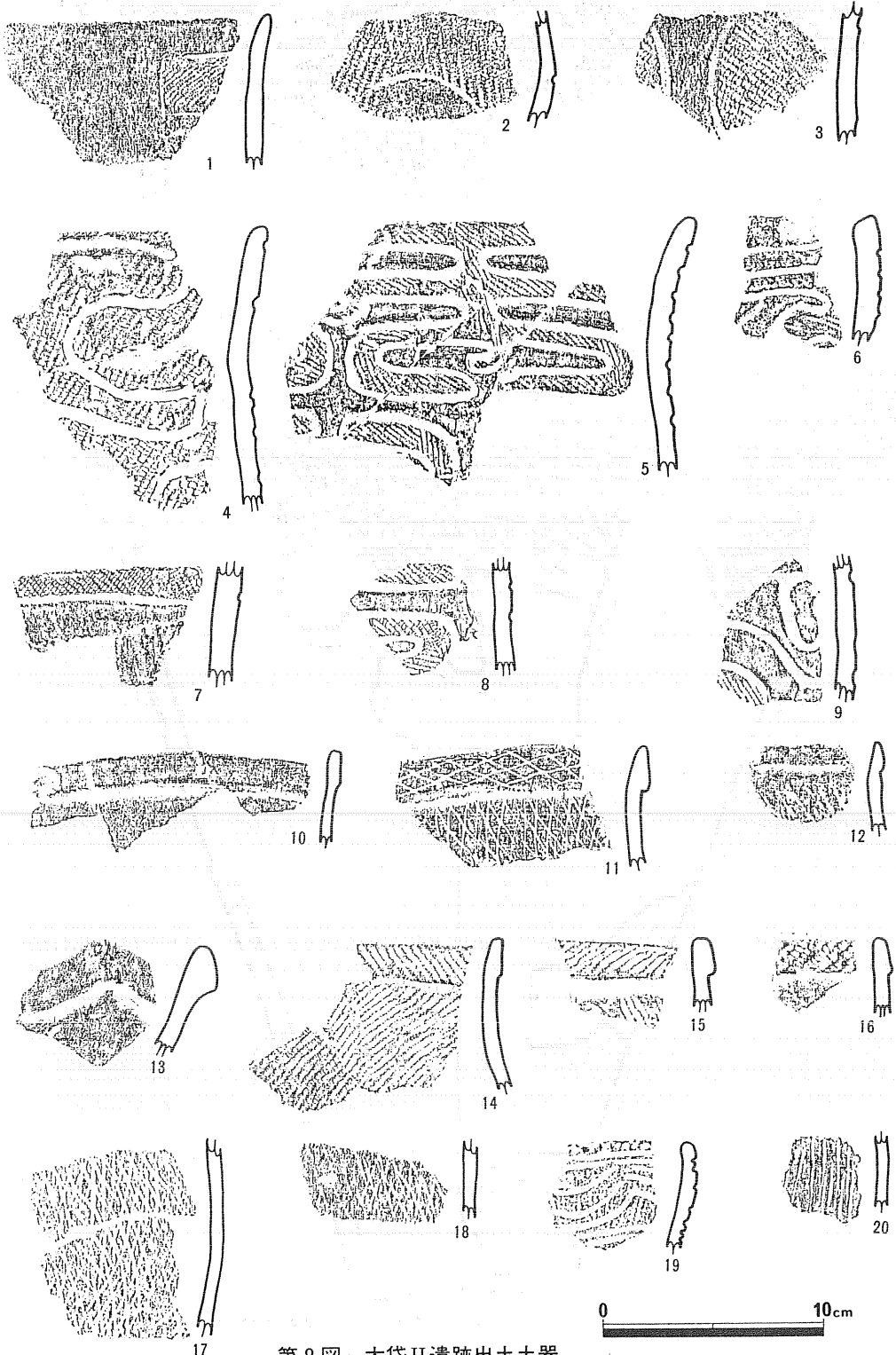
#### (3) 縄文時代後期中葉の土器〔第9図2〕

5個の波状口縁をもち、11条の平行沈線とそれらを連結するS字状の沈線、地文の縄文によって文様構成される土器である。十腰内Ⅱ式に比定する。本遺跡ではこの1点のみである。

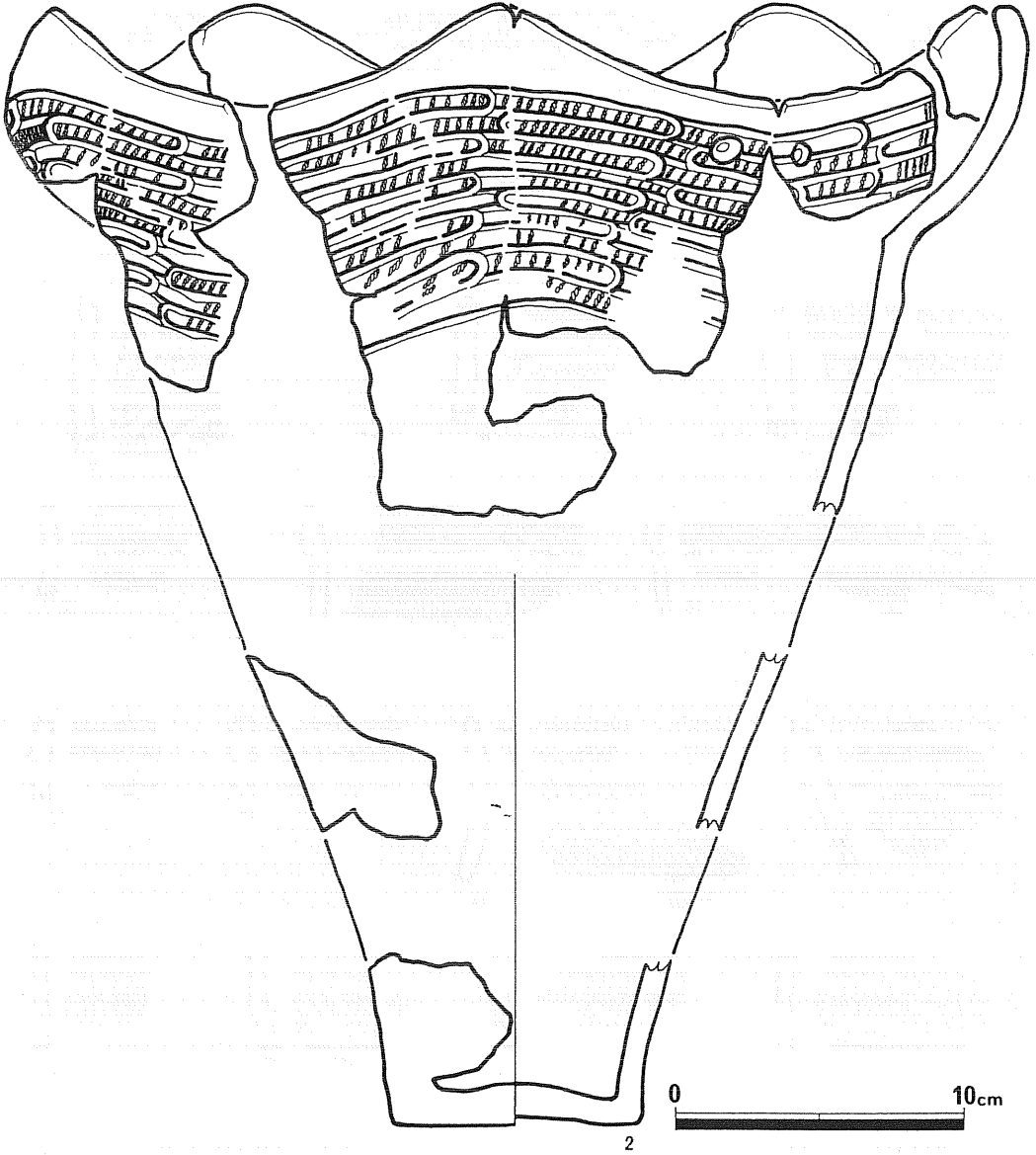
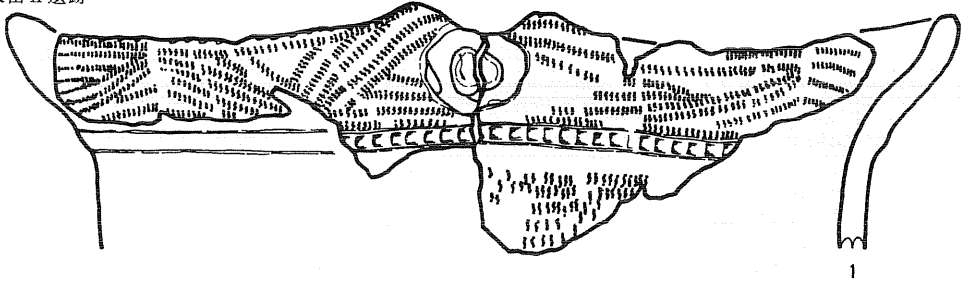
#### (4) 弥生時代の土器〔第8図19、20、第10図1〕

口縁部に沈線文により文様が描かれるもの〔19〕、器面全面に縄軸の絡縄体が回転施文されるもの〔20、第10図1〕がある。前者は天王山式土器に関係してゆく土器、後者は天王山式と

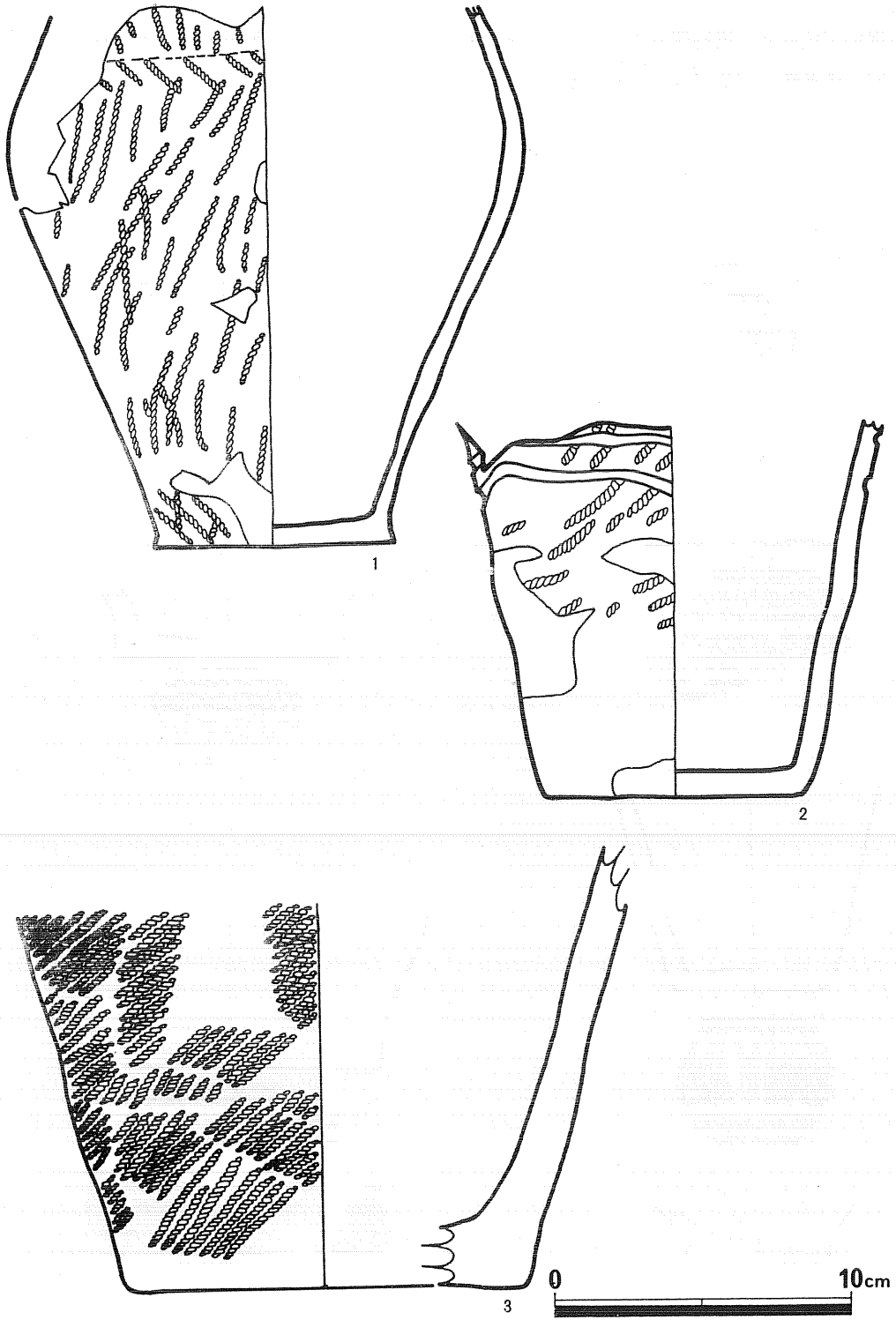




第8図 大岱II遺跡出土土器



第9図 大岱Ⅱ遺跡出土土器

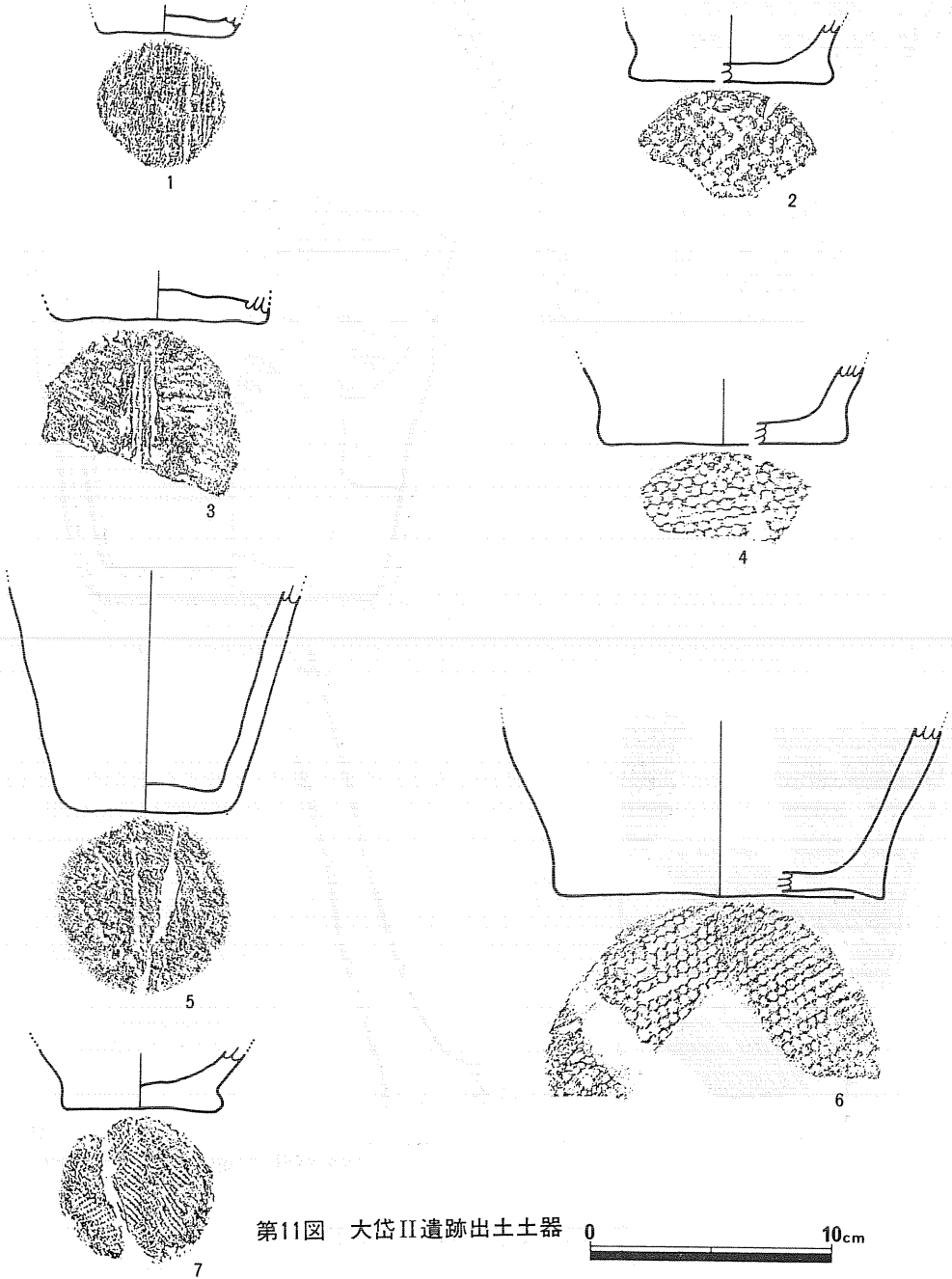


第10図 大岱II遺跡出土土器

時間的・地域的に周縁関係にある小坂X式、青森県内で鳥海山式と呼ばれる土器と理解する。

(5) 底部資料〔第10図3、第11図1～7〕

縄文時代後期中葉の土器底部には笹葉状の圧痕が施されたもの〔1、3〕や、網代痕の施されたもの〔2、4、6〕、木葉痕の施されたもの〔5〕などがある。〔7〕は小坂X式の底部である。底面にも縄軸の絡条体が回転施文されている。



## 2 石器

## (1) 石鏃〔第12図1〕

1点のみ出土している。両面を丹念に調整剥離して製作している。先端は折損している。

## (2) 石匙〔第12図2〕

1点のみ出土している。縦形の石匙である。素材剥片の表面にだけ調整剥離を加え製作している。つまみ部分では主要剥離面側でも左右両側から剥離が加えられる。

## (3) 搔器〔第12図4、6、7、8、9、11〕

6点出土している。縦長の剥片を素材として縁辺に調整剥離を施し刃部を作出したもの〔7、8、9、11〕と、横長あるいは円形に近い剥片を素材として調整剥離により刃部を作出したものの〔4、6〕がある。調整剥離は素材の表面に加えられることが多いが、〔8〕のように主要剥離面側の一部や〔9〕のように主要剥離面側だけに調整剥離の加えられるものもある。

## (4) 剥片〔第12図5、10、12、13〕

〔10、12〕は縦長の剥片、〔5〕は横長の剥片である。〔13〕は石核とも思えるが、図示した右側の左上部の縁辺に剥離が施され、刃部として作出されたように思える。

## (5) 石錘〔第13図1～5〕

5点出土している。重さ40～90g程の小さな礫の短軸を打ち欠いて抉りを作成したもの。

## (6) 凹石〔第13図6～8〕

4点出土している。扁平な礫の表裏面に2箇所凹部分を作っている。

## (7) 刻線礫〔第13図9、10〕

2点出土している。軟質の泥岩の表裏面に剥片によって線を刻みつけていったものである。

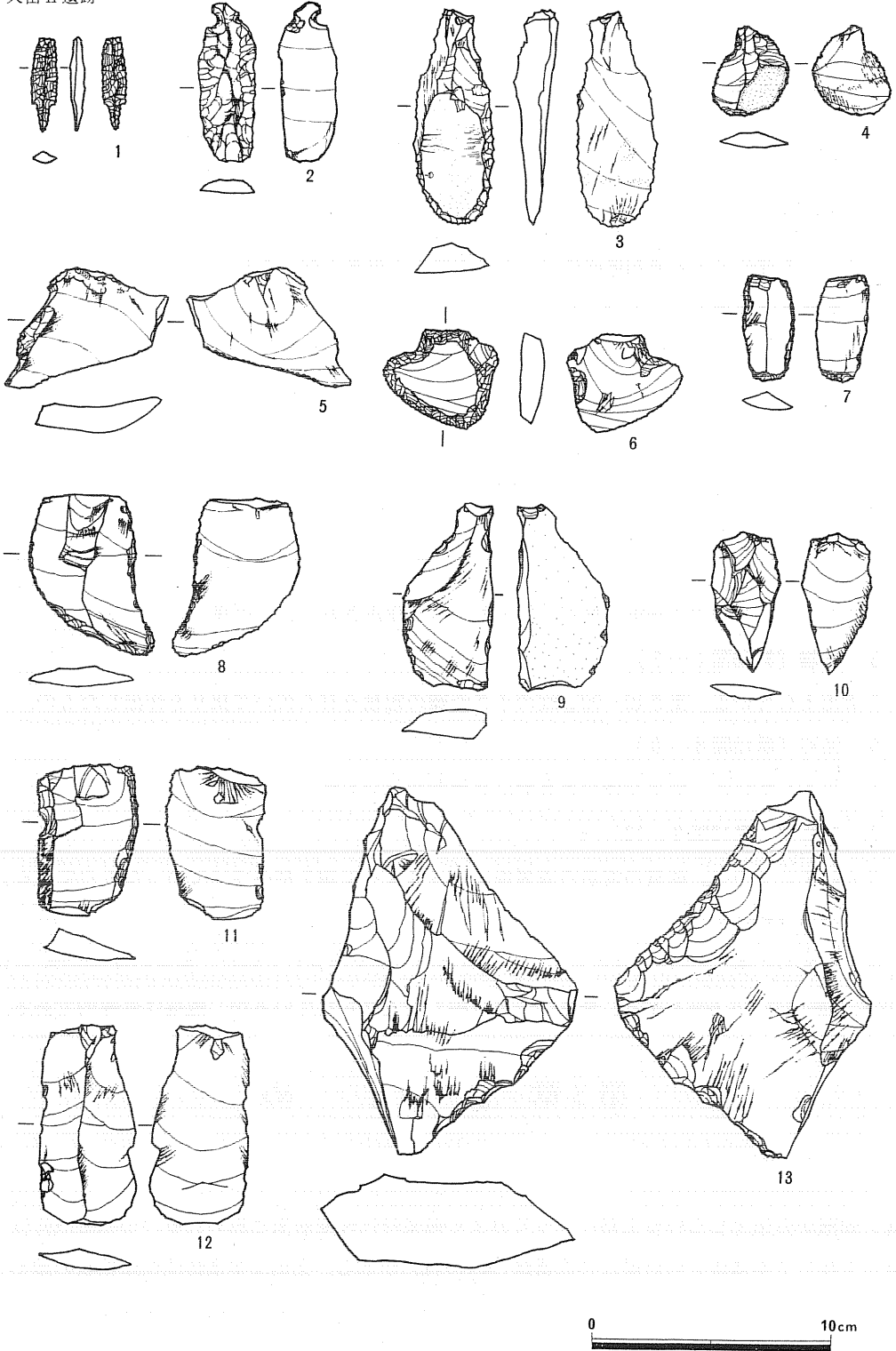
## (8) 石皿〔付図2〕

第2号配石の南2.2mの地点から出土。配石群の一部を構成していた。推定の長径62cm、短径29cm、皿面の厚さ5.6cmを測る。長軸の一端は円く仕上げられているが、他端は直線的である。

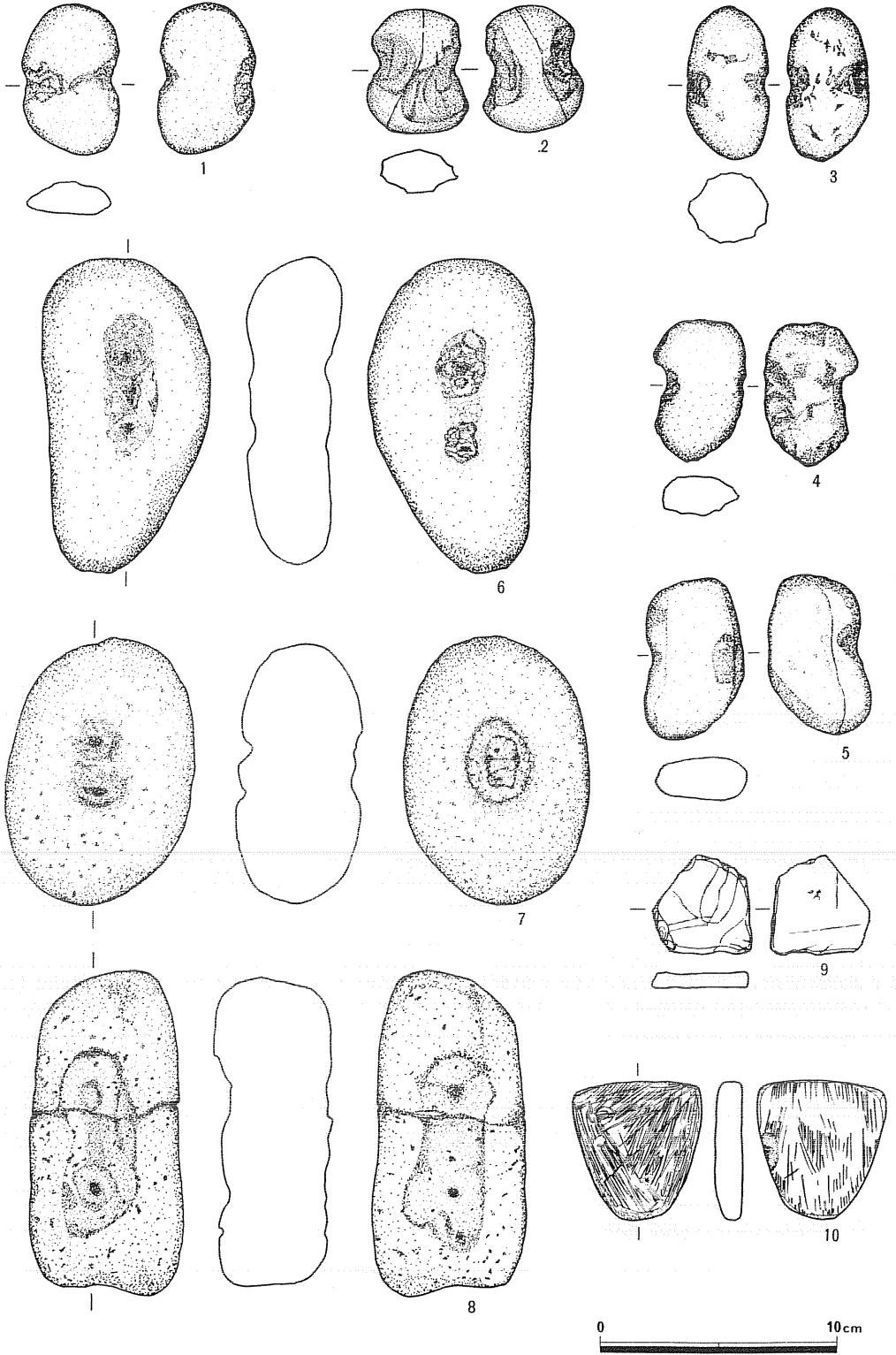
## 第3章 まとめ

大岱Ⅱ遺跡の調査では、18基の土壙と1つの配石群が検出された。これらの遺構の構築時期は、周囲から出土している土器によっておよそ縄文時代後期前葉と思われる。小坂町内には小坂川を挟んで本遺跡との対岸に杉沢遺跡(環状列石)がある。立地は本遺跡同様屋根状の地形を選んで営まれている。縄文時代後期に多く出現するこのような配石遺構が、集落の営まれ得ないような場所、換言すれば集落から離れた場所で営まれていることは、縄文時代の墓制、精神活動を考える上で興味ある課題を示してくれたように思える。

大岱II遺跡



第12図 大岱II遺跡出土石器



第13図 大岱II遺跡出土石器



航空写真

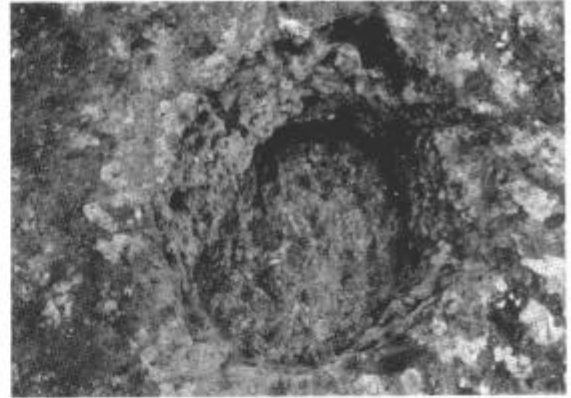


S Q02配石群





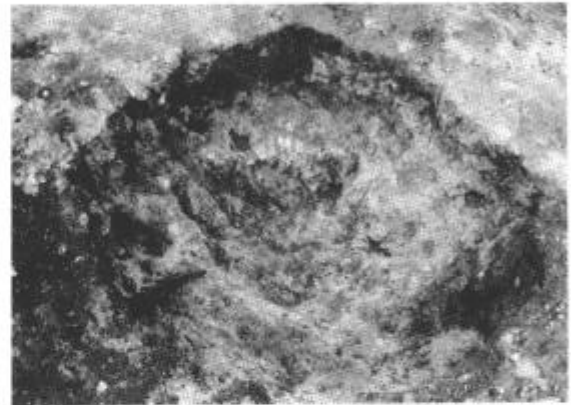
S Q 02 第 2 号配石出土状态



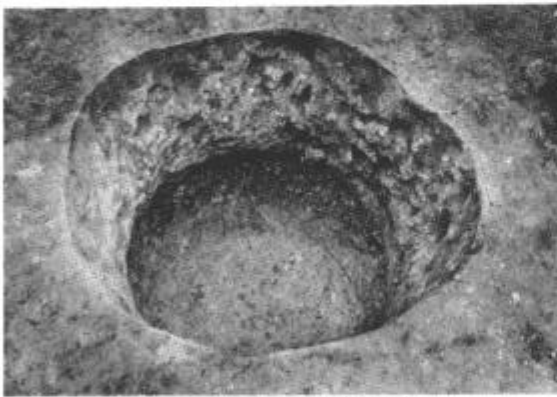
第 2 号配石下土壤完掘状态



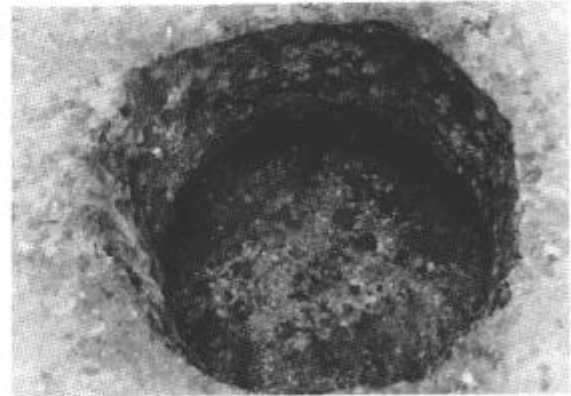
S Q 第 4 号配石出土状态



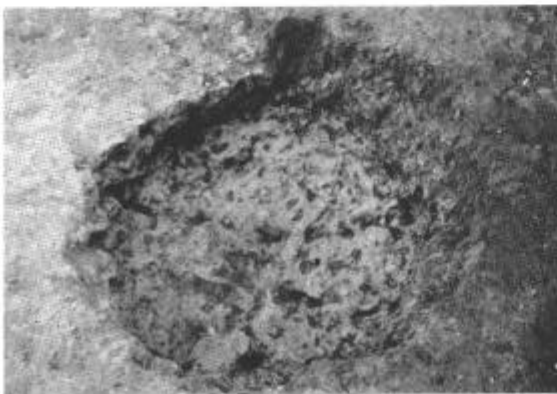
第 4 号配石下土壤完掘状态



S K 08土壤完掘状态



S K 010土壤完掘状态



S K 14土壤完掘状态



石皿出土状态



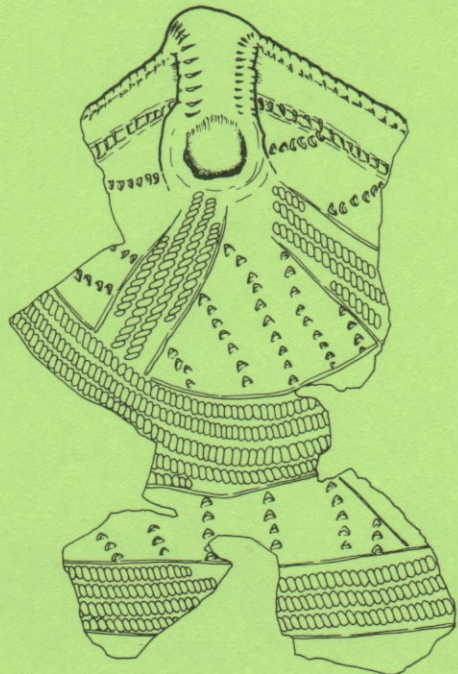
図版 3

大岱Ⅱ遺跡出土遺物（土器）



# 大 袋 III 遺 跡

遺 跡 番 号 No.12  
所 在 地 鹿角郡小坂町小坂字大袋 8 番地他  
調 査 期 間 昭和58年 7 月 4 日 ~ 10 月 29 日  
発掘調査予定面積 7,850m<sup>2</sup>  
発掘調査面積 7,838m<sup>2</sup>



## 第1章 発掘調査の概要

### 第1節 遺跡の概観

遺跡は、小坂川に沿って走る国道282号線の西側の山地、その裾野標高250m程の台地上に位置する。鹿角盆地の北側は、南流して米代川に注ぎ込む小坂川が作る沖積地と、その両側に広がる段丘面からなる。小坂川にはその東西の山地からいくつかの小河川が流れ込んでいるが、遺跡のある台地は、北側を相内川、南側を堀内沢によって画された一連の山地の南の裾部分にある。両河川のほぼ中央には標高394.9mの烏帽子山が聳える。

遺跡のある付近の台地は、南へ突き出した舌状を呈する。この台地の上に大岱Ⅰ遺跡～大岱Ⅳ遺跡、円川原遺跡の4遺跡がのる。大岱Ⅲ遺跡のある地点の標高は大岱Ⅱ遺跡、円川原遺跡とともに、大岱Ⅳ遺跡、大岱Ⅰ遺跡のある地点よりもおよそ30m程高い260mをはかる。遺跡の現況は牧草地である。およそ18,000㎡の面積の土地が牧草地として利用されている。

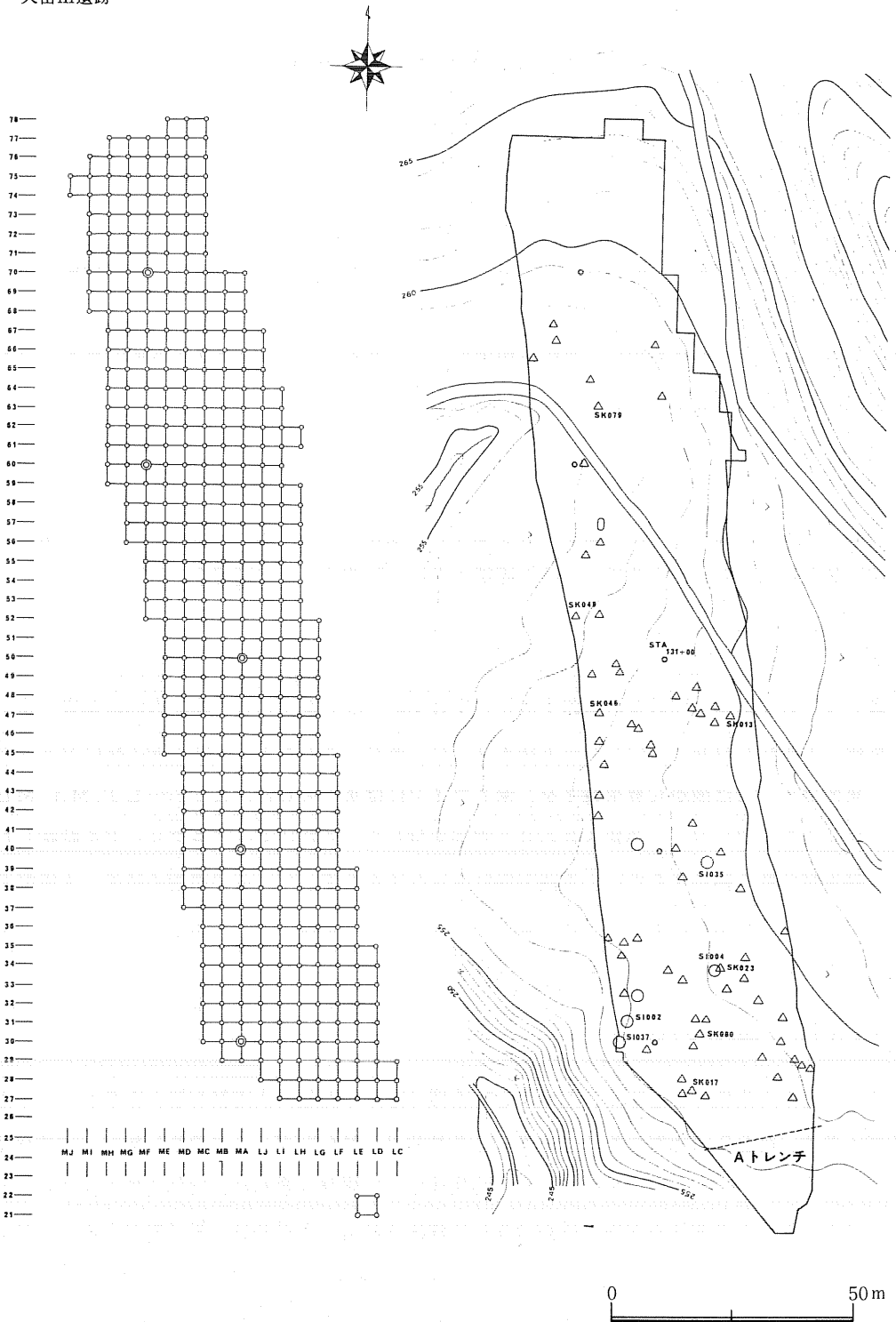
### 第2節 調査の方法

調査は、日本道路公団設置の道路中心杭S T A 130 +00を基点として磁北方向に基礎を求め、4m幅に方眼杭を打設してのグリッド法を採った。基点であるS T A 130 +00の杭はM A 50とし、東面ラインには南から算用数字を、南北ラインには東からL A、L B……L J、M A、M B……M Jのアルファベットの組み合わせ2文字を付して、それによって各グリッドを呼称した。

土層堆積状態を観察するため、東西方向にトレンチを設定した。その観察の結果、大湯軽石層から上位の耕作土には遺物の包含が認められないため、重機によって除土することとし、それ以下を人力によって掘り下げることとした。

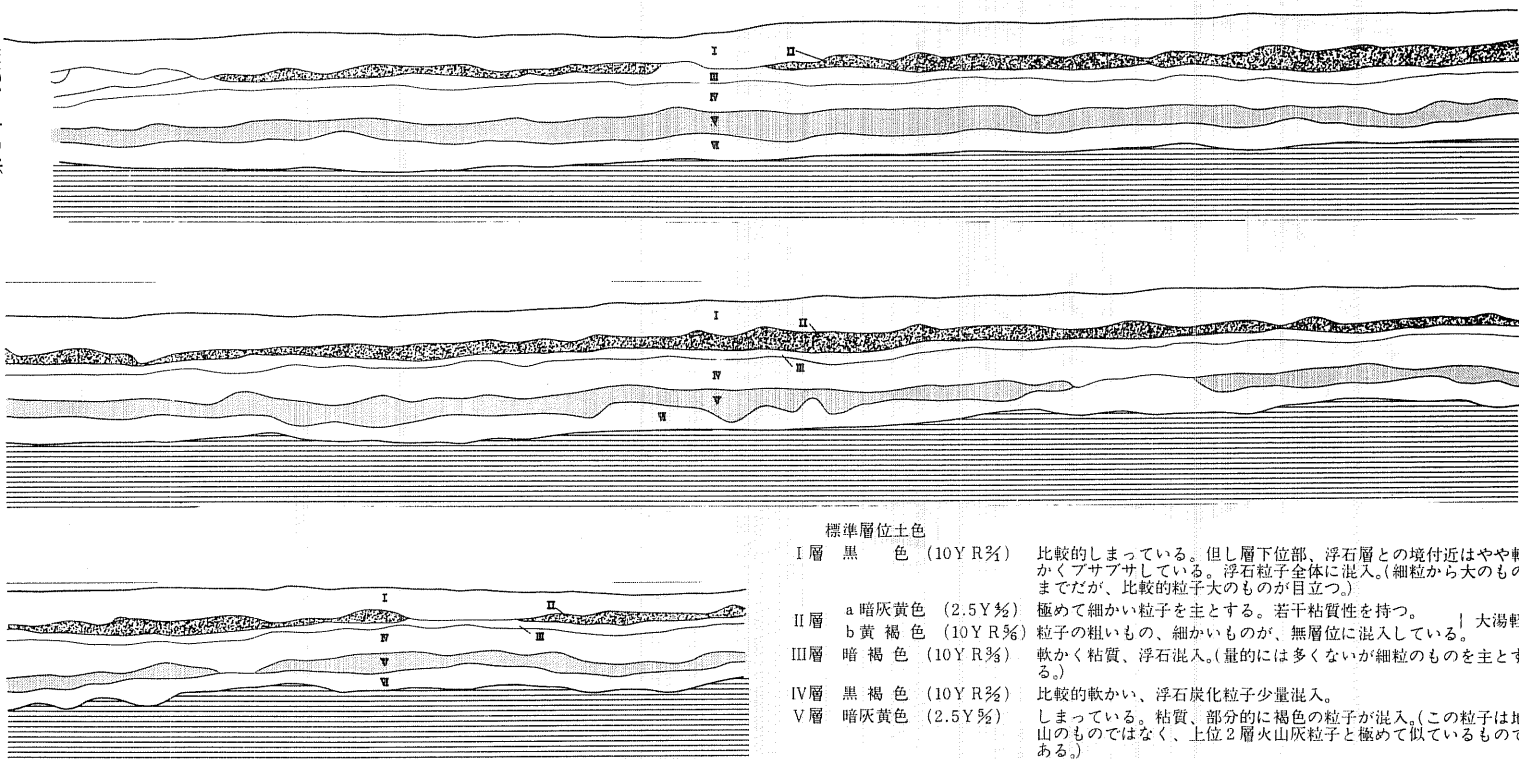
### 第3節 調査の経過

7月4日から重機による除土を開始する。重機で除土した後の大湯軽石層の直下からは小坂X式土器片、後北C<sub>2</sub>式土器片等が出土する。7月23日、M C 31グリッドの第V層の上面で径3m程の円形プラン(S I 002)を確認。縄文時代後期の住居跡と思われ、内部に焼土が認められた。またIV層上面で河原石が何ヶ所か点在して検出される。7月30日、第V層の上面から径30～50cmの土壇プランが確認される。8月6日、土壇(S K 046)から縄文時代中期の土器を検出する。8月20日、住居跡(S I 035)を検出、内部に石囲炉と焼土を認める。10月29日、調査終了、航空写真撮影。



第1図 グリッド配置図・遺構配置図

H:259.500



標準層位土色

- I層 黒色 (10Y R $\frac{2}{4}$ ) 比較的しまっている。但し層下位部、浮石層との境付近はやや軟かくフサブサしている。浮石粒子全体に混入。(細粒から大のものまでだが、比較的粒子大のものが目立つ。)
- II層 a 暗灰黄色 (2.5Y $\frac{6}{8}$ ) 極めて細かい粒子を主とする。若干粘質性を持つ。 | 大湯軽石層  
b 黄褐色 (10Y R $\frac{6}{8}$ ) 粒子の粗いもの、細かいものが、無層位に混入している。
- III層 暗褐色 (10Y R $\frac{3}{4}$ ) 軟かく粘質、浮石混入。(量的には多くないが細粒のものを主とする。)
- IV層 黒褐色 (10Y R $\frac{2}{4}$ ) 比較的軟かい、浮石炭化粒子少量混入。
- V層 暗灰黄色 (2.5Y $\frac{6}{8}$ ) しまっている。粘質、部分的に褐色の粒子が混入。(この粒子は地山のものではなく、上位2層火山灰粒子と極めて似ているものである。)
- VI層 暗褐色 (10Y R $\frac{3}{4}$ ) しまっている。部分的に褐色土混入。
- VII層 鳥越火山灰層



第2図 土層実測図

## 第2章 調査の記録

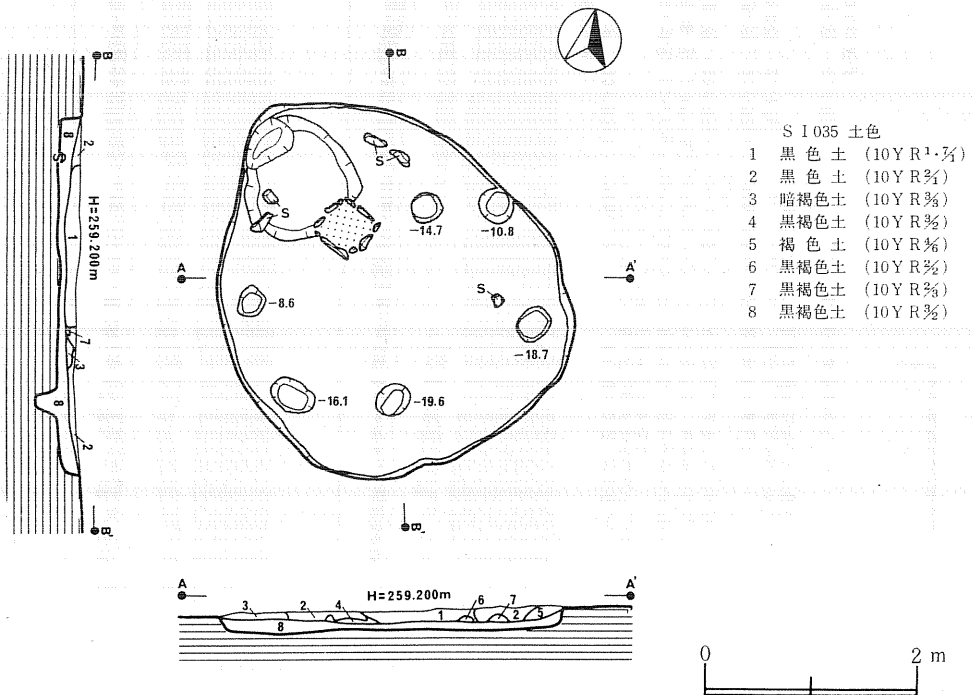
### 第1節 検出遺構

#### 1 住居跡

住居跡は、全部で6軒検出されている。住居跡の確認面は大岱火山灰層の上面であり、住居確認のレベルからは縄文時代後期の土器が出土している。住居跡の分布をみると台地に入り込んだ沢に面した側、調査区内にあってはその南側に偏っている。

##### (1) S135

L I 39グリッドで確認している。北西側に先端部をもった卵形の平面形を呈する。長径380cm、短径320cmを測る。住居の掘り込みの深さは17cmである。覆土は8層に分けられる。覆土の色調は黒褐色～暗褐色を呈するが、壁際に褐色土の堆積が認められる。住居の中心から北西寄りに9個の細長い石を用いて正方形の石組炉が構築されている。壁と石組炉の間には径120cm程のピットが穿たれている。ピットの深さは10cm程である。石組炉の内部には焼土が堆積している。石組炉の北西側のピットは縄文時代中期末に盛行する複式炉の形態の名残りかとも思われる。柱穴は南西側の壁に沿って3個、北東側の壁に沿って3個確認している。



第3図 第35号住居跡実測図

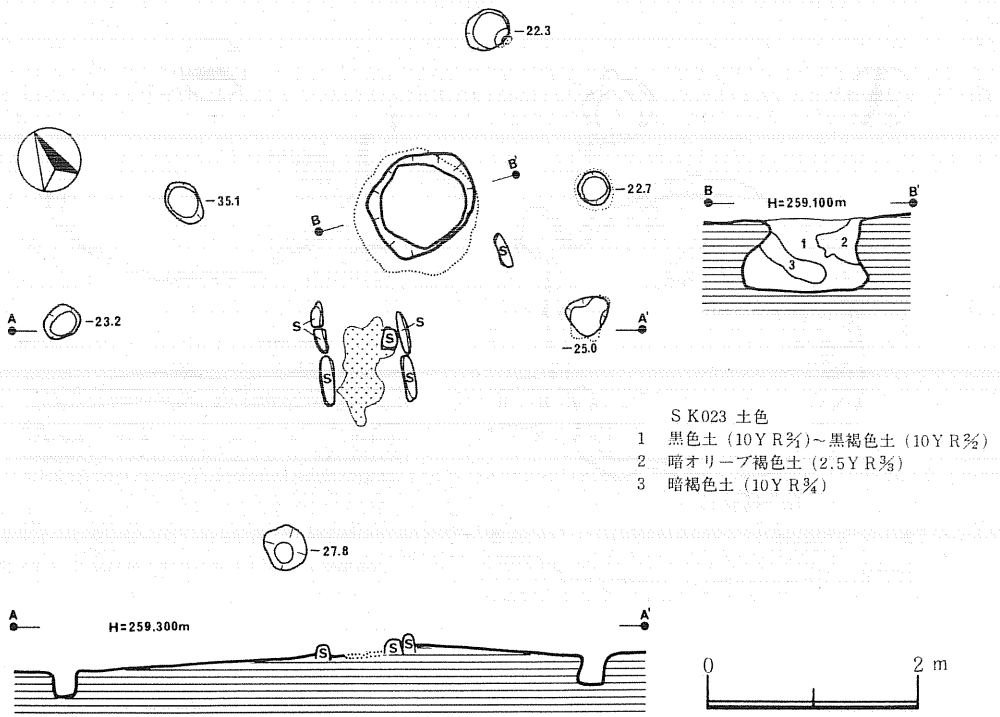


(2) S104

LG34グリッドで確認している。掘り込みのプランは確認できず、炉と炉の周囲にある柱穴とが確認されているに過ぎない。柱穴を結んだ線から想定される平面形はおよそ円形で、径550cm前後と思われる。柱穴と思われるピットは北東側に3個、南西側に3個検出されている。炉は長さ40cm、幅10cm程の細長い石を東側と西側に2個ずつ縦列に置いたものである。北辺と南辺に石は置かれていない。東辺と西辺の石の間隔は68cm程である。内部には焼土が堆積している。炉の北東側には口径120cm、底径105cm、深さ68cmの袋状土壌が確認された。土壌内の覆土は暗褐色～黒褐色を呈するが、一部焼土化した土が堆積している。土壌内からの出土遺物はない。

(3) S102

MB31グリッドで確認している。大岱火山灰の上面で黒褐色の円形プランが認められ、内部精査の結果住居跡と判別し得た。径300cm、深さ16cmを測る。覆土は1層で黒褐色(10Y R $\frac{3}{2}$ )を呈する。住居の中心から、北西側へやや寄った個所に焼土の堆積が認められ、地床炉と確認された。地床炉は長径65cm、短径40cm、厚さ10cmの規模のものである。柱穴と思われるピットは壁際の4個所にあり、深さはおよそ10cm以下と浅いものである。住居外の東側2個所から径50cm程



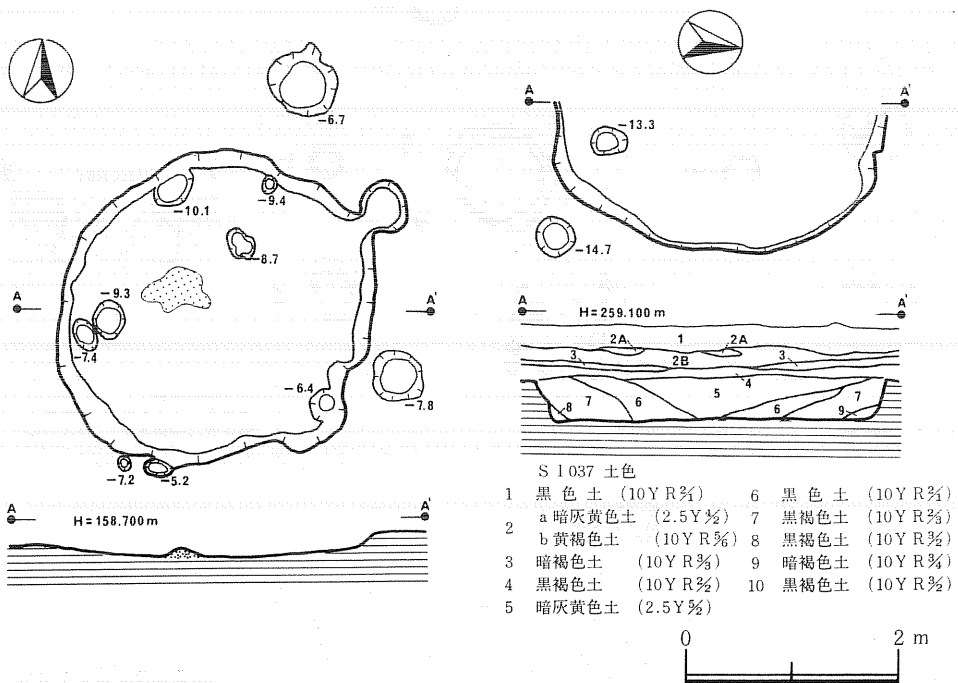
第4図 第4号住居跡・第23号土壌実測図

のピットが確認されているが、住居に付随するものかどうか判然としない。住居内からは僅かの石器片を除いて出土遺物はない。

(4) S 137

MB29グリッドで検出している。路線外へ住居の半分が出ており、調査は路線内の半分にとどまっている。遺跡の基本層位と住居の構築面、覆土の関係を見ると、住居は大岱火山灰の上の黒褐色土中にその構築面がある。覆土中には一旦掘り上げられたと思われる大岱火山灰が再堆積し、レンズ状の堆積層として観察された。調査した住居跡の半分の計測に依れば、径315cm、深さ40cmの円形プランの竪穴住居となるようである。住居内に炉は確認されていない。柱穴と思われるピットは南側の壁近くに1個確認している。出土遺物はない。

他に2軒検出されている住居跡も内部からの出土遺物に目立つものはない。縄文時代後期の土器片や、それと時期を同じくすると思われる石器片(フレイク)が極く少量出土しているにすぎない。が、本遺跡で最も出土量の多い縄文時代後期の土器が、LG31グリッドで多量に検出され、住居跡がそれを中心にした位置に構築されていることから、これらの住居跡が営まれた時期を縄文時代後期前葉として差し支えないものとする。



第5図 第2号住居跡(左)・第37号住居跡実測図

## 2 土 壤

土壌は全部で66基検出されている。分布はやはり住居跡と同様、調査区の南側で密であり、北側では疎である。

### (1) S K 46

MD47グリッドで検出。口径115cm、底径95cm、深さ93cmを測る。底面に3個の石が置かれ、その北東側に、縄文時代中期円筒上層e式の約 $\frac{1}{2}$ 個体の破片が置かれていた。

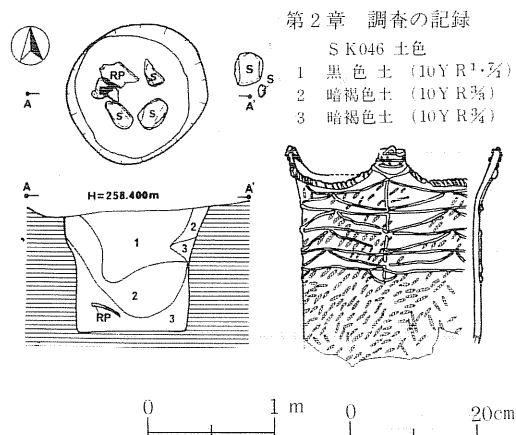
### (2) S K 17

LH27グリッドで検出、口径80cm、底径123cm、深さ107cmを測る。断面形はフラスコ状を呈する。土壌内の覆土はおよそレンズ状堆積にしたがっている。底面近くには、開口部の壁の崩落土と思われる黄褐色土が厚さ27cm程で堆積している。

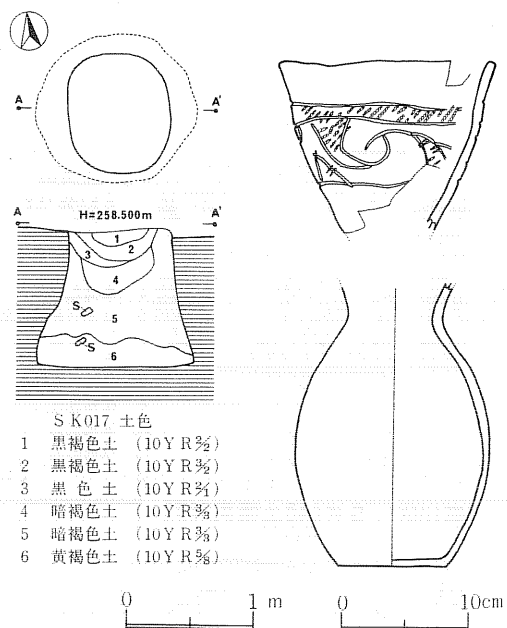
土壌内からは、2個体の土器が出土している。1個は口縁部の開く鉢形の土器で、粗雑な沈線文が描かれ、後にLRの縄文が回転施文されたものである。他は無文の壺形の土器で表面は良く研磨され、樹脂状の塗膜が全面に認められる。両者とも、縄文時代後期前葉の時期、十腰内I式の土器である。

### (3) 第80号土壌

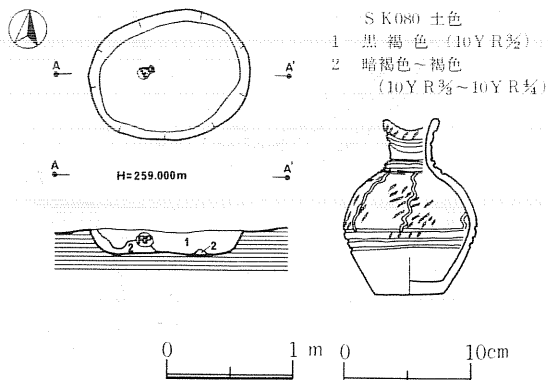
LH30グリッドで検出。口径135cm×50cm、底径110cm×80cm、深さ15cmを測る。平面形が楕円形を呈し、浅い土壌である。土壌内からは小形の壺形土器1個を出土している。縄文時代後期前葉十腰内I式土器である。



第6図 S K046土壌実測図及び出土遺物

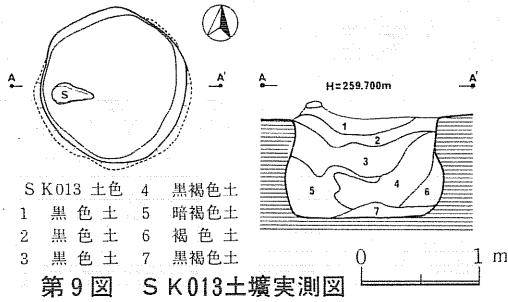


第7図 S K017土壌実測図及び出土遺物



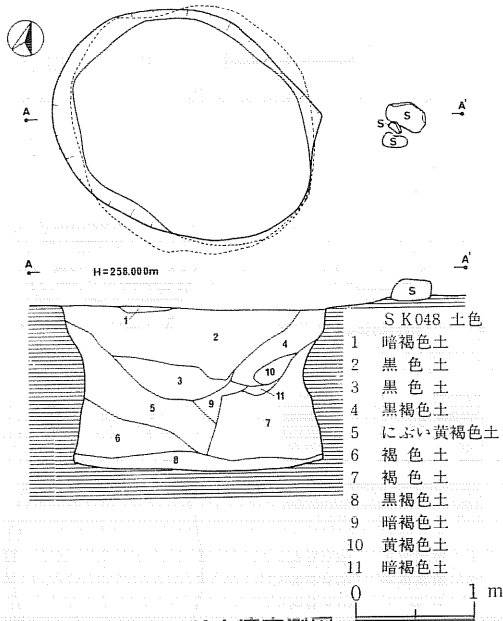
第8図 S K080土壌実測図及び出土遺物

大袋III遺跡



(4) S K 13

L G 47グリッドで検出。口径123cm、底径135cm、深さ83cmを測る。検出面上に、長径35cm、短径18cmの石を1個確認している。覆土は褐色～黒褐色を呈するが、その堆積はレンズ状に重なり合う。出土遺物はない。

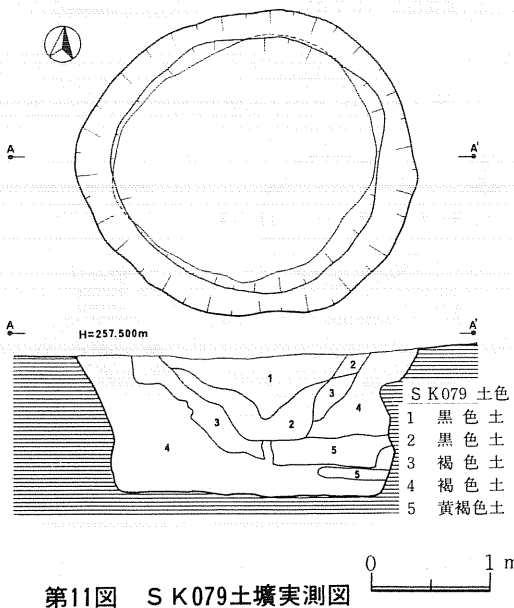


(5) S K 48

M E 52グリッドで検出。口径233cm×180cm、底径222cm×200cm、深さ135cmを測る。覆土は暗褐色～黒褐色を呈するが、一部に黄褐色土がブロック状に混入している。また、大袋火山灰も土壌の上部で僅かに混入している。堆積状態はレンズ状を呈する。土壌の規模としては、大袋III遺跡中、かなり大形のものである。内部からの出土遺物はない。

(6) S K 79

M D 63グリッドで検出。口径288cm、底径220cm、深さ115cmを測る。覆土は黒褐色～暗褐色を呈するが、全体に明るい色調の土が多い。堆積状態はレンズ状である。この土壌も第48号土壌と同様規模の大きいものである。内部からの出土遺物はない。



66基の土壌のうち、時期を明確にし得たのは縄文時代中期の第46号土壌、縄文時代後期の第17号土壌、第80号土壌の3基である。他は内部からの出土遺物がないか、あっても極めて微細な破片で時期の決定には至らない。ただ、調査区南側の土壌群は、その周囲からの出土遺物により、およそ縄文時代後期のものと思われる。

## 第2節 出土遺物

大袋田遺跡の遺構外出土の遺物は、時期的な変化に富み縄文時代から弥生時代まで及ぶ。

### 1 縄文時代の土器

#### (1) 前期の土器 {第12図上段}

〔1、2〕は口縁部に6～7条の押し引き沈線文がめぐるのである。口縁部は波状口縁となり、体部にはLR縄文が回転施文される。前期初頭の早稲田6類a、b式、春日町式に比定される。〔3～7〕は、口縁部に横位の絡条体圧痕文が施され、体部に羽状縄文、斜縄文が施される。前期末葉、円筒下層d式に比定される。

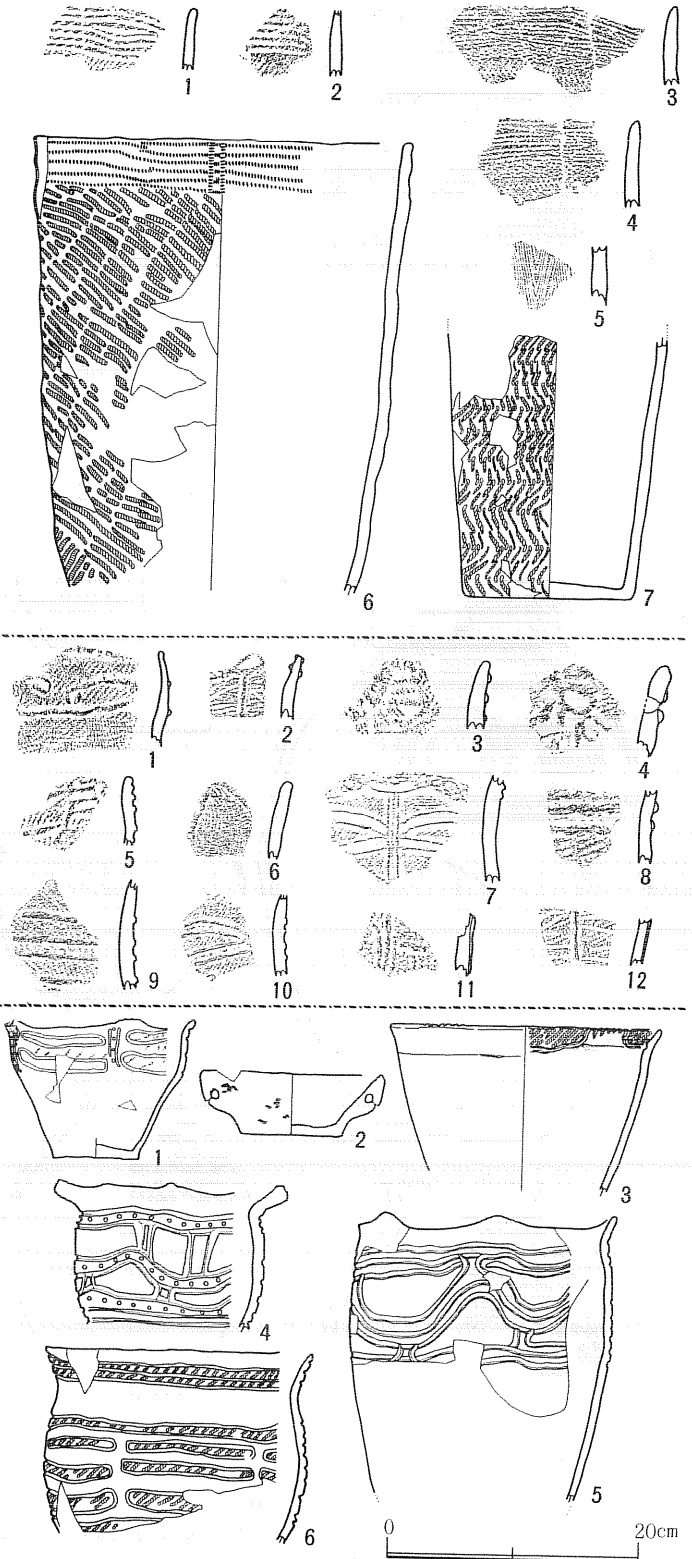
#### (2) 中期の土器 {第12図中段}

〔1～12〕とも地文として縄文を施した後、細い粘土紐の貼付文、沈線文によって所謂肋骨文を描いている。中期中葉円筒上層d式、e式に比定できる。

#### (3) 後期の土器 {第12図下段}

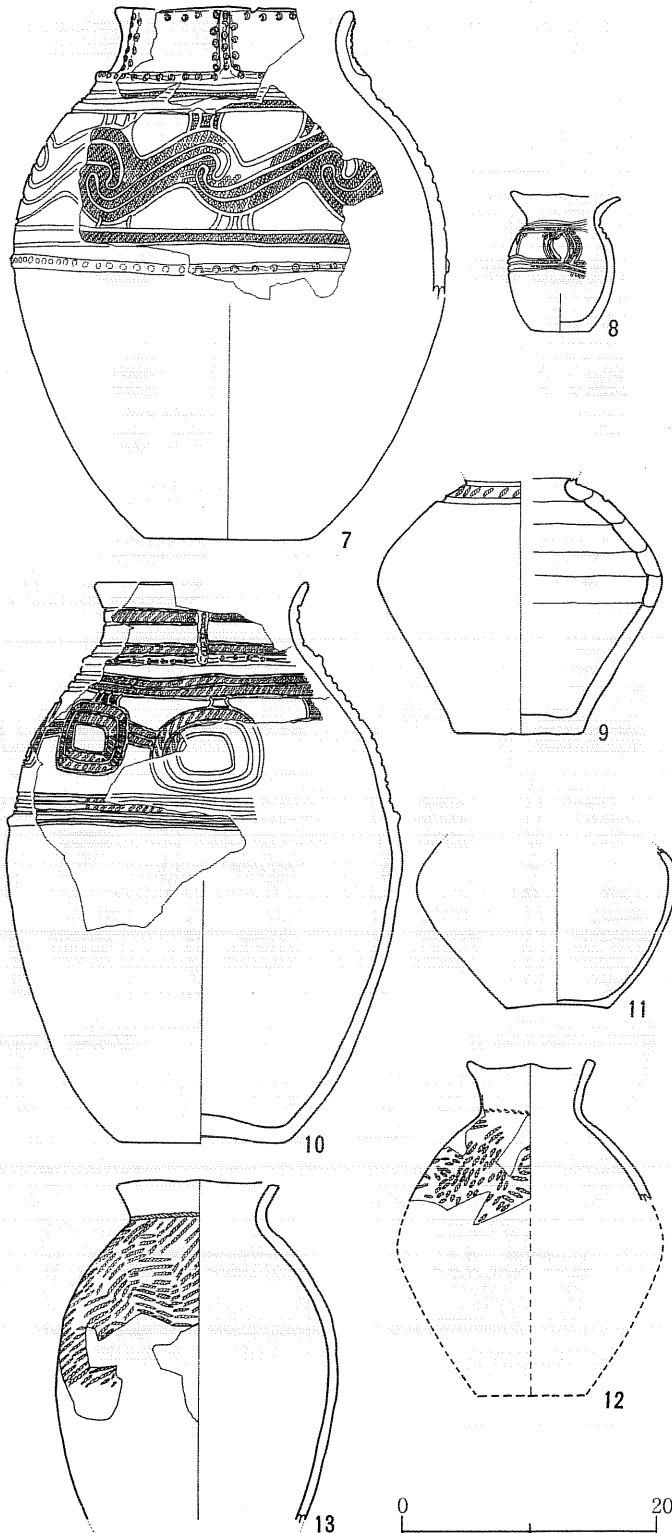
第13図 8～13 第14図 14～30 第15図上段 21～24

〔1～11〕は沈線文を主体する土器である。沈線間には縄文が充填されたり、刺突列が充填されたりする。沈線文の文様帯



第12図 大袋田遺跡出土土器

大岱Ⅲ遺跡



第13図 大岱Ⅲ遺跡出土土器

は基本的に体上半に限られ、文様帯の上限と下限は数条の平行沈線によって画される。文様帯内には〔1、6〕のように杵状文や、〔4、5、7〕のように波状文、〔10〕のように円形文等が描かれるが、文様帯の上下限を画する平行沈線と、文様帯内文様は縦位の沈線で連結されるのが通例である。

〔14~20〕は、器面に斜縄文、網目状撚糸文、平行撚糸文等を施す土器である。〔12、13〕のように口縁部に1条の縄線文をめぐらしたり、〔14、15〕のように1~2条の沈線をめぐらす場合もある。

以上は後期前葉の十腰内Ⅰ式期の土器と見ることができ、この十腰内Ⅰ式期の土器は器形の面でもバラエティーに富む。

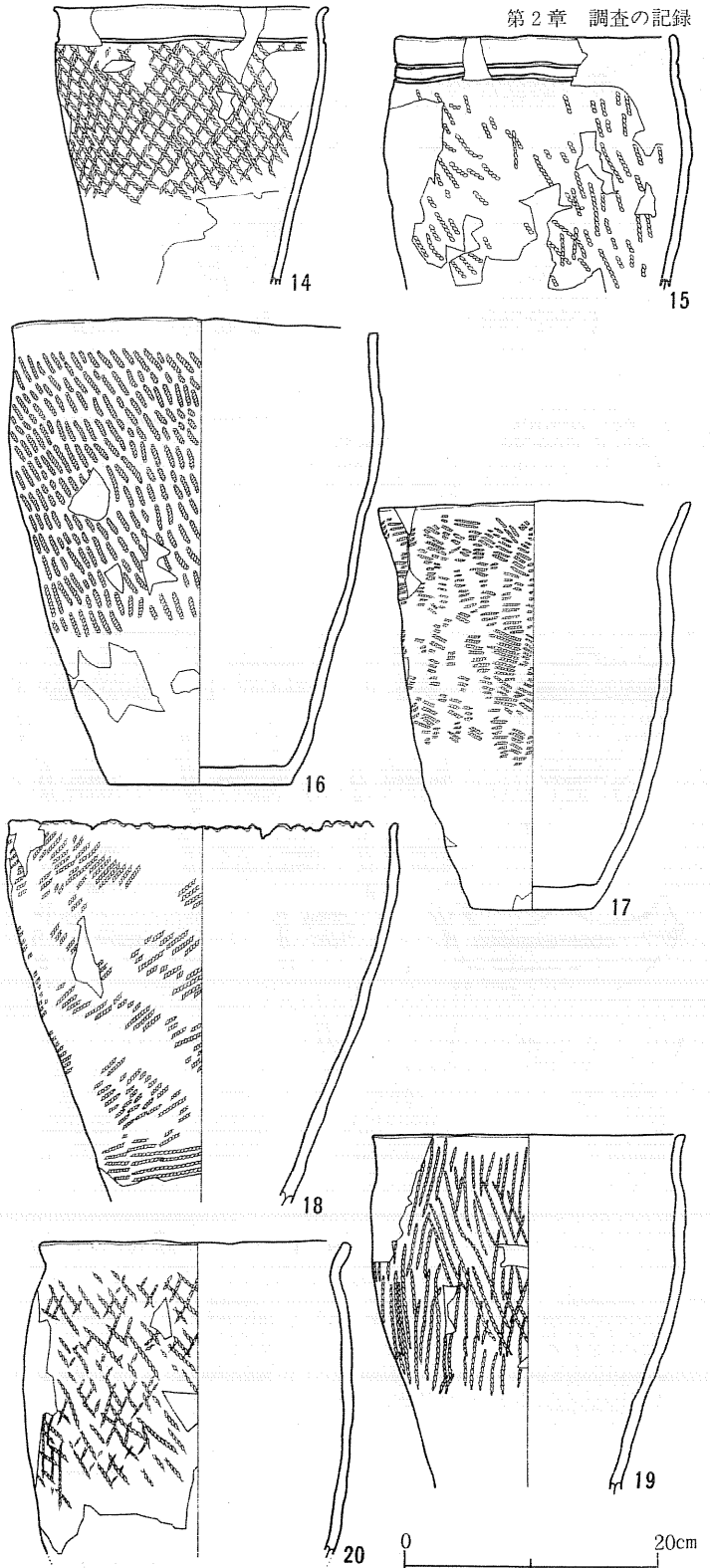
〔1~6〕のような浅鉢~鉢形の土器、〔7~13〕のような壺形の土器、〔14~20〕のような深鉢形の土器などがある。また特殊な器形のものとして、〔2〕のような外耳をもつ浅鉢、〔23〕のような切断土器の蓋、〔24〕のような素文のミニチュア土器などがある。

浅鉢~鉢形の土器は、体上半に文様帯をもつことが多い。口

縁部は波状口縁のものと、平縁のものがあるが、波状口縁の土器の波頂部は文様帯内の文様単位に対応している。断面形では屈曲部のある外反する口縁をもつことが特徴である。

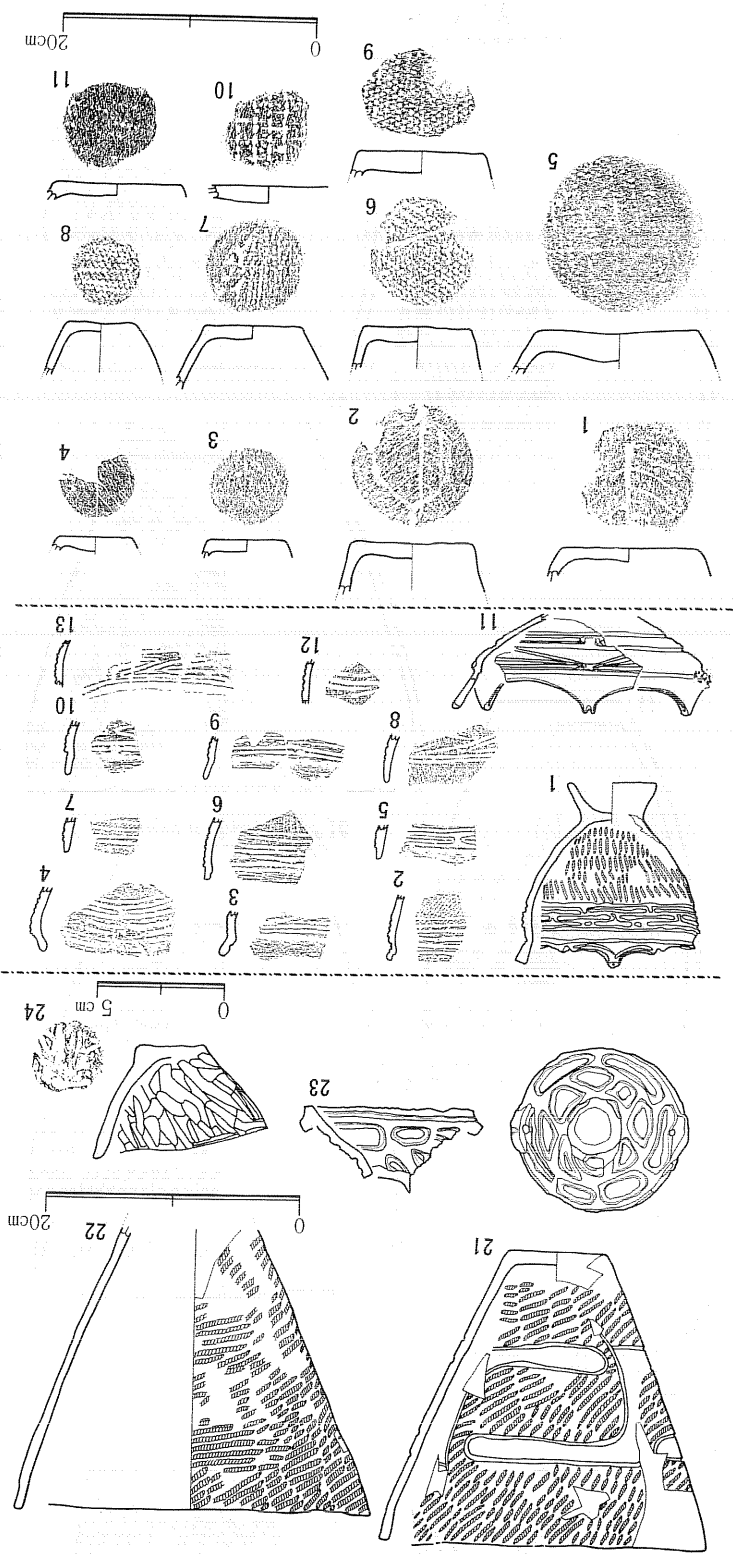
壺形の土器では、文様帯をもつものもたないものがあるが、およそ半数ずつある。文様帯をもつ土器では、文様単位にしたがい波状口縁になるものもある。口縁部から体部にかけてはゆるい曲線を描き、体部の最大径は体部中半よりも僅かに上位にもつ。

深鉢形の土器では、文様帯をもつことはない。口縁は基本的に平縁となる。文様帯をもたないため、文様帯の文様単位に即応した波状口縁になることはないが、〔18〕のように口唇に指頭の圧痕が連続して施され、小波状を呈するものもある。斜縄文、網目状捺糸文等は口縁部に1～数cmの無文帯をおいて施文されている。断面形は、口縁部が僅かな屈曲部をもって外反する。体部はゆるく弧を描くものと、ほとんど直線に近いものがある。



第14図 大岱Ⅲ遺跡出土土器

第15図 大袋山遺跡出土土器



期の土器底部である。後

〔1～4〕は木葉痕、〔5～

〔5〕底部資料〔第15図下段〕

比定する。

A式、〔11、12〕を大洞A式に  
となる。〔1～10、13〕を大洞  
器である。変形工字文は3単位  
箇所に大突起の付く浅鉢形の土  
文様となる。〔11〕は口縁部6  
付く。頸部の工字文は3単位の  
に2箇所、計4箇所にB突起が

大突起と正三角形をつくる位置  
起が付き、その両側に2箇所、  
器である。口縁部に1箇所小突  
である。〔1〕は台付の鉢形土  
しは変形工字文の施される土器  
〔1～13〕とも、工字文ない

〔4〕晩期の土器〔第15図中段〕

土器に比定できる。

中葉十腰内皿式土器、宝ヶ峯式  
る。以上、2個体の土器は後期  
へ向い直線的におりる鉢形であ  
は〔21〕同様、口縁部から底部  
に斜縄文が施されている。器形  
形である。〔22〕は、器面全面  
底部にかけて直線的におりる鉢  
土器である。器形は口縁部から  
より、大まかな曲縄文を描いた  
〔21〕は、磨消縄文の手法に



2 石器

(1) 石 鏃 {第16図上段} 1~16

17点出土している。有茎の石鏃が15点、無茎の石鏃が1点、アメリカ式石鏃が1点である。

製作にあたっては両面に細い剥離を加えて、刃部を作り出しているが、素材剥片の厚さにより、本体から基部にかけて稜線の残るものと、残らないものがある。〔3、4、13〕が後者例、他は前者例である。

〔15、16〕では基部にアスファルトが付着している。

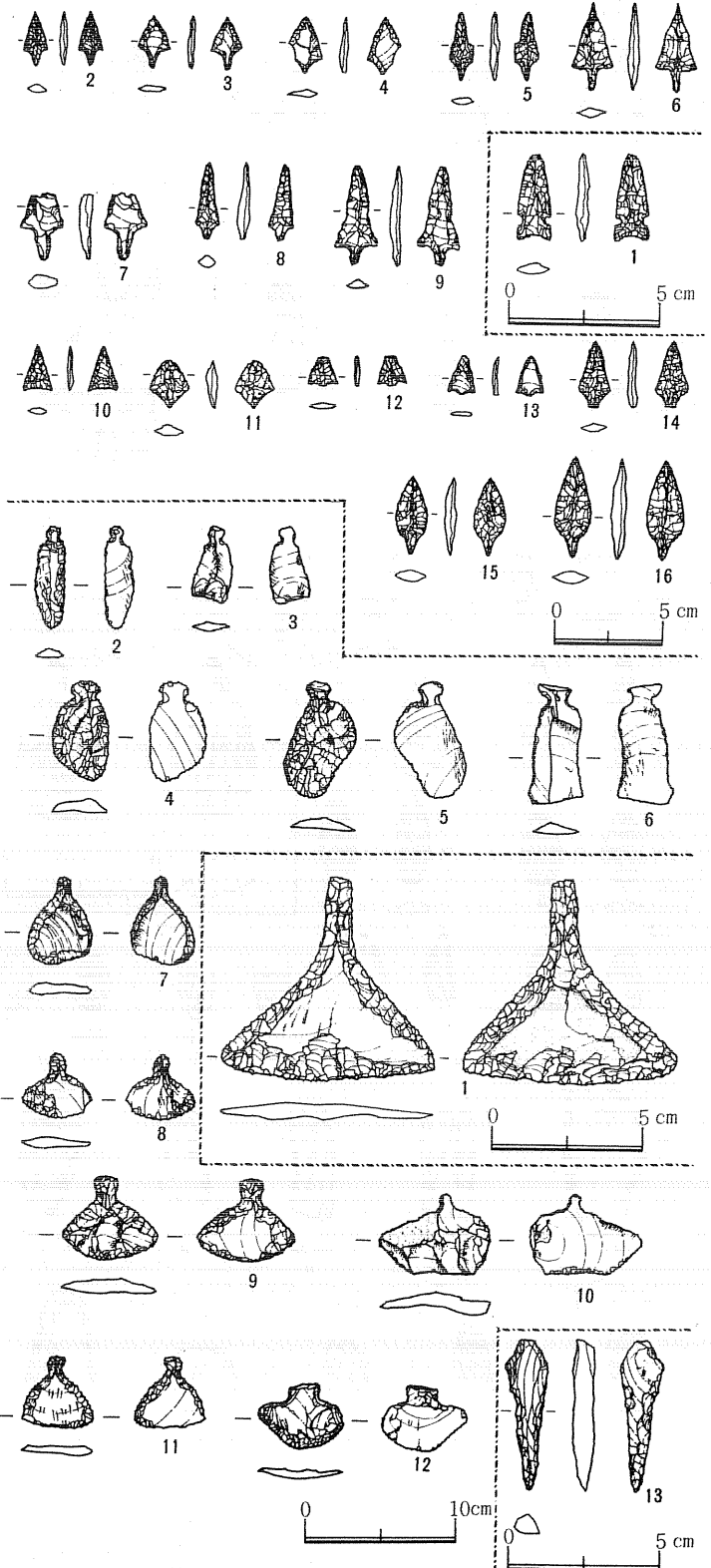
〔1〕のアメリカ式石鏃は小坂で2例目のものである。弥生時代の土器に伴ったものであろう。

(2) 石 匙 {第16図下段} 1~12

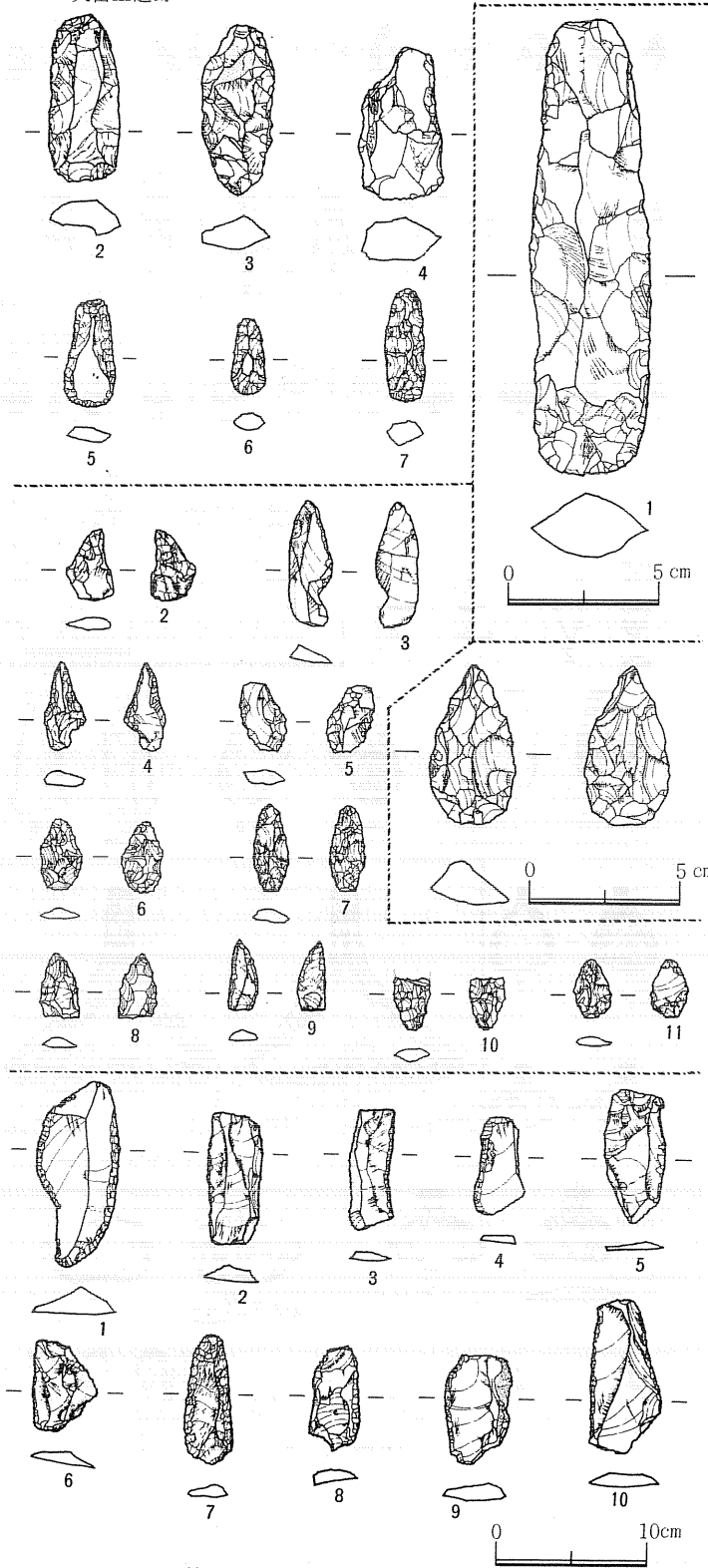
13点出土している。縦形の石匙が6点、横形の石匙が7点である。〔1、7~9、11〕は本体両面に加工が施されるもの、他は片面のみ加工が施されるものである。〔1〕は、本体が三角形をなし、つまみ部の長いものである。つまみ部にアスファルトが付着する。

(3) 石 錐 {第16図下段} 13

1点出土している。断面形が



第16図 大袋Ⅲ遺跡出土石器



三角形を呈す。素材剥片の打面を残す。

(4) 石 筥 {第17図上段 1~7}

石筥としたものは7点出土している。大形のものでは打製石斧ともとれるものが含まれ、また小形のものでは単に搔器とした方が良いものもある。打製石斧の名称は用いないこととし、小形のものでは両面加工で、直線的な端部をもつものを石筥とした。〔1〕は縦長の厚手の石筥である。刃部の先端は薄く仕上げている。

(5) 尖頭器 {第17図中段 1~11}

11点出土している。全体の形を整えているものは少なく、素材剥片の先端に剝離を加え、尖らせている。

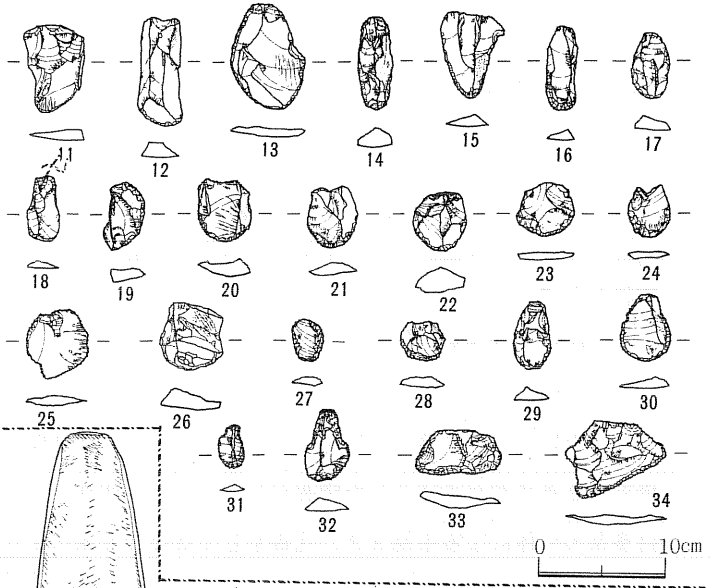
〔1〕は両面に剝離を加え、尖頭器としている。基部には素材となった剥片の打面が残る。

(6) 搔器 {第17図下段、第18図上段 1~10}

34点出土している。殆んど片面加工である。主要剝離面側に僅かに剝離が施される場合もあるが、基本的に主要剝離面側には手が加えられず、素材剥片の打面も残る。

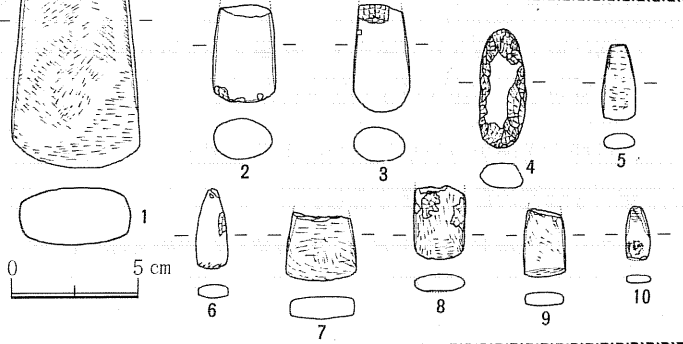
第17図 大袋III遺跡出土石器

素材となる剥片には縦長のもの、横長のもの、円形に近いもの等がある。また、刃部の位置にも、素材剥片の側縁に刃部作出の剥離が加えられるもの、打面と逆側の素材剥片の先端に加えられるもの、剥片全周に加えるものなどがある。〔29、30、31、32〕は、比較的形の整ったもので、基部から本体部分にかけて扇形に広がり、その全周に加工が施されている。



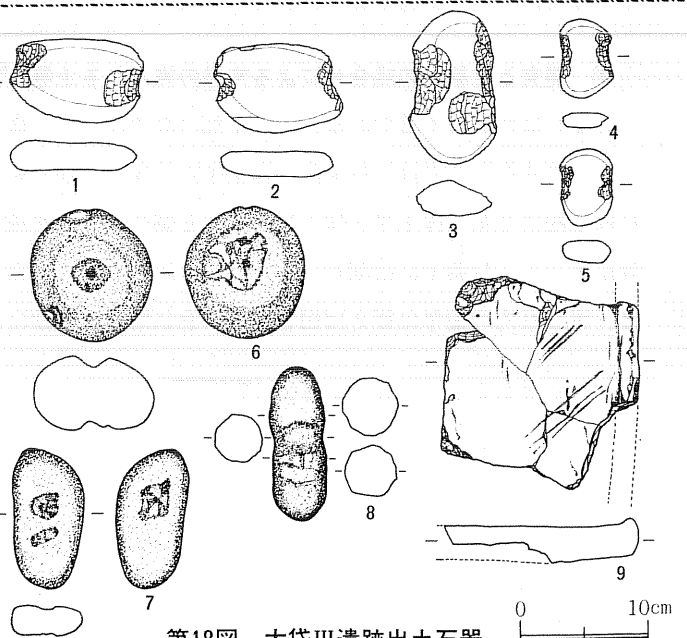
(7) 石斧 〔第18図中段〕

10点出土している。全て磨製のものである。刃部は直線的になるものと、円弧を描くものがある。また〔5、6、10〕のように小形のもの、〔1~4、7~9〕のような大形のものがある。後者では基部を欠くものが多い。〔1〕は、器体基部から刃部まで残る資料である。器体には製作時の擦痕が明瞭に残っている。



(8) 石錘 〔第18図下段〕

5点出土している。扁平な楕円形の礫の長軸端を打ち欠くものと、短軸端を打ち欠くものと2種がある。重量は40g~300g程である。



第18図 大袋Ⅲ遺跡出土石器

- (9) 凹石 {第18図下段  
6、7}
- (10) 独鈷石 {第18図下段  
8}
- (11) 石皿 {第18図下段  
9}

### 3 弥生時代の土器

弥生時代の土器は、遺跡基本層位中大湯軽石層直下の第Ⅲ層から主に出土している。遺構は確認されていない。

- (1) 後北C<sub>2</sub>式土器 {第19図上段  
1~19}

#### 〈江別式〉

鉢形土器、注口付鉢形土器が出土している。口縁部は四単位のゆるい波状口縁を呈する。口縁部に2条の刻目の施された隆線が付けられる。体部は上半に文様帯をもつ。文様帯中には0段多条の原体による帯縄文と、沈線もしくは微隆起線によって、三角形、菱形等の文様が描かれる。帯縄文の間の無文部には角棒状の工具により列点文が施される。列点文は帯縄文の文様区画に沿って施される場合と、帯縄文の文様区画とは別に施される場合とがある。体下半部では、帯縄文は沈線や微隆起線の区画をもたずに縦位に平行して施される。注口付鉢形土器では注口部の先端から口縁部にかけて橋状把手の付く場合と付かない場合とがある。胎土には径1mm~3mm程の砂粒を多く含む。

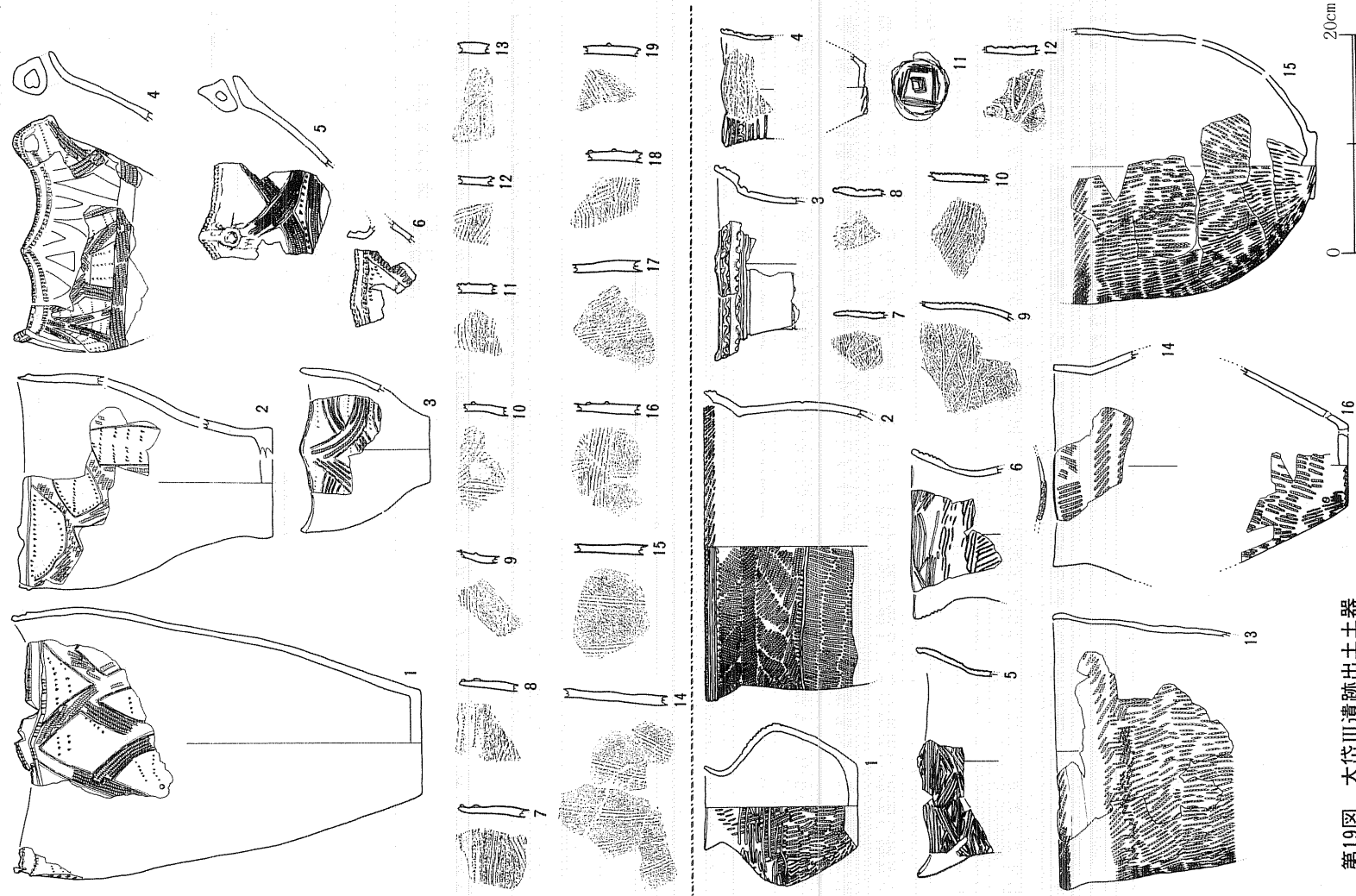
これらの後北C<sub>2</sub>式土器は、北海道からの搬入品ではなく、本州において製作されたものであろう。殊に〔2〕の土器は、文様帯中の帯縄文区画が磨消縄文の手法をもって描かれ、模倣により作られたことを強く感じさせる。

- (2) 縄文と沈線文の組合せによる文様の施される土器 {第19図下段  
1、2}

〔1〕は壺形の土器である。体上半部の肩の部分に、横位に短沈線を重ねて施文している。〔2〕の鉢形土器では、口縁部と体上半部、体下半部で縄文の回転方向を変えて施文している。口縁上端に2条、体上半と体下半を画する個所に1条沈線がめぐる。口縁部の沈線下には刺突列がめぐる。口唇上には刻目が施され、口縁の裏面にも縄文が回転施文される。これらの土器は、青森県内の編年に従えば田舎館式~念仏間式の時期に相当しよう。

- (3) 交互刺突文の施される土器 {第19図下段  
3、4}

〔3〕は口縁の大きく開く壺形土器の口頭部である。口唇に2個1対の突起が付き、口縁上端に交互刺突文がめぐる。〔4〕はゆるい波状口縁を呈する鉢形の土器である。口縁部に2段交互刺突文が施される。これらの土器の交互刺突文はかなり粗雑ではあるが、天王山式に比定される。



第19図 大袋Ⅲ遺跡出土土器

(4) 縄軸の撚糸文と細密な沈線による文様の施される土器 {第19図下段  
5~11}

口縁部が外反する鉢形土器が多い。波状口縁の場合と平縁の場合とがある。口縁部の文様帯には菱形を基調とする文様が細く鋭い沈線によって2重~3重に描かれる。体部には縄のような可塑性のある軸に撚り紐を巻いた絡条体で、糸間隔の広い撚糸文が施される。念仏間式土器に相当する。

(5) 磨消縄文手法による文様の描かれる土器 {第19図下段  
12}

この1片のみである。大泉式、山王Ⅲ層式等と呼ばれる土器に相当する。

(6) 小坂X式土器 {第19図下段  
13~16}

縄軸の絡条体の回転施文により、糸間隔の広い撚糸文が施される土器である。撚糸文は絡条体の回転方向を変えて器面に施文される。器厚は概して薄い。

### 第3章 ま と め

大岱Ⅲ遺跡の調査では、縄文時代後期の住居跡6軒と中期~後期の土壌66基が検出された。遺物は縄文時代前期初頭から弥生時代にわたる各時期の土器、石器が出土している。

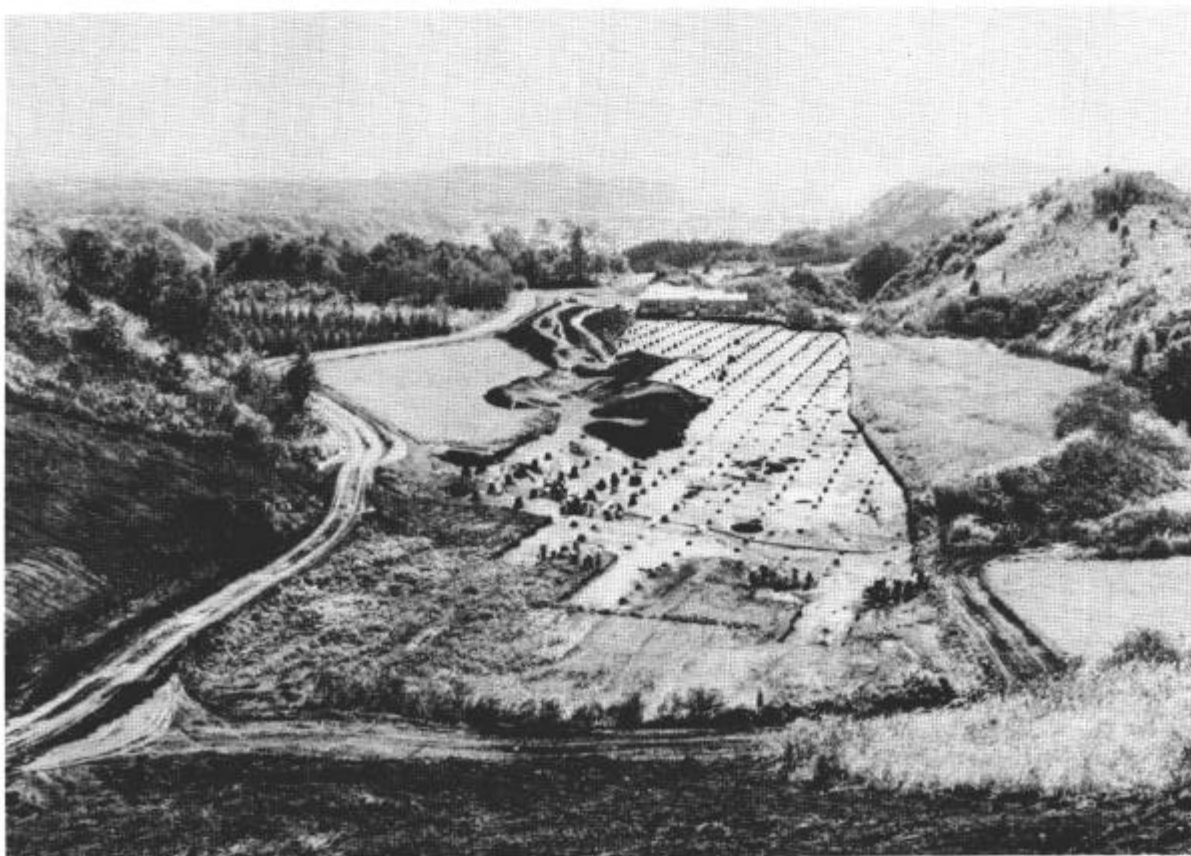
遺跡のある台地は、およそ18,000㎡と広い平坦面を有するが、調査の結果から推測される台地全体での遺構の配置はやはり南側を中心としたものになろう。後期の集落は、この台地の南側を選地して営まれ、さらに南側に隣接する大岱Ⅱ遺跡の配石群も、この集落に関連し構築されたものであると考えてよい。

出土した遺物で目立ったものとしては、縄文時代前期初頭の土器がある。この時期の土器は鹿角盆地での東北縦貫自動車関係の遺跡調査で断片的ながら増えてきており、少なくとも鹿角盆地内では、青森県内の編年に合わせた土器型式の流れを辿ることが可能であるように思われる。さらに資料の増加が期待される。

また、従来から奥山潤氏、安保彰氏等の精力的な調査により、その存在が知られていた後北C<sub>2</sub>式土器も今回の調査で比較的まとまった量が出土している。小坂川右岸での確認は初めてである。今後、資料の増加とともに後北C<sub>2</sub>式土器を出土させる遺構の発見も予想される。その他、弥生時代の土器も今回の調査でその資料の数を増している。弥生時代の土器については未だ編年が確立された状態にあるとはいえ、後北C<sub>2</sub>式土器との関係も不明瞭である。いずれ、型式の設定を含めて、編年の整備がされねばならないと思われる。



大岱Ⅲ遺跡発掘前全景



大岱Ⅲ遺跡発掘後全景



S I 035 竪穴住居跡完掘状況



S I 004 竪穴住居跡確認状況

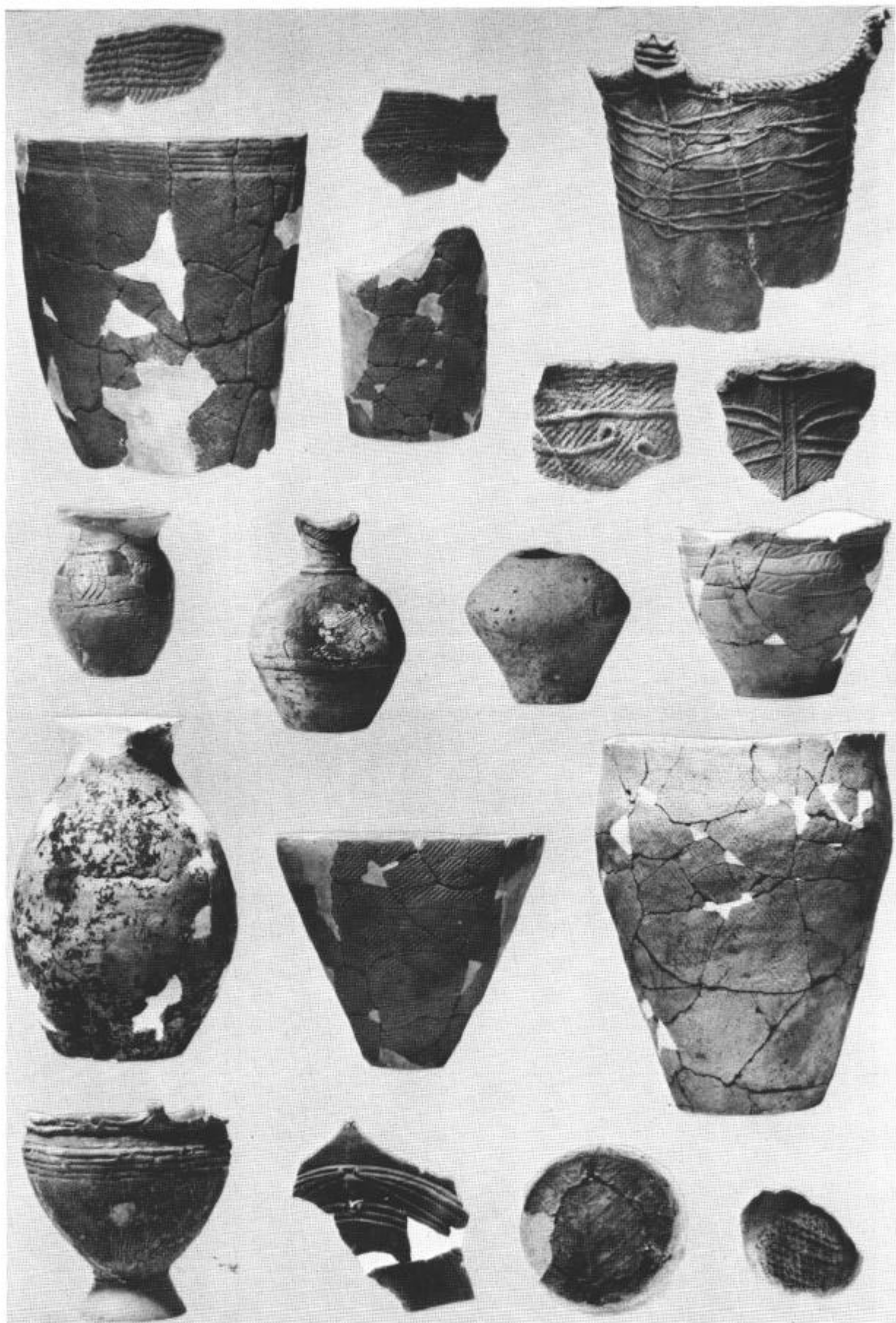




S K 046土壙遺物出土状況

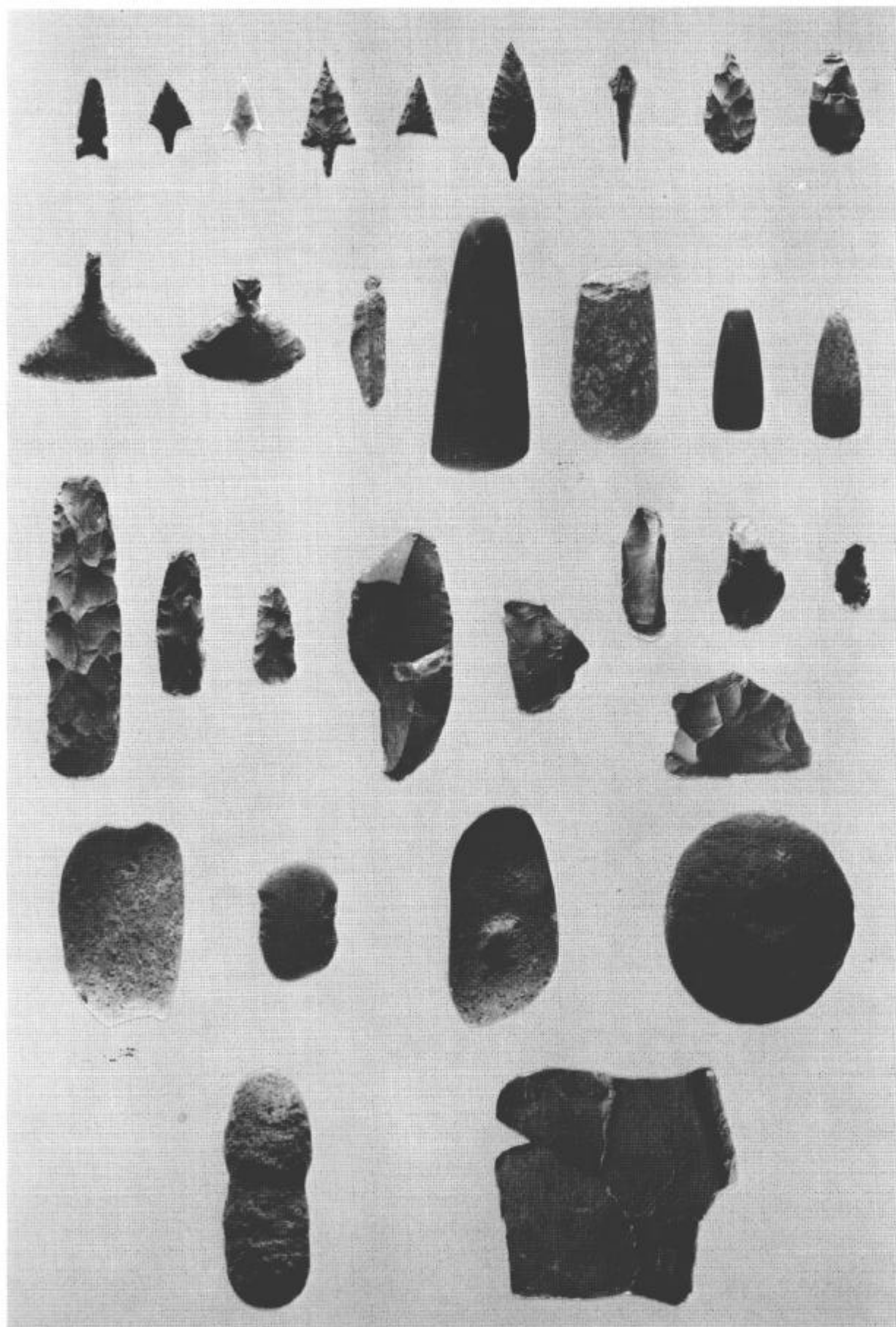


S K 017土壙遺物出土状況



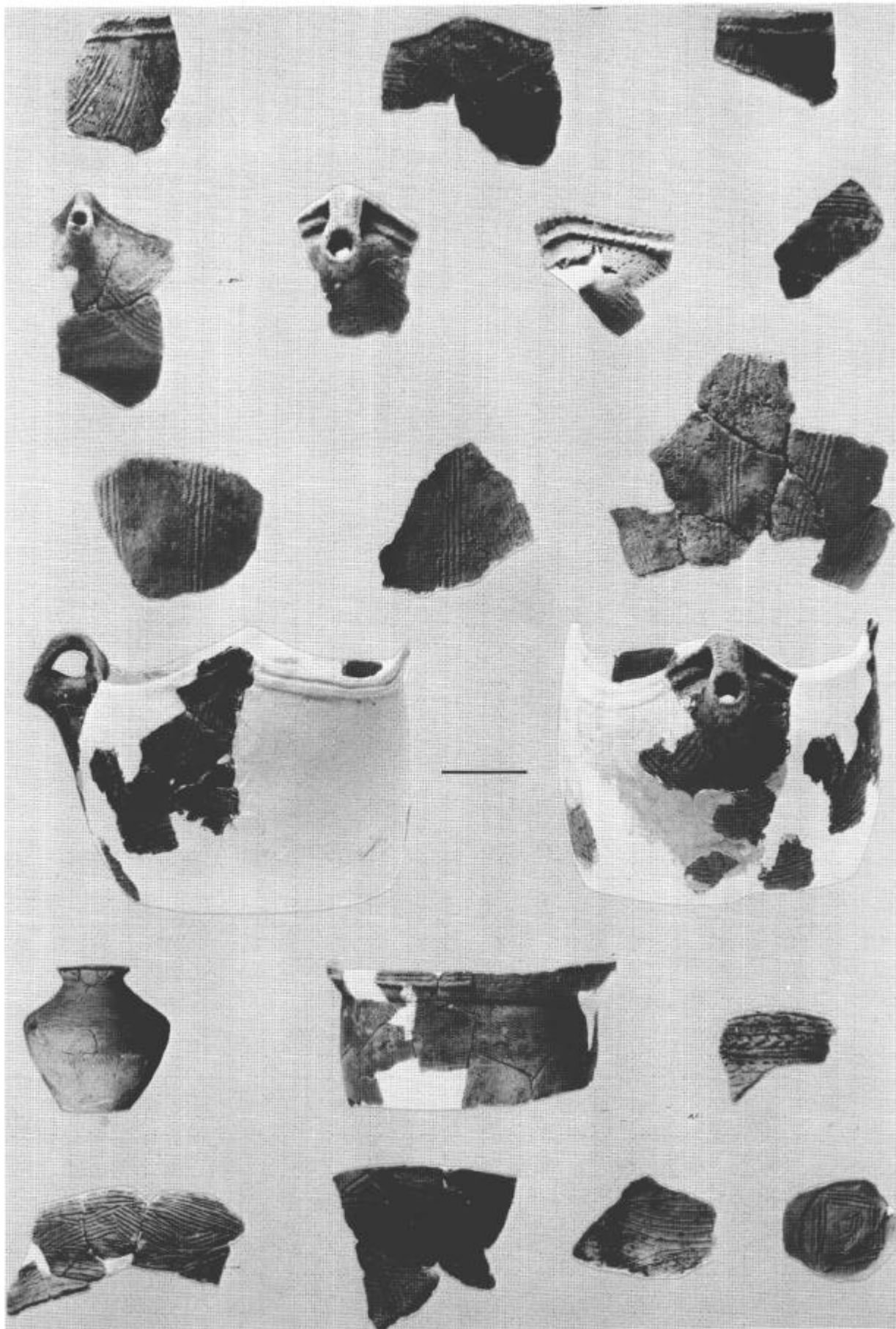
図版 4

大岱川遺跡出土遺物（土器）



図版 5

大袋川遺跡出土遺物（石器）

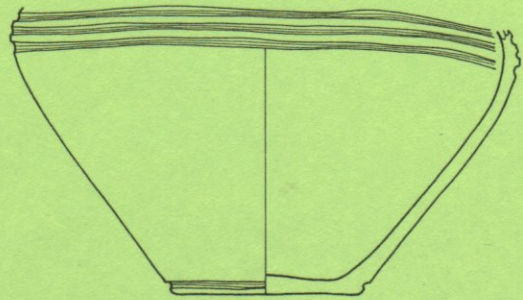


図版 6

大岱Ⅲ遺跡出土後北C.式土器・弥生時代の土器

# 円川原遺跡

遺跡番号 No.13  
所在地 鹿角郡小坂町字円川原9番地  
調査期間 昭和58年9月5日～9月22日  
発掘調査予定面積 1,112m<sup>2</sup>  
発掘調査面積 1,069m<sup>2</sup>



## 第1章 発掘調査の概要

### 第1節 遺跡の概観

小坂川右岸の丘陵の裾部に形成された狭小な平坦地が遺跡である。標高は約260mである。遺跡北側及び東側は小坂川に浸蝕され、急崖を呈する。西側及び南側には、丘陵の裾部に形成された段丘面が広がる。この段丘面には縄文時代前期～弥生時代後期の遺跡（大岱Ⅲ遺跡）が所在する。

遺跡の基本層序は、上位から黒褐色土層(1層)→黒色土層(2層)→大湯軽石層(3・3b・3c層)→暗褐色土層(4層)→黒褐色土層(5層)→黄褐色土層(6層)→褐色土層(7層)である。

### 第2節 調査の方法

発掘調査は、日本道路公団が設定したSTA133+00を発掘原点(M50)とし、4m×4mにグリッド杭を打設して実施した。グリッドの一辺は磁北方向に一致する。また、グリッドの名称は、南北方向の算用数字と東西方向のアルファベットの組み合わせで、呼称することにした。

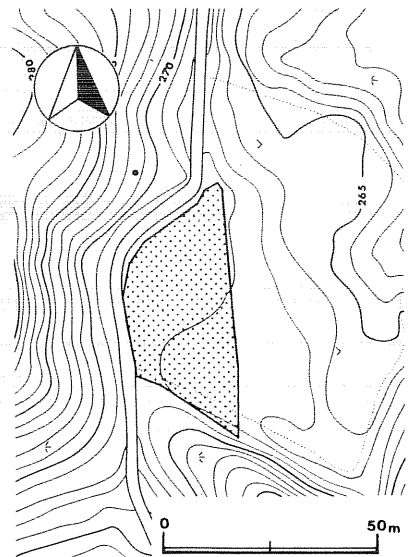
### 第3節 調査の経過

発掘調査期間は、昭和58年9月5日～同年9月22日である。

5日から調査区の粗掘りを開始する。5層が遺物包含層であり、9日頃から縄文時代の土器片が出土しはじめる。20日までには包含層の調査を終了し、地山面で遺構の検出につとめた。結局、縄文時代後期の遺物を少量出土したのみで、遺構は検出されなかった。

## 第2章 調査の記録

### 出土遺物

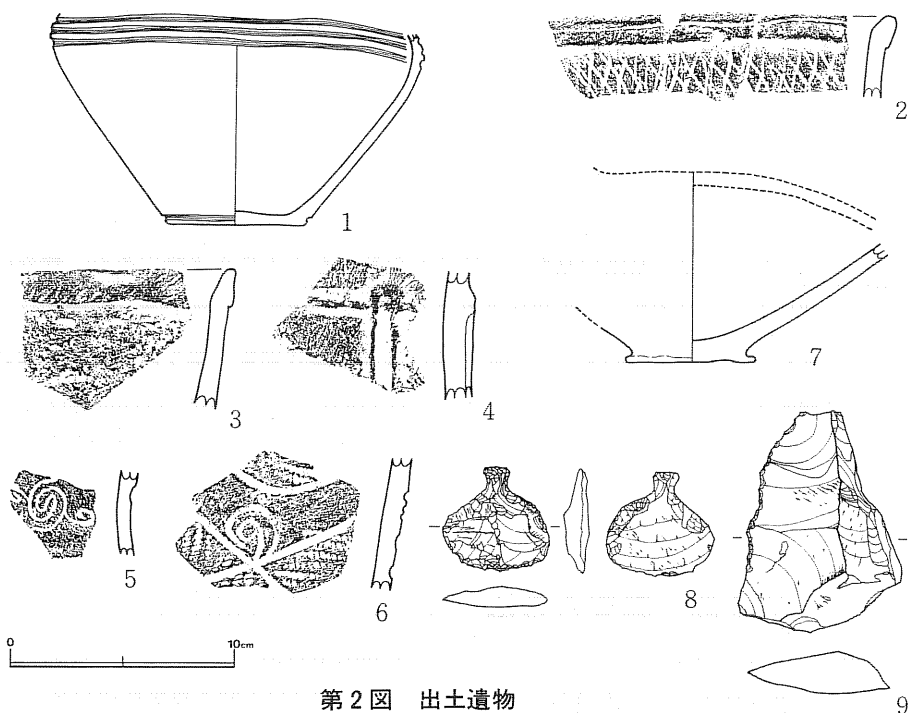


第1図 遺跡周辺の地形と発掘調査区

検出された遺構はなく、遺物が若干出土したのみであったため、一括して記述することにした。

①土器（第2図1～6）

1は浅鉢形土器である。体部は直線ぎみに開き、口縁部は内湾する。口縁部に3条の平行沈線が施文される。口径16cm、底



第2図 出土遺物

径6cm、高さ9.5cmを測る。縄文時代晩期の土器である。

2～6は縄文時代後期（十腰内I式）の深鉢形土器及び壺形土器と考えられる。

7は鳥形をした特異な土器と思われるが、欠損している部位があり、確定できない。縄文時代後期のものと考えられる。

②石器（第2図8・9）

8は横形の石匙であり、9は削器である。いずれも、頁岩を石材としている。

### 第3章 ま と め

円川原遺跡からは、縄文時代後期前葉（十腰内I式）と晩期の土器や石器が出土し、遺構は検出されなかった。今回の調査は、遺跡の西側をわずかに調査しただけであるため、遺跡の性格を把握することができなかった。

なお、遺跡の南側には大岱III遺跡があり、縄文時代後期の十腰内I式土器や晩期の土器も出土している。円川原遺跡は大岱III遺跡との関連が強いものと考えられる。



円川原遺跡全景（西▶）



調査状況

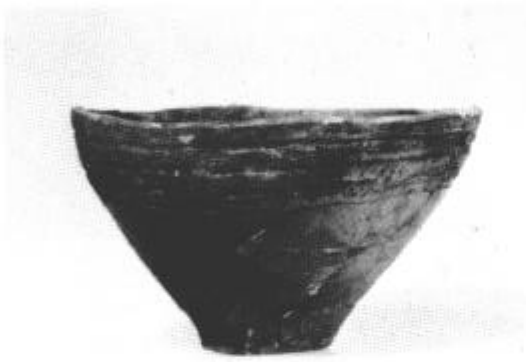




遺物出土状態



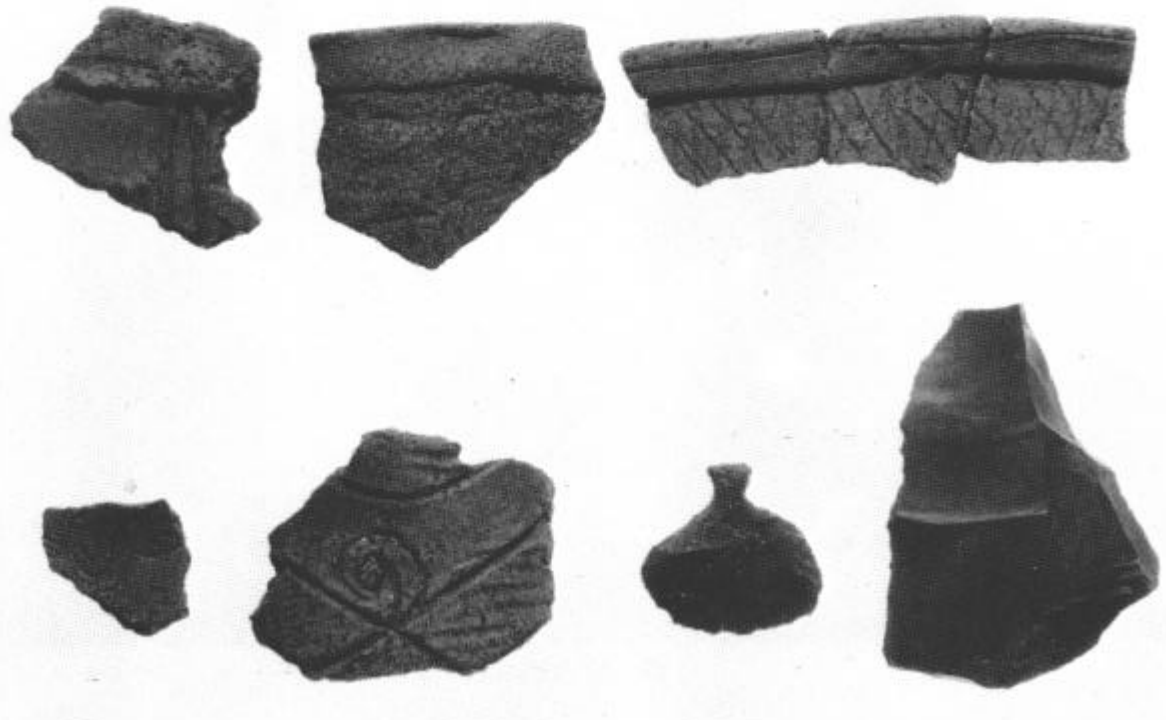
遺物出土状態



出土土器



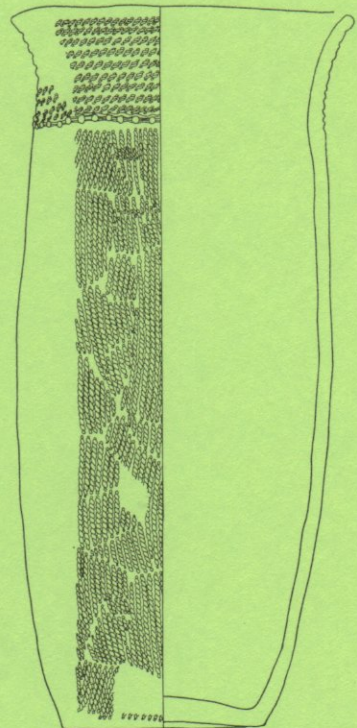
出土土器



出土遺物

# 大 袋 IV 遺 跡

遺 跡 番 号 No.14  
所 在 地 鹿角郡小坂町字大袋  
調 査 期 間 昭和57年 9 月13日～10月30日、昭和58年 5 月16日～ 6 月22日  
発掘調査予定面積 2,396m<sup>2</sup>  
発掘調査面積 1,835m<sup>2</sup> (57年度：910m<sup>2</sup>、58年度：925m<sup>2</sup>)



## 第1章 発掘調査の概要

### 第1節 遺跡の概観

遺跡は秋田県小坂町小坂字大岱45番地に所在する。

町の中央部を貫ぬく小坂川は、青森県との県境に源を発し、県北部を南下、県内有数の大きな河川である米代川に合流する。河川の両岸には河岸段丘が発達しており、小坂周辺ではこの段丘が浸蝕作用を受けて縁辺部が舌状を呈している所が多い。

遺跡は小坂町北西部の平坦な舌状台地に位置し、台地先端部は小沢によりさらに2分されている。標高は約230m、沖積地との比高差約32m。現在は畑地として耕作されている他一部は山林である。

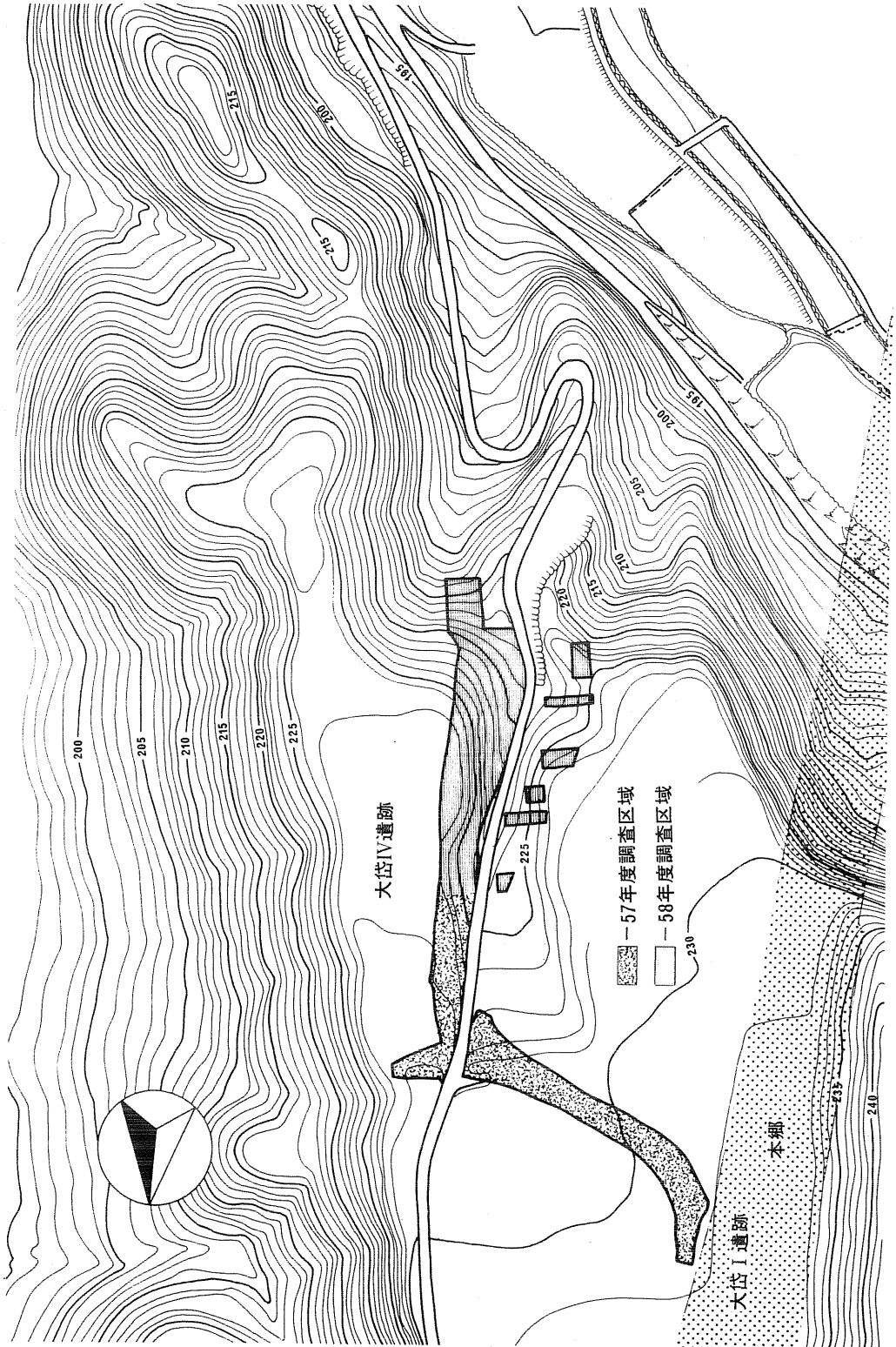
### 第2節 調査の方法

大岱IV遺跡は同台地上に隣接する大岱I遺跡と共に並行調査されたものでありグリッドの設定は両遺跡を含む範囲内に兼ね合わせて行った。

遺跡範囲内のほぼ中央に位置する。日本道路公団設定の基準杭STA125+00を基点とし、これをMA-50と呼称する。グリッドはこの基準杭から東-西、南-北方向に順次設定される。設定はまず40m×40mの大グリッドを求め東西方向にアルファベット文字(A、B、C……)南北方向に算用数字(00、10、20……)を付す。さらに大グリッドを10×10に分割して小グリッドとなし、表示は東-西(AA、AB…AJ、BA…),南-北(00、01、02…10、11…)とする。この事から基点MA50から数えると西方向には大グリッドがMA、NA、小グリッドがMA、MB……となり、北方向には大グリッドが50、60、70……小グリッドが51、52、53……と連続する。

### 第3節 調査の経過

調査は昭和57年9月13日～10月30日、昭和58年5月16日～6月22日の2カ年にわたり継続して行われた。昭和57年には主に遺跡の北部を調査し、その結果、現在の道路(以前は沢地であったと考えられる)に面した斜面部分に多量の遺物が包含されている事が判明し、捨て場跡と断定した。昭和58年度はこの捨て場跡を解明する事を主目的とし、遺跡の南部を中心に調査を



第1図 大岱IV遺跡周辺地形図と発掘調査区

行ったものである。以下その調査経過の概略を記す。

#### 昭和57年度

9月13日、調査開始、調査区内の立木伐採。14日、調査区東側から粗掘り作業開始。24日、調査区南東部の斜面下部より縄文前期の遺物が出土。28日、K J 03グリッドで縄文時代竪穴住居跡検出。10月5日、K J 08グリッドで多量の遺物（縄文前期円筒下層c～d式土器を主体）と共に岩偶出土。8日、L D 13グリッドで縄文時代竪穴住居跡、土壌を検出。周辺にさらに数基の遺構が隣接していると思われる。遺構の精査を行う。15日、調査区西部の粗掘り作業を進行、遺構の検出は認められず、遺物の出土も少ない。25日、遺構の精査をほぼ終了。30日、調査終了。

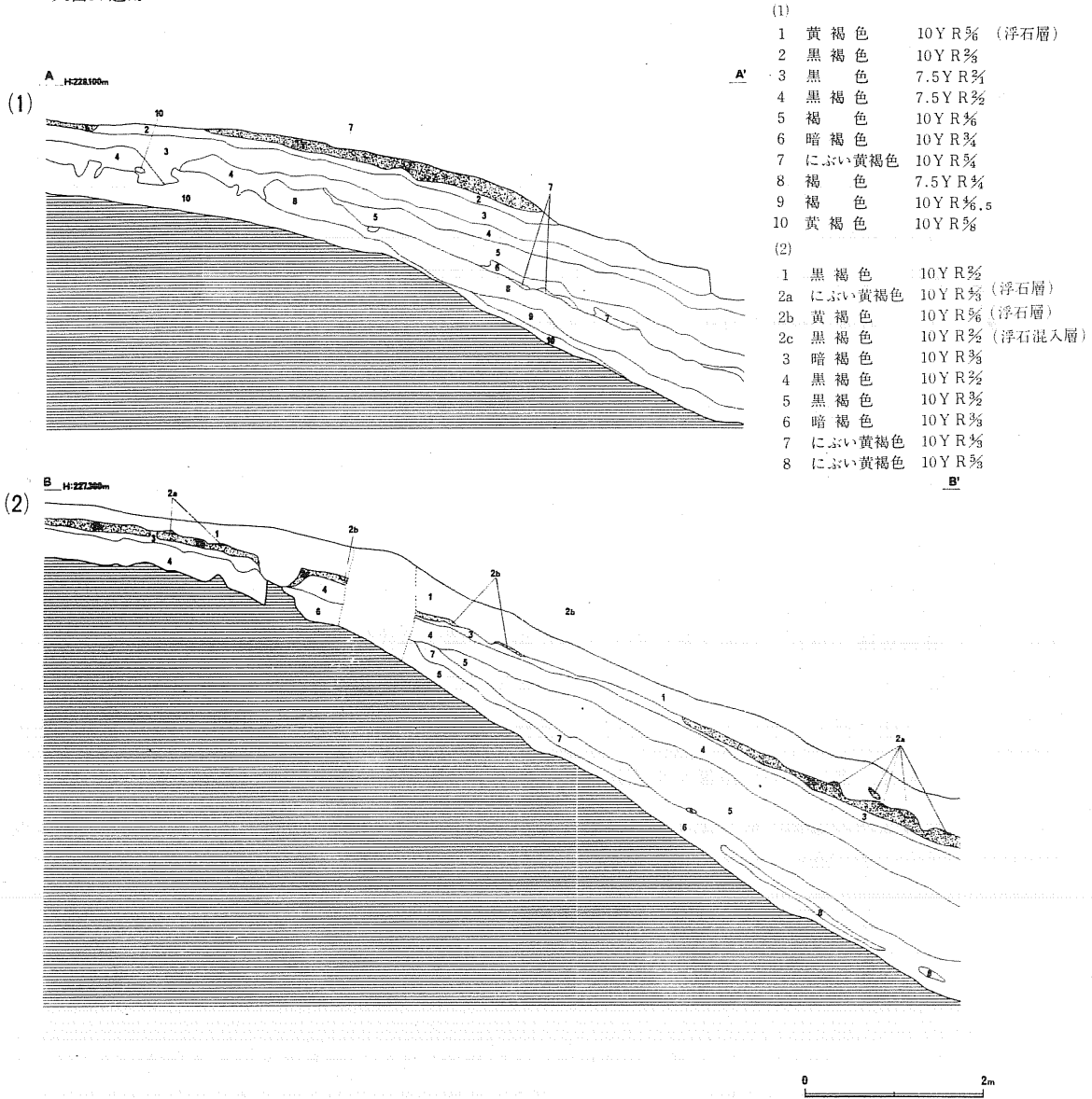
#### 昭和58年度

5月16日、調査開始、現道に面した東、西両斜面に数本のトレンチを入れる。5月23日、試掘りの結果、捨て場跡は東斜面と断定。西斜面は新たに数カ所坪掘りを行った上で終了する事とした。25日、調査区北側と南側西端より粗掘り作業を行う。北側の斜面凹地に多量の遺物集積。28日、斜面上部のやや平坦な場所に縄文時代竪穴住居跡検出。隣接してさらに1基。30日、南側の斜面にも2カ所の凹地検出。同様に遺物が集積、捨て場は3カ所である事が判明。精査を開始する。6月10日、遺構の精査ほぼ終了。捨て場跡よりの出土遺物、極めて多量。遺物は全て位置を平面図に記入する。傾斜地のため調査は困難を極める。21日、調査区内の遺物の取り上げをほぼ終了。遺物は調査区外の斜面下部にも包含されていると考えられる。23日、調査終了。

## 第4節 遺跡の層位

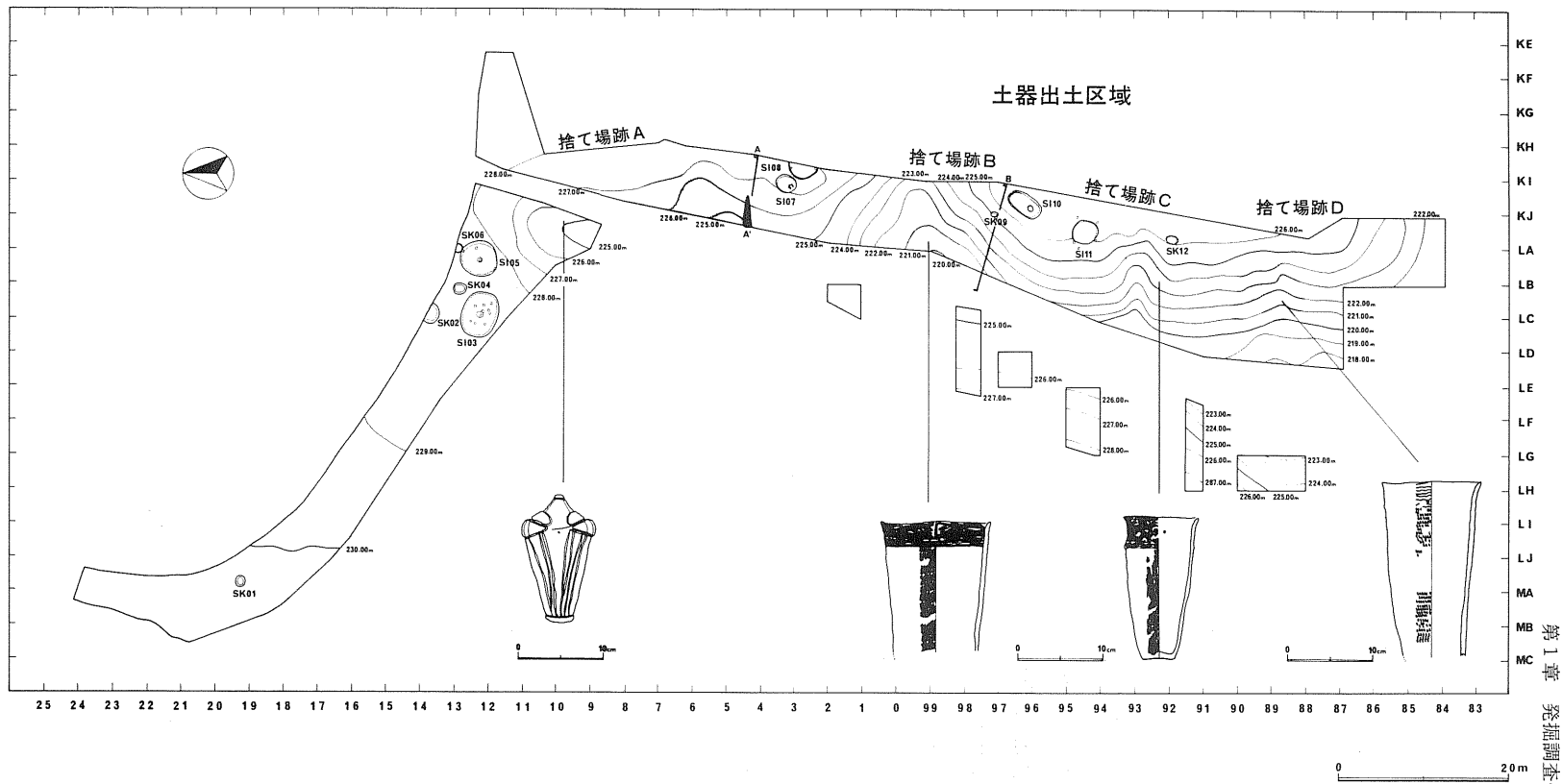
調査区9、98ラインの土層を記録した。その結果いずれの土層にも大きな相違点はみられないが、各地点毎にその概略を記す。(1)は調査区北側の部分で西方向に緩やかな斜面を呈する。耕作土は概に除去され軽石層が露出している。1層は軽石層で、平坦部以外は消滅している。2層は所謂チョコレート色を呈する黒褐色土で、上位部分に少量の軽石を混入。3層、4層はやや粘質を示し、少量の土器を含む。5層は褐色土粒、及び炭化物をやや多く含む。この層中より遺物の出土が多い。6層から9層にかけては斜面部にのみ検出され下部程褐色土粒を多く含む。遺物少量出土。10層は平坦部分における漸移層。黄褐色が多量に混入。(2)は調査区のやや南側。捨て場B地点に隣接する部分で、西方向に急斜面となっている。1層はやや堅くしまった黒褐色土で、軽石混入。2層は軽石層で、粒子の相違からさらに3層に細分される。3層はチョコレート色を呈する黒褐色土。4層は軽石を微量に含む黒褐色土で、斜面部分では遺

大谷IV遺跡



第2図 遺跡層位図

物が出土。5層は粘質の黒褐色土で平坦部分で褐色土を混入する。斜面部では遺物を包含し、下位部程多い。6層は粘質の暗褐色土で、斜面下位部に比較的多くの遺物を含む。7層、8層は斜面部のみに検出され、粘土質の灰白色土を混入する。



第3図 大岱IV遺跡遺構分布図

## 第2章 調査の記録

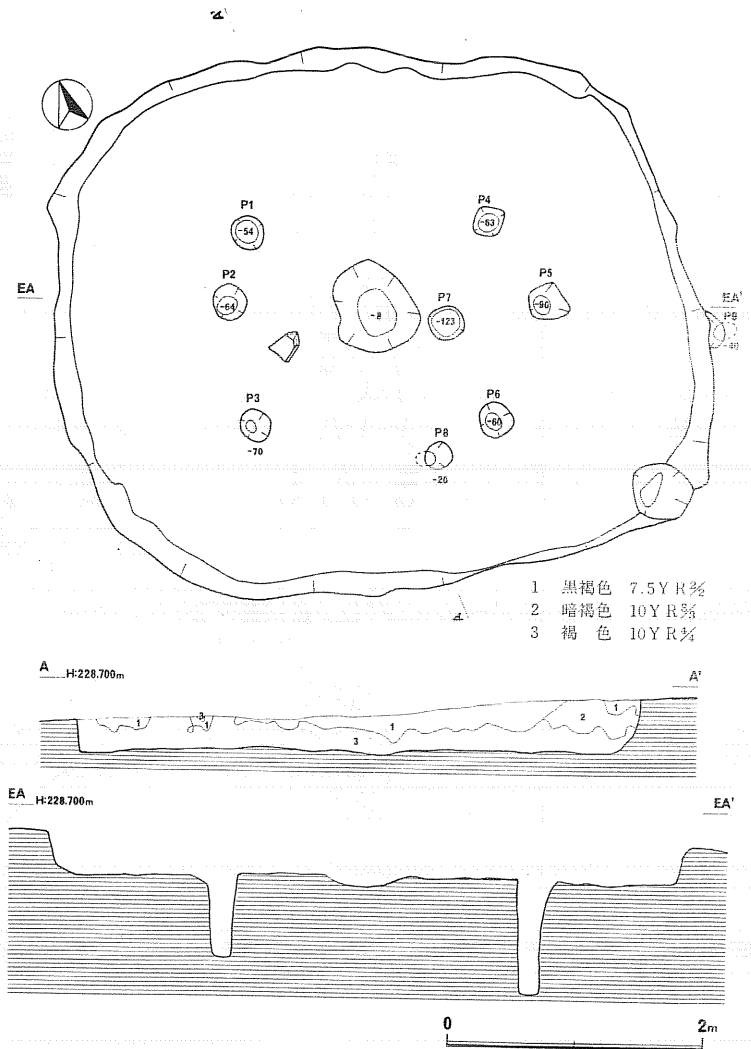
### 第1節 検出遺構と遺物

今回の調査で発見された遺構は竪穴住居跡6軒、袋状土壇5基である。これらの遺構からは遺構の時期を決定づけ得るような遺物の出土は比較的少ないが、竪穴住居跡の一軒が縄文後期と見られる他は全て縄文前期に属するものと思われる。

#### (1) 竪穴住居跡

##### S I 03 (第4図 図版2)

台地南端中央部に南から入り込む小沢が台地平坦部に上りきるその肩部に構築された竪穴住居跡である。第5層黒褐色漸移層下部でプランを確認した。平面形は長辺約5.0m、短辺約4.3mの隅丸長方形を呈し、遺構確認面から床面までの深さは0.25~0.4mである。壁は南東部で明確さを欠くが、他所では比較的しっかりしておりほぼ垂直に立ち上がる。壁溝はない。床面は平坦で、中央部ほど堅くしまっている。炉は中央部にある地床炉で、径約0.7mにわたり、若干凹んでおりこの部分とその周囲が焼けている。径0.25~0.3mのピット



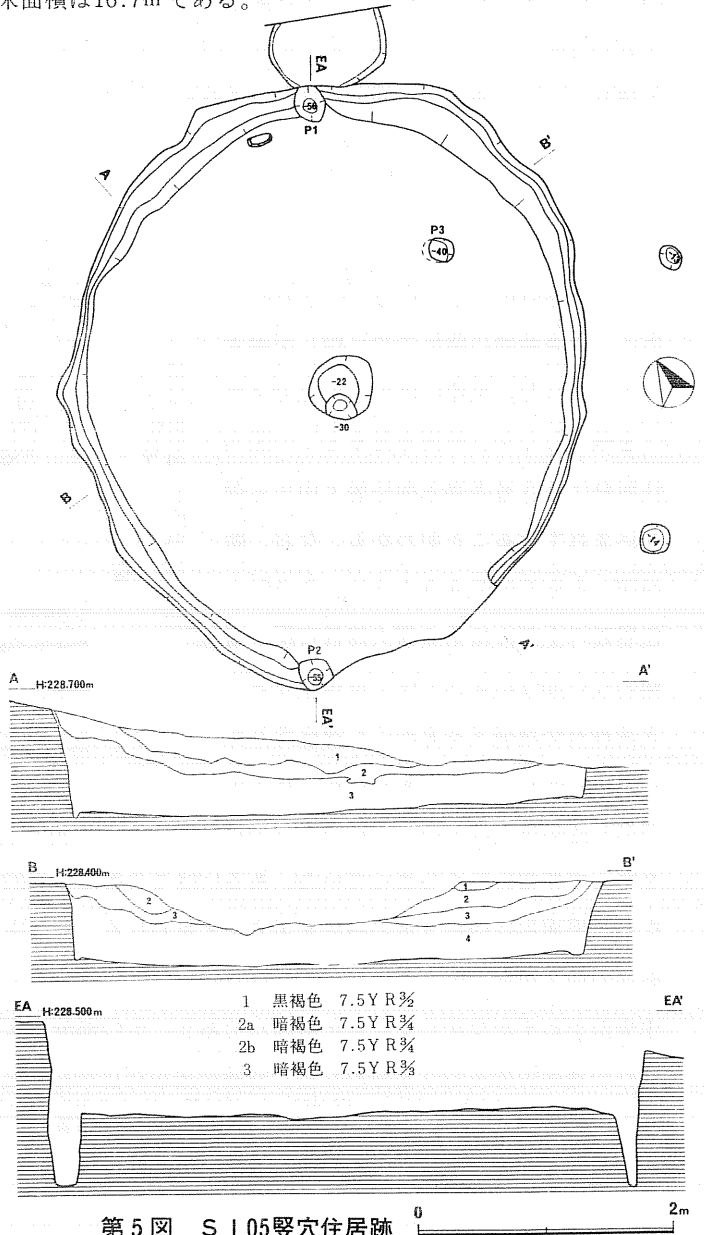
第4図 S I 03竪穴住居跡



が炉をはさんで東西に8個、東壁に1個検出された。ピットの位置、深さなどから、P7(床面からの深さ1.24m)が支柱穴で、P1~P6の6本(床面からの深さ0.55~0.9m)が支柱穴と考えられるが、P7が炉に近すぎることもあり、あるいはP1~P6が炉をはさんで東西に3本ずつ配された支柱穴であるかもしれない。堆積土は3層が褐色土を主体に、比較的堅くしまっており、床面の全域を厚くおおっている。床面に接する遺物は炉の西側0.5mにある台石1個で、他には埋土中に前期後葉の土器片が散見されたにすぎない。前期中葉以降の竪穴住居跡であろう。遺構面積は18.9㎡、床面積は16.7㎡である。

S I 05 (第5図 図版2)

S I 03の東側2mに位置し、同じような地形のところに構築された竪穴住居跡である。この部分の地形は南側が沢の中心部に向かって急激に下降しており、S I 05竪穴住居跡の北端と南端との平均斜度は7°である。第5層黒褐色漸移層下部でプランを確認した。平面形は長径4.7m、短径4.0mの楕円形を呈する。壁は非常にしっかりしており、垂直に近い立ち上がりである。壁面の高さは北側で0.75m、南側で0.2mを測る。床面は平坦で堅くしまっており、南端部を除いて浅い壁溝が巡っている。炉は床面中央部にある地床炉で、径0.5mの凹みとなっており、その内面と周囲が若干焼けている。柱穴と考えられるピットが3個検出されている。このうち柱の位置、深さなどからP1・P2が支柱



大岱IV遺跡

穴であろう。出土遺物としては、埋土中から前期中葉と思われる深鉢形土器の底部破片と、北側床面直上から砂岩製の石皿が出土している。(第9図1、2)。遺構面積は約15㎡である。

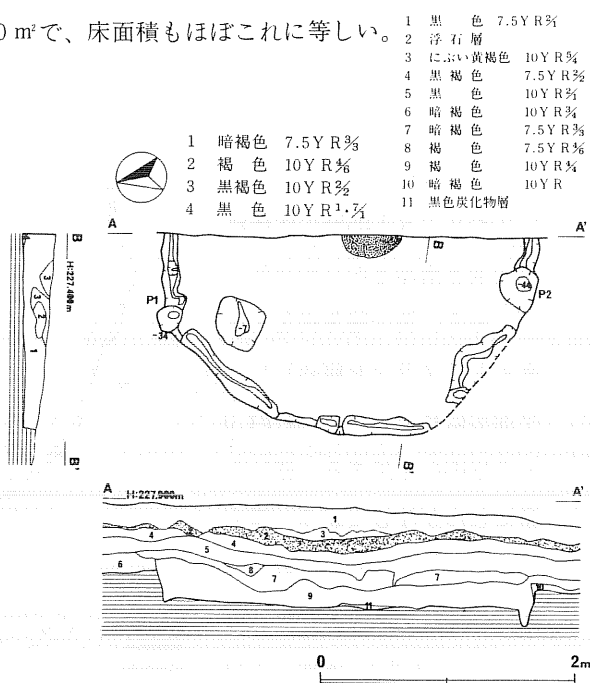
S I 07 (第8図、図版2)

S I 08 竪穴住居跡のすぐ西側にある小さな竪穴住居跡である。舌状台地西端の斜面に構築されているため、西側半分程のプランは明確でないが、径2.2~2.5mの略円形を呈するものと思われる。壁は東側のみわずかに残っていた。床面はほぼ平坦であるが、西半分のそれは、貼床のような状況であり、堅くしまった部分がモザイク状を呈している。炉は中央南側にあるコの字形の石囲炉である。内面が強く焼けていた。柱穴は住居跡内外ともに検出できなかった。出土遺物には炉の東側より縄文後期前葉の鉢形土器(第9図3、4)があり、ほぼその時期の竪穴住居跡と考えられる。堆定遺構面積は4.0㎡で、床面積もほぼこれに等しい。

S I 08 (第6図)

台地に南端から入り込む小沢の東側舌状台地の西端部としてある竪穴住居跡である。調査範囲の関係で約1/2程しか調査できなかった。実際には地山直上でプランを確認したが、断面を見るとこの竪穴住居跡は第5層黒褐色漸移層上面から掘り込まれていることがわかる。なお、断面図からも看取できるように、この竪穴住居跡の上部には第2層大湯軽石層が遺構のない部分に比べて厚く堆積しており、大湯軽石が堆積する直前でも遺構部分がわずかに凹んでいたと思われる。埋土中の第9層褐色土は地山土に近い土や小礫

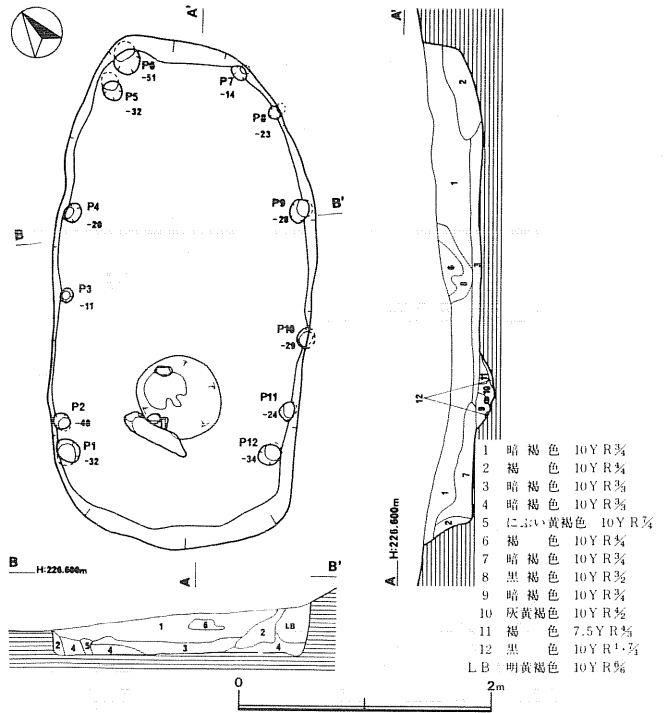
を含んで非常に堅くしまっていた。あるいはこの層は人為的に埋められたものであるかもしれない。平面形は径約3mの円形を呈すると思われる。壁は南~西部で明確でない部分もあるが、断面の様子から、南北部分では0.3m前後あり、ほぼ垂直である。床面は平坦で堅い。炉は床面中央部がわずかながらなだらかに凹んでおり、その部分に炭化物が見られ若干焼けていたので、これが地床炉であろうと思われる。壁溝が途切れながらも巡っている。上幅10cm前後で、深さは1~10cm程である。支柱穴と考えられるピットが調査した範囲から2個検出されているが、いずれも壁に接している。この検出されている柱穴の位置から推定すると、支柱穴は3~4本と考えられる。遺物は埋土中から縄文前期中葉以降の土器片が出土している。



第6図 S I 08 竪穴住居跡

S I 10 (第7図 図版2)

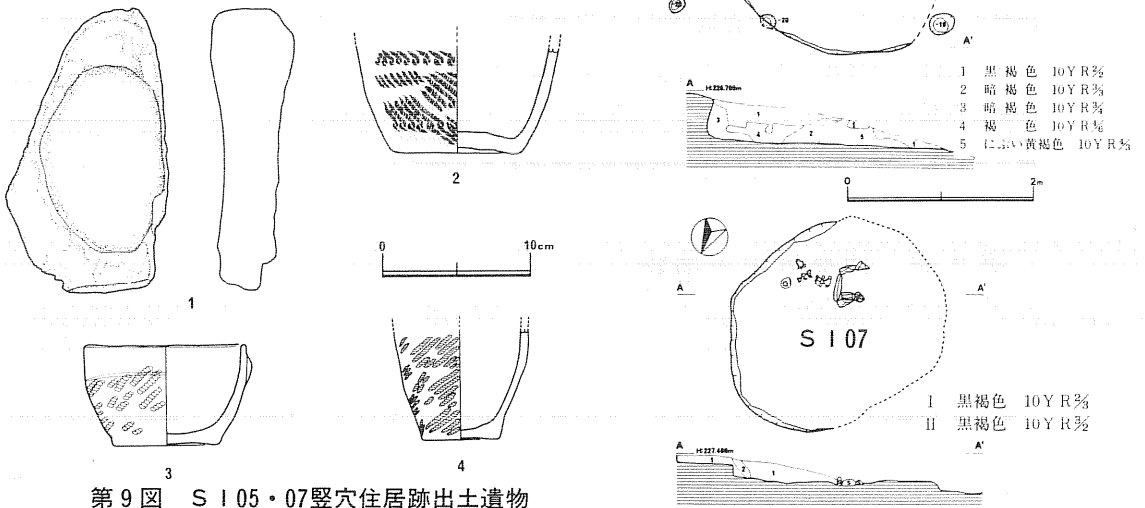
S I 08と同様舌状台地西端肩部に構築された竪穴住居跡である。この部分の平均斜度は8°で、長軸方向が等高線に沿うように掘り込まれている。第5層黒褐色漸移層下部で確認した。平面形は長径4.0m、短径2.1mの小判形を呈する。壁は全周とも良く残っており、東側で0.4m、西側で0.2mを測り垂直である。床面は堅くしまり平坦である。壁溝はない。炉は中軸線上南側にあり、この部分が径0.65mほど楕円状に凹み、焼土、炭化物が認められた。炉の南側には0.55m×0.1m×0.15mの長大な河原石が置かれていた。柱穴は合計12個検出されたが、長辺に沿って6個ずつ対応する形で配されている。これらの柱穴の特徴の一つはそのほとんどが住居跡中心部に向かって掘り込まれていることである。遺物は埋土中から縄文前期に属する土器片がわずかに出土した。遺構面積7.3㎡、床面積6.5㎡である。



第7図 S I 10竪穴住居跡

S I 11 (第8図 図版2)

S I 10と同様の地形のところに構築されている。この部分の平均斜度は13°あり、住居跡は東側ほど深く掘り込まれ、西側では掘り込みがほとんどなく、西側の壁部は

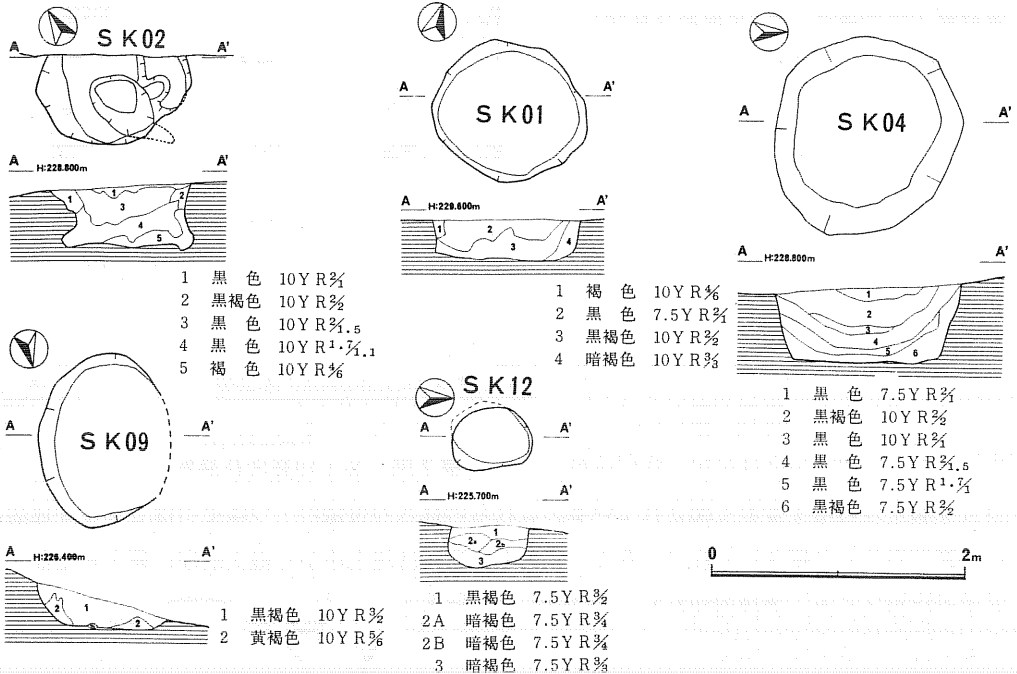


第9図 S I 05・07竪穴住居跡出土遺物

第8図 S I 11・07竪穴住居跡

大岱IV遺跡

明確でない。平面形は長径3.0m、短径推定2.6mの楕円形を呈する。壁は東側で0.4mを測り、その一部では壁上部が覆いかぶさるような形となっている。壁溝はない。床面は平坦で強く、炉は検出されなかった。柱穴と思われる小ピットが床面上に2個、壁に接して2個、遺構外に4個検出されたが、支柱穴は不明である。出土遺物は全くなかったが、縄文時代前期中葉以降の竪穴住居跡と考えられる。推定遺構面積は6.2㎡で、床面積もほぼこれに等しい。



第10図 SK02・01・04・09・12土壌

(2) 土 壌

全部で6基の上壌が検出されている。これらの土壌の構築されたところは、SK01を除いては竪穴住居跡と同じように台地平坦面が沢に傾斜していくその縁部にあたる。6基の土壌のうち、SK02だけは壙中央部がすぼまって壙底部で広がるいわゆる袋状土壌である他は、全てほぼ垂直に掘り込まれたものである。土壌埋土中から出土した遺物はほとんどなくその時期は明確でないが、竪穴住居跡とほぼ同時期の所産であると思われる。

第2節 遺構外出土遺物

(1) 土 器

極めて多量の土器が出土しており、その多くは東斜面における4カ所の捨て場跡からのものである。縄文時代前期の円筒下層b式、c式、d式に属するものを主とし、その他、縄文後期

と弥生土器が少量出土。本項では縄文前期及び弥生土器を取り上げた。

(1) 縄文時代前期

器形及び口頸部文様構成から下記の様に分類した。

第1群 (第11図 1)

高台を付した浅鉢形土器で1点のみ出土。口縁部から底部にかけ撚糸文を施す他、口唇部には刻みを加える。内面は広く磨かれ、口唇部に2個の把手をつくり出している。

第2群 (第11図)

円筒形を呈する深鉢形土器で、口頸部文様帯の有無から2類に分類、さらに文様帯を有するものはその文様構成から細分した。

1類 (第11図 2、3)

口頸部に文様帯を構成していないもので、出土量は少なく比較的小型のものに多い。文様は口縁部から底部にかけて単一の原体を用いる。2は撚糸文で、底部付近で方向を変え横位に施文。3は羽状縄文。

2類 (第11図 4~32)

口頸部に幅を持つ文様帯を構成するもので、文様の区画帯は隆帯や数条の平行沈線、原体の押圧縄文等により明確に意匠される。文様は口頸部と胴部で異った原体を用いる他、同一原体の場合でも回転方向を変えて行。文様の施文方法及び文様構成から次の様に分類した。

<1> 主として原体の回転による文様を口頸部に施す。

① (4~6.8~10) 口頸部に綾絡文を施す。文様帯は5~8cmと幅広く、口縁は平縁で外反するものが多い。隆帯は太くかつ幅で1~2条なされ、隆帯上には刺突や押圧縄文、絡糸体圧痕文が施される。胴部には撚糸文を縦走させるものも多く、他に複節斜縄文を施すものもある。又異なる2原体を用いる場合もあり、5、6では撚糸文と底部付近に綾絡文が施される。

② (11、12) 口頸部に綾絡文と共に2条の垂下する押圧縄文を数単位施す。文様帯は5~7cmと幅広い。口縁は波状を呈し、各波状の波頂部を基点にして押圧縄文を垂下させている。1~2条の隆帯を有し、隆帯に沿って太目の沈線を施すことにより、より浮彫的な効果を高めている。隆帯上には押圧縄文。胴部には縦走する撚糸文が施され、12ではさらに底部付近に綾絡文を施文する。

③ (13~17) 口頸部に網目状撚糸文を施す。17は変形網目状撚糸文。文様の原体は、軸に繩をまいていく際、2本の繩の交叉のみで終える場合と、部分部分で規則的にそれぞれの繩をからめて交叉させるものがあり、後者が多く用いられている。文様帯の幅は4~9cmと一様でない。口縁は平縁。隆帯を持つものと、持たないものがあり、前者では隆帯上に刺突や押圧縄文を加える他、隆帯を平滑に磨き隆帯間に粘土粒を付加する(16)場合もある。後者では区

画帯を施していない。胴部文様には多軸絡条体が多用される他、撚糸文も用いられる。

④ (18~24) 口頸部に結束羽状縄文を施す。文様帯の幅は4~7cm。口縁はいずれも平縁、隆帯を持つもの、持たないものがあり、前者では隆帯上に刺突、押圧縄文、絡条体圧痕文が加えられ、隆帯も比較的幅広く施される。後者では絡条体圧痕文と押圧縄文を交互に平行施文(24)したり、数条の平行沈線を基調に沈線間に爪形の刺突を加えたり(22・23)する事によって区画帯を構成している。胴部の文様は、隆帯を持つものは、口縁部と異原体の文様を用いる事が多く、撚糸文や多軸絡条体が施される。隆帯の無い場合は、胴部上半に口頸部と同じ原体を用いて施文する場合が多く、下半部には撚糸文や多軸絡条体回転文が施される。

⑤ (7,25,26) 口頸部に絡条体回転文を施す。文様帯の幅は5~8cm。口縁は平縁。口頸部の文様区画帯は、25が爪形の刺突を連続させ、26は低平な微隆帯。胴部の文様は撚糸文と底部付近に綾絡文を施すものや、単一原体を用い複節縄文を施すものがある。

⑥ (27~32) 縄文施文により口頸部の文様帯を構成、文様は複節、単節の斜縄文が主体で、31は撚り戻しを施す。施文は口縁部から胴部にかけて単一の原体を用いるもの及びそれぞれの部分で異原体を使いわけのものがある。前者では複節縄文が多用され、口頸部隆帯もしくは低い隆線を有す。後者の場合は口頸部に斜縄文、胴部には複節縄文や撚糸文が施され、隆帯は有せず、押圧縄文や、連続する爪形の刺突により文様区画帯を構成する。口頸部文様帯の幅は4~6cm。口縁は平縁の他、波状を呈するものもある。

〈2〉 主として押圧縄文や絡条体圧痕文を用い、押圧による文様を口頸部に施す。

① (33~39) 横位に数条平行して施された文様を主体とする。原体はRLやLRの縄文を用い、それぞれの押圧は一本の紐で全周に一気に巻きつけて施す。各押圧文様間に矢羽状の押圧縄文を加え羽状的な意匠を施すもの(34)や、爪形の刺突を数段にわたり連続させるもの(33)もある。隆帯は比較的幅広のものを1条巡らし、隆帯上には押圧縄文や絡条体圧痕文及び刻みを施す。隆帯を持たないものもあり、この場合文様区画帯は数条の沈線と沈線間に施された刺突によって構成される。その他、区画帯としての施文を省略する場合もある。胴部には撚糸文や複節縄文、多軸絡条体回転文の他、39では擬木目状撚糸文が施される。又、胴部文様に異原体の文様を充填するものもあり、36では横位に1条綾絡文を加える。口頸部文様帯の幅は3~7cm。器形は円筒形の他、35・38胴部が紡錘形にふくらみ口縁部が外反する。

② 山形状や鋸歯状あるいは菱形に施された文様を主体とする。文様構成からさらに細分。

②-1 (39~45) 直線状に押圧された文様の組合わせで構成されるもので、垂下する押圧縄文を加えるものもある。39は羽状縄文を施した口頸部に、平行する2条の押圧縄文を山形状に配したもので、押圧縄文間には刺突を施す。隆帯を付すものは、隆帯上に絡条体圧痕文や刺突を加え、口縁が波状を呈するものが多い。隆帯を持たないものは幅広の沈線や押圧縄文

により区画帯を形成、口縁は平縁のものが多い。胴部文様は2個の異なる原体を用いて行う場合と、単一の原体で施文する場合があり、前者では撚糸文を施した器面に絡条体回転文や綾絡文を何段にも加えるものや、上半に羽状縄文、下半に斜縄文と分割して施文する場合がある。後者では多軸絡条体回転文の他、羽状縄文が多用される。文様帯幅は5～4cm。

②-2 (46～49) 曲線的な押圧縄文により構成される。文様帯は2cmと狭幅の傾向を示すが46は口頸部がくびれており文様帯幅6cm。文様区画帯として隆帯もしくは低平な隆起線が施され、上面に刺突が加えられる事が多い。口縁はいずれも緩い波状を呈す。胴部には単一の原体を使用され、撚糸文、羽状縄文の他、46では木目状撚糸文がみられる。

③ (50～52) 横位に数条平行して施された文様帯に、垂下する押圧縄文を2～3条一単位で加える。押圧文は絡条体圧痕文や押圧縄文が用いられる。文様帯の幅は2.5～3cm、隆帯を持つ場合、隆帯は摘み出しによる低平なもので隆帯上に刺突を加え、隆帯直下に綾絡文を1条施す。隆帯を有しないものは数条の押圧縄文により区画帯を形成する。胴部文様は全面に複節縄文を施文する他、地文として付加条による縄文や撚糸文を施した後、横位に狭幅の羽状縄文を数段にわたって加えるものもある。

## (2) 弥生時代 (第11図 53)

出土量は極めて少なく、いずれも調査区西側から出土している。図化可能な1点を掲載した。

口頸部がくびれ、口縁部がくの字状に強く外反する深鉢形土器、口縁部上端には4条の平行沈線を沈線間に押し引きによる刺突を連続して施す。口頸部から胴部上半にかけては変形工字文をさらにその下に斜行撚糸文、上に綾絡文を施す。胴部下半に比較的撚りの細かい撚糸文を縦位に施文する。弥生時代後期のものと思われる。

## (2) 石器・石製品

各石器の出土内訳は第1表のとおりである。石器としたものはそのほとんどが定形的石器で、その他には歯こぼれ等の使用痕の見える剥片や河原石があり、後者も含めるとその数は1,000点を超える。これらの石器・石製品は土器と同じように、その部分が斜面の捨て場から出土したものである。また、定形的石器の器種毎の出土点数を見ると、石鏃・石槍などのいわゆる狩猟用の道具とされている石器が少なく、逆に石匙、搔器、削器等の加工用の道具とされる石器が多い。しかしながらこのような傾向の中であって後者の仲間である定形的な石鏃が全く出土していないことが注目される。以下各器種毎に略述するが、( )内は実測図の番号である。

### ① 石器

石鏃 (第12図1～4) 4点出土している。いずれも明確な柄を有さないものである。基部の形状が直線的なもの(平基)と、わずかに出ているもの(凸基)とがある。

石槍 (第12図5～8) 14点出土している。形状によって、1～3類に分けた。

大岱IV遺跡

- 1類 先端部のあまり尖らないもので、全体に扁平なものが多い（5、6）。
- 2類 先端部の尖るものである。断面形が菱形か、三角形を呈する（7、8）。
- 3類 片面加工のものである。

石匙（第12図9～20、第13図21～35） 93点出土。形状によってI～III群に分け、さらに細分した。

I群 つまみが長軸線あるいは長軸線に対して斜位にある縦型のもの。1～3類に分類。

1類 つまみの部位が長軸線上にあるものである。

a 先端が尖る（9～11）。両面調整のもの（9、11）と片面調整のもの（10）があり、断面形が凸レンズ状か半円状を呈し、他の石匙に比べ部厚い。

b 先端部が直線的なもので、平面形が長方形を呈し、うすい（12、13）。

c 先端部が広がるもので、全体の形状は細長い二等辺三角形を呈する。丁寧な押圧剝離によるつくりでうすい（14、15）。

d 先端部が丸味のあるもので、23点出土しており最も多い（16～18）。

e 細長い側辺の一方が直線的で、他方がゆるい弧を描くものである。つまみは直線的な側辺に並行する（19～21）。

2類 つまみが中軸線に対して斜位につくものである。

a 刃部が直線的なもの（22～24）。

b 刃部が丸味を持つもの（25、26）。

3類 縦型と横型の間中型で、全体にずんぐりしている（27、28）。

II群 石器の長軸線に対してもつまみが直角に付くものである。形状によって1～4類に分類。

1類 つまみが長軸線に対して直角に付き、刃部とつまみが直交する。

a 刃部が直線的であるもの（29）。

b 刃部がゆるく弧を描く（30、31）。31のつまみ部にはベンガラと思われる赤い付着物あり。

2類 長軸線に対してつまみが斜位に付くもの。

a 刃部が直線的なもの（32）。

b 刃部がゆるく弧を描くもの。

3類 全体の形状がずんぐりして大型のもの。

a 刃部が直線的であるもの（33）。

b 刃部がゆるい弧を描くもの（34）。

4類 全体にずんぐりして厚みのあるものである（35）。

III群 その他I～III群に含まれないものや、破片で全体の形状が不明のものが4点ある。

搔器（第14図36～47） 全部で12点出土している。刃部の形状などに対して4類に分類。



- 1類 刃部と主要剥離面の角度が直角に近く、多くは背面にかけ二次加工が施される。
- a 部厚く大型のもの (36、37)。
  - b 中型のもの (38、39)。
  - c 小型のもの (40)。

- 2類 刃部と主要剥離面とのなす角度が $60^{\circ}$ ～ $45^{\circ}$ 前後のものである。
- a 大型のもの (41)。
  - b 中型のもの (42、43) で、搔器の中では最も多い。
  - c 小型のもの。

- 3類 刃部と主要剥離面とのなす角度が $45^{\circ}$ 以下のもの (45)。

- 4類 刃部が直線的であるもの (46、47)。

石筥 (第14図48、49、第15図50～60) 全部で68点出土している。

- 1類 平面形状が二等辺三角形を呈するものである。

- a 両面加工のもの (48～50)。
- b 片面加工のもの (51、52)。

- 2類 平面形状が楕円形を呈するものである。

- a 両面加工のもの (53、54)。
- b 片面加工のもの (55、56)。

- 3類 平面形状が長方形を呈する。

- a 両面の加工のもの (57、58)。
- b 片面加工のもの (59)。

- 4類 大型で平面形状が楕形のもの (60)。

削器 (第15図61～63、第16図64～76) 全部で176点と最も多く出土している。刃部の形状によって1～3類に分けられる。

- 1類 刃部が内側に湾曲しているもので、全体の形状が鎌に似ている。

- a 大型のもの (61～64)。
- b 中～小型のもの (65、66)。

- 2類 刃部が直線的なものである。

- a 大型で細長いもの (67～69)。
- b 大型で幅のあるもの (70)。
- c 中型のもの (71)。
- d 小型のもの。

- 3類 刃部が外側にゆるくふくらみ弧状を呈するもの。

大岱IV遺跡

- a 大型のもの (72)。
- b 中型のもの (73、74)。
- c 小型のもの (75、76)。

両面加工石器、その他の石器 (第17図77~79) 大型の剥片石器である。

磨製石斧 (第17図80~85) 平面形状より2類に分類。石材は15点が緑色凝灰岩で、流紋岩、泥岩、砂岩が1点ずつある。緑色凝灰岩製のものには擦切技法の痕跡が明瞭なものもある。

- 1類 頭部の平坦面と刃部が直線的なもの (80、81)。
- 2類 頭部の平坦面と刃部とも長軸線に対して斜めのもの (89~85)。

② 石製品 石製品としては1点の岩偶と12点の刻線礫などが出土している。

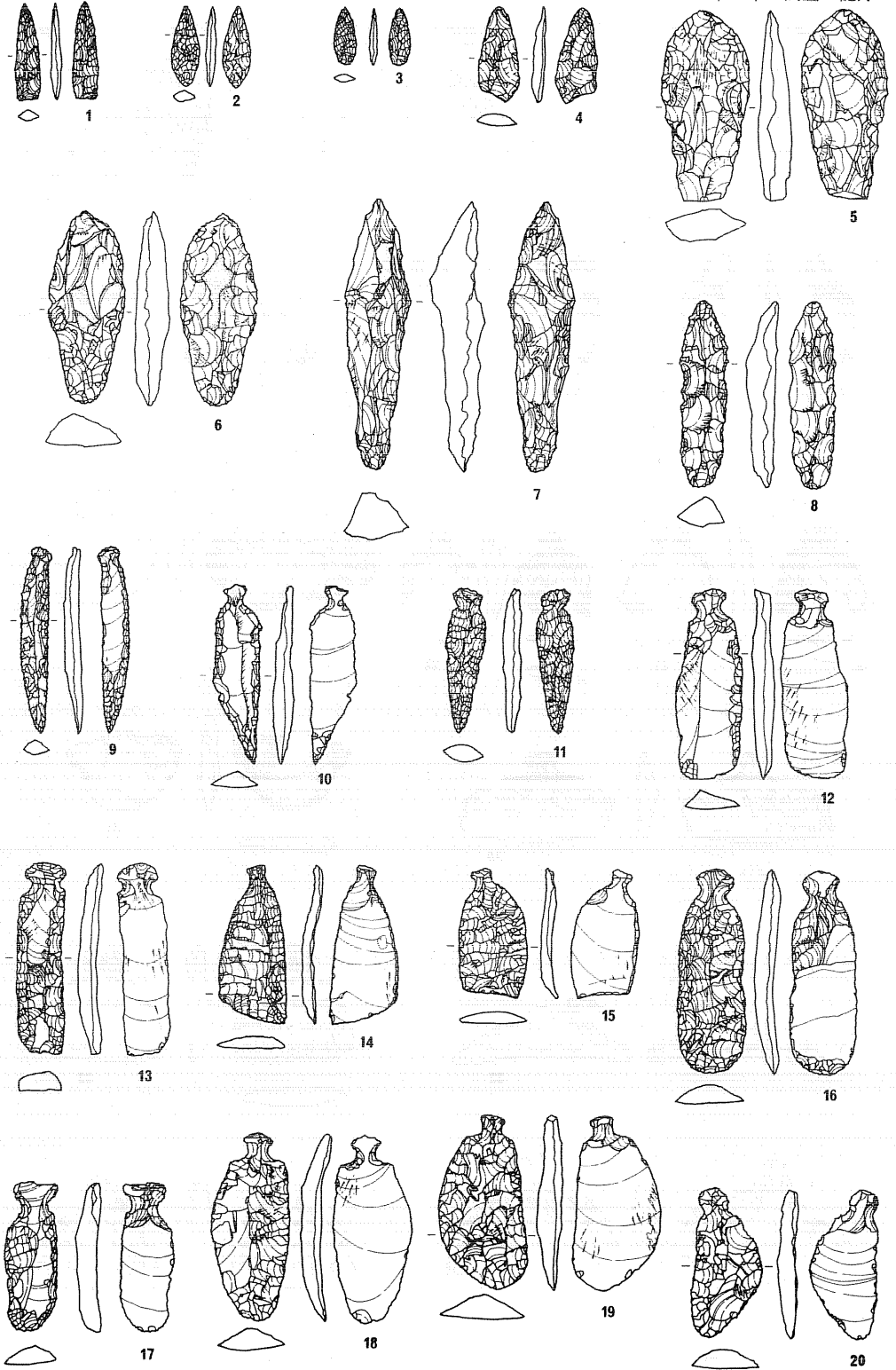
岩偶 (第20図 図版4) 捨て場Aの最南端第3層黒色土中から円筒下層式土器と共に岩偶が出土した。大きさは、長さ15.1cm、8.6cm、最大厚2.8cmである。部厚い板状の灰黄色凝灰岩を先端の鋭利な工具で削り、頭部、肩部、両手、脚部を浮彫状に表現している。胴部表面には、向かって左側に3条、右側に4条の沈線が施され、胸部中央には径4mmの浅い凹みが刻まれている。なお、第20図A・Bは同一の岩偶の実測図であり、Bは製作等の工具痕をも表現したものである。この岩偶は縄文時代前期円筒下層式土器と同時期のものと考えられる。岩偶は、  
(註1) 青森県寅平遺跡、(註2) 石神遺跡、(註3) 熊沢遺跡、(註4) 秋田県内の岱遺跡、(註5) 茂屋下岱遺跡、(註6) 北海道サイベ沢遺跡などから出土しているが、本岩偶とその形態や、頭・四肢等の表現が似ていると思われるものは、熊沢遺跡、内の岱遺跡、茂屋下岱遺跡のものである。このうち茂屋下岱遺跡のものとは熊沢遺跡のものは円筒下層b式に、内の岱遺跡のものは円筒下層d式に伴うとされているが、本岩偶は円筒下層b~d式のどの時期に伴うものか判然としない。

刻線礫 (第19図) 12点の刻線礫が出土している。泥岩、凝灰岩などの石の表裏面に先端の鋭利な工具で沈線等を施したものである。1は第20図の岩偶と同じ材質の凝灰岩製で、砲弾状を呈し、先端部には上から見て十字になるよう深い刻みが施されている。13は刻線礫ではないが、楕円形の安山岩の上から4分の1程のところの両側辺に抉り込みを入れ、片面の中央部を磨いている。あるいは岩偶の最も簡略化されたものかもしれない。

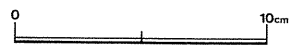
第1表 出土石器分類表

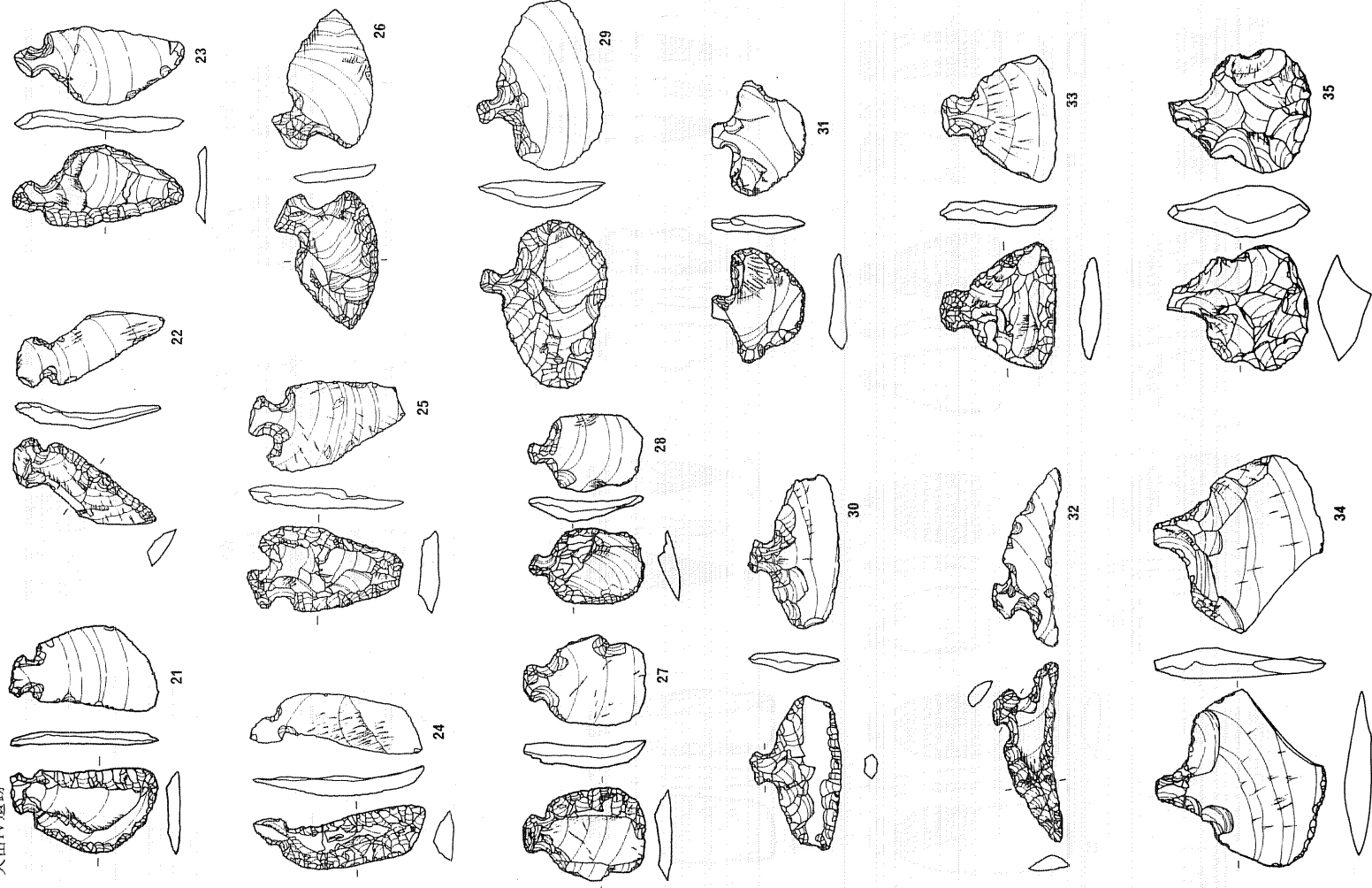
| 石器 | 類・点数 | 1類  | 2類 | 3類 | 4類 | 合計  | パーセンテージ |     |    |     |    |
|----|------|-----|----|----|----|-----|---------|-----|----|-----|----|
| 石  | 銚    | 4   |    |    |    | 4点  | 1%      |     |    |     |    |
| 石  | 槍    | 5   | 8  | 1  |    | 14点 | 2%      |     |    |     |    |
| 石  | 匙    | a   | 14 | 8  | 13 | 93点 | 12%     |     |    |     |    |
|    |      | b   | 5  | 12 |    |     |         |     |    |     |    |
|    |      | c   | 5  |    |    |     |         |     |    |     |    |
|    |      | d   | 23 |    |    |     |         |     |    |     |    |
|    |      | e   | 13 |    |    |     |         |     |    |     |    |
| 石  | II群  | a   | 3  | a  | 2  | a   | 1       | a   | 1  | 18点 | 2% |
|    |      | b   | 6  | b  | 1  | b   | 3       | b   | 1  |     |    |
|    |      | その他 |    |    |    |     |         |     |    |     |    |
| 搔  | 器    | a   | 5  | a  | 8  | 4   | 5       | 51点 | 7% |     |    |
|    |      | b   | 8  | b  | 15 |     |         |     |    |     |    |
|    |      | c   | 3  | c  | 3  |     |         |     |    |     |    |
| 石  | 寬    | a   | 15 | a  | 19 | a   | 7       | 68点 | 9% |     |    |
|    |      | b   | 8  | b  | 11 | b   | 5       |     |    |     |    |

| 石器   | 類・点数 | 1類 | 2類 | 3類 | 4類 | 合計   | パーセンテージ |      |      |     |
|------|------|----|----|----|----|------|---------|------|------|-----|
| 削    | 器    | a  | 15 | a  | 13 | a    | 14      | 176点 | 23%  |     |
|      |      | b  | 14 | b  | 10 | b    | 38      |      |      |     |
|      |      | c  | 43 | c  | 20 |      |         |      |      |     |
|      |      | d  | 9  |    |    |      |         |      |      |     |
| 両面加工 |      | 5  |    |    |    | 5点   | 1%      |      |      |     |
| その他  |      | 19 |    |    |    | 19点  | 3%      |      |      |     |
| 磨製石斧 |      | 8  |    | 10 |    | 18点  | 2%      |      |      |     |
| 扁    | 平打製  | a  | 12 | a  | 5  | a    | 37      | 119点 | 16%  |     |
|      |      | b  | 12 |    |    | b    | 5       |      |      |     |
|      |      | c  | 8  |    |    | c    | 8       |      |      |     |
|      |      | d  | 9  |    |    | d    | 23      |      |      |     |
| 多    | 目的礫  |    |    |    |    | a    | 12      | 7    | 161点 | 21% |
|      |      |    |    |    |    | b    | 71      |      |      |     |
|      |      |    |    |    |    | c    | 62      |      |      |     |
| 総合計  |      |    |    |    |    | 750点 |         |      |      |     |

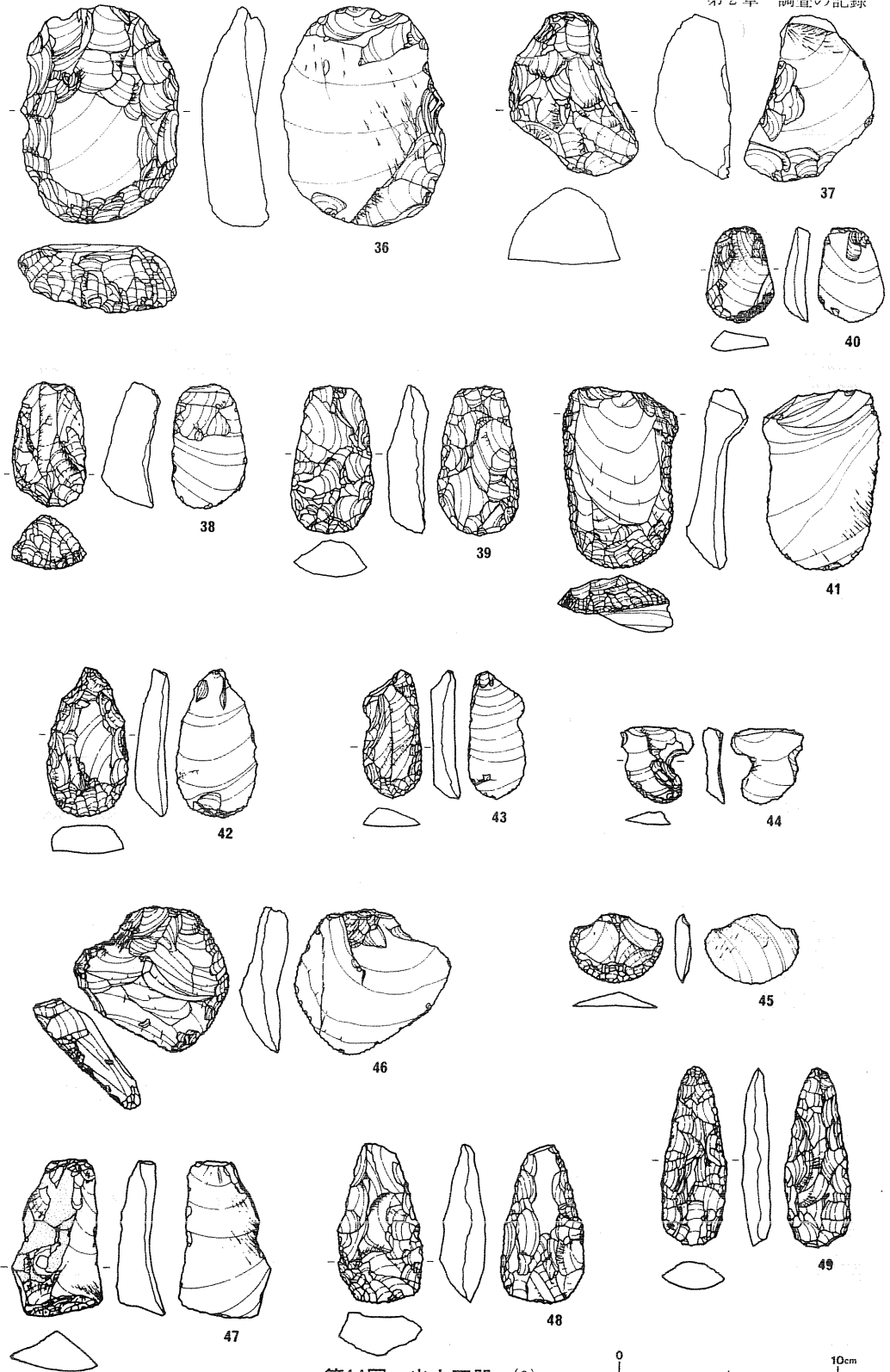


第12図 出土石器 (1)



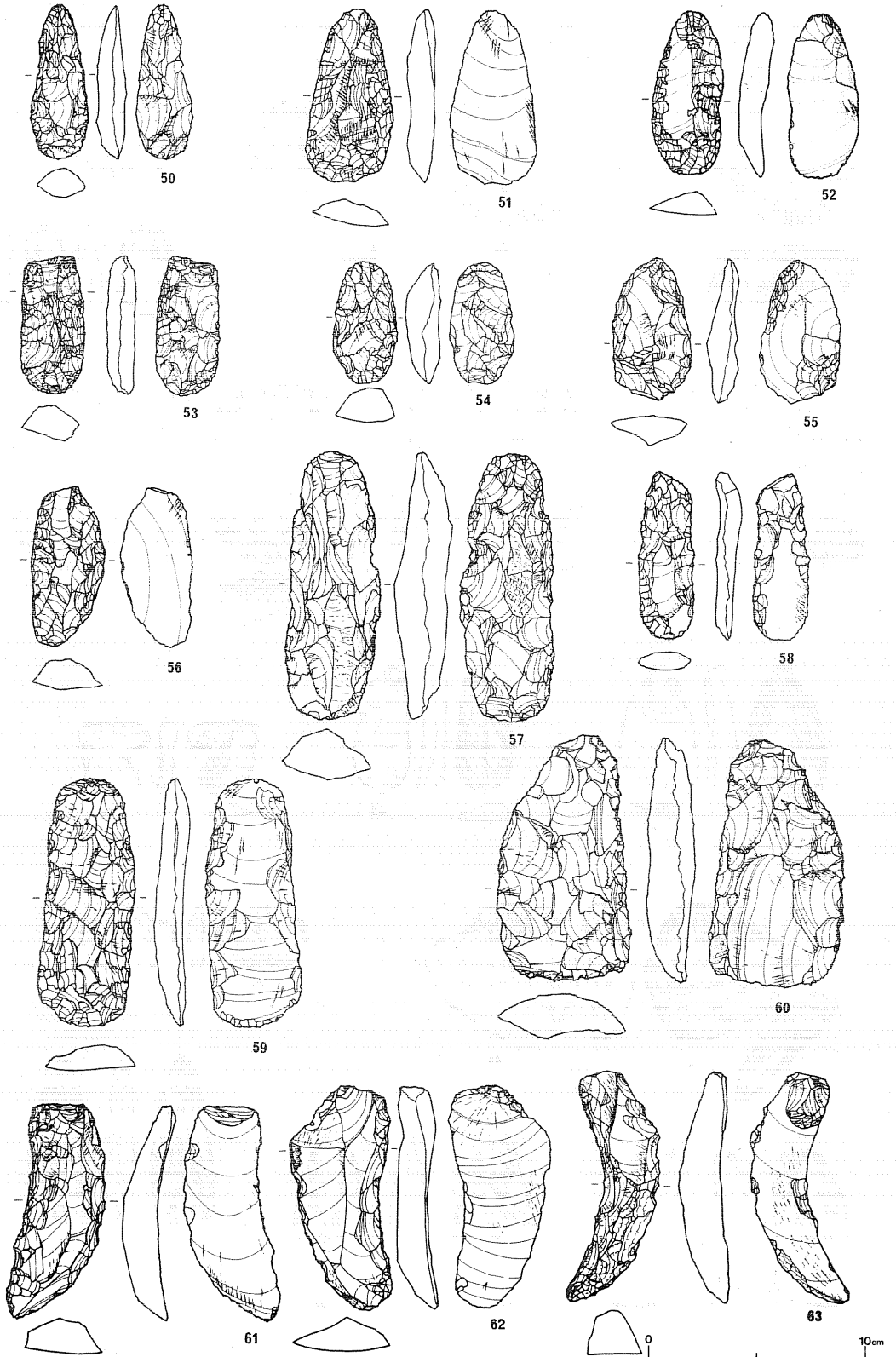


第13図 出土石器 (2)



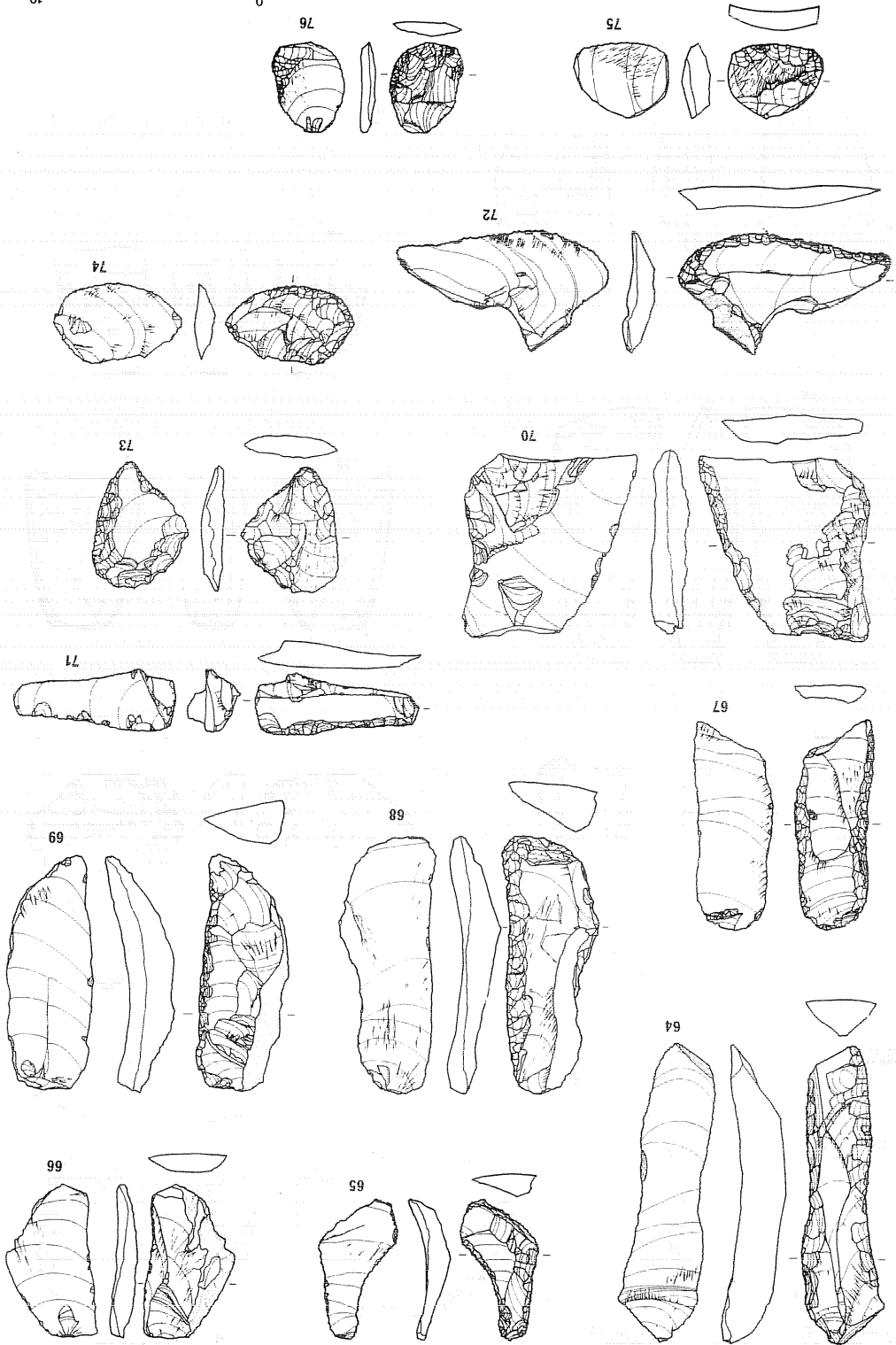
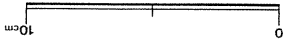
第14図 出土石器 (3)

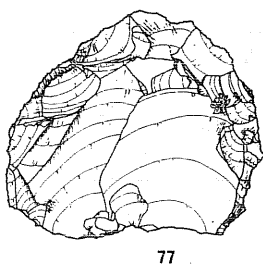
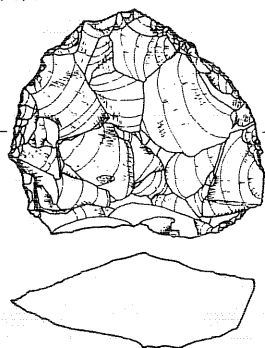
大岱IV遺跡



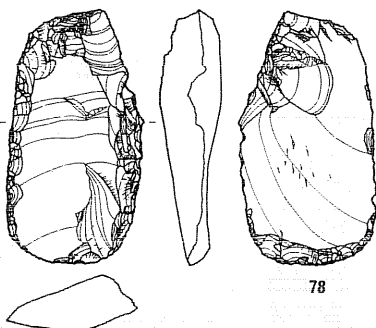
第15圖 出土石器 (4)

第16図 出土石器 (5)

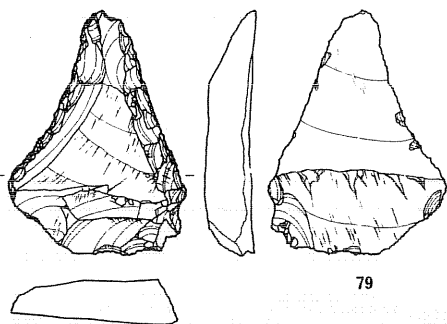




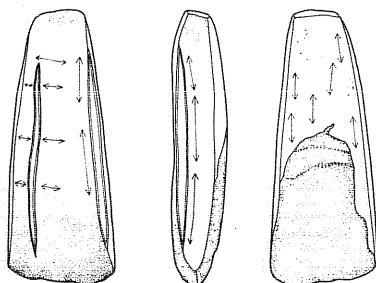
77



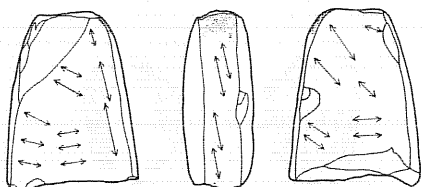
78



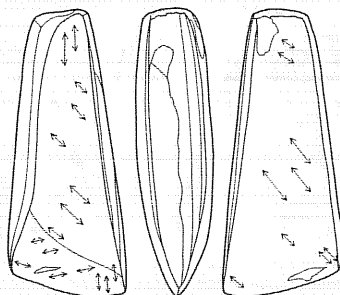
79



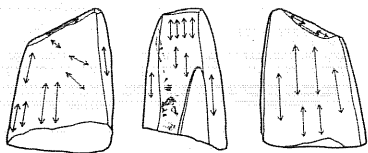
80



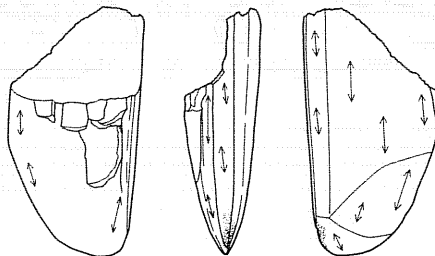
81



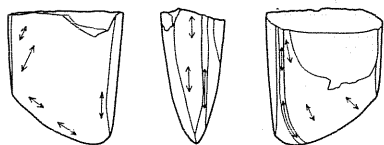
82



83

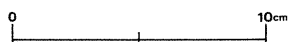


85

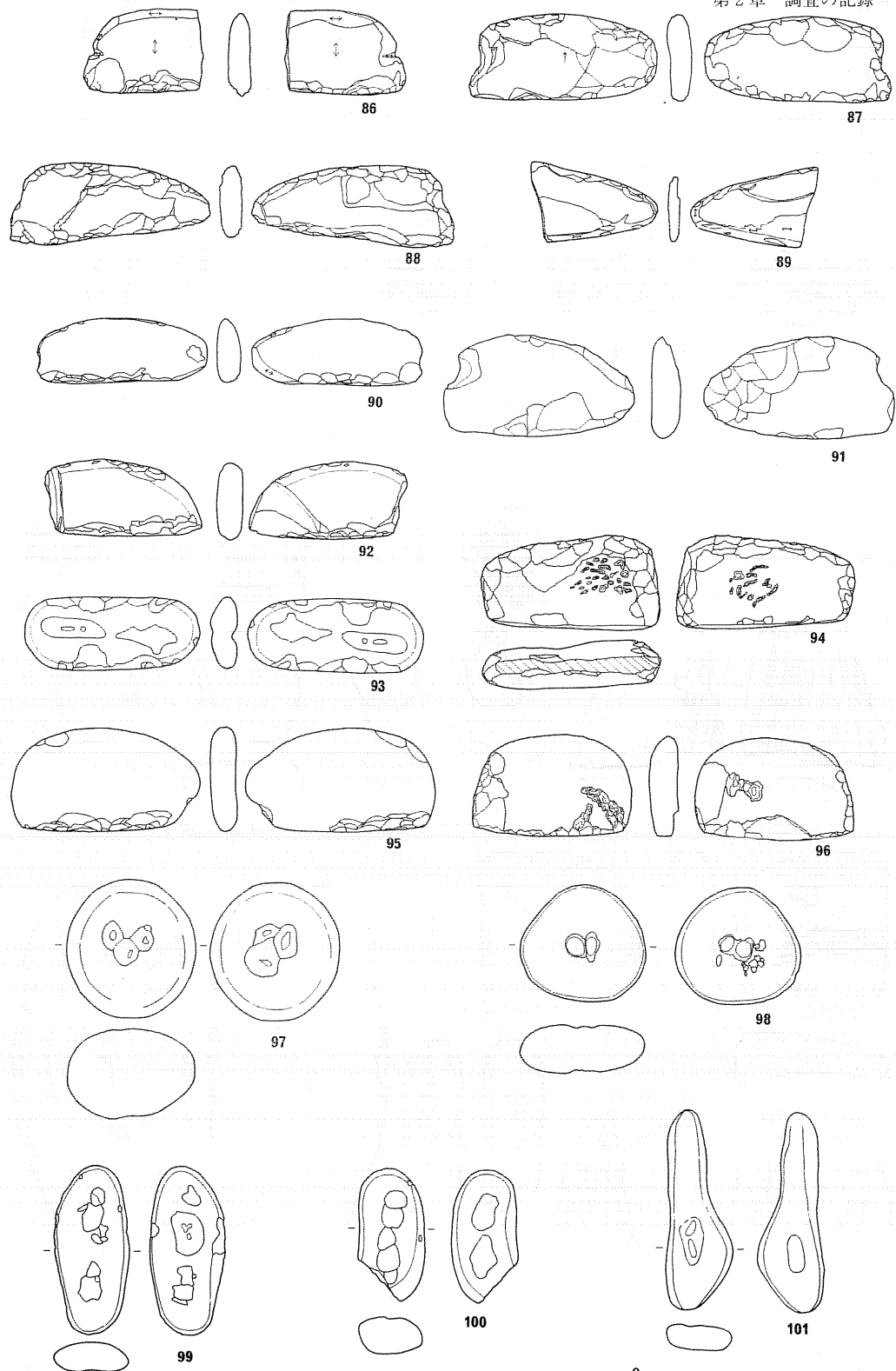


84

第17図 出土石器 (6)







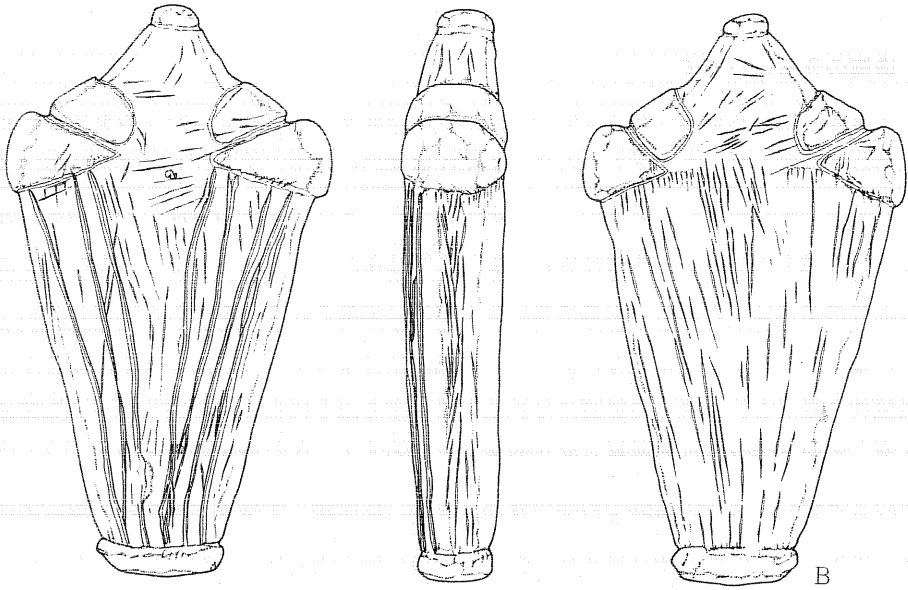
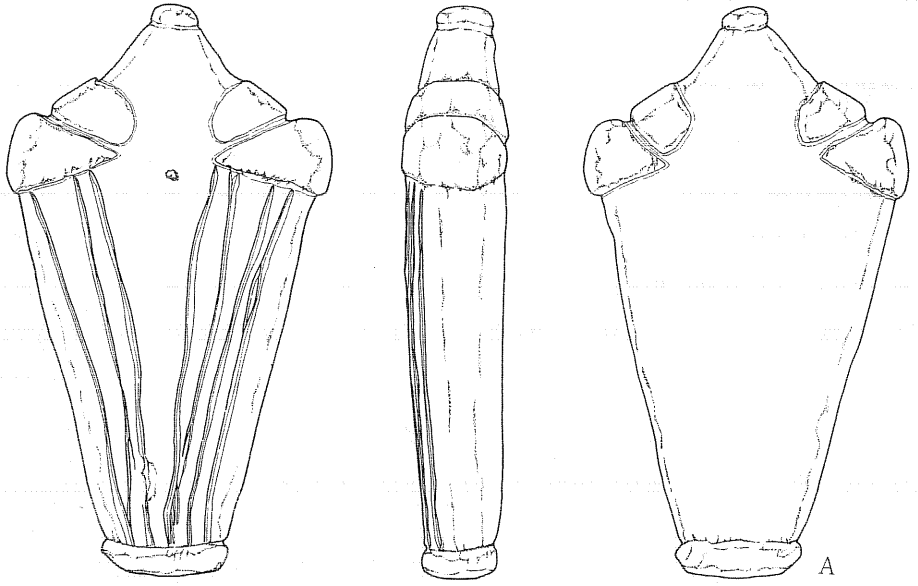
第18図 半円状扁平打製石器・多目的の礫器



第19図 出土線刻磬



大谷IV遺跡



第20図 岩偶実測図

### 第3節 その他

#### 捨て場跡 (第3図)

本遺跡では4カ所確認された。いずれも斜面にみられる自然地形の凹地を利用している。遺物は土器の他石器、石製品で、中でも土器はいずれも縄文前期の円筒下層b式～d式にいたるもので、その出土状況は乱雑で、交錯しながら重なり合い、投棄した状態を示す。各地点の出土遺物についてその时期的相違はみられないが、C、D地点では円筒下層c式土器の出土比率がわずかに高い。又、B、C、D地点の急傾斜が長く続く部分では、遺物の出土が斜面下端部付近になるとほとんどみられなく、いずれも斜面上端から中位部にかけてであり、特に斜面中位部のやや傾斜が緩くなった部分に集積している。遺物はB地点で量も多く、次いでC、D地点E地点は比較的少ない。A地点は調査区外の斜面下位にも包含されていると思われる。

## 第3章 ま と め

### ① 遺構の分布について

大岱IV遺跡は、舌状台地に入りこむ小さな沢の東西部分から調査したのであるが、調査範囲が沢部の斜面が主となったこともあって、大岱IV遺跡の中心部と見られる舌状台地部はほんの一部しか調査できなかった。以上のような事情もあり、大岱IV遺跡の遺構の分布のあり方については推測の域を出ないが、竪穴住居跡や袋状土壇は南から入り込んだ小沢を囲むように分布し、大部分の遺構は平坦部から沢部に傾斜する肩部に構築されているものと思われる。

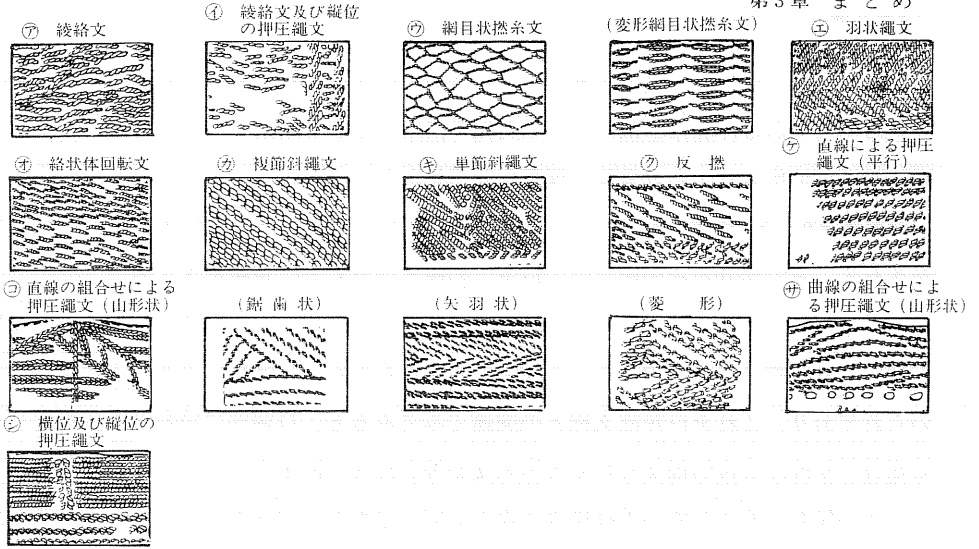
また、遺物の出土分布を見ると、平坦面には遺物はほとんどなく斜面に集中する。さらにこれを微視的に見ると、これらの斜面には沢部に直交するように数カ所の沢状の小さな凹地があり、土器・石器の大部分はこの数カ所の凹地から重なるようにして出土している。

以上のことから、大岱IV遺跡での場の使われ方は、住居跡・土壇等が平坦部の端に沢部を囲むように構築され、沢部に臨む斜面及び斜面の凹地が捨て場となっていたものと考えられる。

### ② 出土土器について

極めて多量の土器が出土し、その総数はコンテナ50箱にも及ぶ。土器は縄文時代前期・後期・弥生時代のものであるが、前期のものを除くと他は極めて少量である。前期の土器は円筒下層式土器に属し、下層b式からd式のものである。本項ではこの円筒式土器について記述する。なお第21図に記載した模式図はいずれも本遺跡出土の土器に関してまとめたもので、(1)は口頸

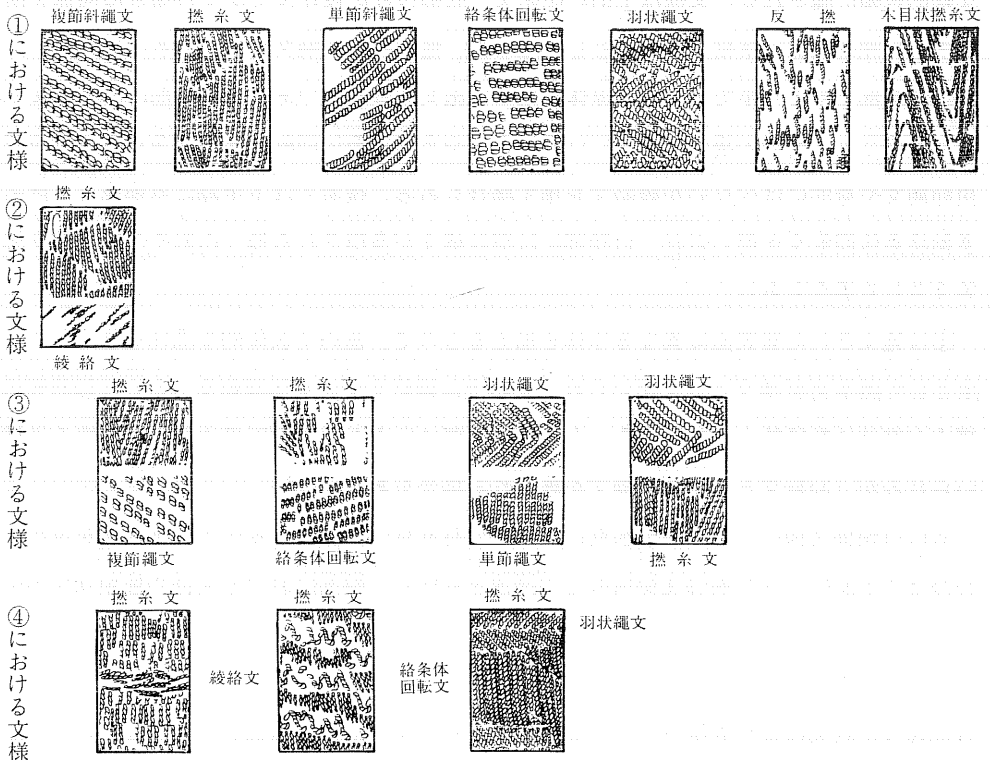
(I) 口頭部文様



(II) 胸部文様構成図



(III) 胸部文様



第21図 口頭部及び胸部文様

部に施された文様で、本文で記載した土器分類の第Ⅱ群2類の各項に基づいて順次その文様構成を表示してある。(Ⅱ)は胴部における文様の構成区分を略図化したものである。(Ⅲ)は(Ⅱ)の構成図において使用されている文様の種類を表示したものである。

**胴部文様及びその構成について** 本遺跡出土の土器は、その胴部文様構成において4型体に分類される。第21図(Ⅱ)がその模式図で以下この模式図をもとに説明を加える。

①は単一の原体を用いて胴部全面に文様を施す場合を示したもので、原体は多種多様のものが用いられ、部分的に方向を変えて施文する場合もある。口頸部には表図(I)の全ての文様が用いられており、これを口頸部文様との関連でみると、口頸部に綾絡文を主体として施文する場合、胴部には複節繩文もしくは撚糸文が施される。撚糸文は縦位になされるのを主とするが、この傾向は他の形態の文様構成の場合も同じである。羽状繩文が用いられる場合は、胴部には撚糸文や多軸絡条体回転文が施される他、同一原体の羽状繩文が施される場合もある。繩文施文の場合は、胴部に複節繩文や撚糸文、特に口頸部文様が複節繩文の場合、胴部でも同一原体を用いる事が多い。さらに口頸部に押圧文を主体として施文する場合、平行押圧押文では複節繩文、山形状の押圧繩文では撚糸文や、特に羽状繩文が多用される傾向を示す。

②は胴部と胴下半の底部付近で異なる原体を用いて施文する場合である。底部付近の文様は比較的狭幅に施される。文様は上部が撚糸文、底部付近が綾絡文で全ての場合に同様な構成を示す。口頸部文様は綾絡文を主体として施され、他には羽状繩文が一例あるにすぎない。

③は胴部上半と下半で異なる2原体を用いて施文するものである。上半部には撚糸文や羽状繩文が施され、前者の場合下半部には複節繩文や多軸絡条体回転文が施文される。口頸部には複節繩文や量的には少ないが綾絡文を施す場合もある。後者では下半部に単節繩文・撚糸文・多軸絡条体回転文が用いられ、口頸部には羽状繩文が多用される他、山形や菱形の押圧繩文が施文される場合もある。

④は施文された器表面に異なる原体を加えるもので、極めて装飾的な意匠を施すものである。主として撚糸文が地文として用いられ、その上に綾絡文や絡条体回転文、さらには狭幅の羽状繩文が横位に数段施文される場合もある。口頸部には主として押圧繩文を主体とする文様が用いられるが、回転文として羽状繩文が施される場合もある。

次に口頸部文様について繩文前期における各時期毎の指標となるべき文様構成を選出した後合わせて上記に述べた胴部文様構成との関連を見極め、胴部における文様の使用状況の推移を述べてみたい。第21図(I)口頸部文様⑦・①は綾絡文を主体とするもので、本遺跡出土の土器ではいずれも文様幅が広く、隆帯は多くの場合顕著に施されているが、低平な微隆帯や数条の平行沈線及び刺突により表現されているものもある。①では波状口縁を呈し各波状の頂点を基点に押圧繩文を垂下させている。⑦は円筒下層a式、b式に位置づけられ、b式では第Ⅱ類と

して前半に、①は円筒下層b式として、垂下する押圧縄文や波状口縁を第Ⅲ類として後半に位置づけられている。⑦は網目状撚糸文で、文様幅は広く、隆帯は低平なものを主とし、他に隆帯を持たないものもある。円筒下層b式にみられ、中でも本遺跡でも出土している変形網目状撚糸文は、石神遺跡では下層b<sub>2</sub>式として後半に位置づけている。③は直線状の押圧縄文を組み合わせる事によって山形状・鋸歯状・矢羽状・菱形状の文様を施すもので、文様帯は比較的幅広く、文様区画帯は低平な微隆帯や押圧縄文により構成されている。女館貝塚遺跡では下層c式の標式的な土器として位置づけている。④は曲線の押圧縄文を用いて緩やかな山形状の文様を施すもので、文様幅は狭くなる傾向を示す。文様区画帯としては幅の狭い隆帯及び低平な隆起線が用いられている。蟹沢遺跡では円筒下層d式に位置づけられている。⑤は横位の平行押圧縄文に数単位の垂下する押圧縄文を加えるもので、文様幅は明らかに狭くなり、隆帯を施さず押圧縄文で区画帯を構成する場合が多い。円筒下層d—1式の標式的なものと言えよう。以上の事を考慮し、本遺跡出土土器の胴部文様構成と関連させてみると、口頸部文様が⑦の場合、胴部文様構成は①、②が伴う。①では複節縄文や撚糸文、②では撚糸文+綾絡文が施され、中でも②の文様構成が多用される。口頸部文様①では①における撚糸文と②における撚糸文+綾絡文が使用される。口頸部文様⑦では、①における撚糸文や多軸絡条体回転文が多用され、⑦・①で比較的多く用いられていた②の文様構成は消滅する傾向を示す。この事は下層b式内において、口頸部に綾絡文と網目状撚糸文を施す場合、胴部に使用される文様構成が変革していく傾向を示しているとも考えられる。又、原体としては撚糸文と共に多軸絡条体も良く用いられる。口頸部文様③になると②の文様構成は消滅し、①における撚糸文、多軸絡条体回転文、羽状縄文の使用が主体を占める。特に羽状縄文は多用され、対して複節縄文の使用は減少する。口頸部文様④では①の構成が継続して使用され羽状縄文や木目状撚糸文が施される他、複節縄文も用いられ、その他④の構成もよく用いられる。しかし③の文様構成はない。この事は口頸部文様⑤の場合についても同じである。以上の事から胴部文様構成は、①の構成は円筒下層b式～d式を通じて用いられ、縄文としては複節縄文が下層b式期を中心として比較的初期の段階に多用され、撚糸文もこれに準ずると考えられる。下層c式の段階になると多軸絡条体や羽状縄文が用いられ、特に羽状縄文の使用比率は高い。撚糸文は引き続いて存続するがb式に比べ使用率は低く、複節縄文は大きく減少する。下層d式では羽状縄文が引き続いて用いられる他、木目状撚糸文も使用される。その他、複節縄文や撚糸文も再び一般的に用いられる様になる。②の構成は、ほぼ下層b式期内に限定使用されると言えよう。③の構成はb式、c式期に用いられており、d式期に至っては本遺跡出土の土器にはみられない。④の構成はc式期を中心にみられ始め、d式期にも使用されると共に横位に施された文様帯間が、幅広く、一定の等間隔でなされる事により規格的な文様構成を呈する様になる。又胴部上端、文様区画帯直下に横位

に綾絡文を加える手法もこの時期にみられる。

次に本遺跡出土土器の中でも口頸部・胴部に比較的多用されている羽状縄文について若干記述したい。羽状縄文は円筒土器においては下層b式に出現したと考えられている<sup>(註7)</sup>。文様はb式以降、d式期に至るまで用いられ、口頸部のみならず胴部にも広く使用される。本遺跡のものについてみると羽状縄文が胴部に用いられる場合、胴部上半のみと胴部全面の場合があり、後者では口頸部文様が山形状の押圧縄文を主とする下層c式期に多用される。反面胴部上半の場合は極めて少なく、口頸部にも羽状縄文を施文する場合にむしろ多くみられる。口頸部に施文される場合には前述の胴部上半施文の他、無施文の場合もあり胴部全面施文は極めて少ない。無施文では胴部に撚糸文と底部付近に狭幅な綾絡文を施す文様構成②にあたるものがあり、円筒下層b式に位置づけられる。これらの事から羽状縄文は下層b式期に口頸部文様として用いられ、やがて下層c式期に至って胴部に全面施文されると考えられ、胴部上半のみ施文されるものはこれら下層b式及びc式の間介在するものと考えられよう。

器形について 円筒下層式の土器は基本的には円筒形を呈する深鉢形土器であり、口縁部から胴部、そして底部にかけ大きな器形変化を有しないものと言えよう。しかし細部について比較するならば器高、口縁部形状、胴部形状等に若干の差異が認められ、同様にこれらの要素を一定の規格内で包含する各タイプの存在が認められる。本遺跡出土のものについては6タイプ(第22図)に分類できる。

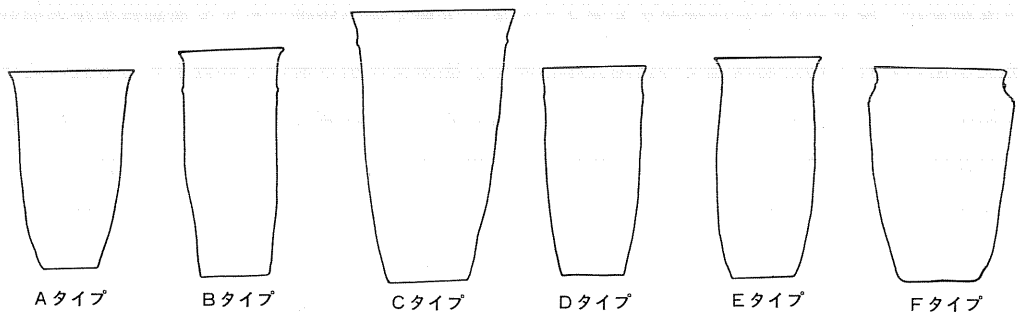
Aタイプ：胴部下半がやや外傾して立ち上がり、中央部でわずかに内側に屈曲、以後ほぼ垂直に立ち上がる。口縁部はやや開く。

Bタイプ：胴部下半から上半にかけてはAタイプとほぼ同じ体形を示し、口縁部は胴部からそのまま立ち上がる。

Cタイプ：胴部下半から上半にかけてはほぼ垂直に立ち上がり、口縁部はやや開く。

Dタイプ：口径と底径の差が極めて少なく、底部から口縁部にかけほぼ垂直に立ち上がる。

所謂円筒形を呈する。



第22図 器形の様式図



Eタイプ：胴部中半に張りを持ち、口縁部は大きく開く。

Fタイプ：胴部下半から上半にかけてはやや外傾して立ち上がり、口縁部で屈曲し内反する。

つぎに出土土器のうち、完形もしくは器形のほぼ判明できるもの26個について、それぞれのタイプにおいて、どのような口頸部文様（第21図の(1)）が施されているかを示したのが次の表である。

第2表 器形及び口頸部文様における相関表

| 口頸部文様<br>器形 | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑧ | ⑨ | ⑩ |
|-------------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| Aタイプ        | 4 |   | 2 |   |   |   |   |   |   |   |
| Bタイプ        | 2 | 2 | 1 |   | 1 |   |   | 1 |   |   |
| Cタイプ        |   |   | 2 | 1 |   | 1 |   | 1 |   |   |
| Dタイプ        |   |   | 1 |   |   |   |   |   | 1 | 1 |
| Eタイプ        |   |   |   | 1 | 1 |   |   | 1 |   |   |
| Fタイプ        |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 1 |

Aタイプは口頸部に綾絡文を施す土器に多くみられ、その他、口頸部のみに羽状縄文を施す場合にも認められる。Bタイプは口頸部に綾絡文+垂下する押圧縄文の場合全てがこの器形であり、その他、網目状撚糸文や羽状縄文の場合にもみられる。Cタイプは口頸部に羽状縄文や直線による山形状押圧文が施される場合にみられ、その他縄文を主体としたものにも認められる。羽状縄文の場合は、胴部上半にも同文様が施される。Dタイプは口縁から胴下半にかけての全面に羽状縄文が施されたものや、口頸部に直線及び曲線による山形状の押圧縄文を施す場合。Eタイプは口頸部に絡条体圧痕文、胴部は上半に撚糸文、下半に狭幅の綾絡文を施す土器の他、直線による山形押圧文の場合にもみられる。Fタイプは1例だが、口頸部に曲線による山形の押圧縄文。これらの事から各タイプの形態が主として認められる時期をみると、A及びBタイプは下層b式期を主体とし、AタイプはBにくらべやや古いものと考えられる。Cタイプは下層b式期後半からc式にかけて主にみられ、Dタイプは下層c式期以降、d式期にも認められる。Eタイプは下層b式からc式にかけての比較的長い時期に点々とみられ、量的にも少ない。Fタイプはd式期にほぼ特徴的なものであろう。

**口頸部文様区画帯について** 区画帯として用いられているのは、(1) 隆帯（及びより細めの低い微隆帯も含む。）(2) 沈線。(3) 押圧縄文である。さらに(1)、(2)では、各区画帯に新たに刺突、圧痕文などの施文を加えているものが多く、これらも含めて記述する。

(1) 隆帯は1～2条でなされ、3条以上のものは存在しない。明らかに粘土紐の張り付けによるもの他、摘み出しによると思われるものも存在する。隆帯上には、①押圧縄文、②絡条体圧痕文、③連続刺突文の他、④無施文の場合がある。①では施文が隆帯に対し斜位になされるものと平行に施されるものがあり、前者の場合、撚糸、複節縄文、絡条体が等間隔で施される。いずれも隆帯に対し斜位に深く施されている事から隆帯自体がねじれた形状を呈す。後者では撚糸文が主に使用される。②は幅広の隆帯に主として施される。③は刺突痕が円形、爪形、楕円形を呈するものがあり、爪形のは先端が平たく薄い工具で施したもの他、爪によつたとされるものもある。楕円形のは先端を細くした棒状工具で押し引き風に施している。④は比較的少ない。(2) 浅く幅広の沈線内に連続した刺突を施すもので、刺突は円形の他、楕

円形及び爪形のものがある。又沈線は隆帯と複合し、隆帯の外側に施す事によって隆帯をより浮彫的に表現する場合が多い。(3) 絡条体圧痕文で1～3条施される。(2)の場合と同様、隆帯外側に付属して施される場合も小数みられる。

これらについて第21図、口頸部文様との関連をみると、(1)の場合は口頸部文様が、㊦、㊧を除きいずれの場合にもみられるが中でも、①、②は㊦～㊧及び㊨に多く、㊩、㊪になると隆帯を持つものは③の施文を主とする。この事から下層b～d式において隆帯を有するものは、隆帯上の施文が①、②は下層b式、③は下層c～d式に多用され傾向がうかがえる。(2)の場合は㊦、㊩、㊪～㊫、㊬～㊭にみられる。中でも爪形のものには㊪に多用される他、㊩でも残存し、反面㊦、㊩にはみられない事から、口頸部に羽状縄文の用いられる下層b式に出現し、押圧山形文の下層c式まで残余するものと考えられる。又楕円形の刺突は㊩、㊪に多用されており、その主体は下層c～d式と思われる。反面円形刺突は㊦、㊩の下層b式に多いが、㊪、㊭の下層d式にも用いられており、全期を通じて用いられているが、b式のものに比べd式では刺突が小径の傾向を持つ。この事は隆帯幅の大小との相互関係からくるものと思われる。(3)の場合は㊪、㊫～㊬に施されており、反面㊦、㊩にはみられない。すなわち羽状縄文が施される下層b式以降、下層d式にかけてみられる。

以上の事から隆帯は下層b式からd式に至るまで存在するが、隆帯の中でも低く幅細の微隆帯が時期を下るにつれその比率を増す傾向はうかがえる。又、隆帯を用いない文様区画帯も綾絡文を施す類を除くと下層b式から出現しており、微隆帯の場合と同様、時期が下るにつれ、その比率を増していく現象がみられる。

註1・7・8・12・13 村越潔 『円筒土器文化』 雄山閣 1974

註2・9 江坂輝彌 『石神遺跡』 ニューサイエンス社 1970

註3 青森県教育委員会 『熊沢遺跡調査報告書』 青森県埋蔵文化財報告書38集 1977

註4 安保彰 『小坂のあけぼの』 1975

註5 奥山潤 大館鳳鳴高校社会部考古班 『茂屋下岱式土器群』 1971

註6 児玉・大場・武内 『サイベ沢遺跡』 市立函館博物館 1958

註10 江坂輝彌 『青森県女館貝塚発掘調査報告書』 石器時代2 1955

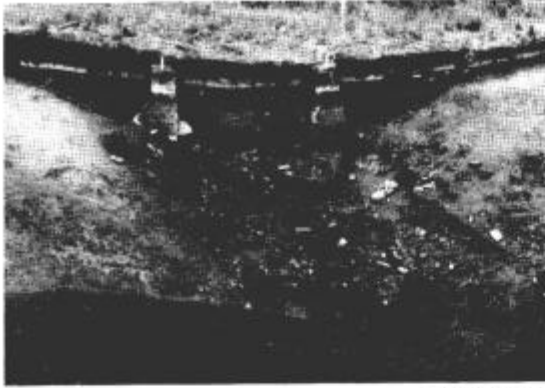
註11 江坂輝彌・笹津備洋・西村正衛 『青森県蟹沢遺跡報告書』 石器時代5 1958



遺跡遠景（東▶西） 57年度



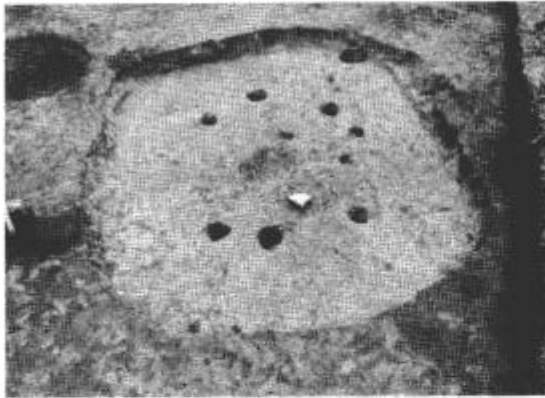
遺跡遠景（南▶北） 58年度



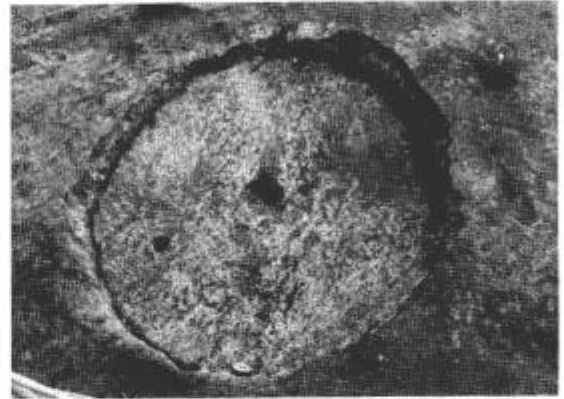
捨て場跡B



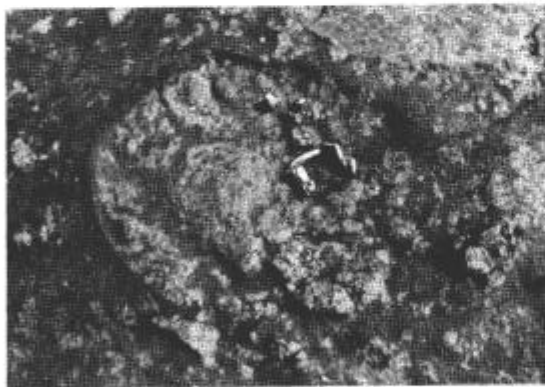
捨て場跡B 土器出土状態



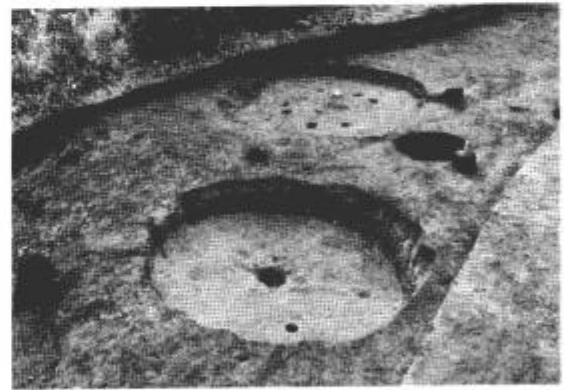
SI 03 竪穴住居跡



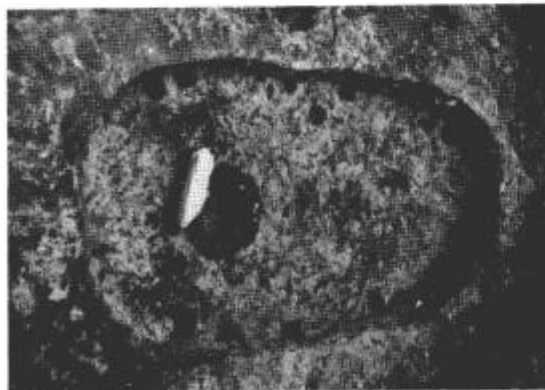
SI 05 竪穴住居跡



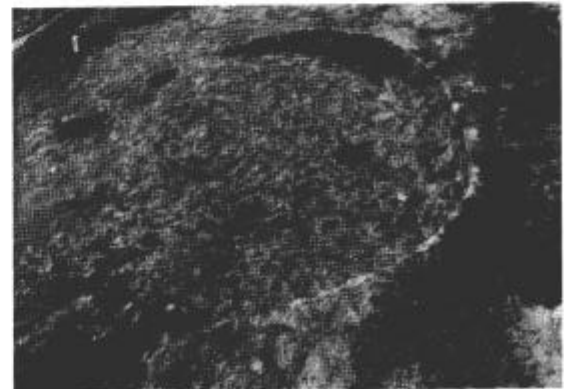
SI 07 竪穴住居跡



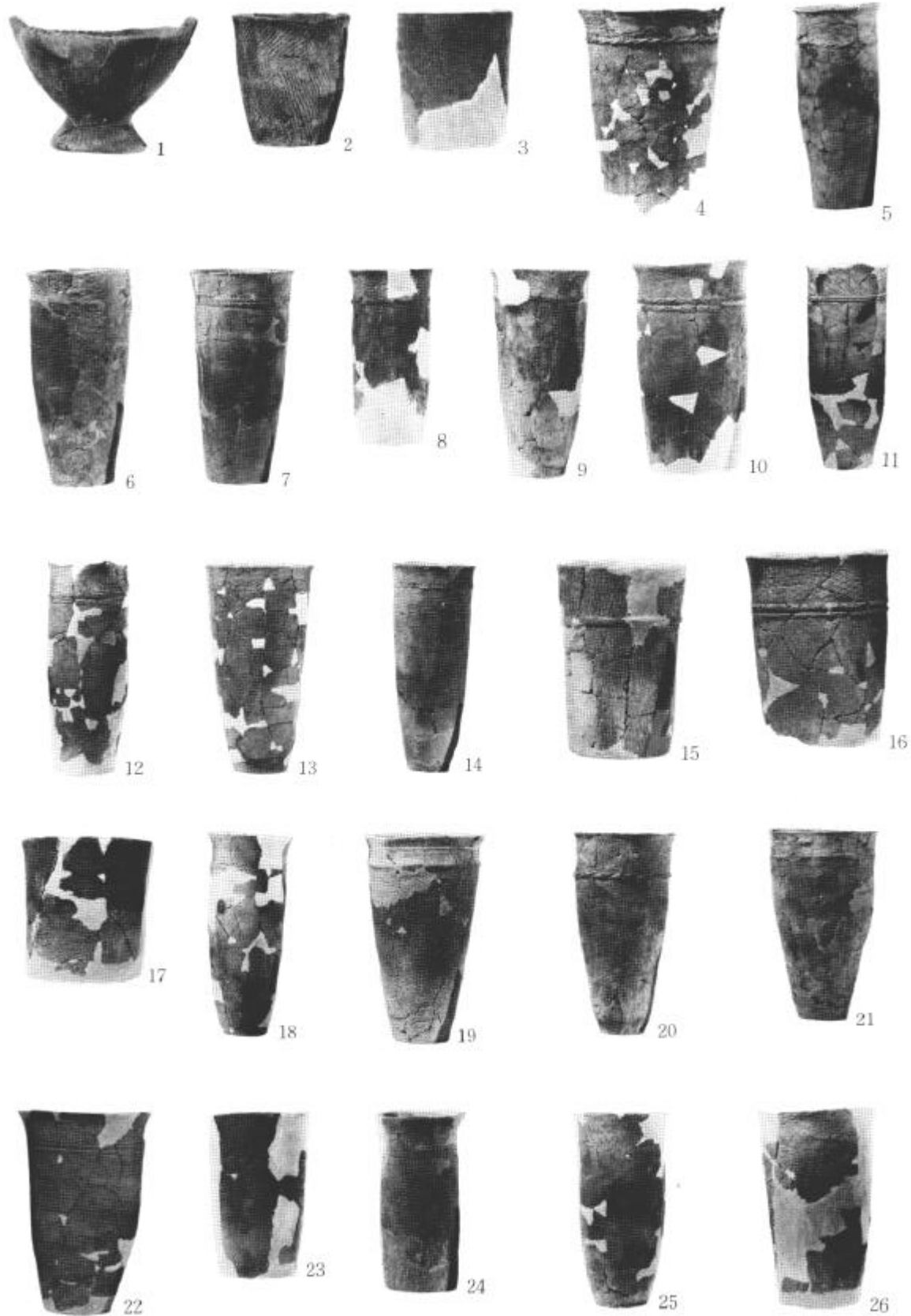
SI 03、SI 05、SK04 (東▶西)



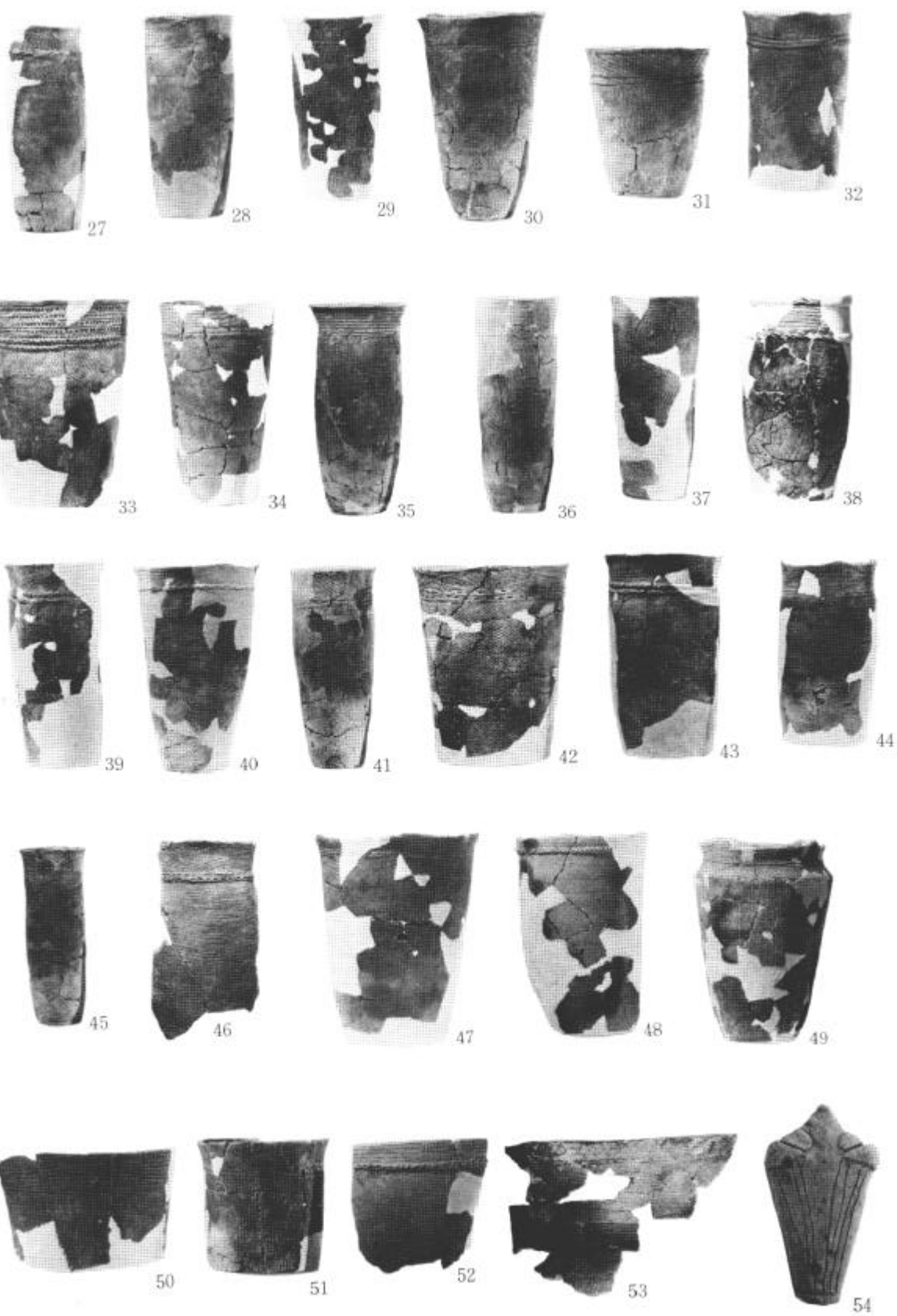
SI 10 竪穴住居跡



SI 11 竪穴住居跡



図版3 出土遺物（土器）



図版4 出土遺物（土器、岩偶）

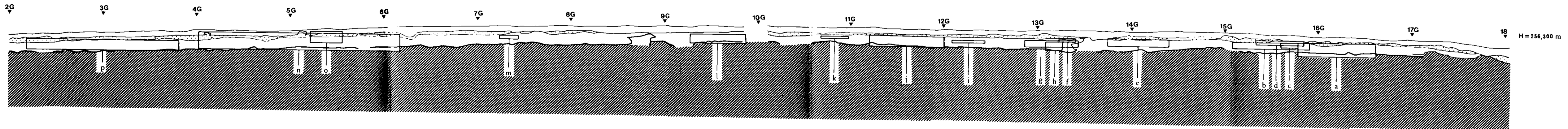
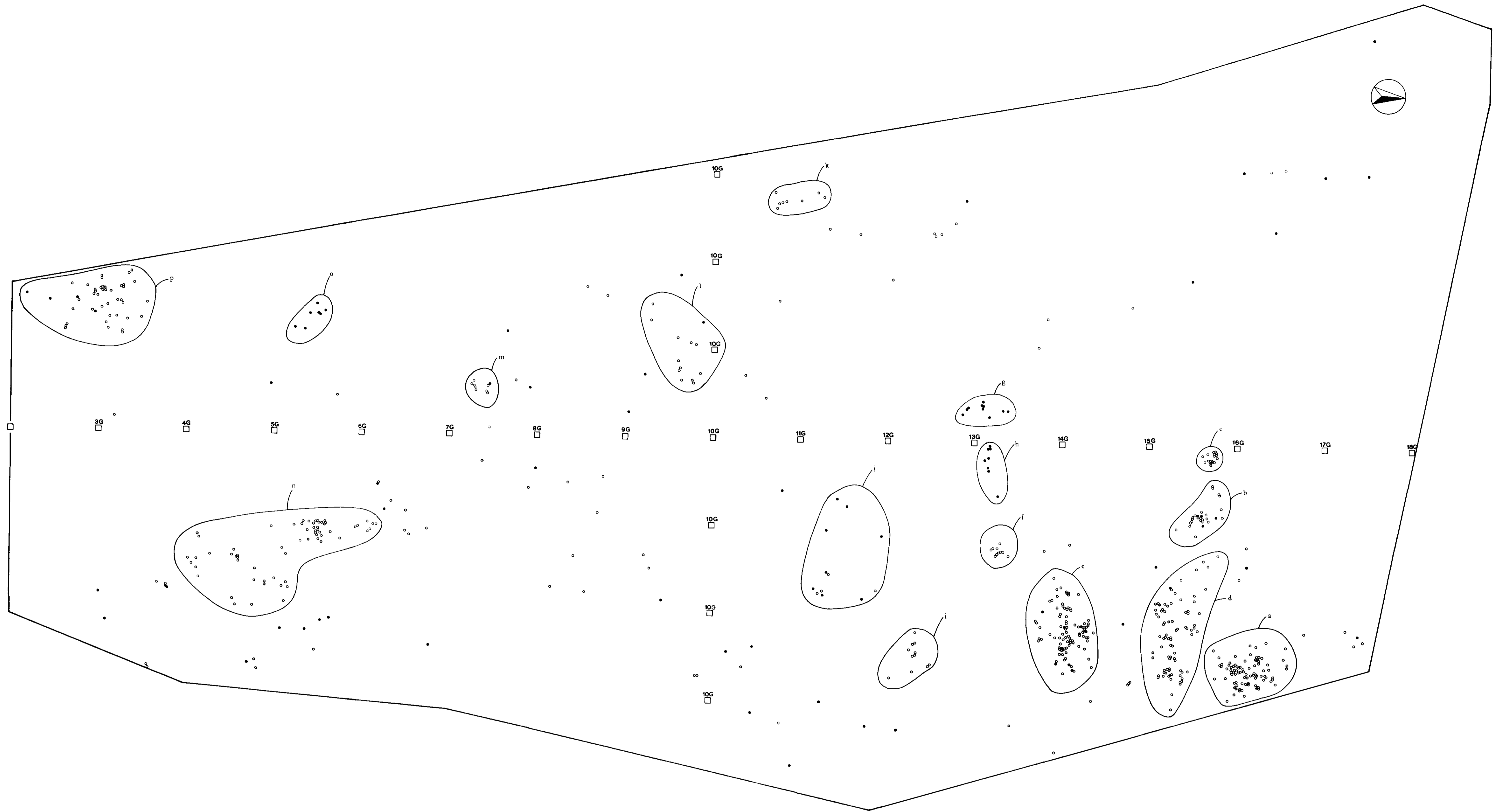
## 発掘調査参加者

### 発掘作業員

|                                 |                                    |                                 |                                   |                                       |                                 |                                 |                                 |                                  |
|---------------------------------|------------------------------------|---------------------------------|-----------------------------------|---------------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|----------------------------------|
| 青柳倉松工藤幸徳金澤興市澤口久美男宮館隆蔵中村吉介熊谷芳蔵   | 熊谷穎之進熊谷泰一池中田兼忠志荒川盛秀志山本重治工藤清次郎小畑金次郎 | 工藤秋村松原聡一高橋英志彰秋本篤山崎文夫高橋忠男熊谷ミヨ    | 村野秀聡藤省一郎高橋サツ成田ユキ目時トキ本薫ノブ田栄ナミ前川静洋子 | 介治郎伊藤野省一高橋忠男熊谷ミヨ成田ユキ目時トキ本薫ノブ田栄ナミ前川静洋子 | 熊黒小高中庄熊成和柏大中池澤中田千葉山清水奈三山崎       | 谷畑高村司谷成田和谷森村田沼口ノ葉山清水奈三山崎        | 芳澤金高村司谷成田和谷森村田沼口ノ葉山清水奈三山崎       | 蔵由昭考仁みつ子エどりミエ子サエエしず子リツ子ノ敦宮子生チワル子 |
| 小林明美杉原ヨシエ幸子峰ハナツ昭子栄美子チワ山崎ミナ子進藤悦子 | 中村明美杉原ヨシエ幸子峰ハナツ昭子栄美子チワ山崎ミナ子進藤悦子    | 中村明美杉原ヨシエ幸子峰ハナツ昭子栄美子チワ山崎ミナ子進藤悦子 | 中村明美杉原ヨシエ幸子峰ハナツ昭子栄美子チワ山崎ミナ子進藤悦子   | 中村明美杉原ヨシエ幸子峰ハナツ昭子栄美子チワ山崎ミナ子進藤悦子       | 中村明美杉原ヨシエ幸子峰ハナツ昭子栄美子チワ山崎ミナ子進藤悦子 | 中村明美杉原ヨシエ幸子峰ハナツ昭子栄美子チワ山崎ミナ子進藤悦子 | 中村明美杉原ヨシエ幸子峰ハナツ昭子栄美子チワ山崎ミナ子進藤悦子 | 中村明美杉原ヨシエ幸子峰ハナツ昭子栄美子チワ山崎ミナ子進藤悦子  |

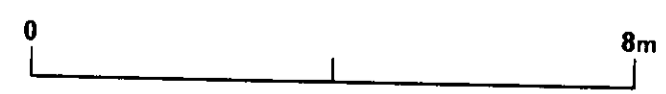
### 整理作業員

|                                |                                |                                 |                                |                                |                               |                                    |                                |              |
|--------------------------------|--------------------------------|---------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|-------------------------------|------------------------------------|--------------------------------|--------------|
| 津島満子池田邦子浪岡サツエ大野甲子高柳良子茂木みさき池田静子 | 大川貞子藤肥律子皆川恵子山田節子高橋チエ子森元てる子嶋津竜子 | 加藤えり子森元京子佐藤せい子小松郁子高橋奈保子泉谷昭子高橋康子 | 柳田良子伊藤教子岡本恵美子鎌田れい子鈴木修子後藤のり子辻輪子 | 越後谷晴美進藤始子熊谷恵子長瀨優子高階恵子山田美喜子佐藤仁美 | 照井真澄美小松悦子茂木祐子渡辺義美戸澤典子進藤里美加藤良子 | 高橋フサ子藤井美貴子柏谷愛子池田マサ子後藤正子長谷川順子佐々木アイ子 | 大河洋子細井洋子齊藤美江子高橋まき子高橋れい子藤井幸誠又井薫 | 岡本龍子洪谷志高野ひより |
|--------------------------------|--------------------------------|---------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|-------------------------------|------------------------------------|--------------------------------|--------------|

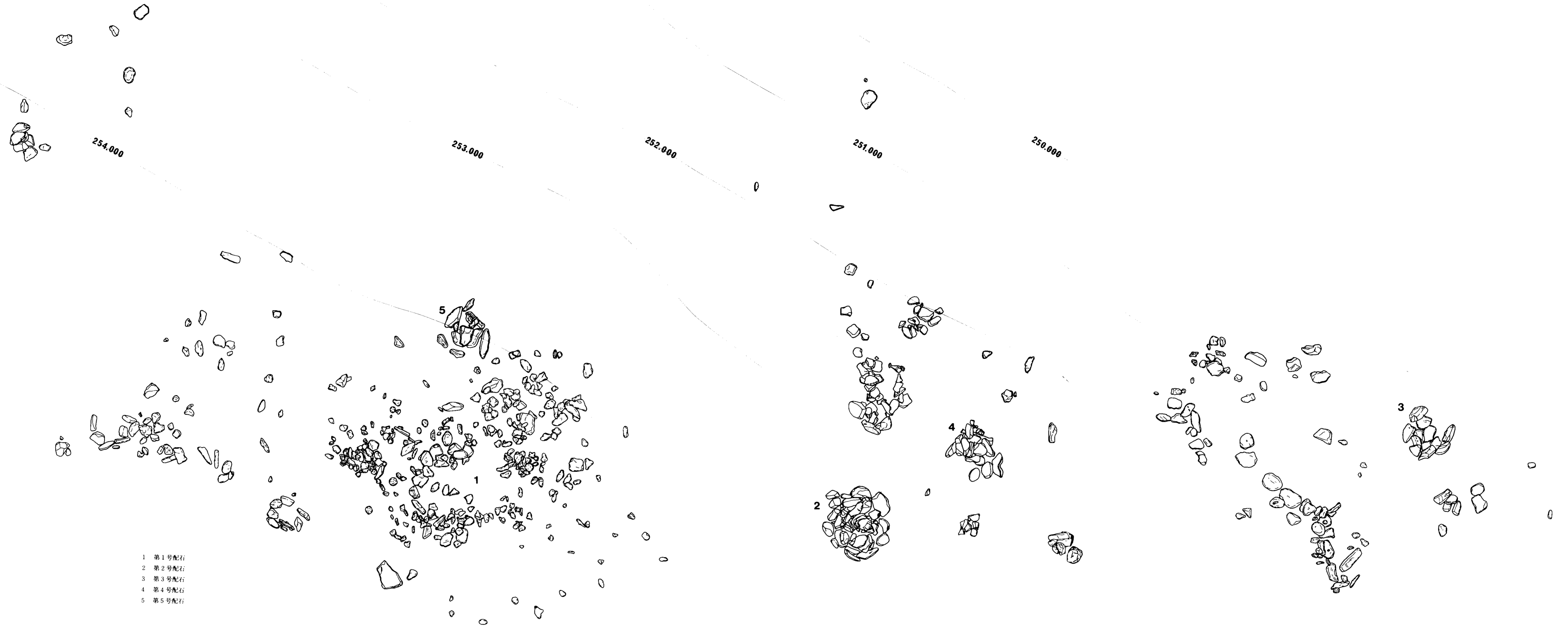


大伎II遺跡遺物分布図(昭和57年度調査区)〈附図1〉

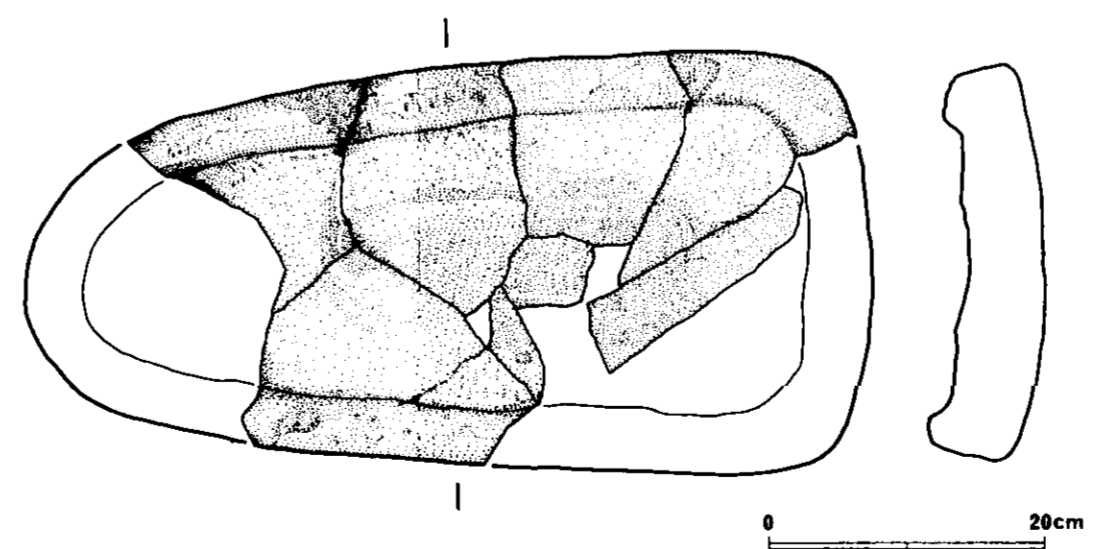
○土器片  
●石器





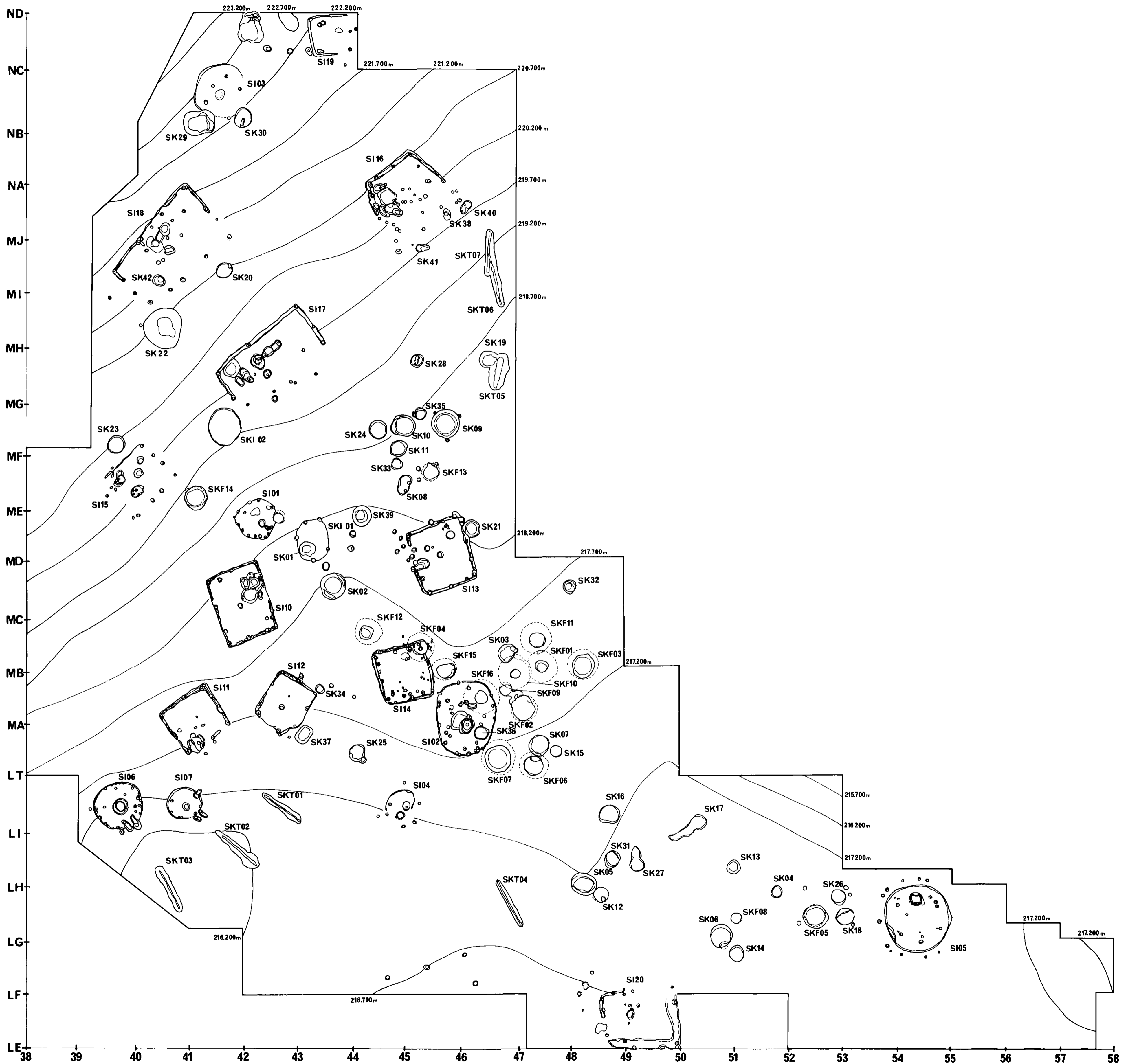


- 1 第1号配石
- 2 第2号配石
- 3 第3号配石
- 4 第4号配石
- 5 第5号配石



出土石器(石皿)実測図  
大谷II遺跡配石群<附図2>





第3図 白長根館1遺跡・遺構分布図〈附図3〉

第11圖 大穴IV遺跡・透網外出土器(附圖4)

